

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(111)

—地方職員共済組合職員住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

うお み が はら い せき
魚見ヶ原遺跡

(鹿児島県鹿児島市魚見町)



鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(111)

魚見ヶ原遺跡

二〇〇七年三月 鹿児島県立埋蔵文化財センター

2007年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

序 文

この報告書は、地方職員共済組合職員住宅建設に伴って、平成10年度に実施した魚見ヶ原遺跡の発掘調査の記録です。

この遺跡は、鹿児島市魚見町に所在し、眼下に鹿児島湾、東側には桜島を望む台地端に位置しています。

今回の調査では、弥生時代前期の竪穴住居跡や土坑などとともに、多くの土器・石器などが発見されました。これまで、稲作農耕が南九州へ伝播した頃の人々の生活の様子は、資料も少なくはっきりしていませんでしたが、今回発見された多種多量の石器や、多くの炭化した木の実などは、こうした問題を解明するきっかけになると思われます。

また、いくつかに分類できる土器は、その移り変わりとともに本地域における特徴や他地域との交流などをも示しています。

本報告書が、県民の皆様はじめ多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

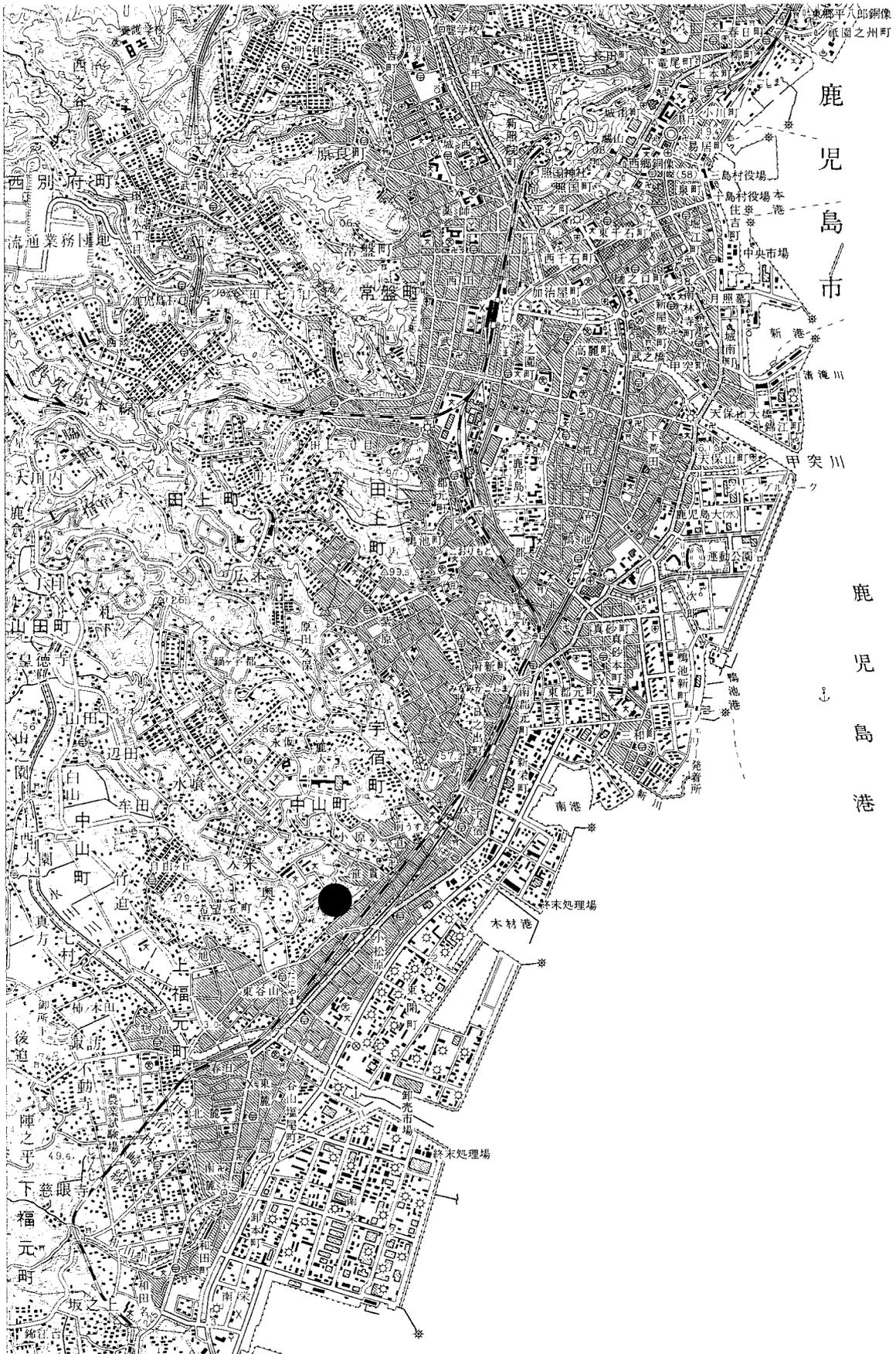
最後に、調査に当たりご協力いただいた県総務部職員厚生課、鹿児島市教育委員会、関係各機関並びに発掘調査に従事された地域の方々に厚くお礼申し上げます。

平成19年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター
所 長 宮 原 景 信

報 告 書 抄 録

ふりがな	うおみがはらいせき							
書名	魚見ヶ原遺跡							
副書名	地方職員共済組合職員住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	111							
編著者名	池畑 耕一							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 0995 - 48 - 5811							
発行年月日	2007年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査起因
		市町村	遺跡番号	°	°			
うおみがはらいせき 魚見ヶ原遺跡	かごしまけんかごしまし 鹿児島県鹿児島市 うおみちょう 魚見町103番の1	46201	1-115	31° 32 10	130° 31 40	確認調査 19981205 本調査 19990106 ~ 19990326	本調査 2,300	地方職員 共済組合 職員住宅 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
魚見ヶ原遺跡	集落跡	縄文時代早期 縄文時代後期 縄文時代晩期 弥生時代前期 弥生時代中期 古墳時代 古代 中世 近世	竪穴住居跡 土坑 道跡	押型文土器 指宿式・市来式・鐘崎式・御領式土器 入佐式・黒川式土器 高橋式土器・打製石鏃・磨製石鏃・石匙・石錐・石槍・石剣・石庖丁・石鎌・打製石斧・磨製石斧・ピエスエスキーユ・スクレイパー・擦痕石器・敲石・磨石・石皿・石錘・砥石・礪器・軽石製品（石偶・女陰・有孔品・くぼみ石形）炭化木の実 北麓式土器 中津野式土器 土師器 土師器・青磁 陶磁器・ふいごの羽口			遺跡は調査範囲については消滅したが、その周辺は残存している。	
遺跡の概要	<p>魚見ヶ原遺跡は、縄文時代早期から近世まで長期にわたる複合遺跡で、主体となるのは弥生時代前期と中期前葉である。</p> <p>竪穴住居跡と土坑から成る集落が発見されており、竪穴住居跡の中には松菊里タイプのもも含まれている。多くの土器・石器が出土しており、その種類は多様である。土器の中には、貝殻で重弧文を付した壺形土器や、研磨した鉢形土器など他地域からの持ち込みと思われるものもある。石器も多様であるが、石庖丁・石鎌などの出土が少なく、逆に敲石や石皿などの粉食具が多く、炭化した木の実が多量に出土しているのは、当時のこの地域の生業を物語っている。多くの軽石製品は多様な用途を示しているが、祭祀の一端をも暗示している。</p>							



遺跡位置図 (1:50000)

例 言

- 1 本書は、地方職員共済組合職員住宅建設に伴う魚見ヶ原遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、鹿児島県鹿児島市魚見町に所在する。
- 3 発掘調査及び報告書作成（整理作業）は、鹿児島県総務部職員厚生課から鹿児島県教育委員会が依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが担当した。
- 4 発掘調査は、平成9年1月6日から同年3月26日まで実施し、整理作業・報告書作成は平成18年度に実施した。
- 5 遺物番号は、通し番号とし、本文・挿図・表・図版の番号は一致する。
- 6 挿図の縮尺は、各図面に示した。
- 7 本書で用いたレベル数値は、海拔絶対高である。
- 8 発掘調査における図面の作成、写真の撮影は、調査担当者が行った。空中写真撮影は、有限会社ふじたに委託した。
- 9 遺構実測図のトレースは、整理作業員が行った。
- 10 土器の実測・トレースは、整理作業員の協力を得て池畑耕一が行った。
- 11 石器の一部については、実測・トレースをアイシン精機株式会社文化財プロジェクトに委託し、監修は池畑が行った。その他の石器は整理作業員の協力を得て池畑が行った。
- 12 遺構内から出土した炭化物の放射性炭素年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。
- 13 遺物の写真撮影は、鶴田静彦・吉岡康弘・西園勝彦が行った。
- 14 本書の執筆・編集は、池畑が担当した。
- 15 遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用する予定である。なお、魚見ヶ原遺跡の遺物注記の略号は「UO」である。

目 次

序 文
報告書抄録
例 言
目 次

発掘調査の経緯	1
第1章 調査に至るまでと、その後の経過	1
第2章 調査の組織	1
第3章 調査の経過	1
遺跡の位置と環境	3
第1章 地理的・地質的環境	3
第2章 歴史的環境	3
地層	6
発掘調査の概要	6
第1章 発掘調査の方法と成果	6
第2章 縄文時代	8
第3章 弥生時代	10
第1節 遺構	12
1 竪穴住居跡	12
2 土坑	22
3 溝状遺構	41
4 柱穴群	42
5 焼土跡	42
第2節 遺物	44
1 弥生土器	44
2 石器	69
3 軽石製品	88
第5章 古墳時代	92
第6章 古代・中世	92
放射性炭素年代測定	94
まとめ	97
第1章 弥生時代前期～中期前半のムラ	97
第2章 弥生土器	97
第3章 魚見ヶ原遺跡の生業と技術	98
第4章 軽石製品の語るもの	98

挿 図 目 次

第 1 図 周辺の遺跡分布図	5	第26図 土坑12・13と	
第 2 図 基本地層図	6	出土の土器	30
第 3 図 調査地点配置図	7	第27図 土坑14・15・16・17と	
第 4 図 縄文土器	8	出土の土器	31
第 5 図 弥生時代の		第28図 土坑18・19と出土の土器	33
遺構配置図(1)	10	第29図 土坑21・22・23・24	34
第 6 図 弥生時代の		第30図 土坑25・26・28・29と	
遺構配置図(2)	11	土坑25出土の土器	35
第 7 図 1号住居跡	12	第31図 土坑32・33と	
第 8 図 1号住居跡出土の土器	13	土坑31出土の土器	36
第 9 図 住居跡出土の石器(1)	14	第32図 土坑34と出土の土器	37
第10図 住居跡出土の石器(2)	15	第33図 土坑35・36	38
第11図 住居跡出土の石器(3)		第34図 土坑37・38と	
と軽石製品	16	土坑35～38出土の土器	39
第12図 2号住居跡と出土の土器	17	第35図 土坑40・41・44・45と	
第13図 3号住居跡	18	土坑39出土の土器	40
第14図 3号住居跡出土の土器	19	第36図 弥生時代の溝状遺構	41
第15図 4号住居跡とその		第37図 柱穴出土の土器	42
出土土器(1)	20	第38図 焼土跡	43
第16図 4号住居跡		第39図 弥生時代前期の土器(1)	
出土の土器(2)	21	甕形土器(1)	44
第17図 土坑1と出土の土器	22	第40図 弥生時代前期の土器(2)	
第18図 土坑2・土坑3	23	甕形土器(2)	45
第19図 土坑出土の石器	24	第41図 弥生時代前期の土器(3)	
第20図 土坑出土の軽石製品	25	甕形土器(3)	46
第21図 土坑4・5と		第42図 弥生時代前期の土器(4)	
土坑2～5出土の土器	26	甕形土器(4)	47
第22図 土坑6と出土の土器	27	第43図 弥生時代前期の土器(5)	
第23図 土坑6と土坑43出土の石器	27	甕形土器(5)	48
第24図 土坑7と出土の土器	28	第44図 弥生時代前期の土器(6)	
第25図 土坑8・9・10・11と		甕形土器(6)	49
出土の土器	29	第45図 弥生時代前期の土器(7)	
		甕形土器(7)	50

第46図	弥生時代前期の土器(8)		第58図	石器(4) 石鏃の未製品	
	甕形土器(8)	51		大型石鏃	72
第47図	弥生時代前期の土器(9)		第59図	石器(5) 石匙・石錐	
	甕形土器(9)	52		石槍・ピースエスキーユ	73
第48図	弥生時代前期の土器(10)		第60図	石器(6) 石剣・石鎌	
	壺形土器(1)	53		スクレイパー・磨製石鏃	74
第49図	弥生時代前期の土器(11)		第61図	石器(7) 磨製石庖丁・磨製石斧	75
	壺形土器(2)	54	第62図	石器(8) 打製石斧	76
第50図	弥生時代前期の土器(12)		第63図	石器(9) 石核・礫器	77
	壺形土器(3)	55	第64図	石器(10) 礫器・磨石	78
第51図	弥生時代前期の土器(13)		第65図	石器(11) 磨石・石錘・敲石・凹み石 ...	79
	壺形土器(4)・鉢形土器・		第66図	石器(12) 擦痕石器	80
	高环形土器・蓋形土器	56	第67図	石器(13) 砥石・石皿	81
第52図	弥生時代中期の土器(1)		第68図	軽石製品(1)	88
	甕形土器(1)	57	第69図	軽石製品(2)	89
第53図	弥生時代中期の土器(2)		第70図	軽石製品(3)	90
	甕形土器(2)	58	第71図	古墳時代～	
第54図	弥生時代中期の土器(3)			中世の土器・土製品	92
	壺形土器	59	第72図	測定試料の暦年較正	
第55図	石器(1) 石鏃	69		確率密度分布図	96
第56図	石器(2) 石鏃	70	第73図	弥生時代の石器分類表	98
第57図	石器(3) 石鏃	71			

表 目 次

第1表	周辺の遺跡地名表	4	第11表	弥生土器観察表(9)	68
第2表	縄文土器観察表	9	第12表	石器観察表(1)	82
第3表	弥生土器観察表(1)	60	第13表	石器観察表(2)	83
第4表	弥生土器観察表(2)	61	第14表	石器観察表(3)	84
第5表	弥生土器観察表(3)	62	第15表	石器観察表(4)	85
第6表	弥生土器観察表(4)	63	第16表	石器観察表(5)	86
第7表	弥生土器観察表(5)	64	第17表	石器観察表(6)	87
第8表	弥生土器観察表(6)	65	第18表	軽石製品観察表	91
第9表	弥生土器観察表(7)	66	第19表	古墳時代～中世の土器・	
第10表	弥生土器観察表(8)	67		土製品観察表	93

図 版 目 次

図版 1	遠景，1号住居跡と 2号住居跡	99	図版17	弥生土器(5)	115
図版 2	遠景，道跡	100	図版18	弥生土器(6)	116
図版 3	1号住居跡	101	図版19	弥生土器(7)	117
図版 4	2号住居跡	102	図版20	弥生土器(8)	118
図版 5	2号住居跡，現地説明会	103	図版21	石器(1)	119
図版 6	3号住居跡	104	図版22	石器(2)	120
図版 7	4号住居跡	105	図版23	石器(3)	121
図版 8	土坑	106	図版24	石器(4)	122
図版 9	土坑	107	図版25	石器(5)	123
図版10	土坑	108	図版26	石器(6)	124
図版11	土坑と出土の土器	109	図版27	石器(7)	125
図版12	土坑と遺構出土の土器	110	図版28	石器(8)	126
図版13	弥生土器(1)	111	図版29	石器(9)	127
図版14	弥生土器(2)	112	図版30	軽石製品(1)	128
図版15	弥生土器(3)	113	図版31	軽石製品(2)	129
図版16	弥生土器(4)	114	図版32	軽石製品(3)	130

I 発掘調査の経緯

第1章 調査に至るまでと、その後の経過

鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無およびその取り扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき、鹿児島県総務部職員厚生課は、鹿児島市魚見町に計画した地方職員共済組合職員住宅建設に先立って、対象地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課に照会した。

文化財課は平成8年11月15日（金）に分布調査を実施した結果、事業区域内には魚見ヶ原遺跡が所在することが判明し、確認調査を実施することとなった。

確認調査は県文化財課（青崎和憲・堂込秀人）が担当し、12月5日（木）に実施した。その結果、弥生時代の遺跡で、約12,000㎡に広がることが確認された。

そこで、平成8年度に県総務部・県文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の三者で再度協議を行い、当事業区域内では現状保存や設計変更が不可能なことから、住宅や集会所等掘削する部分について埋文センターが本調査を実施することとした。

調査は平成9年1月6日から3月26日まで実施した。調査総面積は2,300㎡である。整理作業・報告書作成作業は18年度に埋文センターにおいて行った。

第2章 調査の組織

1 本調査（平成8年度）

起回事業主体者	鹿児島県総務部職員厚生課
調査主体者	鹿児島県教育委員会
調査企画調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査責任者	県立埋蔵文化財センター(以下埋セ)
	所 長 吉 永 和 人
調査企画者	埋セ次長兼総務課長 尾 崎 進
	〃 調査課長 戸 崎 勝 洋
	〃 課長補佐兼第一調査係長 新 東 晃 一
	〃 主任文化財主事 青 崎 和 憲
調査担当者	〃 文化財主事 前 迫 亮 一
	〃 文化財研究員 桑 波 田 武 志
事務担当者	〃 主 査 前 屋 敷 裕 徳
	〃 〃 政 倉 孝 弘
	〃 主 事 溜 池 圭 子

2 整理・報告書作成（平成18年度）

起回事業主体者	鹿児島県総務部職員厚生課
作成主体者	鹿児島県教育委員会
企画調整	鹿児島県教育庁文化財課

作成責任者	県立埋蔵文化財センター(以下埋セ)
	所 長 上 今 常 雄
	〃 〃 宮 原 景 信
作成企画者	埋セ次長兼総務課長 有 川 昭 人
	〃 次 長 新 東 晃 一
	〃 調査第一課長 池 畑 耕 一
	〃 主任文化財主事兼第一調査係長 長 野 眞 一
作成担当者	〃 調査第一課長 池 畑 耕 一
事務担当者	〃 総 務 係 長 寄 井 田 正 秀
	〃 主 事 五 百 路 真
企画委員	〃 文化財主事 寺 原 徹
	〃 文化財研究員 西 園 勝 彦
報告書作成検討委員会	平成18年12月15日
	所長ほか 12名
報告書作成指導委員会	平成18年12月14日
	新東次長ほか 2名

第3章 調査の経過

本調査の経過を1週間ごとに記していく。

- 1月6日（水）～8日（金）
6日の午前中に杭打ちをし、午後から作業員を集めてオリエンテーション、道具搬入をする。
表土剥ぎのあと、次のトレンチを調査する。
D - 14・15区、E - 8・9区、F - 4・5・10・11区、F・G - 8・9区、H - 6・7・10・11区、J - 4・8・9区。
D - 14区は薩摩火山層を剥いで旧石器の確認。
F - 10・11区は縄文時代早期の確認。
H - 10・11区、J - 8・9区で溝を検出。
- 1月11日（月）～14日（木）
表土剥ぎのあと、次のトレンチを調査する。
D - 2・3区、D・E - 6～9区、F - 4・5区、F・G - 8・9区、H - 4～7・10・11・14・15区、H・I - 15区、J - 4・8～11区、L - 14・15区
D・E - 6・7区で多くの遺物、F・G - 8・9区では遺構が出ている。J - 10・11区では溝2条を検出。
H - 14・15区は薩摩火山灰層の上面で遺構検出。
- 1月18日（月）～22日（金）
19日は雨のため作業中止。
表土剥ぎのあと、次のトレンチを調査する。
B・C - 7・13・15区、D・E - 6・7・17区、D - 8・9区、F・G - 8・9・17区、H - 2・4～11区、H・I - 15区、E～J - 17区、J - 11・14・15区、K - 16・17区
B・C - 13区で旧石器の確認。D・E - 7区やK -

- 16・17区では遺物が多く出土。D - 8・9区に焼土。
土坑1～3を掘り上げ、写真撮影。遺構配置図作成。
- 4 1月26日(火)～29日(金)
発掘調査をした地点。
B - 13区, C - 6～8区, D・E - 6・7区, F・G - 8・9区, H - 11区, J～L - 13～15区, J・K - 16・17区, M - 17区。
B - 13区は下層確認。土坑1～4の実測・掘り上げ。
J - 15区, K - 16区で住居跡検出。J・K - 15・16区では石鏝が多く出土。
- 5 2月1日(月)～5日(金)
1日は雨のため、3日は雪のため外の作業中止。
発掘調査をした地点。
C - 4～8区, D・E - 6・7区, J～L - 13～17区
この週から南東隅を広げて調査する。
H - 4～7区はトレンチ埋め戻し。
- 6 2月8日(月)～12日(金)
12日は雨のため午前中は土器洗い。
発掘調査をした地点。
D・E - 5～7区, F - 8区, K・L - 15～17区
土坑3の掘り上げ。A号棟建設地の表土剥ぎ。
- 7 2月15日(月)～19日(金)
発掘調査をした地点。
C - 6・7区, C～E - 4～6区, K・L - 14～17区, H - 2区, I - 16・17区, J・K - 17区
C - 7区でドングリ数十点出土。方形住居検出。
2基の住居を掘り上げる。J - 17区に土坑。
- 8 2月22日(月)～26日(金)
24日午前中、26日の3時過ぎは雨のため遺物洗い。
C～E - 4・5区, D・E - 8区, E - 8区, J - 12・13区の掘り下げ。
D - 6・7区, E - 7区の溝, C - 8区, F - 8・9区の土坑, 住居1～3号の掘り上げ, 清掃, 写真撮影。
D・E - 4・5区精査, 溝掘り上げ。
D・E - 9区の一部を下げる。
- 9 2月28日(日)
町内会主催ウォーキング大会のコースに遺跡が組み込まれる。
- 10 3月1日(月)～5日(金)
4日は雨のため終日土器洗い。
1号～3号住居跡の掘り上げ, 写真撮影など。4号住居跡を検出。土坑3号～5号掘り上げ, 実測。
C・D - 7・8区, C～E - 5～7区, D・E - 8・9区掘り下げ。C・D - 7・8区には木の実が多い。
D・E - 8区実測。
D・E - 6区の溝掘り上げ, 実測。D - 4～8区の溝平面図作成。F - 8・9区北側の地層断面実測。
- G - 10・11区表土剥ぎ。
- 11 3月8日(月)～12日(金)
11日朝は雨のため土器水洗い。
1号～4号住居跡の掘り上げ, 写真撮影, 実測。4号住居跡から完形の壺出土。
D - 6区の4基の土坑掘り上げ。
C・D - 6区, D～F - 3区, D・E - 6～8区, F - 6・7区掘り下げ, 遺構検出。
D - 9区, G - 11区表土剥ぎ。
- 12 3月14日(日)
10時と13時半からの2回現地説明会。見学者360名。
- 13 3月15日(月)～19日(金)
17日からセンターの大久保浩二・黒川忠広応援。大久保は19日までと29日, 黒川は29日まで。
C～E - 5区, D～F - 4～8区, D～G - 8・9区, F - 6・7区, G - 10・11区の遺構検出, 遺構掘り上げ。
A号棟・B号棟・F号棟敷地の遺構検出, 遺構掘り上げ。
1号住居, 土坑6号・7号・9号, 12～14号, 18～26号の掘り上げ。
E・F - 3区の表土剥ぎ, 遺構検出。
J・K - 12～14区の埋め戻し。
- 14 3月23日(火)～26日(金)
26日は雷雨のため作業できず, 午後に道具搬出。作業員雇用は終了。
A号棟・B号棟敷地の遺構掘り上げ。
1号・2号住居の掘り上げ。
土坑6号に貝だまり。
- 15 3月28日(日)・29日(月)
1号・2号住居の実測終了。遺構配置図作成。航空写真撮影。
現地指導: 河口貞徳(県考古学会長), 上村俊雄(鹿児島大学教授)
発掘体験: ラサール中1年生3クラス148名(1月26日～28日), 東谷山中1年生2クラス72名(2月8日・12日), 東谷山小5年生6名が取材(2月10日), ラサール中3年生3クラス160名(3月9日・10日), 東谷山小6年生4クラス138名・福平中陸上部12名(3月16日～19日)
主な来跡者: 町内会(会長・副会長・会計・総務部長)・職員厚生課(課長・課長補佐・係長・主査), 山口県議, 鹿児島大学(上村俊雄・本田道輝・大西智和), ラサール学園(永山修一・麻生善三), 鹿児島市教委(出口浩)埋文友の会(永田), 出納長, 大崎町教委(内村憲和), 東谷山小教員3名, 隼人町教委(重久淳一), 根占町教委(下大川司), 有明町教委(中水忍・出口順一郎)
取材: 朝日新聞・毎日新聞・南日本新聞

II 遺跡の位置と環境

第1章 地理的・地質的環境

魚見ヶ原遺跡は鹿児島市魚見町103番の1に所在する。遺跡のある鹿児島市は、県のほぼ中央、薩摩半島の基部近くにある南北に長い市で、県庁所在地である。

行政的には、北は始良郡蒲生町、薩摩川内市と、東は始良郡始良町、垂水市と、南は指宿市と、西は川辺郡知覧町、同川辺町、南さつま市、日置市、いちき串木野市に接している。鹿児島湾を挟んで鹿屋市、錦江町などとも面している。魚見ヶ原遺跡は旧鹿児島市の南部近くにある。

地形的には薩摩半島は中央を南北方向に標高400mほどの山々からなる南薩山地が連なり、西側はゆるやかに落ちているが、東側は狭いシラス台地を経て急傾斜で海岸に落ちている。そのために東側の河川は概して短く、大雨等による洪水によって水害をもたらしている。70~150mほどの高さで続くシラス台地は、幅2~3kmほどで南北に連なっており、海へは急崖となって落ちる。台地を浸食して稲荷川、甲突川、田上川、永田川などの川が東流して鹿児島湾に注いでいるが、これらの川のまわりには狭い平野が形成されて、その先端部にやや広い三角洲ができています。ここが古くは水田として開拓されたが、現在では宅地化が進み市街地となっている。

魚見ヶ原遺跡は標高約60mのシラス台地の南端に立地し、ほぼ平端な地形にある。東側の低地とは比高約55mである。現在の海岸線からは3.5km離れているが、国道225号線付近から東側のほとんどは昭和時代の埋め立て地であり、当時は永田川と脇田川の河口に挟まれ、海岸に近い台地端であったものと思われる。台地上は近年の団地造成によって住宅等が建ち並び大規模団地になっており、桜ヶ丘団地・魚見ヶ原団地などと呼ばれている。当敷地内は私立高校の野球練習場の跡地で、ほぼ平端に整地されていた。

第2章 歴史的環境

鹿児島市街地周辺の遺跡は稲荷川・甲突川・田上川・永田川などの河川周辺の台地と、河川流域の沖積微高地とに立地している。

旧石器時代の遺跡は薩摩半島の分水嶺に位置する松元町仁田尾地区に集中してある。前山・仁田尾・御仮屋跡などの遺跡でナイフ形石器文化期のものが、仁田尾・仁田尾中A・仁田尾中B・杵塚などの遺跡で細石器文化期のものが出土している。また、もう少し東北側の同一標高の台地上にある加栗山・加治屋園遺跡でも細石器文化期のものが出土している。それぞれの遺跡には石器製作地もあり、仁田尾遺跡では細石器文化期の落とし穴も検

出されている。

縄文時代の遺跡も各地で発見されている。草創期では南部にある掃除山遺跡で竪穴住居跡2軒などが検出され、仁田尾地区の横井竹ノ山・前原遺跡や、北部の加栗山・加治屋園遺跡などでは無文土器・隆帯文土器・石鏃・石皿などが出土している。早期になると前原・加栗山遺跡などで竪穴住居跡・連穴土坑・集石・道跡などから成る集落が発見されている。また当遺跡と同じ台地上にある鹿児島大学桜ヶ丘団地遺跡でも竪穴住居跡が発見されている。旧石器時代から縄文時代早期前半までの加栗山・加治屋園遺跡周辺から仁田尾地区、掃除山遺跡に至る台地上の地域は遺跡数、出土量とも全国的にも有数の密集地である。前期から中期になると台地上だけでなく低地にも遺跡が進出して来る。春日町・大龍・鹿児島大学郡元団地遺跡などがこの時期の遺跡であるが、遺構は見つかっていない。後期も同じような所にある。春日町・大龍・若宮神社・武などの遺跡があり、その後背台地にも木ヶ暮・山ノ中・光山貝塚・草野貝塚などの遺跡が存在する。草野貝塚では台地上に土坑群があり、出土品には土器・石器・骨角器・石製品など多様なものがある。これら生活用具・祭祀具・食料残渣などは当時の様相を復元するのに貴重で豊富な出土品である。鹿児島中央駅西口にある武遺跡では竪穴住居跡群も見つかっている。晩期の遺跡は少ない。

弥生時代にはほとんど平地へ遺跡が集中する。鹿児島大学郡元団地や一ノ宮・北麓などの遺跡では沖積平野に中期から後期の遺跡が形成される。一ノ宮遺跡では竪穴住居跡が、北麓遺跡では溝状遺構が検出されており、北麓遺跡出土の土器は中期前葉の北麓式土器と呼ばれている。

古墳時代には海岸に注ぐ田上川下流域に大集落が形成される。鹿児島大学郡元団地遺跡は、百軒を越す竪穴住居跡や水田・井堰跡などで構成されており、土器にも多様なものがみられる。この頃にはこの低地に武や笹貫・不動寺などの遺跡もあり、農耕文化の盛行がうかがえる。笹貫遺跡は笹貫式土器の標識遺跡である。一ノ宮遺跡では金環も出土しており、中央との密な関係もあったようである。

古代になって一ノ宮遺跡では『厨』の墨書がある土器が出土しており、鹿児島郡の中心地としての位置づけが想定できる。谷山城跡では「大吉」の墨書土器とともに蔵骨器が出土しており、仏教文化の先進地的性格を示している。

中世には勢力争いが盛んとなり、特に後半には島津氏と在地豪族との争いが顕著となる。市街地を囲むシラス

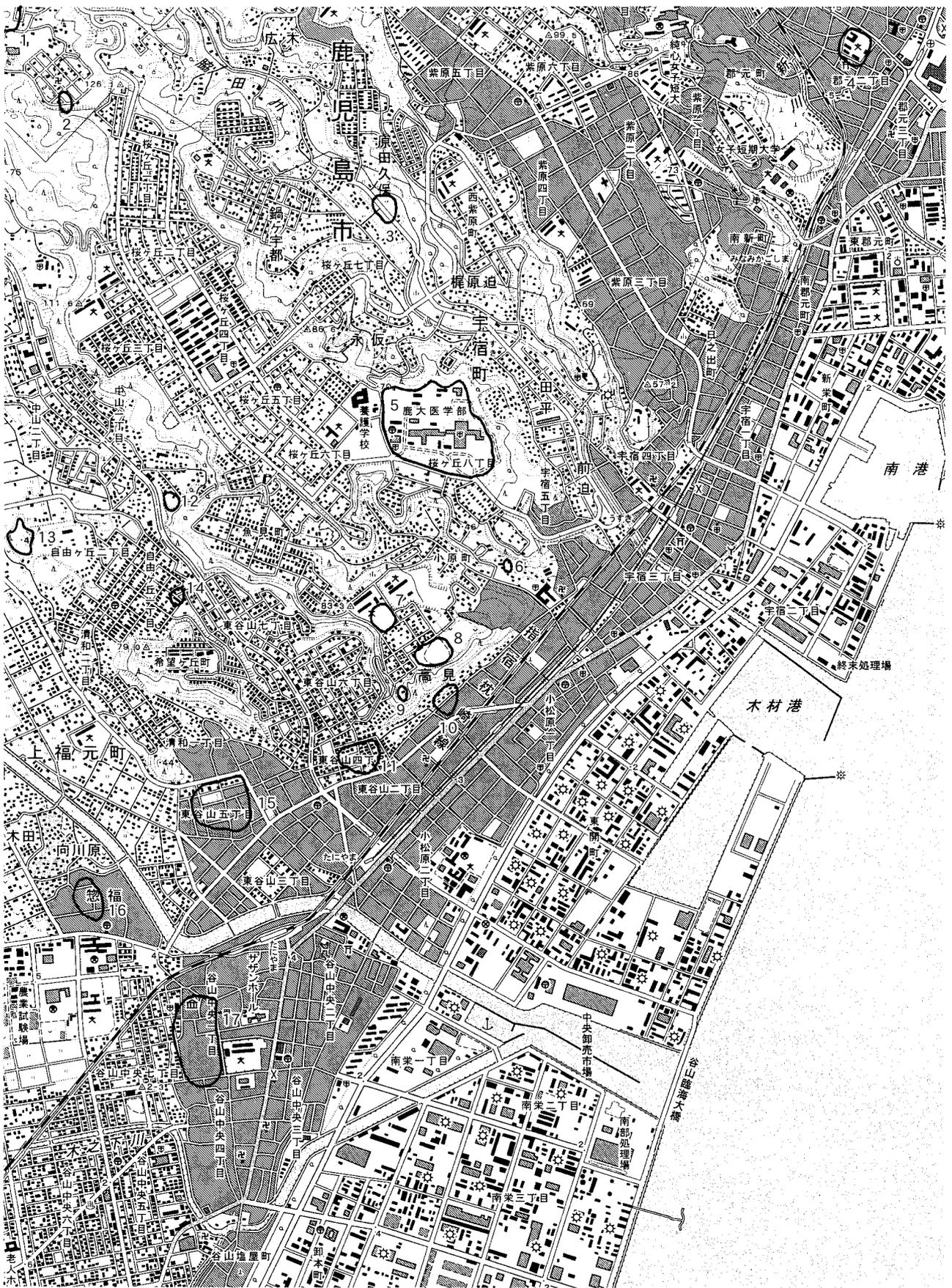
台地上には多くの山城が築かれる。北側から清水城・上山城・夏蔭城・苦辛城・谷山城などと続き、これらのうち清水城・苦辛城・谷山城などは広い範囲で調査が行われている。山城では多くの曲輪が検出され、城の構造がはっきりするとともに多くの輸入陶磁器などが出土している。

近世には島津氏の拠点居城となり、市街地は城下町と

なる。鹿児島城の本丸や二ノ丸は黎明館や県立図書館などの建設によって調査が行われ、その周辺についても建物の建築等によって調査されている。さらに石橋や寺跡・窯跡などの調査もさまざまな開発行為によって進んでいる。西田橋・大乘院・福昌寺跡・寿国寺跡・豎野冷水窯跡などである。

第1表 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名	所在地	時代	遺物等	備考
1	坂下	山田町坂下	弥生・古墳	散布地	
2	上ノ原	" 上ノ原	縄文(早・後)・弥生	前平式・吉田式・市来式・石斧・石皿	消滅
3	原田久保	宇宿町原田久保	縄文(中・後)・古墳	阿高式・南福寺式・出水式・指宿式・松山式・市来式・北久根山式・丸尾式・成川式・古式須恵器	鹿市埋文報告35
4	一ノ宮	郡元町2丁目一ノ宮神社周辺	縄文～中世	住居跡・溝・阿高式・市来式・北麓式・一ノ宮式・黒髪式・山ノ口式・成川式・土師器・須恵器・陶磁器・磨製石鏃・金環・銅鏃・墨書土器	県指定史跡
5	桜ヶ丘団地遺跡群	桜ヶ丘鹿大医学部敷地	縄文～中世	前平式・高橋式・須恵器・磁器・石鏃・磨石・石皿	鹿大埋文調査室発掘調査
6	笹貫	宇宿町笹貫湯貫迫	弥生～古墳	笹貫式・須恵器・石錐・敲石	
7	亀ヶ原	魚見町東谷山小学校一帯	弥生～古墳		消滅
8	魚見ヶ原	" 旧樟南高グラウンド	縄文～中世	竪穴住居跡・土坑・押型文・市来式・黒川式・高橋式・北麓式・成川式・石鏃・石槍・石斧・石匙	本報告書
9	波ノ平城	上福元町波ノ平	南北朝	山城	消滅
10	高見	" 高見	古墳	成川式	
11	波ノ平	" 高見波ノ平	弥生～古墳	磨製石斧・成川式	
12	椿山城	" 武迫	中世	山城	消滅
13	梶城	中山町	室町	山城	詳細不明
14	城ヶ原城	上福元町希望ヶ丘	室町	山城	消滅
15	薬師堂	" 薬師堂	弥生(前)～古墳	竪穴住居跡・高橋1式・中津野式・石斧・軽石製品	
16	堂園	" 堂園	弥生～古墳	成川式	消滅
17	北麓	" 北麓	弥生～中世	溝・掘立柱建物・高橋式・北麓式・成川式・土師器・陶磁器・鉄製品・砥石・磨製石鏃	鹿市埋文報告21



第1図 周辺の遺跡分布図

Ⅲ 地層

調査対象地は野球場の跡地とあって整然と整地され、水はけなどを考慮して盛土などもしっかりしてある。弥生時代の遺跡を対象としたため、ほとんどは層までの掘削でやめ、それ以下の地層はC4区のトレンチで確認した。

層は表層で、約40cm～90cmの厚いグラウンド整地層である。2つの層に分かれ、a層はひじょうに固く、b層は固い層である。

層は旧表土（耕作土）で灰色がかった黒色土でサラサラし、白色軽石粒も含まれている。a層とb層に分かれ、a層が灰褐色土、b層が暗灰褐色土である。イモ穴のほとんどはb層の上面から掘り込んでいる。

層は黒色土で、弥生時代から中世までの包含層である。10cmほどの厚さのため削平されている所もある。

層は暗い黄褐色土で、この上面が弥生時代などの生活面であるとともに、縄文時代後・晩期の包含層である。

層は黄褐色火山灰で、いわゆるアカホヤ火山灰（約6,400年前に鬼界カルデラから噴出した火山灰）である。

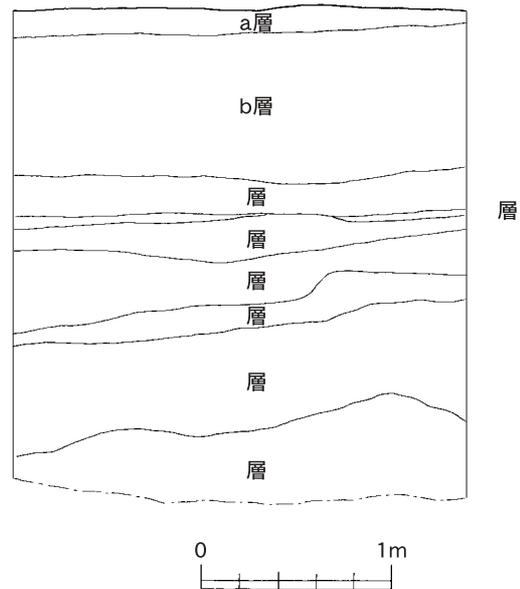
層はやや硬質の黄褐色土で、縄文時代早期の押型文土器の包含層と思われる。

層は硬質の黒色土である。

層は黄褐色の軽石層で、桜島から約11,500年前に噴出した「薩摩火山灰」といわれるものである。

層は粘質土で色調によってa・b・cの3層に分かれる。a層が黒褐色を呈し、しだいに薄くなってc層は茶褐色を呈している。

層は黄褐色土である。



第2図 基本地層図

Ⅳ 発掘調査の概要

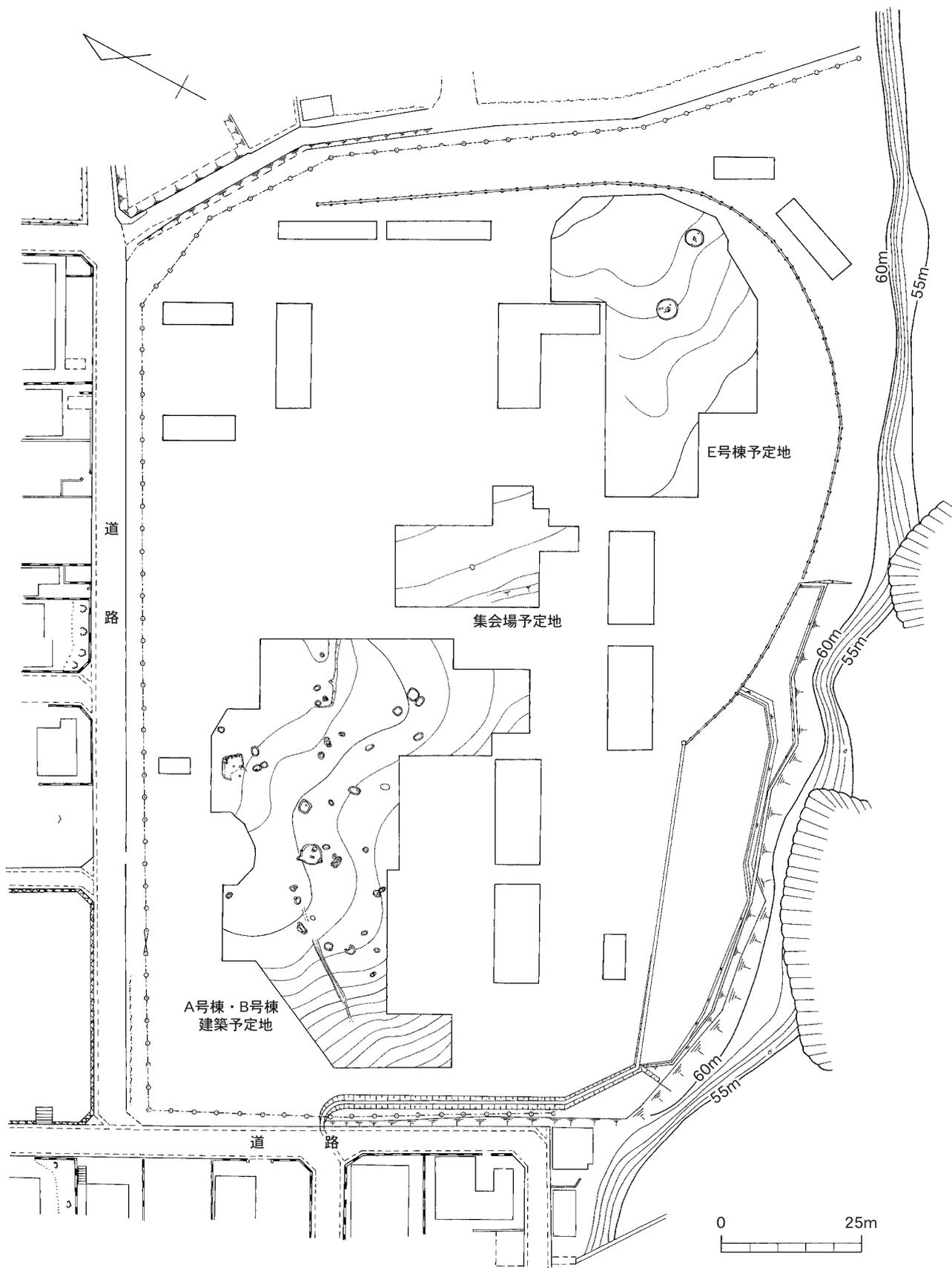
第1章 発掘調査の方法と成果

調査の対象地は確認調査によって約12,000㎡に広がる事がわかってきた。このなかで住宅や集会所の建つ場所を中心として本調査をすることとしたが、まずは全容を確認するため、全体的にトレンチを設定して包含層の有無を調査した。グリッドは10m四方をひとつの区とすることとし、その方向は団地区画とほとんど平行に設定した。主軸はN27度30分Wである。それぞれのグリッドは北側から南へアルファベット大文字のA・B・C・・・とし、西側から東へ1・2・3・・・とした。それぞれの区はA-1区、A-2区・・・と呼んでいる。

調査は以前高校の野球練習場として使われていたため、過去に整地されたあと、厚く盛土がされており、原地形は残していない。そのため盛土部分は重機を用いて除去

し、そのあと人力によって調査をした。調査の結果、西南側には深い谷がはいていたため、G・H-2・3区あたりは遺構面までがかなり深かった。また、北側・東側は削平を受けていたため遺物包含層のない所も広くみられ、深い遺構については残存している遺構だけでムラの状況すべてを語ることはできない。

確認トレンチの調査がおわった段階でかなりの調査期間を要していたため、後半は住居建設によって遺構が破壊される部分のみを調査することとし、土坑やピットのなかには上面を検出しただけで掘り上げてないものもあり、住居跡についても柱穴は掘り上げてない。このため、今後この用地内で工事が予定される場合は、再度調査完了の状況を確認する必要がある。



第3図 調査地点配置図

第2章 縄文時代

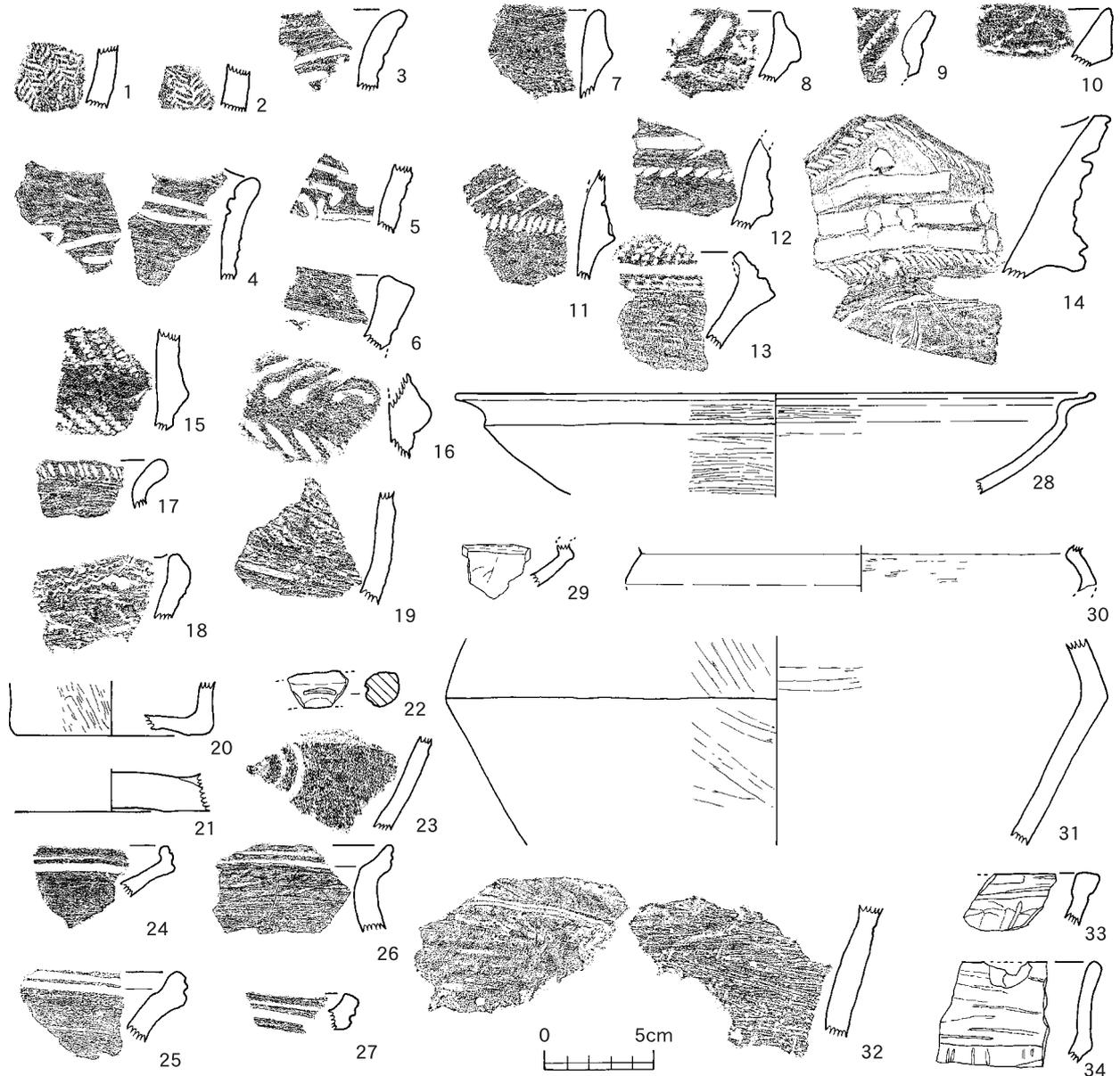
早期・後期・晩期の縄文土器49点がある。

早期中葉の山形押型文土器（1・2）がD8区で2点出土している。こまかい押型文で、外面が茶褐色、内面が淡黒褐色を呈し、焼成度は良い。石英・白色石・青灰色石などのこまかい石を含んでいる。

後期前葉の指宿式土器（3～5）がD6区・F6区などで3点出土している。外面には横方向・矩形・L字形などの凹線があり、波状口縁となる。4は内面にも二条の凹線がみられる。内外とも横方向のヘラナデで仕上げ、焼成度は良好である。淡茶褐色を基調とし、3が黄みがかり、4がやや赤みがかっている。5は灰色がかっている。4と5は外にススが付着している。石英・黄白色

石・茶色石などの細石を含んでいる。6も同時期と思われるが、口縁部が矩形を呈し分厚い。外面に横方向のヘラ凹線がみられる。内外ともいねいな横方向のヘラナデで、口唇部と内面は黒褐色を呈している。

後期中葉の市来式土器（7～22）は23点ある。口縁部は肥厚しているが、幅の狭いものと広いもの、有文のものと無文のもの、文様が口縁部のみにあるものと、胴部にまで施されているものなど多様である。7は無文でやや波状となる。8～10は肥厚帯が狭く、ここにヘラによる刺突文・横線・押圧文・二枚貝腹縁による斜方向あるいは横方向押圧文などがみられる。9の内面は剥脱し、10は磨滅が目立つ。11～14は肥厚帯が広いもので、ここにヘラによる沈線・凹線・刺突文・押圧文などがみられ



第4図 縄文土器

る。13は鋭く屈曲しているが、他は鈍角になっており、14はやや大型で、波状になっている。15・16は肥厚帯だけでなく胴部までヘラによる斜め凹線・刺突文、二枚貝腹縁による押圧文がみられる。

17と18は口縁端が丸みをもつもので、17は口唇部に右下がりのヘラキザミが、18は突起部がやや肥厚する波状の口縁端に横方向の二枚貝押圧文が付される。

22は把手と思われる直径1.5cmほどの棒状のもので、一面に短い凹線がみられる。底部は安定した平底で、20は直径9cmあまりのあげ底となる底で、丸みをおびてまっすぐ立ちあがる。内外ともヘラナデで仕上げている。

21は厚さ2cm足らずの分厚い作りで大型となる。立ち上がり部の内面に粘土の貼付け痕がみられる。茶褐色を呈しているが、底には白粉が付着している。

23は鐘崎式土器である。胴下部に同心となる弧状凹線があり、その上の屈曲部付近に横方向の凹線がある。黄褐色・灰褐色を呈し、胎土は市来式土器と同じであることから在地で作られたものと思われる。

24～27は後期後葉の御領式土器である。24は口縁端が鋭角に立ち上がり、ここに二条の凹線が施されている精製浅鉢である。28・29は晩期前葉の入佐式土器の浅鉢である。28は口縁直径が29.5cmあり、口縁端が短く立ちあがっている。丸底風の底から、丸みを帯びて肩部へ至り、鋭い稜をもって外へ強く反っている。外面は淡茶褐色を呈しているが、部分的に赤みを帯び、内面は黄みがかった淡茶褐色を呈している。

30～34は晩期中葉の黒川式土器で、浅鉢・深鉢・鉢がある。浅鉢(30)は頸部の直径が20.2cmあり、短い肩部から丸みをもった胴部へ移っている。深鉢(31～33)は口縁部がやや肥厚するもので、胴部中央は直径が30.5cmと大きく、ゆるやかな稜をもつ。32の外面には浅い二条の凹線がみられる。31・33の外面はヘラミガキで仕上げている。34はやや外反ぎみでまっすぐ立ちあがる口縁部と、稜をもって狭くなって底へ移る胴部からなる鉢で、外面はヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデで仕上げる。

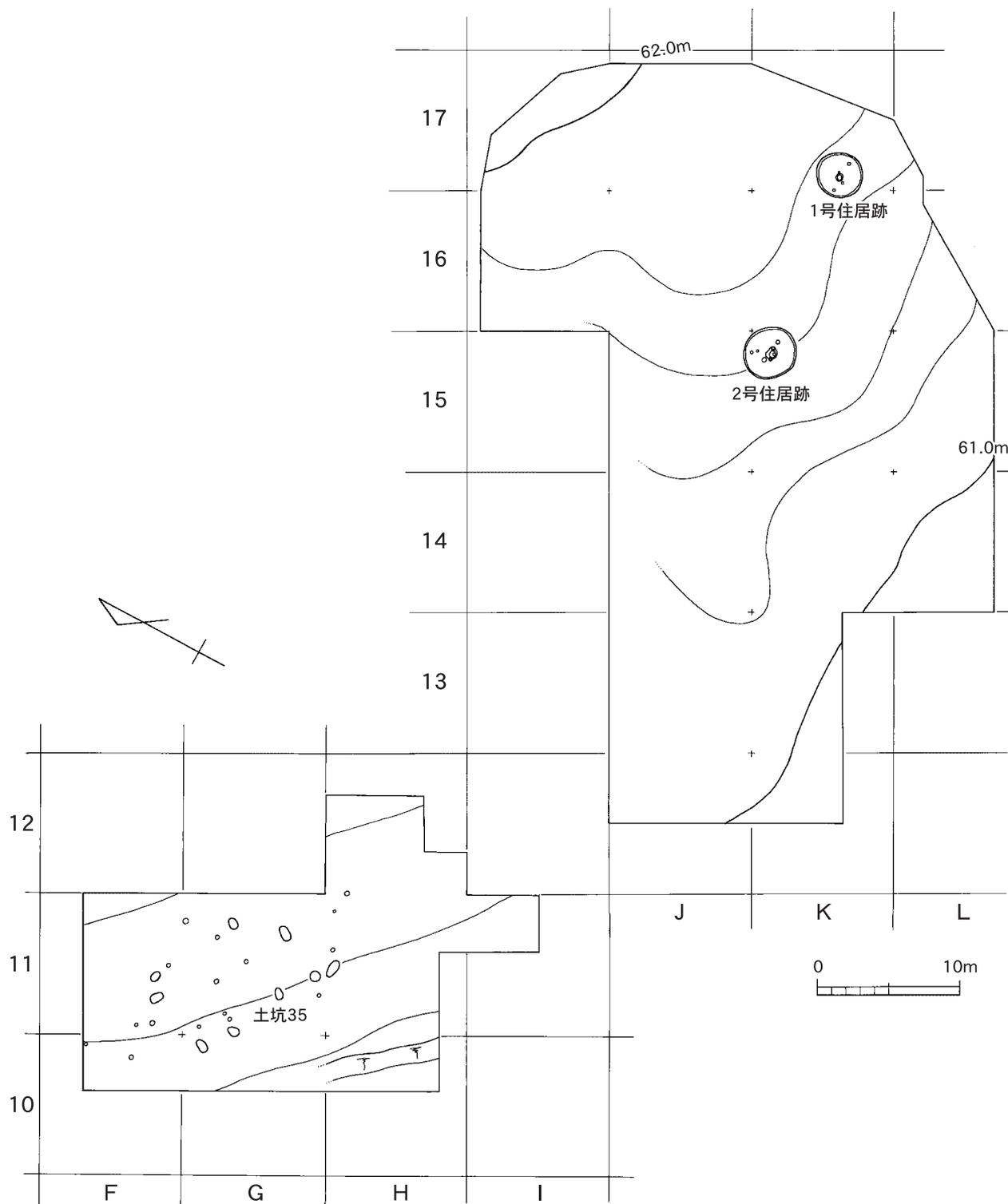
第2表 縄文土器観察表

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
1	押型文	D-8		山形押型文	ヘラ横ナデ	茶褐色	淡黒褐色	石英・白色石・青灰色石など細石	良	
2	押型文	D-8	表	山形押型文	ヘラ横ナデ	茶褐色	淡黒褐色	石英・白色石・青灰色石など細石	良	
3	指宿式	F-6		ヘラ横ナデ・ヘラによる矩形凹線	ヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	黄白石・石英などの細い石	普	
4	指宿式	-	表採	ヘラによる矩形横凹線・ヘラナデ	ヘラ横線・ヘラナデ	やや赤みがかった淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石・茶石など4mm大の小石	良く堅い	スス付着
5	指宿式	D-6		ヘラ凹線・丁寧なヘラナデ	ヘラナデ条痕	灰茶褐色	灰茶褐色	白英・茶色石などの細石	良	スス付着
6		L-16		横のヘラ凹線・丁寧なヘラ横ナデ	丁寧な横ナデ	茶褐色	口唇黒褐色	茶色石・黄白石・石英などの細石	良	
7	市来式	L-15		ヘラ横ナデ	条痕ざみヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石など細石	良	
8	市来式	-	表採	ヘラ凹線・横線に挟まれた刺突文	外内ともヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	白色石・石英・黄白石などの細石	普	
9	市来式	E-6	表	ヘラ横ナデ斜方向二枚貝押圧	ヘラ横ナデ	灰褐色	灰褐色	長石・黄白石などの細砂	良	
10	市来式	K-16		ヘラナデのあと二枚貝押圧	丁寧なヘラナデ	明茶褐色	明褐色	白色石・石英・黄白石などの細石	普	摩滅が目立つ
11	市来式	-	表採	丁寧な横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	灰がかった淡茶褐色	茶褐色	雲母・白色石などの細石の多い砂質土	良	
12	市来式	-	表採	貝殻条痕	ヘラ横ナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	白色石・石英などの細石の多い砂質土	普	
13	市来式	ノースタガ	表採	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	茶色石・白色石・石英などの細石多	良	スス付着
14	市来式	隣の池木園	表採	ヘラ横ナデ	ヘラ横斜ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・黄白石などの細石の多い砂質土	良	
15	市来式	L-16		ヘラ横ナデのあと二枚貝押圧	横貝殻条痕	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	良	
16	市来式	E-6		ヘラナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	金雲母・白色石の細石多	普	
17	市来式	H-4	土坑一括	ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黒灰色	黒灰色	石英・白色石・黄白石などの細石	良	
18	市来式	L-16		ヘラ横ナデのあと二枚貝押圧	ヘラ横斜ナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	黄白石・石英などの細石	良	
19	市来式	G-9	溝	横斜貝殻条痕	ヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	黄白石・白色石・石英などの細石多	良	
20	市来式	-	表採	ヘラナデ・底ヘラナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
21	市来式	P-81	表	ヘラナデ底は丁寧	ヘラナデ	茶褐色(底は白粉)	茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
22	市来式	-	表採	同心弧状沈線	ヘラナデ	黄褐色・灰褐色	黄褐色・灰褐色	白色石・石英・茶色石などの細石の多い砂質土	普	
23	鐘崎式	-	表採	ヘラナデ	ヘラナデ	黄褐色	黄褐色	白色石・石英・雲母などの細石多	普	把手
24	御領式	C-7		横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	灰褐色	黒褐色	-	普	
25	御領式	E-7		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	白色石・石英・茶色石などの細石の多い砂質土	普	
26	御領式	-	-	丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・長石などの細石の多い砂質土	良	スス付着
27	御領式	E-6		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・長石などの細石の多い砂質土	良	
28	入佐式	D-7		ヘラ横ミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色部分的に赤み	黄みがかった淡茶褐色	白色石・石英・茶色石などの細石	良	
29	入佐式	K-15		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	灰褐色	-	良	
30	黒川式	K-16		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	乳灰色	乳灰色	石英などの細かい石	普	
31	黒川式	E-7		斜めヘラみがかき	ヘラ横ナデ剥脱目立つ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石など・細石の多い砂質土・4mm大の茶色石も有り	良	スス付着
32	黒川式	K-16		口縁・横ヘラミガキ下・底ヘラミガキ	口唇部ヘラミガキ	茶褐色	黒褐色	白色石・黄白色石などの多い砂質土	良	
33	黒川式	-	表採	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰黒褐色	灰黒褐色	石英・白色石・茶色石・青灰色石などの細石4mm大有り	良	
34	黒川式	C-15		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石など細石	良	

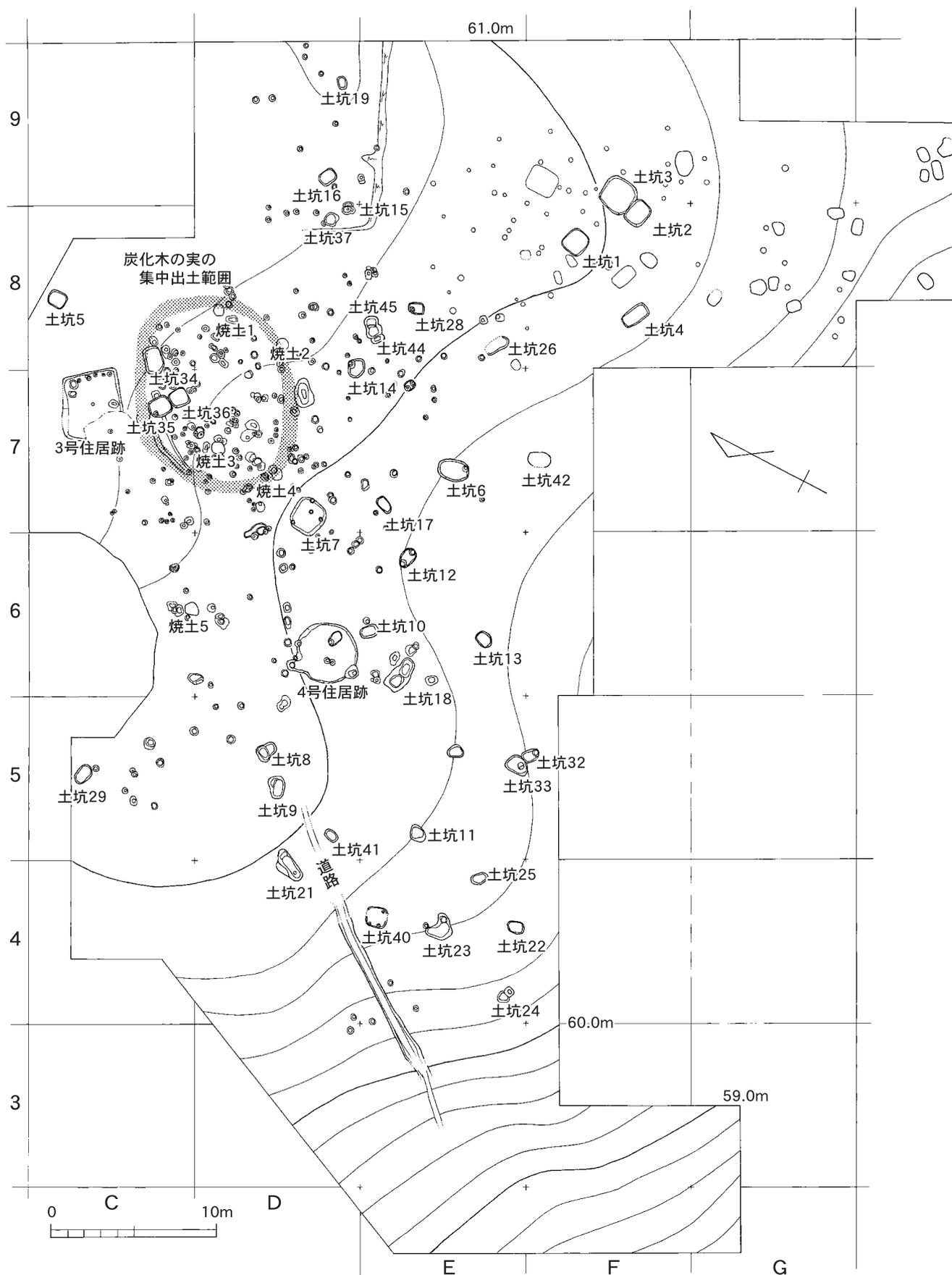
第3章 弥生時代

本遺跡の主体となる時代で、竪穴住居や土坑・ピット・溝などの遺構と、甕形土器などの土器、石鏃・打製

石斧などの石器、石偶などの石製品、炭化木の実などが発見されている。



第5図 弥生時代の遺構配置図(1)



第6図 弥生時代の遺構配置図(2)

第1節 遺構

1 竪穴住居跡

調査区内で、6・7区周辺と、15・17区周辺でそれぞれ2軒ずつ、あわせて4軒検出された。

1) 1号住居跡(第7図~第11図35~51, S1・S2, S15, S20~S22, S36, Ss1~Ss6)

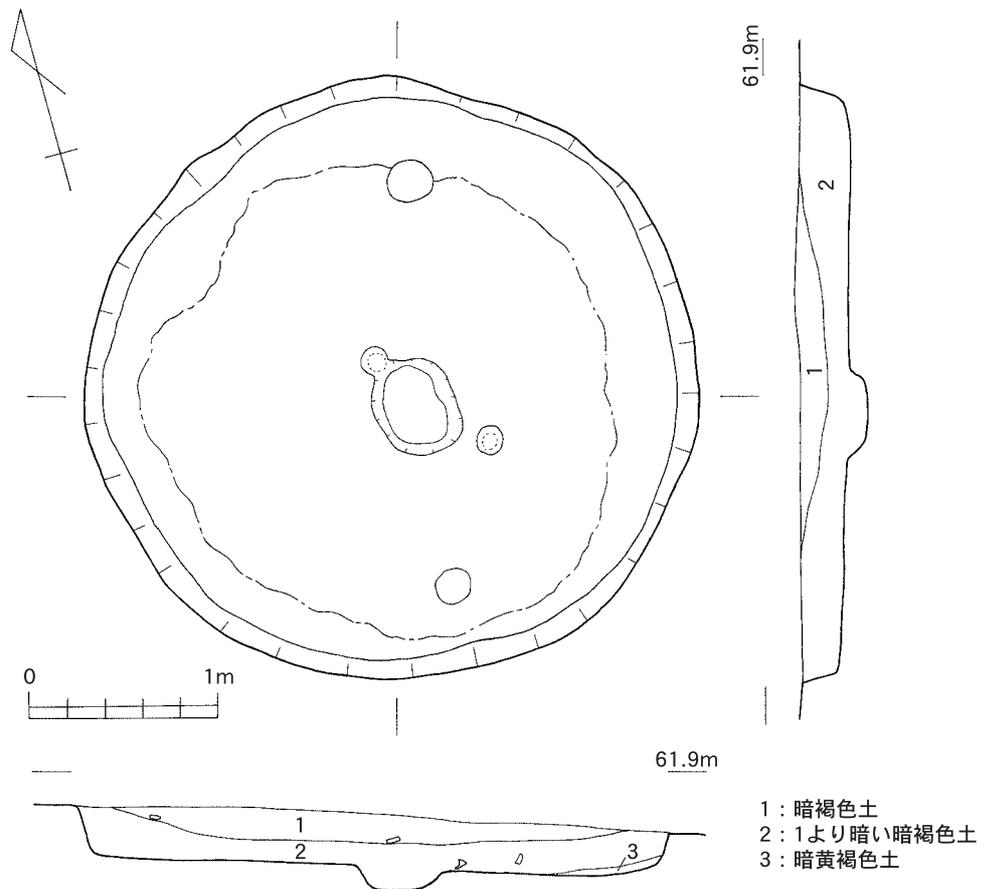
東側の15・17区周辺で2軒検出されたが、もっとも東のK17区で検出されたのが1号住居跡である。直径が3.2mの円形を呈し、深さは約20cmある。主柱穴ははっきりしないが、内部に柱穴と思われる2本のピットがある。柱間は芯芯距離で約220cmあり、それぞれのピットは直径が約20cmだが、深さは掘りあげなかったため不明である。中央に炉穴と思われる45×55cm、深さ10cmほどのくぼみがあり、その脇には直径15cmほどの小さな穴が2本ある。芯芯距離は約70cmである。この形状からいわゆる松菊里タイプの住居かと思われる。中央の直径2.5mほどがやや堅くなっており、周辺へ行くにつれ硬度は弱い。床面からサヌカイトのチップが多数出土している。

多くの土器・石器・石製品が出土している。

甕形土器(35~46)は三角突帯が貼付されるものと、

台形様、あるいは矩形の突帯が貼付されるものがある。35・36は口縁端に付された三角突帯に刻目の付くもので、35は二条ある。刻目は三角突帯の先端に小さく付く。35の口縁直径は32cmあり、35が丸みをおびて内傾ぎみに底へ向かうのに対して、36は外傾している。外面は条痕状のハケナデで、35はそのあと部分的にヘラミガキがみられる。内面はヘラナデである。37は如意状口縁のもので、頸部に三角突帯が付されている。内・外面ともミガキに近いいねいなヘラナデで仕上げている。38~43は台形状の貼付突帯で端部はくぼんでいる。39・40・42は刻目が付されるが、42の施文具は二枚貝である。また39は刻みを先に施してから凹線を引くのに対し、40・42は凹線が先である。38と43は二条突帯である。42は貼付部で剥離している。39を除きヘラナデで仕上げているが、内面は横方向、外はていねいである。39の外だけが縦方向ヘラナデである。底は低い脚台状のものと、平底のものがあるが、いずれも使用している胎土は粗い。45はカゴ状のものの上で作っており、白粉が付着している。

壺形土器(47~50)の口縁部は直径が10.5cmと小さいものから23cmもの大きいものまであり、いずれも外反し、端部は丸みをおびている。48・49は端部にくぼみがみられ、内面には三角突帯が貼付されているが、49の突帯に



第7図 1号住居跡

は4個のヘラ刻みがみられる。飛び飛びに施されているようである。外面はヘラミガキあるいはいねいなヘラナデで仕上げ、内面も同様にいねいである。肩部には二条の凹線がみられる。

51は台付鉢形土器で、端部には凹線がみられる。

石器には石鏃・石錐・打製石斧・くぼみ石・石皿・擦痕石器などがある。石鏃(S1・2)は5点出土している。いずれも平基の小型のものでサヌカイト製の1点は未製品である。S15はサヌカイト製の石錐である。逆三角形の剥片を利用し、錐部をこまかく加工している。打製石斧は2点あり、S20は頁岩製の打製石斧である。先端がとがった刃部破片で、全体的に磨耗している。あと1点は緑泥片岩製の破損品である。くぼみ石(S22)は砲丸状のもので、両面の中央が浅くくぼんでいる。一か所に欠損部があり、敲石としても使われた可能性がある。石皿は2点あり、ともに安山岩製でS36は両面を使用し、欠損している。

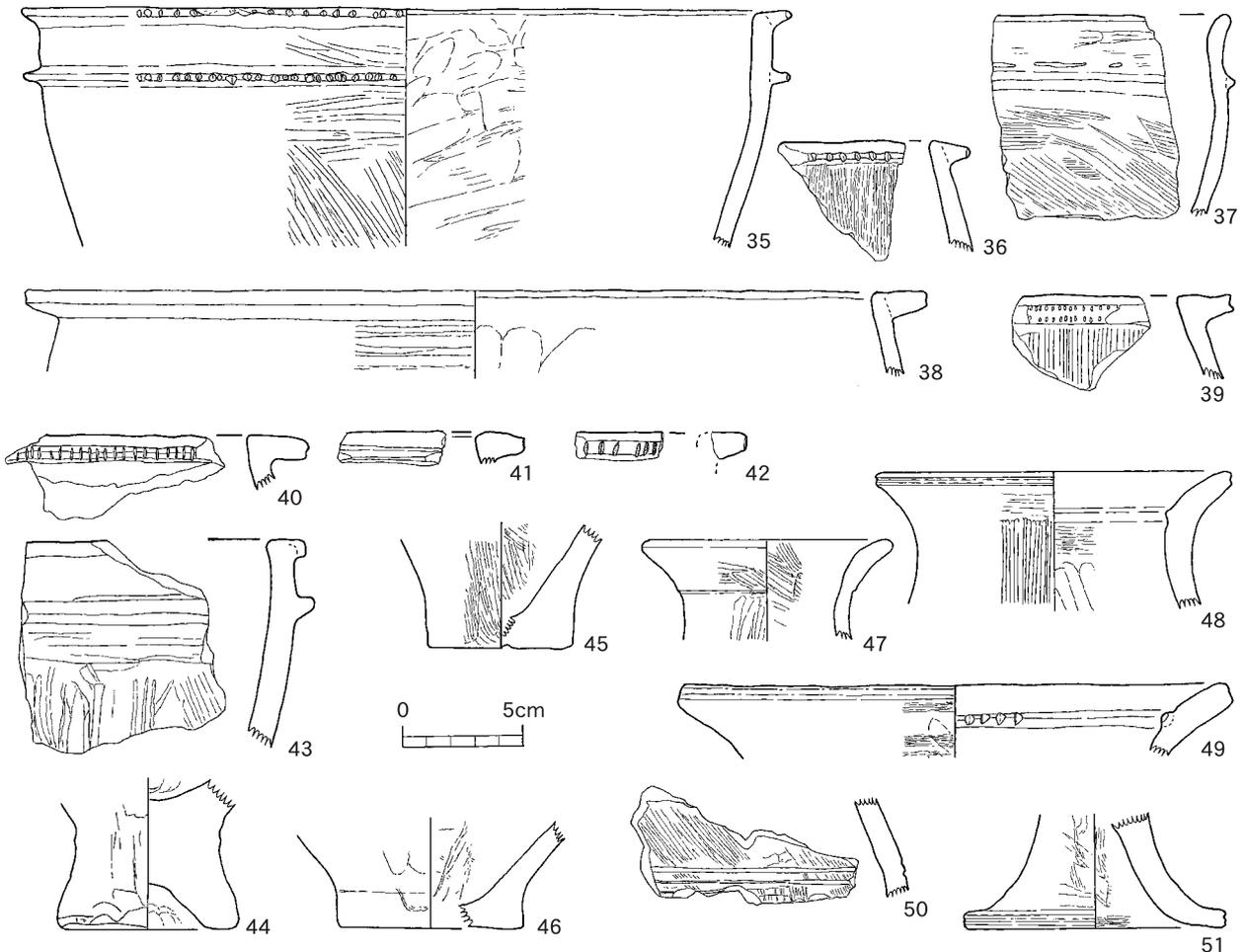
軽石製品も多い。Ss1は半欠品で、脚部と股を形づくった石偶と思われる。Ss2は二面をこすって平坦にし、その逆面に筋状のへこみがみられる。Ss3は直径4cm前後の小さい石を用い、片面に縦筋がみられること

から女陰部と思われる。Ss4も小型のもので、片面にふたつの丸い小穴が並んでいる。Ss6は円形状の石の両面にくぼみがみられる。Ss5は円盤状に整形した大型品である。

出土した土器には前期のもの、中期のものがあるが、中期の土器は数が少ないことから混入とは思えず、この住居の時期は中期前葉の北麓式期と思われる。なお、50の破片は2号住居跡の破片と接合していることから、この2軒は並行した時期であろう。

2) 2号住居跡(第9図・第10図・第12図, 52~63, S3~S9, S16~S18, S23~S25・S33)

1号住居跡の西側約15mのK15区で検出された住居跡で、直径が3.45×3.65mの円形を呈し、深さは約20cmある。主柱穴は不明だが、中央にある直径35~45cmのピットは不明瞭である。中央に炉穴と思われる直径70cm、深さ20cmほどの窪みがあり、その縁に直径30cm、深さ30~40cmほどの小さなピットがある。芯芯距離は約80cmで、これも1号住居跡と同様、松菊里タイプの住居と思われる。土坑内では炭化材が多く検出された。床は2.5m~2.8mの範囲に硬化し、周辺は軟らかくなっている。



第8図 1号住居跡出土の土器

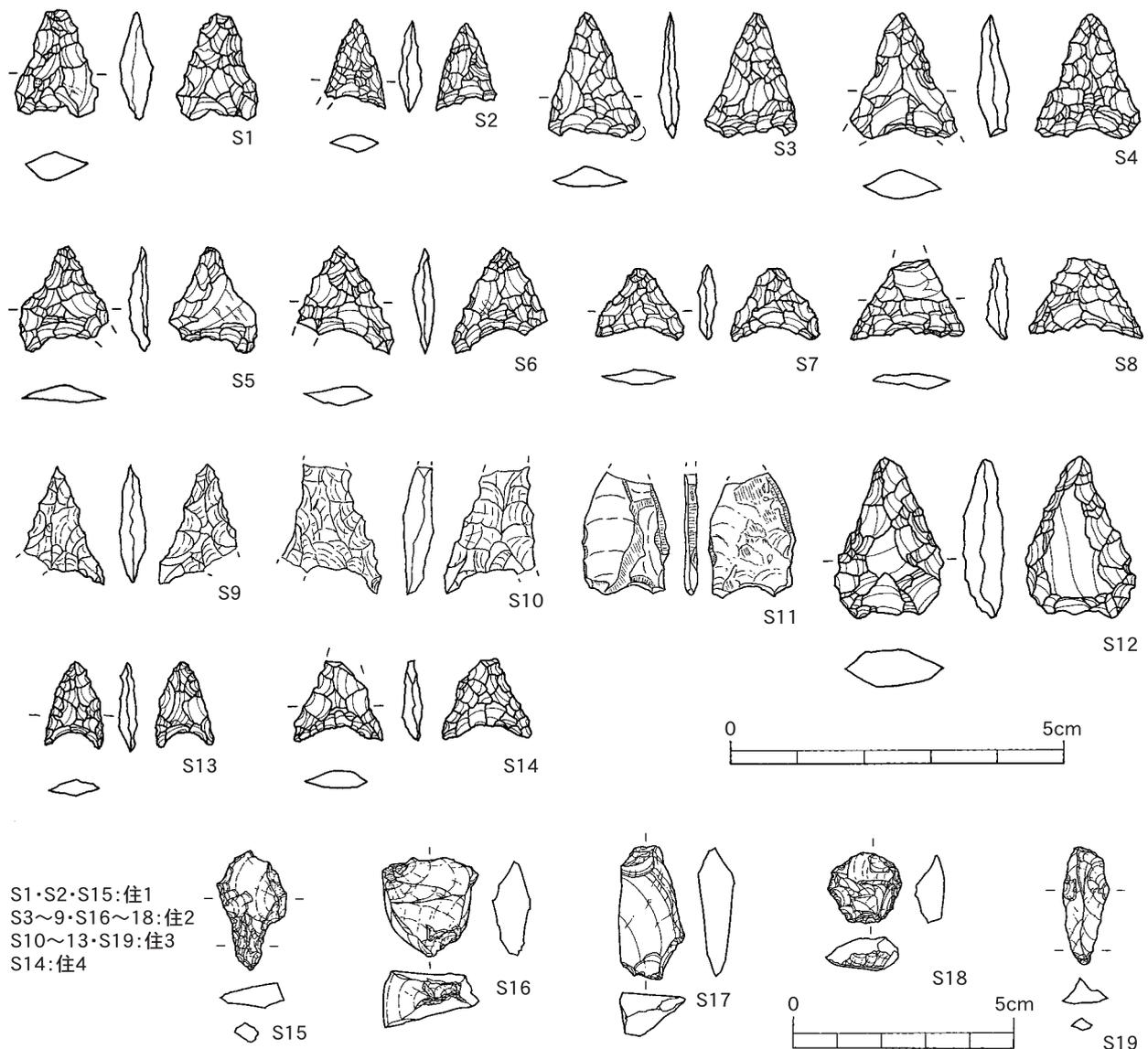
多くの土器・石器が出土している。

甕形土器（52～58）は口縁の少し下に矩形様の突帯を貼付けたものと、口縁端に三角突帯を付けたものがある。52は口縁直径が32cmで、口縁端と突帯は矩形様を呈する。中央付近に3個の連続した山形突起があり、内外ともヘラミガキ、あるいはミガキ風のていねいなナデで仕上げている。53・54は端に三角突帯が貼付けられ、小さな刻みが付される。55・56はやや下がった所に突帯を貼付けられ、55は2条突帯でヘラ刻みが付されている。56の突帯はカマボコ形で、内外ともヘラミガキで仕上げ光沢を呈している。57はやや内反する器形で、刻目突帯は一周しない。底は安定した平底で白粉が付いている。

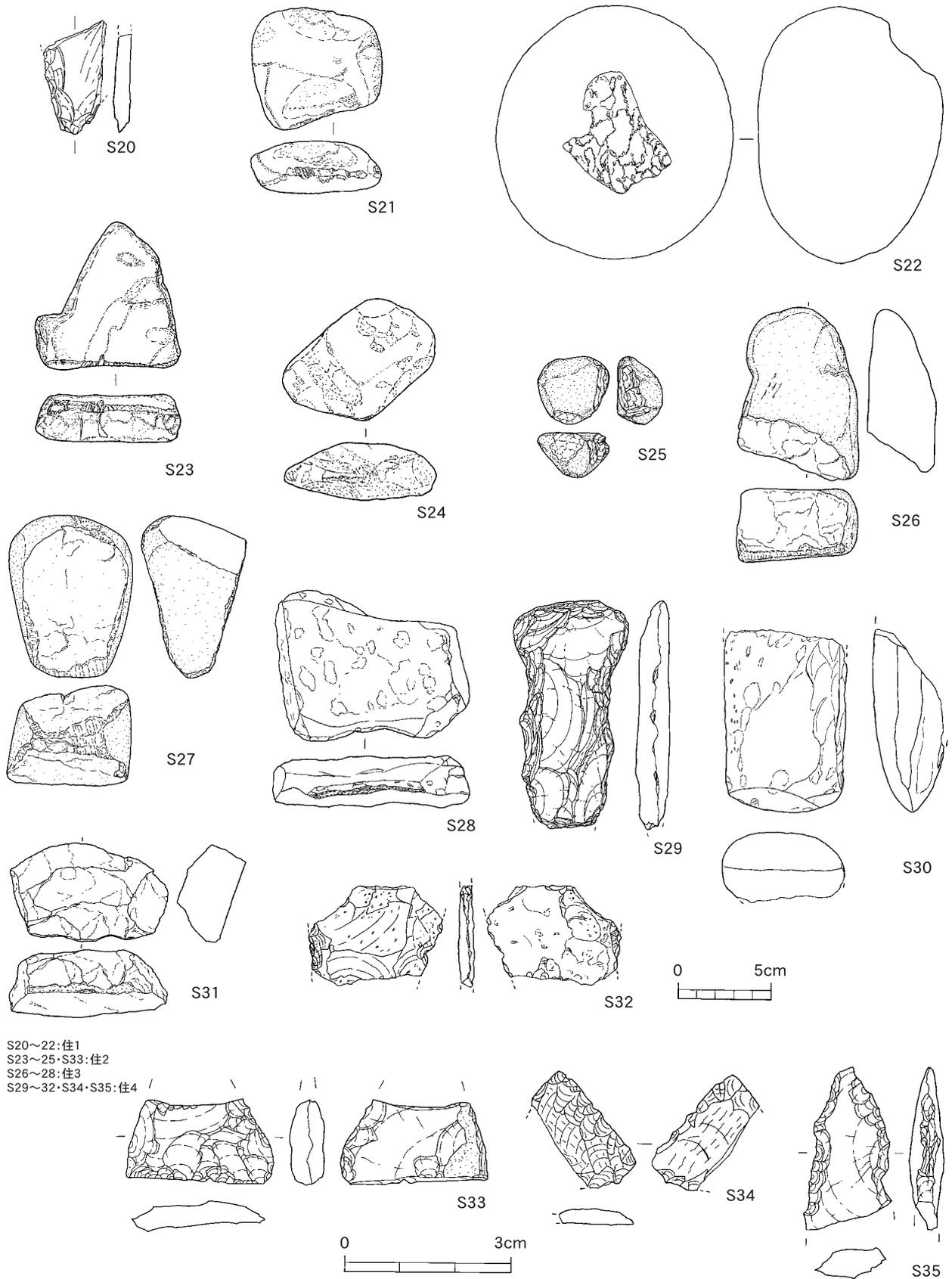
壺形土器（59～63）は外反する口縁で、59は丸みをおびた端部で、60は端部に凹線がみられる。肩部には二条の沈線がみられる。62は胴部の破片で、外面を横方向の

ハケナデで仕上げたあと、縦方向の沈線がみられる。文様なのか絵画なのかははっきりしない。底部は小さな円盤貼付け状のもので、内面剥脱が目立つ。これらはいずれもヘラミガキあるいはていねいなヘラナデ仕上げである。

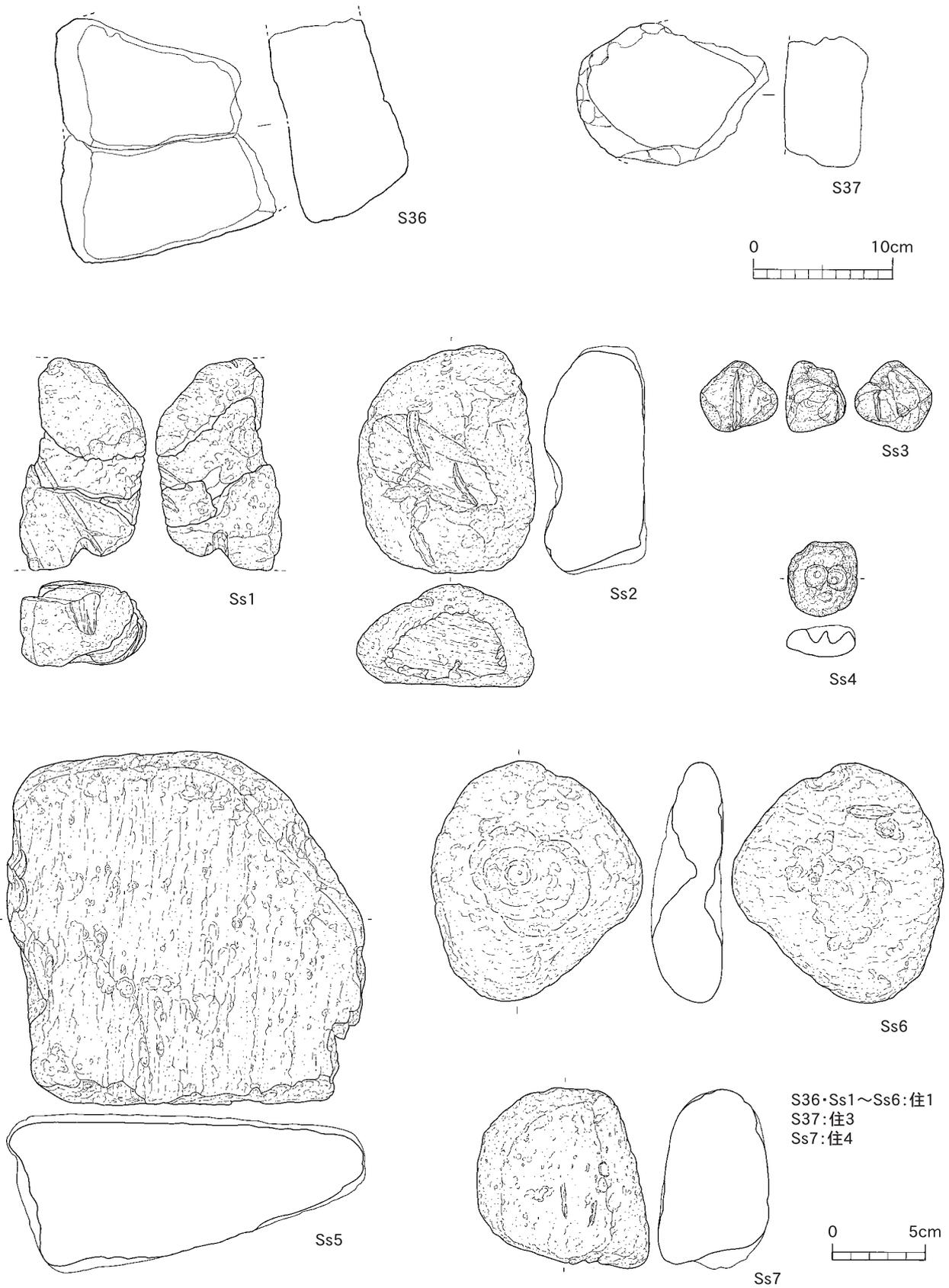
石器も多く、石鏃、ピエス・エスキュー、擦痕石器、石皿が出土している。石鏃は11点出土しており、うち3点（うち2点が大型）は未製品である。小型品が多く、正三角形で浅いえぐりのあるもの、二等辺三角形で平基のもの、同じ形で浅いえぐりのもの、剥片鏃がある。S33はサヌカイト製大型石鏃の未製品である。形は整っているが、上部が欠けたためか押圧剥離を途中でやめている。ピエスエスキューは3点ある。分厚い剥片を用い、三角形のもの、長方形のもの、指状のものがあり、S17は短側辺の両側とも用いている。擦痕石器は3点あり、いずれも砂岩円礫を使い、S23は三角形の二辺を、S24



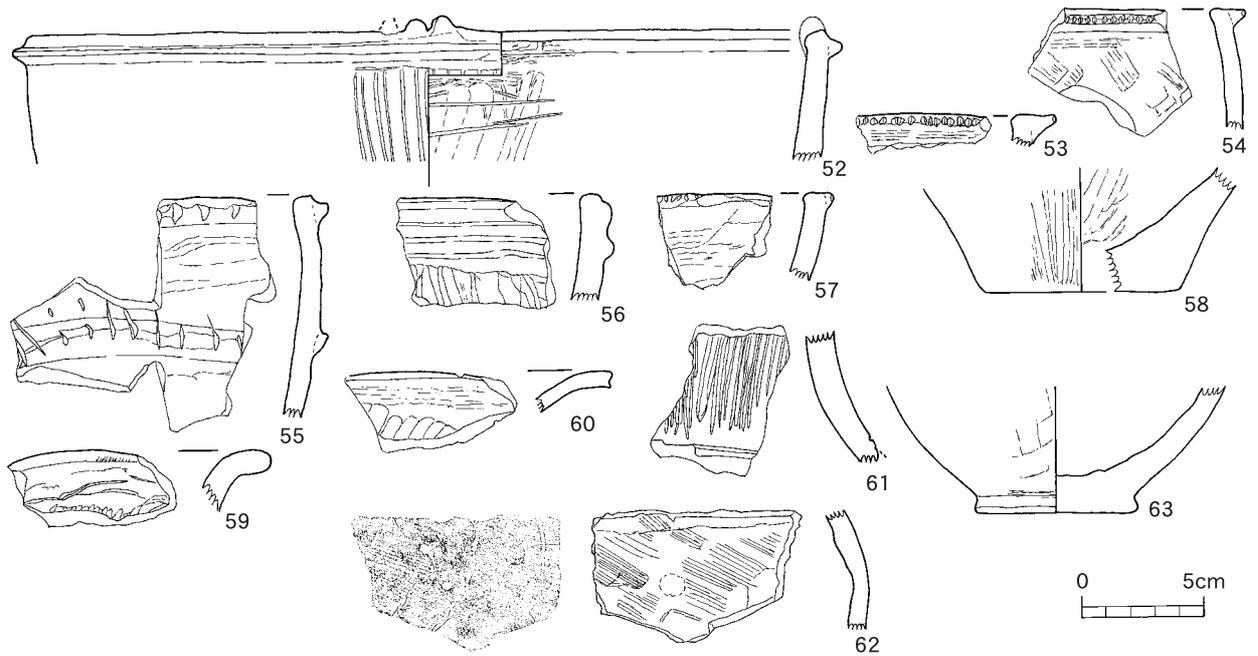
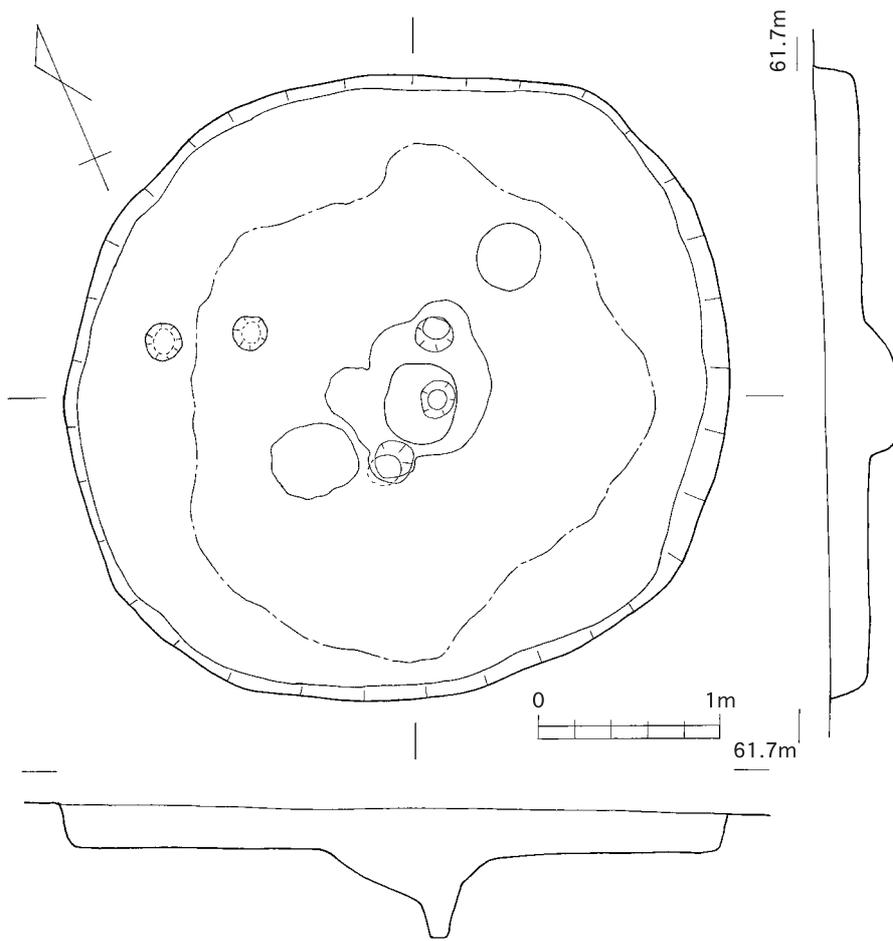
第9図 住居跡出土の石器(1)



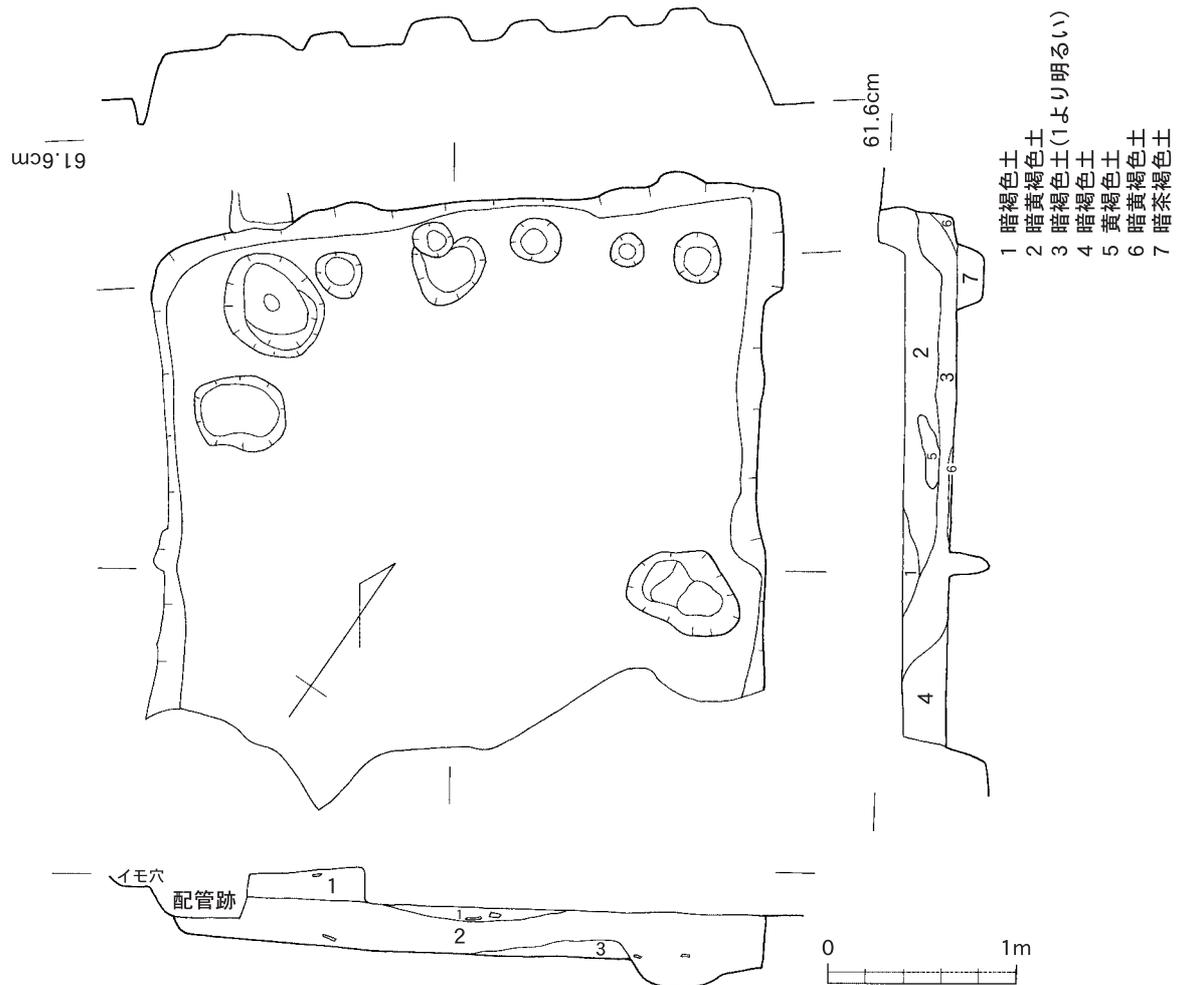
第10図 住居跡出土の石器(2)



第11図 住居跡出土の石器(3)と軽石製品



第12図 2号住居跡と出土の土器



第13図 3号住居跡

は方形の一边を用いている。S25はにぎりこぶし状の円礫の2か所に敲打痕がある敲石である。同一個体と思われる石皿2点あるが、いずれも薄くはがれている。

出土した土器には前期と、中期のものがあるが、量的に1号住居跡と同時期の北麓式期のものと思われる。

3) 3号住居跡(第9~11・13・14図, 64~76, S10~13, S19, S26~28, S37)

6・7区周辺で2軒の住居跡が検出されたが、北側のC7区で検出されたのが3号住居跡である。南側の一部を新しい攪乱土坑で壊されているが、一边が3.1mほどの方形をしており深さは約25cmある。中に数個の柱穴があるが、支柱穴とは成りにくい。ただ北辺の壁沿いには5本ほどの小穴が並んでおり壁柱の可能性もある。

土器には甕形土器・壺形土器・高环形土器がある。

甕形土器(64~69)には如意状口縁のもの、突帯文土器とがある。64は口縁直径20.5cmの如意状口縁のもので、頸部に台形の貼付突帯があり、ここと口縁端にかけて細かいヘラ刻みがみられる。内外ともヘラミガキで仕上げ、光沢を呈する。65は口縁直径が26cmある突帯文土器

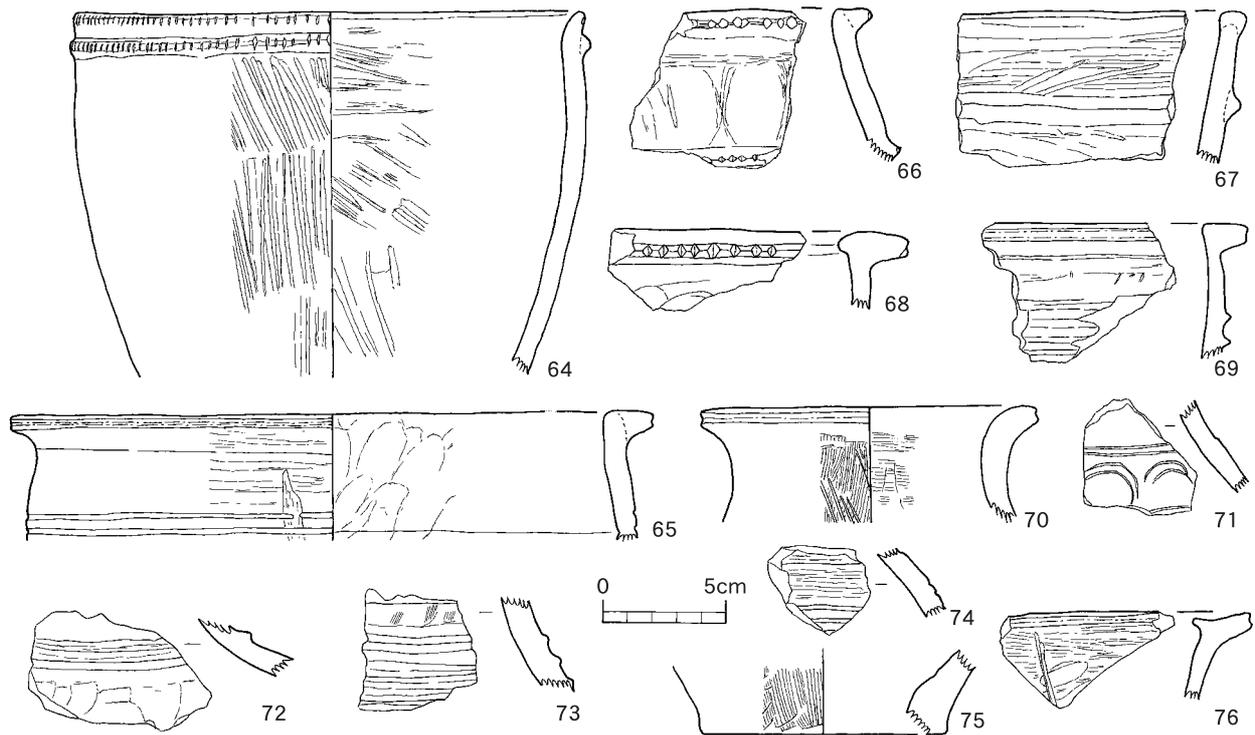
で、矩形を呈する口縁端に凹線が巡っている。口縁下には二条の沈線が巡っている。66は口縁が内傾するもので口縁部と肩部にある二条の三角突帯には小さいヘラ刻みがみられる。67は外へ開く器形をし、口縁端と口縁下にかまぼこ形の貼付突帯がみられる。68は内外に張り出す口縁部で、外側には凹線がみられ、その下方に深いヘラ刻みがみられる。69も口唇部に凹線のみみられるもので、口縁下に二条の三角突帯がみられる。

壺形土器(70~75)の口縁は直径が13.5cmあり、ゆるやかに外反する。丸みをもった口唇部には凹線がみられる。段をもつ肩部には二条の沈線に挟まれた連弧文のあるもの、三角突帯のあるもの、凹線があるものがある。72は外面に丹塗りがみられる。底部は安定した平底だが、内面が全面剥脱している。

高环形土器(76)は口縁端が内外へ張り出す深鉢形の坏部で、内側は鋭い三角突帯、外側は凹線が巡っている。

土器には前期前葉のものもみられるが、中期前葉のものが多いことからこの住居は中期前葉のものである。

石器には石鏃・磨製石鏃・石錐・擦痕石器・磨石・石皿がある。石鏃(S10・S12・S13)はサヌカイト製の



第14図 3号住居跡出土の土器

ものが3点あり、二等辺三角形でえぐりのある小型のもの、先端と基部の欠けた二等辺三角形でえぐりのあるもの、二等辺三角形で平基のものがある。粘板岩製の磨製石鏃(S11)は先端が欠けた二等辺三角形で、部分的に磨いており、未製品の可能性がある。S19は三角柱形の剥片を利用した石錐で、先端部のみを細かく加工している。S26~S28は擦痕石器である。S26は円礫の欠けた短側面部の角部をL字形に使用している。S27は円礫の一面が欠けているが、その角部を使用している。いずれも長辺と直交した筋状の擦痕がみえる。S28は角礫を使用したもので、使用により内弯している。磨石は砂岩製の破片で、丸い形をしている。石皿は3点あり、いずれも安山岩製の破片である。S37は平坦である。

この住居は、前期前葉の土器もあるが、中期前葉の北麓式土器が多いことから中期前葉のものと思われる。

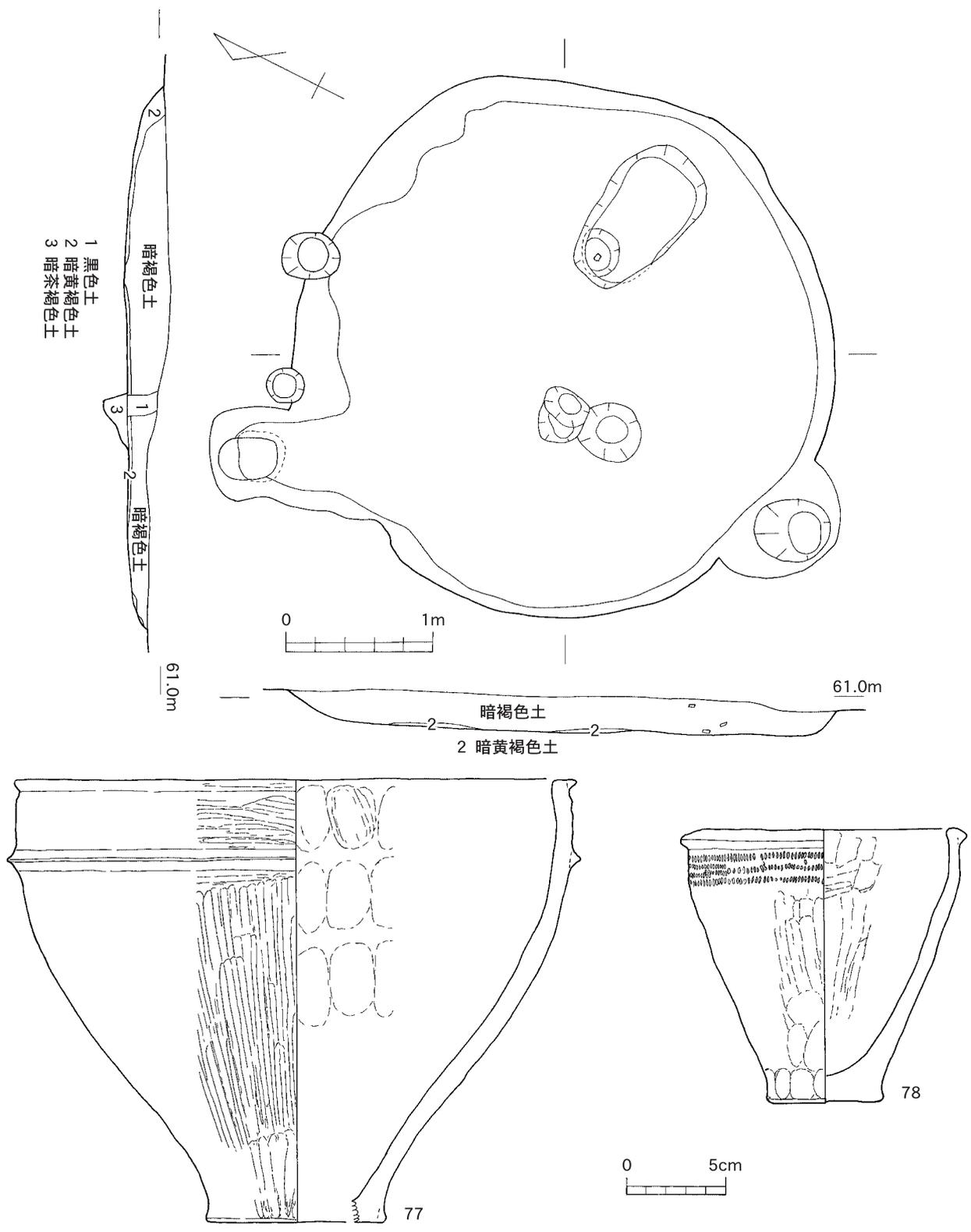
4) 4号住居跡(第9図~第11図, 第15図・第16図, 77~96, S14, S29~S32, S34, S35, Ss7)

3号住居跡の南側20mの所にある直径3.7mほどの円形をした住居跡で、深さが10~15cmある。支柱穴は不明だが、壁際へ南北に並ぶ2本は支柱穴の可能性はある。これらは直径が約40~50cm、深さが60~90cmほどで、芯芯の柱間は3.8mある。中央にある芯芯距離1.2mの2本の柱もその可能性がある。それぞれの柱は直径30cm、深さ80cmと直径40cm、深さ50cmある。また、東側には長径105cm、短径55cmのだ円形をした深さ50cmの土坑がある。埋土中央で壺形土器の完形品が出土した。

土器には甕形土器・壺形土器・台付鉢形土器がある。

甕形土器(77~86)は突帯文土器であるが、突帯が口縁端にあるものと、やや下がってあるもの(84)、三角突帯とだ円状に長く延びるもの(81・82)、小さく内外へ張り出すもの(80)、刻目のあるもの(79・81・84・85)とないものなど多様である。口縁直径は78が15cm、77・79が27~28cm、80・81が35~36cmある。79は口縁下に一条以上の凹線が巡っている。80は口縁下に二条の三角突帯が巡っている。81は口縁端の内面にもヘラ刻みが巡る。82は口縁がやや上向きになっている。底は安定した平底である。調整はいずれもいねいであるが、83~85はミガキが加えられている。

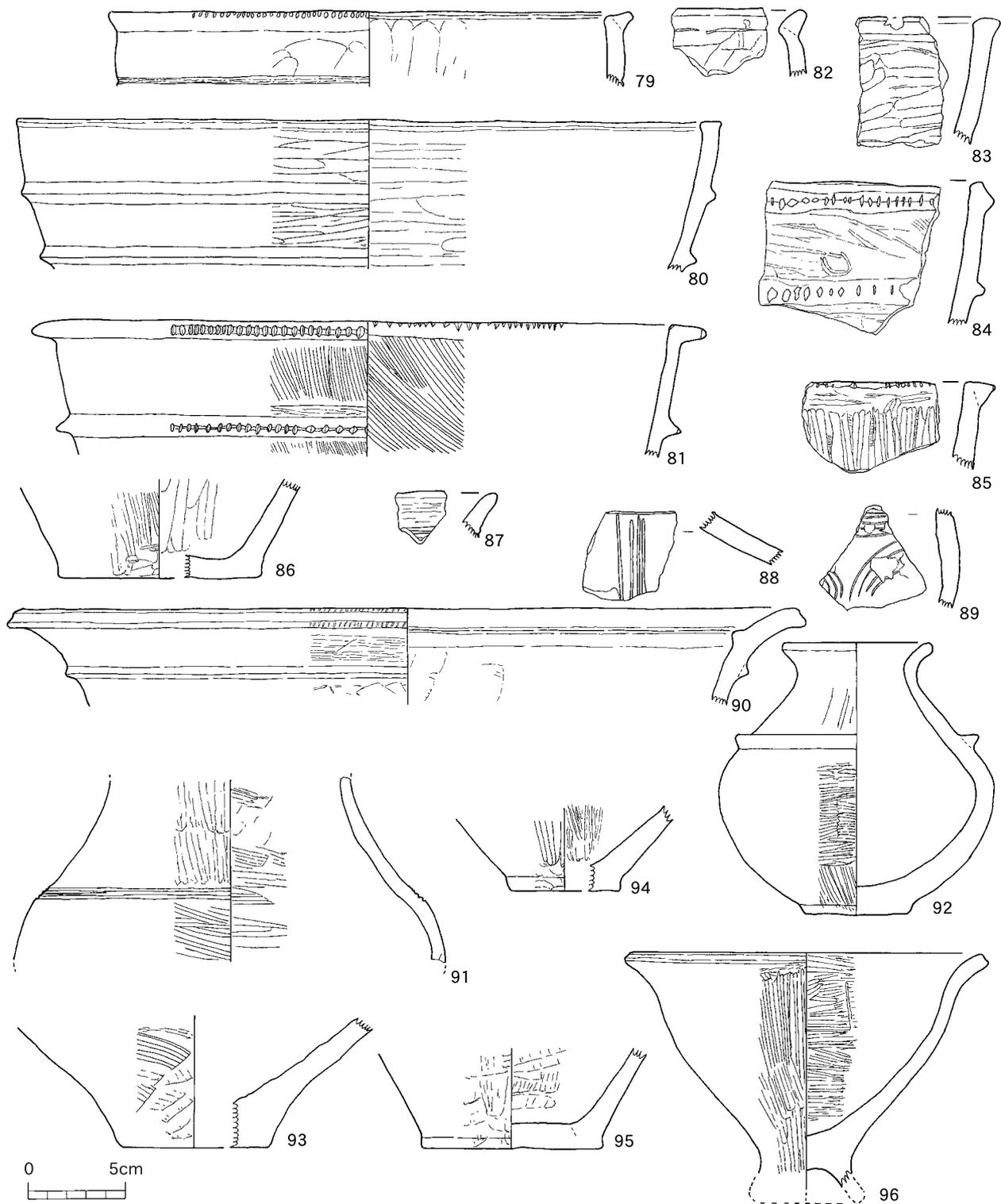
壺形土器(87~95)は、口縁部が外反するもので、87は口縁下に二条の凹線が巡っている。90は直径が41cmと広い広口壺で、口縁端を凹線が巡り、浅いヘラ刻みが施されている。口縁下の内外には三角突帯が貼付けられ、内側の突帯周辺は丹塗りが施されている。88・89は肩部であるが、88は頸部下を沈線が巡り、その下に縦方向の沈線文が施されている。89は頸部下に一条の凹線が巡り、その下に四条のヘラ沈線文と重弧文が施されている。内面の剥脱が目立つ。91はなで肩で胴の張る器形で、肩の下部に四条の沈線が巡っている。上下の貼付部が磨滅している。92は口縁直径が7.5cm、胴部最大径が14cm、底部直径が5.5cm、高さが14cmの小型壺形土器で、口縁はくびれた頸部から強く外反し、肩下部に三角突帯が貼付けられている。外面上部はていねいなヘラナデ、下部はヘラミガキで、内面はヘラナデだが、剥脱が目立つ。表面



第15図 4号住居跡とその出土土器(1)

には化粧土が塗られているのか、外面の剥脱も目立つ。底部は安定した平底だが、93は外へ強く反り、94・95は端部が円盤状を呈している。93の内面は剥脱が目立ち、95の底には白粉が付いている。
台付鉢形土器(96)は脚台を大きく欠いているが、ほ

ぼ完形の丹塗り磨研土器である。口縁直径が18cm、残存高12cmで、口縁が強く外反する器形をしている。口縁端はややくぼんでおり、内底部は剥脱が目立つ。この土器は土坑6や、E7区 層出土の破片と接合しており、土坑6とは近い時期のものと思われる。



第16図 4号住居跡出土の土器(2)

石器が7点、軽石製品が1点ある。S14はえぐりの浅い小型石鏃である。S35は基部の欠けた二等辺三角形大型石鏃である。横剥ぎの剥辺の側辺のみを押圧剥離で仕上げている。S29はえぐり入りの打製石斧で、刃部は使い込んでにぶくなっている。S30は刃部のみの蛤刃磨製

石斧である。S31は角礫の側辺を使用した擦痕石器である。S32は打製石斧の破片である。S34は片面に大剥離面を残した正三角形の石鏃である。Ss7は二条の短い筋のある軽石製品である。

この住居の時期は前期前葉のものと思われる。

2 土坑

多くの土坑が検出されたが、上面検出のみで掘り上げていないものもあるために、すべての土坑には番号がつけてない。土坑27は掘り上げたあと土坑でないことがわかり欠番となっている。なお、20・30・31・39・43号については図面との照合ができなかったため、遺構の特定・説明ができなかった。

1) 土坑1 (第17図, 97~100)

F 8区で検出された略長方形の土坑で、2か所をイモ穴によって削られている。東西が160cmと長く、南北は西側がややふくらんで140cmあり、東側は105cmほどである。深さは30~35cmあり、上から黄みがかった暗褐色土、暗褐色土、暗黄褐色土の3層に分かれる。中に土器片12点(甕8・壺3)と打製石斧1点が入っていた。

甕形土器(97~99)は口縁端に貼付突帯のあるもので、97は二条甕で、ともに縦方向の刻目が施される。やや内反ぎみの器形を呈し、2段目の突帯は高い。98はやや下がって突帯が貼付けられている。99は低い突帯で、口縁部に弧状の突帯が貼付けられる。外面は97が縦方向のヘラナデ、98と99がヘラミガキで、内面調整はともにヘラナデである。97と98は細かい石を用いているが、99は7mm大のものもある粗い土を用いている。

壺形土器(100)は二条の横方向凹線のある肩部で、外面はていねいな縦方向のヘラミガキで仕上げ光沢を呈

する。内面もていねいな横方向ヘラナデで、土は細かい。安山岩製の打製石斧は刃部破片で、摩耗し、擦痕がみられる。

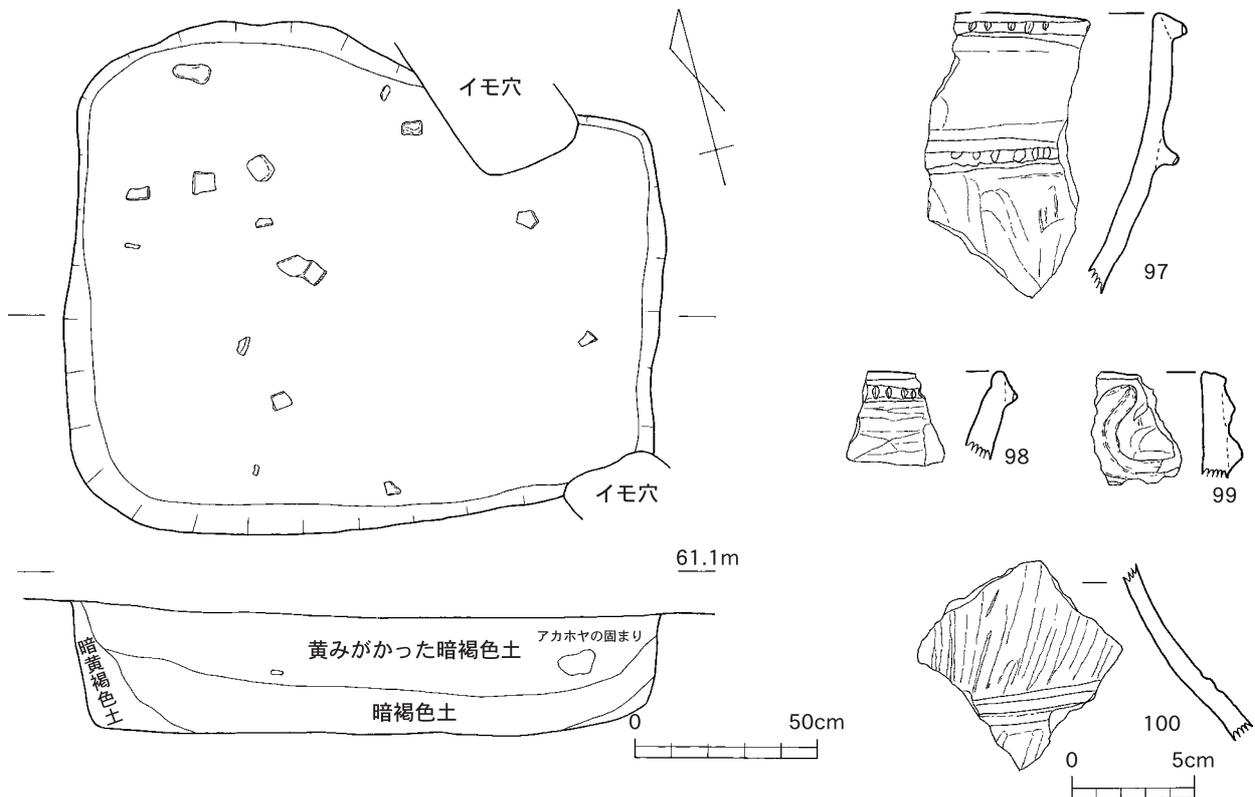
前期前葉のものである。

2) 土坑2 (第18図, 第21図, 101~104)

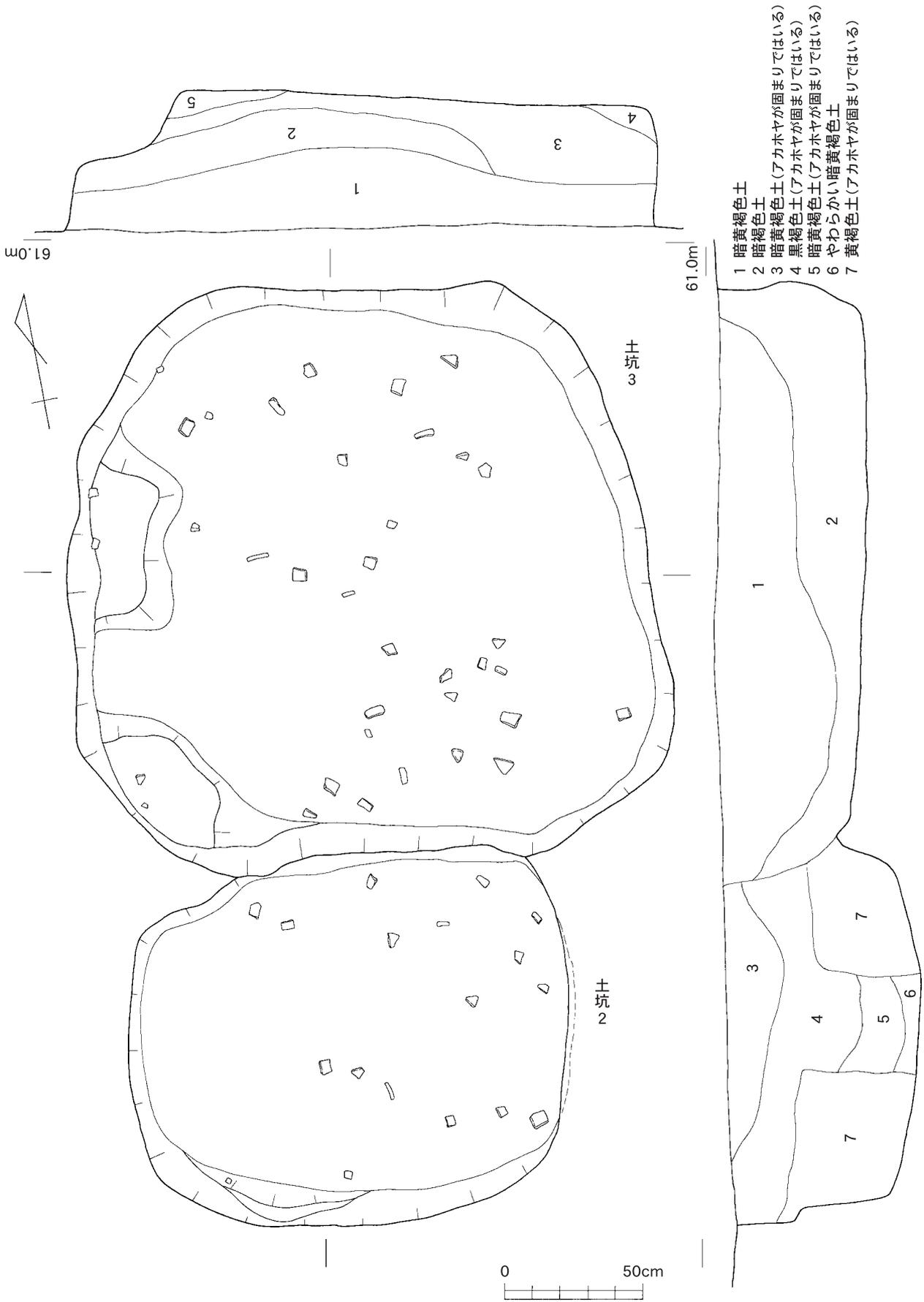
F 8・9区で検出された隅丸方形の土坑で、土坑3よりは古い。東西方向が160cm、南北方向が136cmの東西にやや長い方形をしており、角はやや丸みがかっている。深さは60~70cmあり、埋土は5層に分かれる。最下層はアカホヤがブロック状に入っている厚さ35~40cmの厚い層だが、中央の直径35cmほどが穴になっており、下からやわらかい暗黄褐色土、アカホヤがブロック状にはいった暗黄褐色土、アカホヤの入った黒褐色土と続いているが、最上層は全体に広がっている。その上は窪みとなっており、アカホヤがブロック状に入った暗黄褐色土が入っている。中には土器の小破片が18点(甕10・壺7・鉢1)入っていた。

甕形土器(101)は外へ開く器形で、口縁端にくっついて二条の突帯が貼付けられる。端部のほうは低い突帯で、その下の方はヘラ押圧のある突帯である。壺形土器(102・103)は肩部に二条の沈線があり、平底からややくぼみをもって立ちあがる。104は小型鉢形土器で、口縁端に突帯が貼付けられるものである。

前期前半のものである。



第17図 土坑1と出土の土器



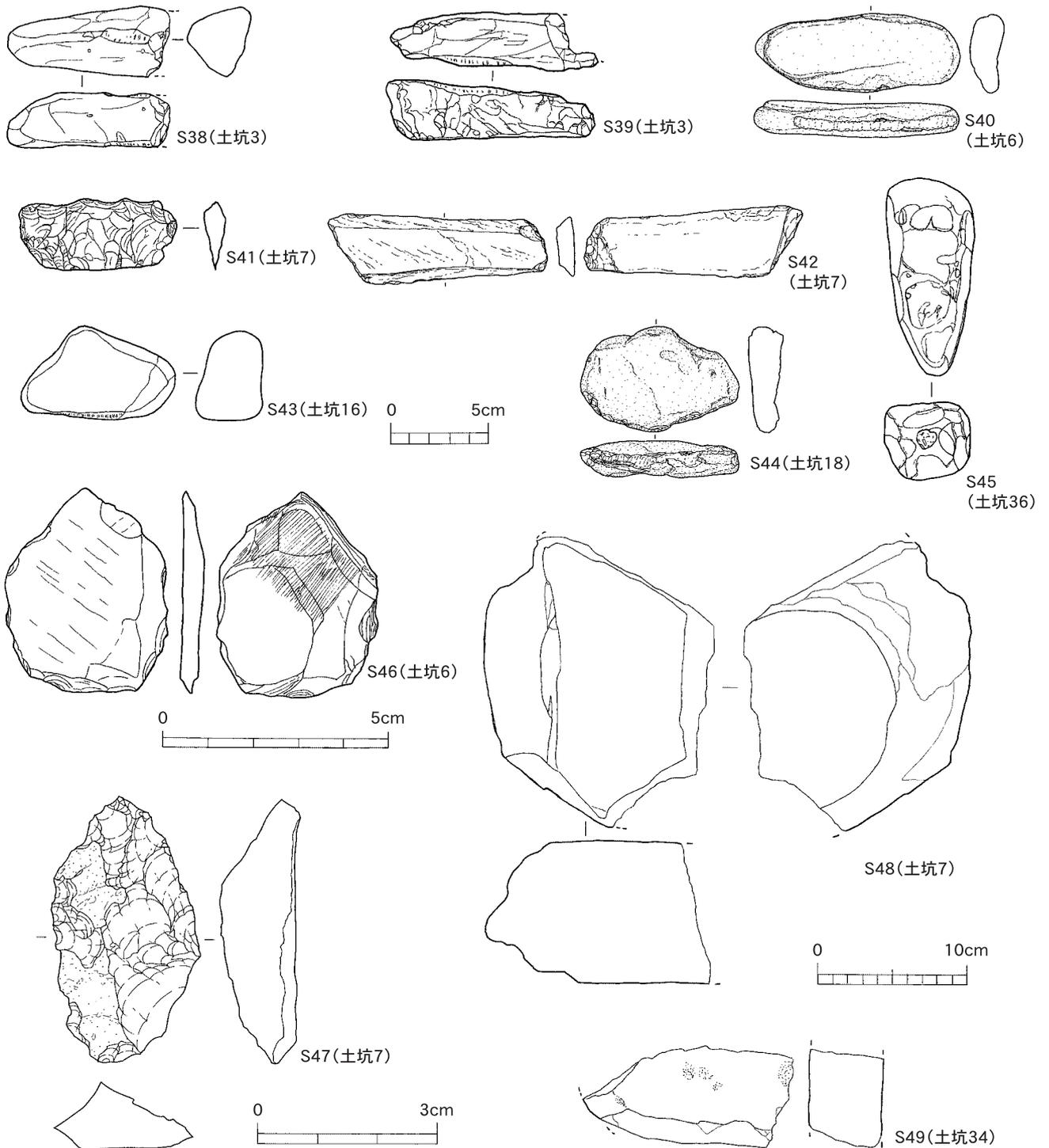
第18図 土坑 2・土坑 3

3) 土坑3 (第18~21図, 105~109, S38~39, Ss8)
 土坑2の北側(F8・9区)に接して検出された土坑
 で、土坑2より新しい。一辺が210cm近くのほぼ正方形
 をしているが、隅はいずれも丸みを帯びている。西側は
 長さ140cm, 幅30cmにわたって、20~25cmほど高くなっ
 ている。深さは50cmほどで、北側はやや袋状になってい
 る。埋土は2層に分かれ、上が暗黄褐色土、下が暗褐色

土であるが、下のほうはこまかくみると、上から黒褐色
 土、暗褐色土、暗黄褐色土に分かれる。

穴の中には109点もの土器片が入っているが、いずれ
 も小破片である。他に擦痕石器2点、軽石製品が1点あ
 る。

甕形土器(105~107)はやや内反している口縁端に台
 形様の突帯が貼付けられ、口唇部はやや窪む。105はそ



第19図 土坑出土の石器

の下に三角突帯が貼付けられる。底は直径7.5cmの分厚い平底である。壺形土器(108・109)は口唇部が窪む広口の口縁部で、肩部には三条の三角突帯が貼付けてある。

擦痕石器はいずれも砂岩の自然礫を用いて、S38が円礫で三角柱形の二辺を、S39が角礫で一辺を用いている。

軽石製品(Ss8)は、くぼんだ石皿状を呈した半欠品で、残存長19cm、幅26.7cmである。

中期前葉のものである。

4) 土坑4(第21図, 110~112)

F8区で検出された長方形の土坑で、底は方形を呈しているが、検出面付近は肩が崩れ、不定形を呈している。上面では東西方向が180cm、南北方向が94cmあるが、底面では145cm×70cmある。深さは40cmあり、埋土は上の暗褐色土と、下の暗黄褐色土の2層に分かれる。

土器12点(甕10・壺1・鉢1)が出土している。

壺形土器(110・111)は口縁直径が29cmある広口の細

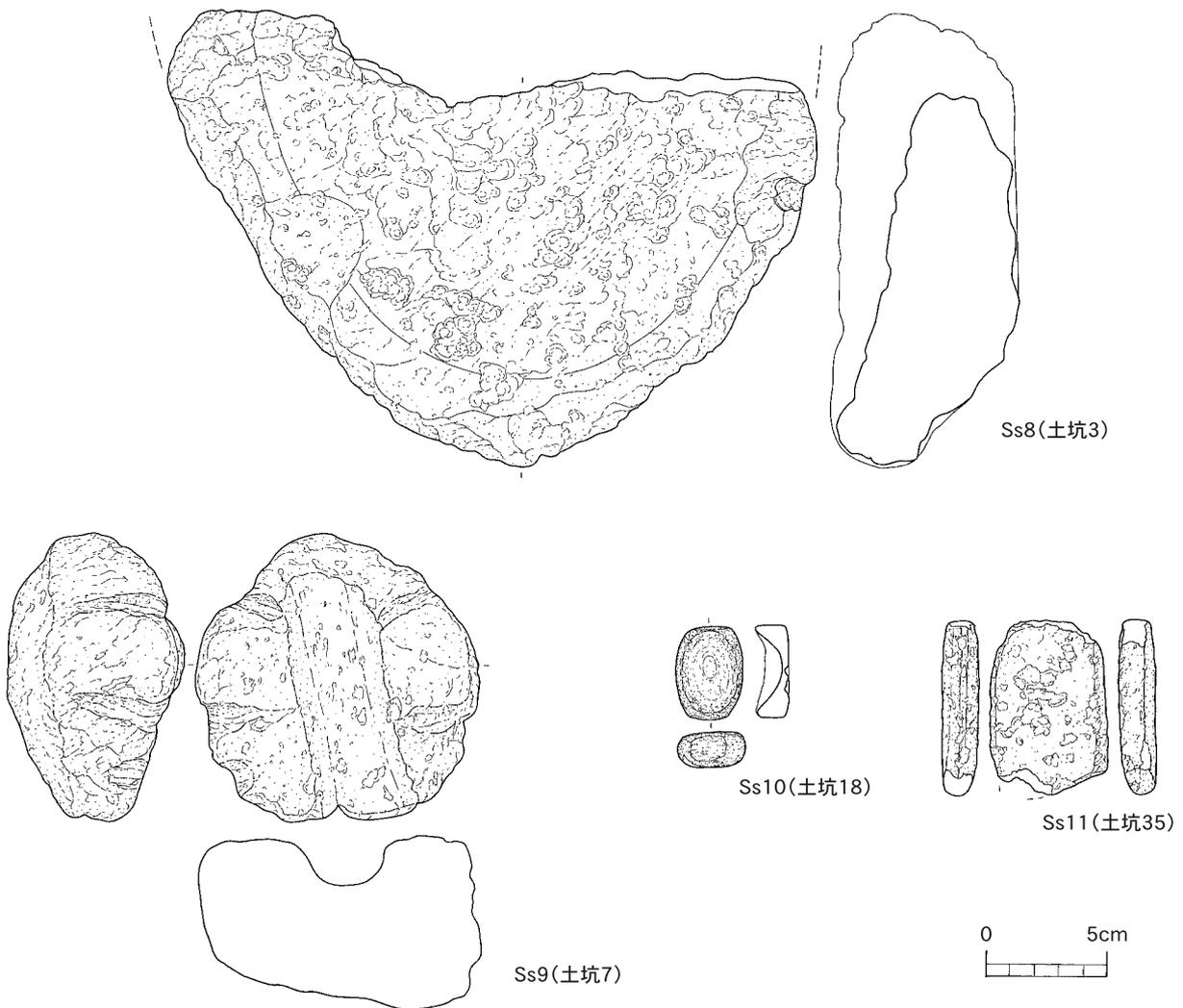
いもので、口縁内外に突帯が貼付けられているためT字形を呈する。内側は低く、外側の口唇部はくぼんでいる。111は端部が丸みを帯びている。112は高環形土器あるいは台付鉢形土器の脚台で、内外ともヘラミガキで仕上げ、外面に逆時計回りの沈線が二条巡っている。

5) 土坑5(第21図, 113・114)

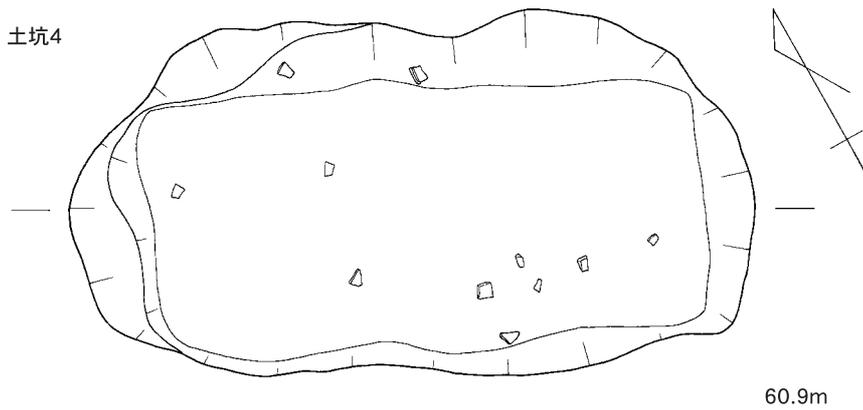
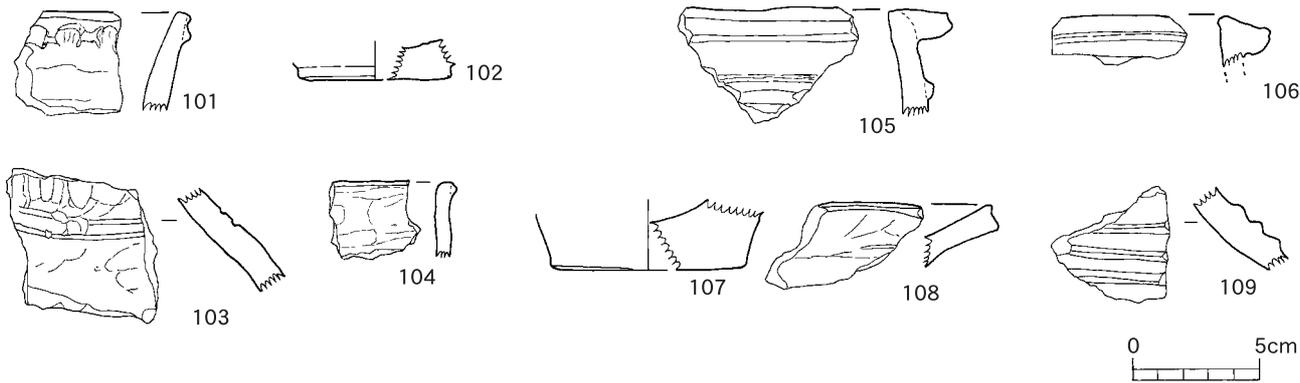
C8区で検出された長辺100cm、短辺88cmの隅丸方形をした土坑で、深さは26cmある。2層に分かれ、上が暗褐色土、下がやや黄みがかかった暗褐色土である。

土器9点(甕8・沈線のある壺1)と、軽石1点(軽石1)が出土している。甕形土器(113・114)は直径36.5cmの大型のもの、小型のものがある。113の口縁端には矩形の突帯が貼付けられ、端部はへこんでいる。内側にもやや突出しており、内外とも横方向のヘラナデで仕上げている。

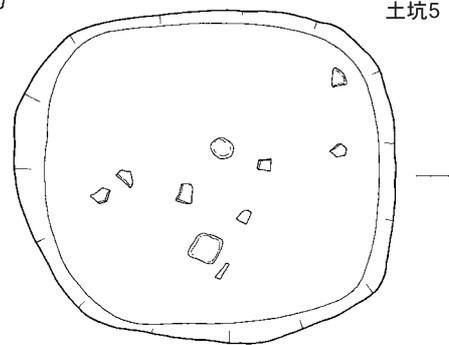
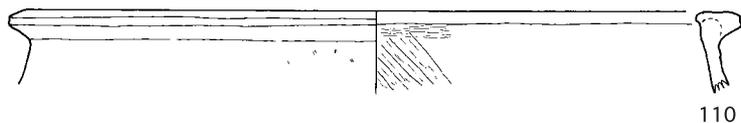
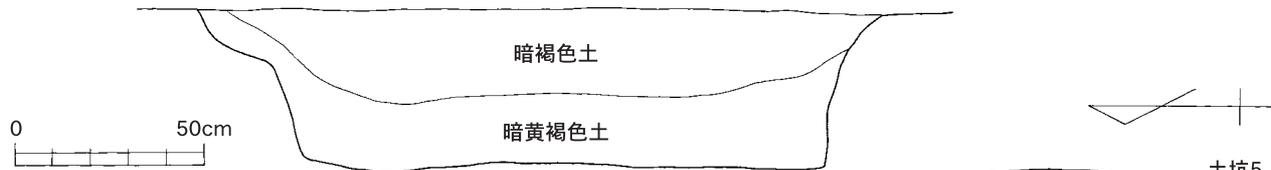
中期前葉のものである。



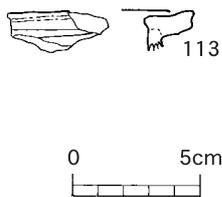
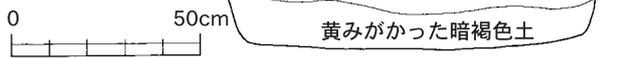
第20図 土坑出土の軽石製品



101~104 : 土坑2
105~109 : 土坑3



110~112 : 土坑4
113~114 : 土坑5



第21図 土坑4・5と土坑2~5出土の土器

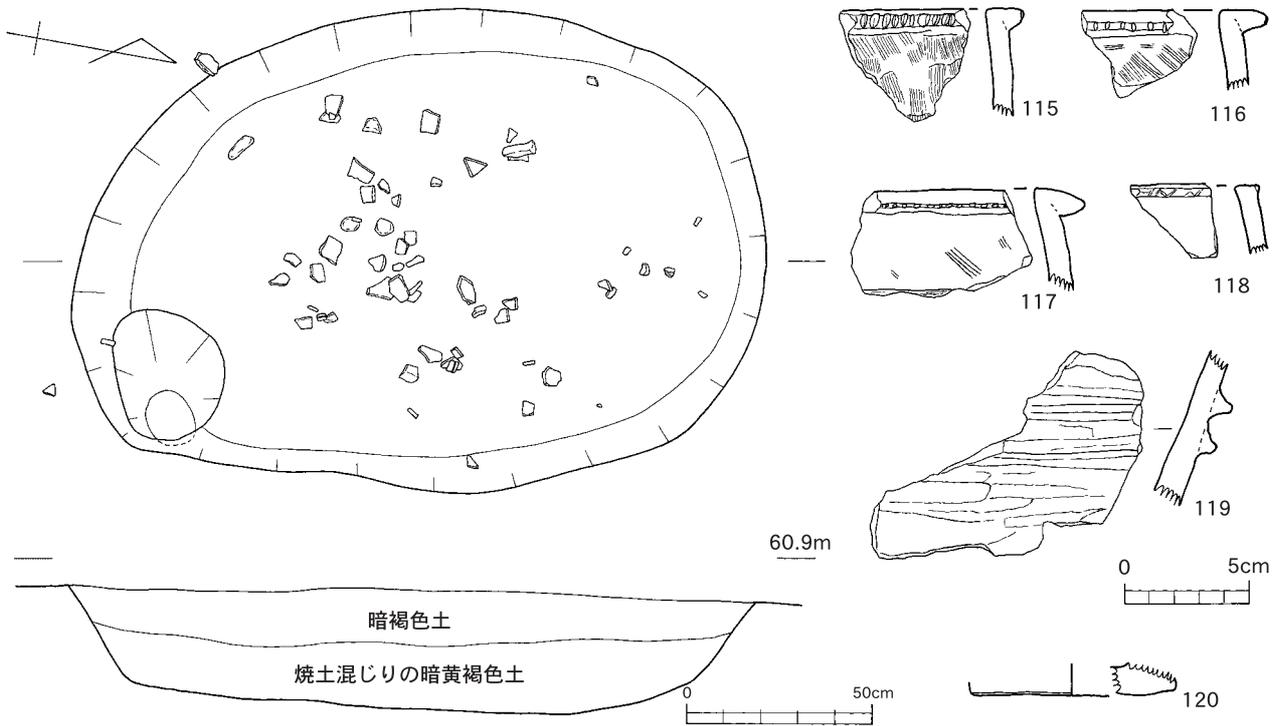
6) 土坑6 (第16図, 第19図, 第22図, 第23図, 96・115~120, S40・S46・S50~S53)

E7区で検出された長径185cm, 短径130cmの北西から南東方向に主軸をもつた円形をした土坑で, 深さは32cmある。南東隅に直径30cm足らずで, 深さ70cmの柱穴があり, 北西隅には10cm×15cmの範囲に厚さ8cmの貝だまりがみられる。土器84点(甕2・壺1・台付鉢1)と石器9点(石鏃3・ピエスエスキュー1・磨製石器1・擦痕石器1・安山岩のチップ3)が出土している。

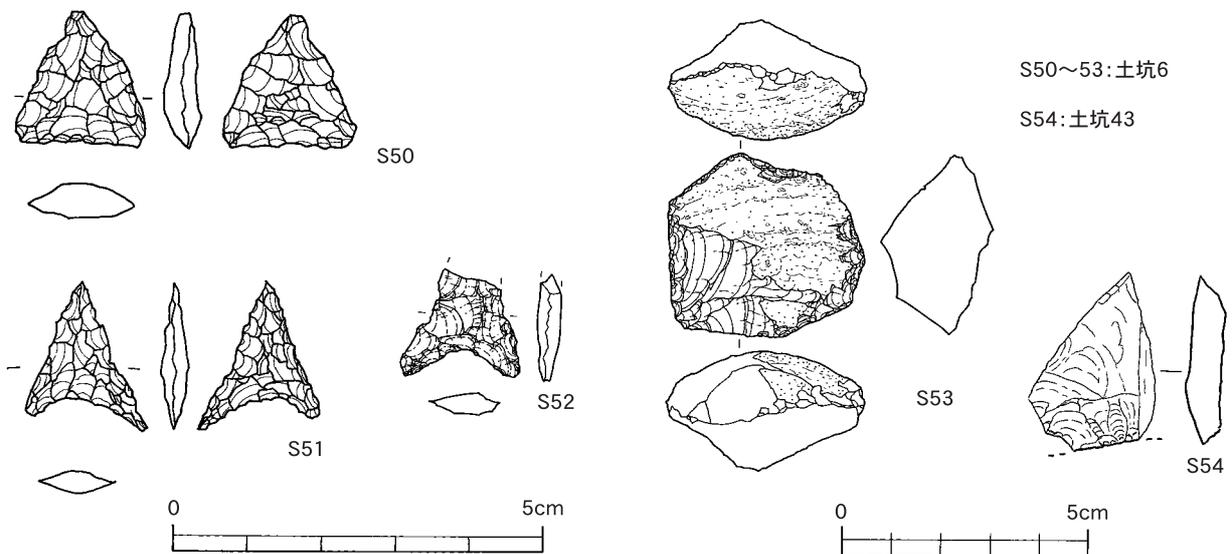
甕形土器(115~120)は口縁部に一条あるいは二条の突帯が, 肩部にも二条の突帯が貼付けられ, 平底である。

口縁部の突帯は細長い三角突帯で, 口唇部にヘラ刻みがある。118は低い突帯で, こまかいヘラ刻みが付され, 肩部の三角突帯は先端が鈍く, ヘラ刻みはない。底部はていねいにナデられており, 底に白粉が付いている。

台付鉢形土器(96)は, 4号住居跡・E7区 層出土の破片と接合し, 脚台の端部を欠いているが, ほぼ完形の丹塗磨研土器である。口縁部直径が18cm, 推定高13cmの低い器形を呈し, 口縁部は外反し, 低い高台が付く。口唇部はややくぼみ, 内外ともヘラミガキで仕上げている。内底は剥脱が目立つ。石英・白色石など細礫の多い土を用い, 外面は赤みがかった茶褐色を呈している。



第22図 土坑6と出土の土器



第23図 土坑6と土坑43出土の石器

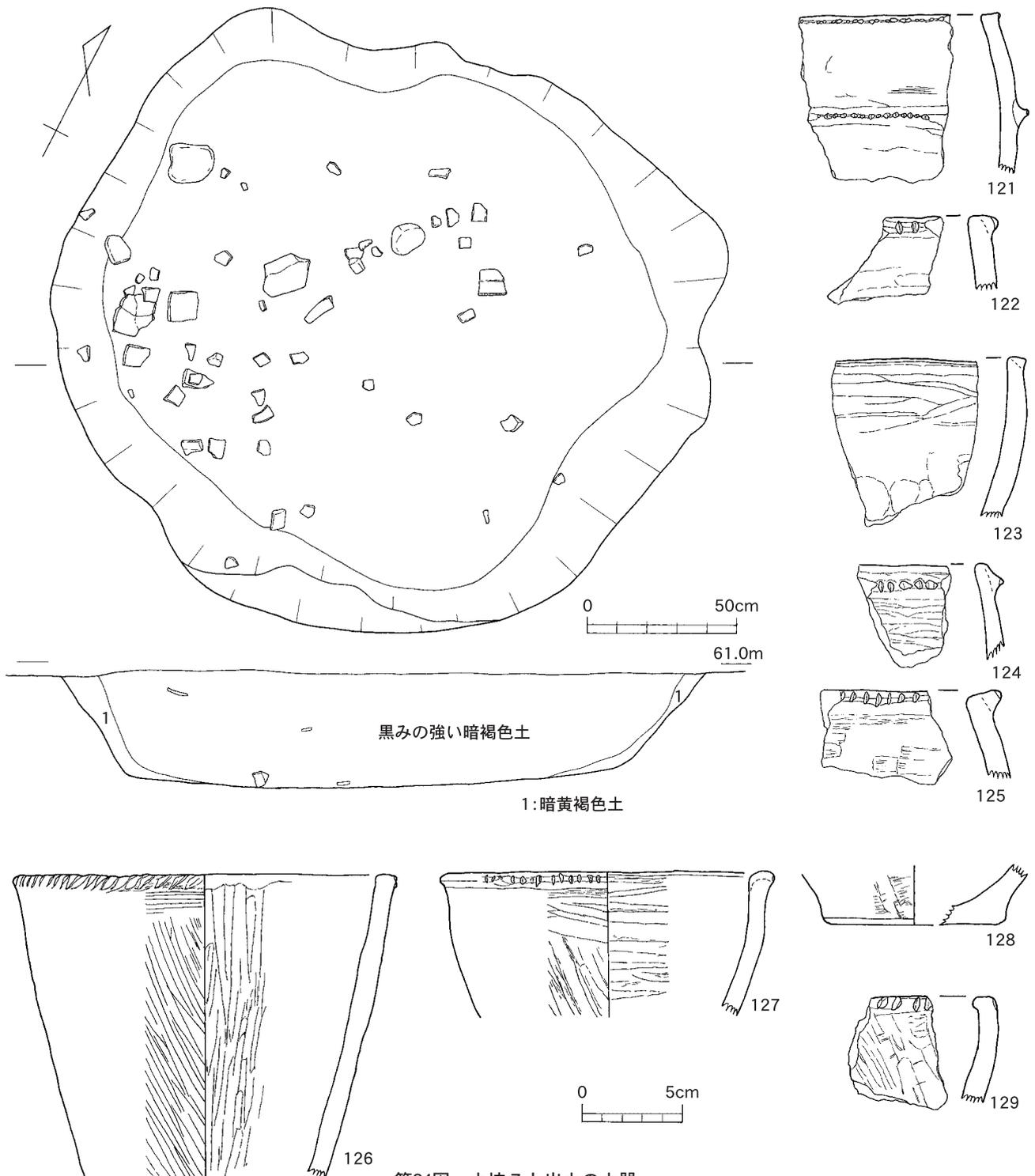
石鏃（S50～S52）はいずれもサヌカイト製で、三角形平基のものと、二等辺三角形凹基のものがある。サヌカイト製ピエスエスキュー（S53）は片面に皮を残す分厚い剥片を使用し、四面とも刃部としている。磨製石器（S46）は薄い剥離もある扁平なもので、端部分である。刃部は使用により磨耗している。擦痕石器（S40）は砂岩の自然礫を利用したもので、長側辺の面が長さ8cmにわたって使用されている。

前期のものである。

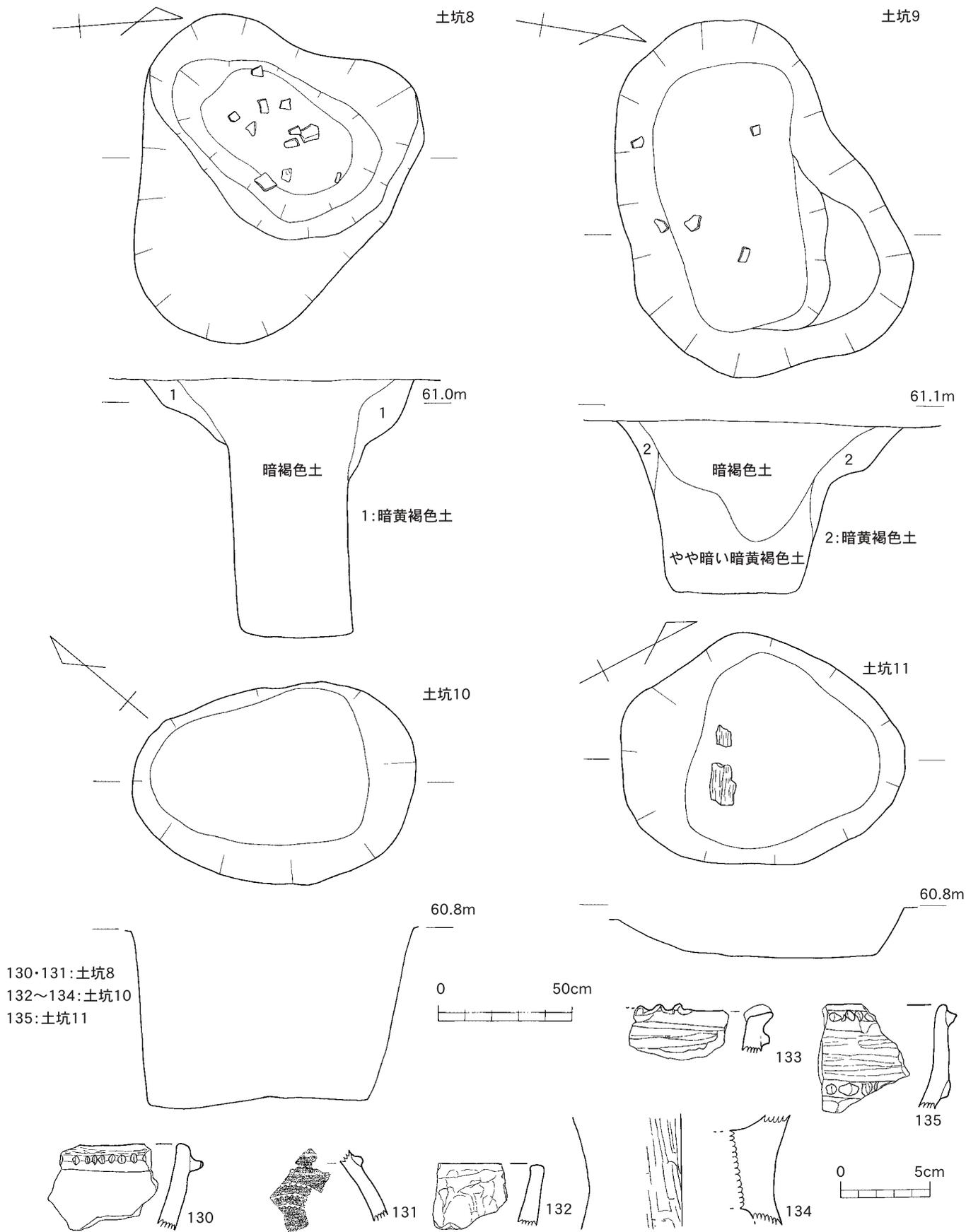
7) 土坑7 (第19・20・24図, 121～129, S41・S42・S47・S48, Ss9)

D7区で検出された215cm×195cmの略円形をした土坑で、深さは36cmある。

土器34点(甕26・壺6・鉢2)と石器3点(石鏃1・擦痕石器1, 石皿1)・石製品1点が出土している。



第24図 土坑7と出土の土器



第25図 土坑 8・9・10・11と出土の土器

甕形土器（121～127）はいずれも突帯文土器だが、突帯は端部より少し下がった所に貼付けられたものと、口縁端へ貼付けられたものがある。124がやや下へ貼付けられたもので、小さい刻目が付されている。口縁端の突帯は小さいものと普通のものがある。121・122が小さいもので、123だけは刻目が無い。121は内傾する器形を呈し、胴部にも突帯があり、いずれもこまかいヘラ刻みが付されている。126は口縁直径が19cmあり、底部へまっすぐ伸びている。刻目はヘラによる密な押圧である。126は土坑35の破片と接合している。127は口縁直径が16.5cmで低いやや小ぶりの甕である。122と125は内傾し

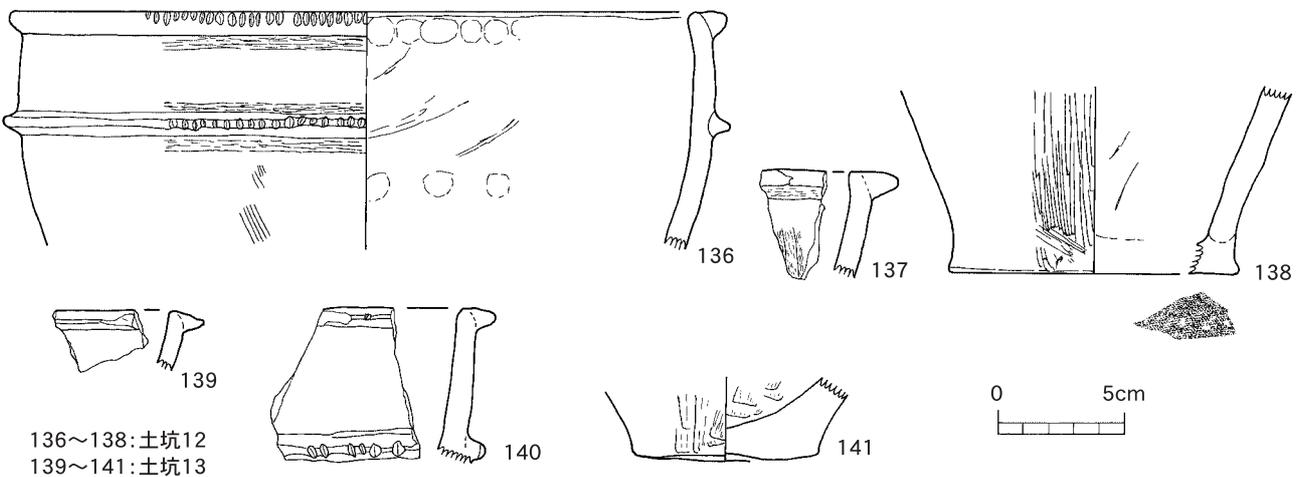
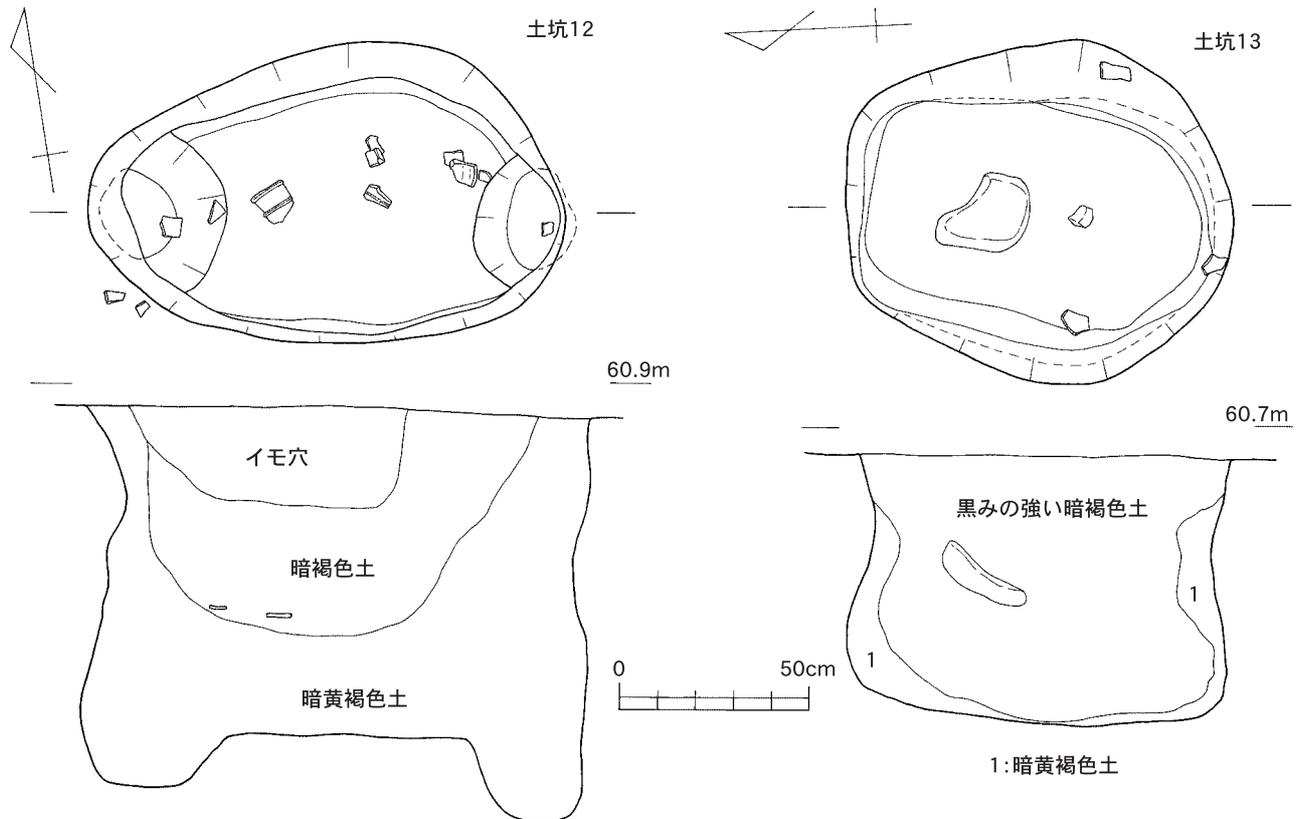
た口縁端に刻目突帯が付されている。

壺形土器（128）の底部はヘラナデで仕上げている安定した平底であるが、磨滅が目立つ。

鉢形土器（129）は内湾する口縁部で、口縁端にヘラ刻みがみられ、口縁内部は玉縁状にふくらんでいる。

S41は打製石斧の頂部の破損品を利用した刃器で、細加工はないが鋭い。S42は扁平で細長い剥片の長側片を使用している。S47は長さが4.5cmの大型石鏃である。分厚い剥片を用い、片面に表皮を残す粗い作りである。

軽石製品（Ss9）は中央に深い筋状のくぼみがあり、これと直交して左に三条、右に二条の凹線がある。左側



第26図 土坑12・13と出土の土器

の逆面にはこの凹線に続く筋が延びており、頭部・胴部・下肢部に分け、下肢部には股も表現している。前期前葉のものである。

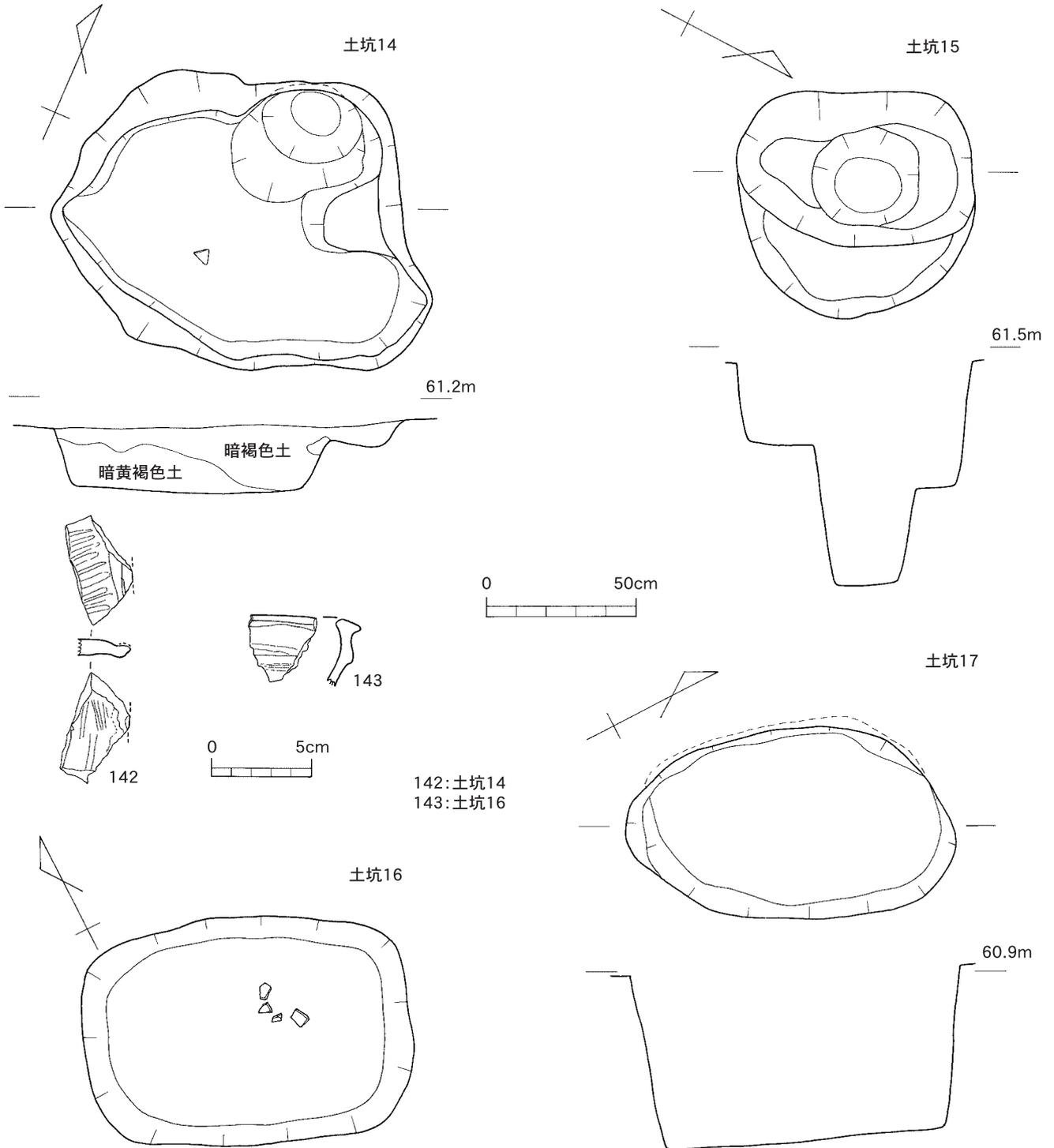
8) 土坑 8 (第25図, 130・131)

D 5 区で検出されただ円形の土坑で、上面では東北方向が120cm、南北方向が105cmあるが、段落ちして90cm × 60cmのだ円形に落ちている。深さは95cmある。

土器は13点(甕11・壺2)出土している。

甕形土器(130)は刻目突帯が口縁よりやや下がった所に貼付けられている。壺形土器(131)は頸部と肩部の境付近に突帯が貼付けられ、肩部には二枚貝腹縁による重弧文が施されている。外面はヘラミガキ、内面はヘラナデで仕上げている。

前期前半のものと思われる。



第27図 土坑14・15・16・17と出土の土器

9) 土坑9 (第25図)

D5区で検出されたただ円形の土坑で、東西方向が135cm、南北方向が95cmある。深さは65cmである。

中には遺物がほとんどなく、甕と壺の小破片が各1点あるのみである。前期のものと思われる。

10) 土坑10 (第25図, 132~134)

E6区で検出されたただ円形の土坑で、東西方向が95cm、南北方向が50cmある。深さは65cmである。

土器4点(甕・壺・鉢・高坏の破片が各1)が出土している。甕形土器(133)は口縁端とそのすぐ下に刻目のない突帯が貼付けられる二条甕で、口縁端に三条の棒状突起が貼付けられて波状を呈している。外面はミガキに近いいねいな横方向のヘラナデ、内面はていねいな横方向のヘラナデで仕上げている。鉢形土器(132)は外へ開きながらまっすぐ伸びる器形をし、外面は縦方向のヘラミガキ、内面はていねいな横方向のヘラナデである。高坏形土器(134)は短くて太い筒部で外面・内面ともヘラミガキで仕上げている。前期のものである。

11) 土坑11 (第25図, 135)

E5区で検出された105cm×85cmの円形土坑で、深さは20cmある。

土器4点(甕3・鉢1)が出土している。鉢形土器(135)は口縁の少し下と、屈曲部に刻目のある突帯が貼付けられている。内外とも横方向のヘラナデであるが、外面はていねいである。前期前半のものである。

12) 土坑12 (第26図, 136~138)

E6区にある125cm×80cmの東西に長い円形をした土坑で、深さは85cmある。東西の両端が直径35cm、深さ15cmと直径25~35cm、深さ20cmの柱穴状に窪んでいる。

土器23点(甕20・壺3)が出土している。136~138はいずれも甕形土器で、口縁部端に突帯が貼付けられている。136は直径26cmのやや内反する口縁で、天井部はややくぼみを呈する。肩部にも突帯が付く二条甕で、この突帯にはいずれも縦方向のヘラ刻みが付されている。137の突帯にはヘラ刻みがみられない。138は直径11.5cmの平底で、底には細かい繊維痕がみられ、白粉も付されている。胴部と底部は貼付けられている。内・外面ともていねいなヘラナデで仕上げ、底近くの外はミガキのようである。茶褐色・明茶褐色・淡茶褐色を呈し、焼成度は普通である。石英・白色石・青灰色などの細かい石を含んでいる。前期のものである。

13) 土坑13 (第26図, 139~141)

E6区にある長径が103cm、短径が92cmの南北方向に長い円形をした土坑で、深さは71cmある。

甕14、壺2のあわせて16点の破片が出土している。口縁端に突帯が貼付けられる甕形土器で、二条甕である140は突帯の上にヘラの刻目が付されている。底部は中央がややあげ底となる直径7.3cmほどの平底である。ヘラによるナデ整形で、139の内面が横方向で、あとは縦方向である。139の外面はミガキに近い。

前期のものである。

14) 土坑14 (第27図, 142)

D・E-7・8区の境付近にある長径130cm、短径115cmの略円形をした土坑で、深さは25cmと浅い。

出土品は少なく、甕・鉢・蓋がそれぞれ1片ずつ出土している。142は口縁端がやや肥厚する蓋で、内面の端部にススが附着している。口縁端は上下に肥厚するものと思われるが、上は欠けている。上下ともヘラミガキでていねいに調整され、5~7mm大の赤色石・青灰色石も含まれているが、概して石英の多いこまかい土である。

15) 土坑15 (第27図)

D-8・9区にある78cm×75cmの円形をした土坑で、深さは45cmである。

土器の破片12点(甕10・壺2)が出土しているが、いずれも小破片である。前期のものと思われる。

16) 土坑16 (第19図・第27図, 143, S43)

D9区にある長辺110cm、短辺77cmの東西方向に長い長方形をした土坑である。

出土品は少なく5点(甕4・小甕1)だけである。143は鉢の可能性もある小型の二条甕である。口縁部が内側に曲がる器形を呈している。内外ともヘラによるていねいな調整で、外面はミガキ、内面はミガキに近い横方向のナデである。S43はツルツルした砂岩円礫を用いた擦痕石器で、対角の位置にある二辺を3.2cmの間、使い込み、ともに筋状にへこんでいる。

前期前葉のものと思われる。

17) 土坑17 (第27図)

E7区にある長径110cm、短径65cmの南北方向に長い土坑で、深さは55cmある。出土品はない。

18) 土坑18 (第19・20・28図, 144~147, S44, Ss10)

E6区にある長径205cm、短径120cmの南北方向に長い円形の土坑で、深さは94cmある。途中で立ちあがり、埋土も異なることから、円形あるいは長方形をしたふたつの土坑が重なっている可能性が高い。

35点(甕32・壺3)の土器片と、擦痕石器1点・軽石製品1点が出土している。

甕形土器(144~147)は口縁端に突帯が貼付けられて

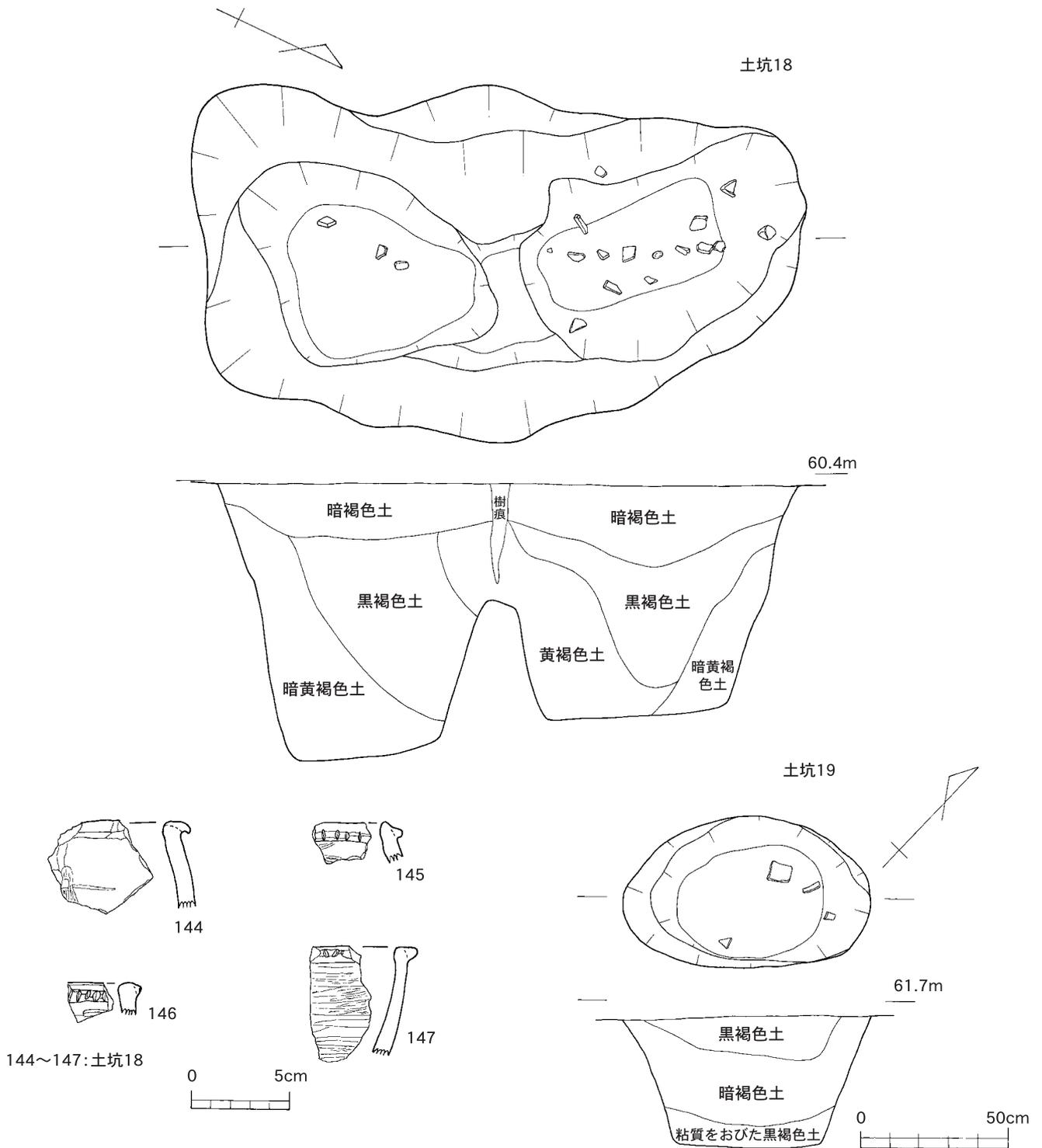
いるが、内傾している145はやや下に貼付けられ、144以外は縦あるいは斜方向のヘラ刻みが施されている。147は小さい突帯で、146は低い。外面調整は144と147がヘラナデ、145と146はヘラミガキである。内面はヘラナデだが、147は特にないである。

擦痕石器（S44）は砂岩自然礫の一長側辺を幅0.4cm、長さ4cmにわたって使用している。軽石製品（Ss10）

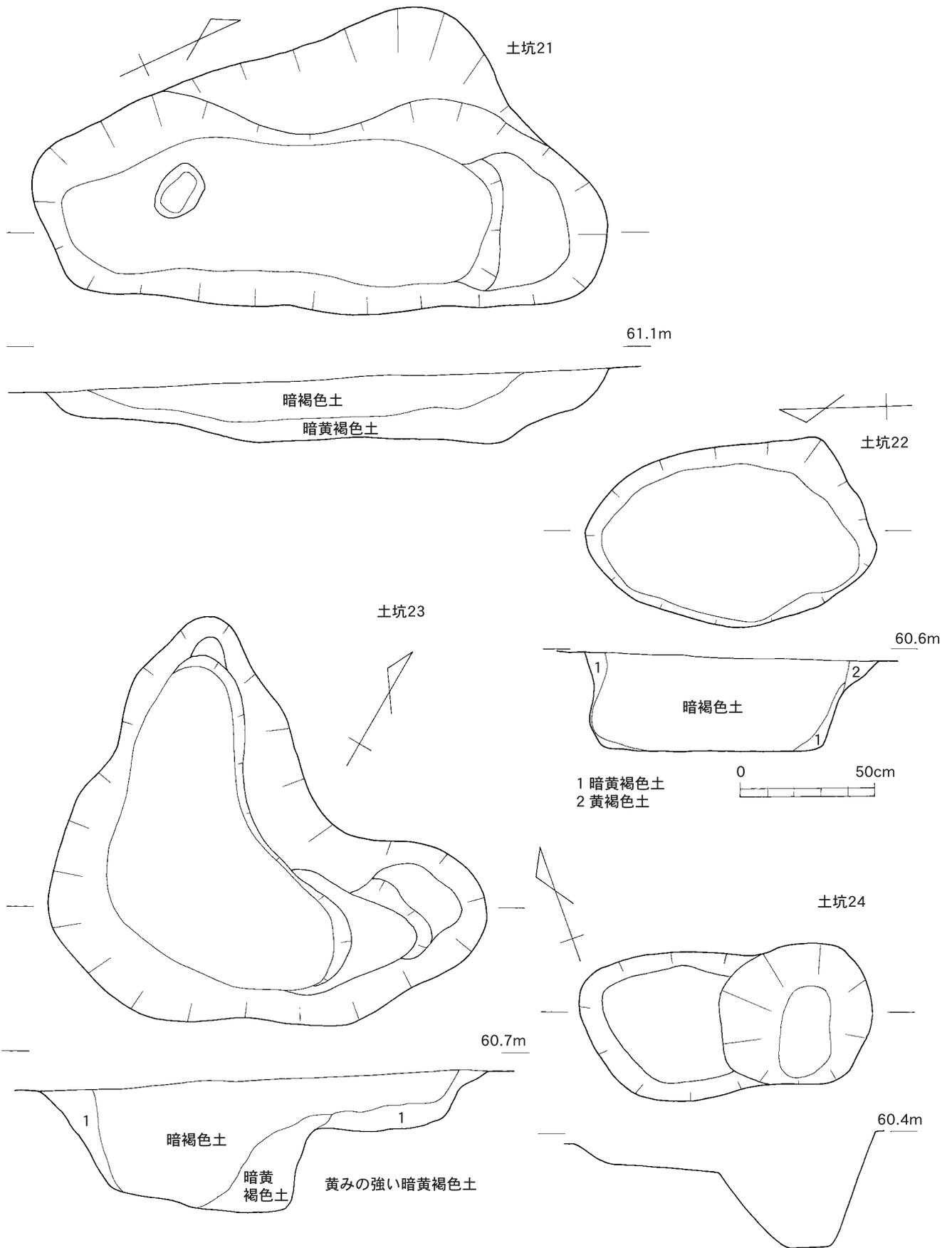
は長さ3.9cm、幅2.9cmの直方体の物の片方を深く窪ませ、逆面にも2か所に小穴がみられる。前期のものである。

19) 土坑19 (第28図)

D9区にある長径84cm、短径52cmの北東・南西に長軸をもつた円形の土坑で、深さは45cmである。出土品は6点（甕4・壺2）のみで、前期のものと思われる。



第28図 土坑18・19と出土の土器



第29図 土坑21・22・23・24

20) 土坑21 (第29図)

D 4区にある長径210cm, 短径110cmの南北方向に長い土坑で, 深さは30cmである。出土品はない。

21) 土坑22 (第29図)

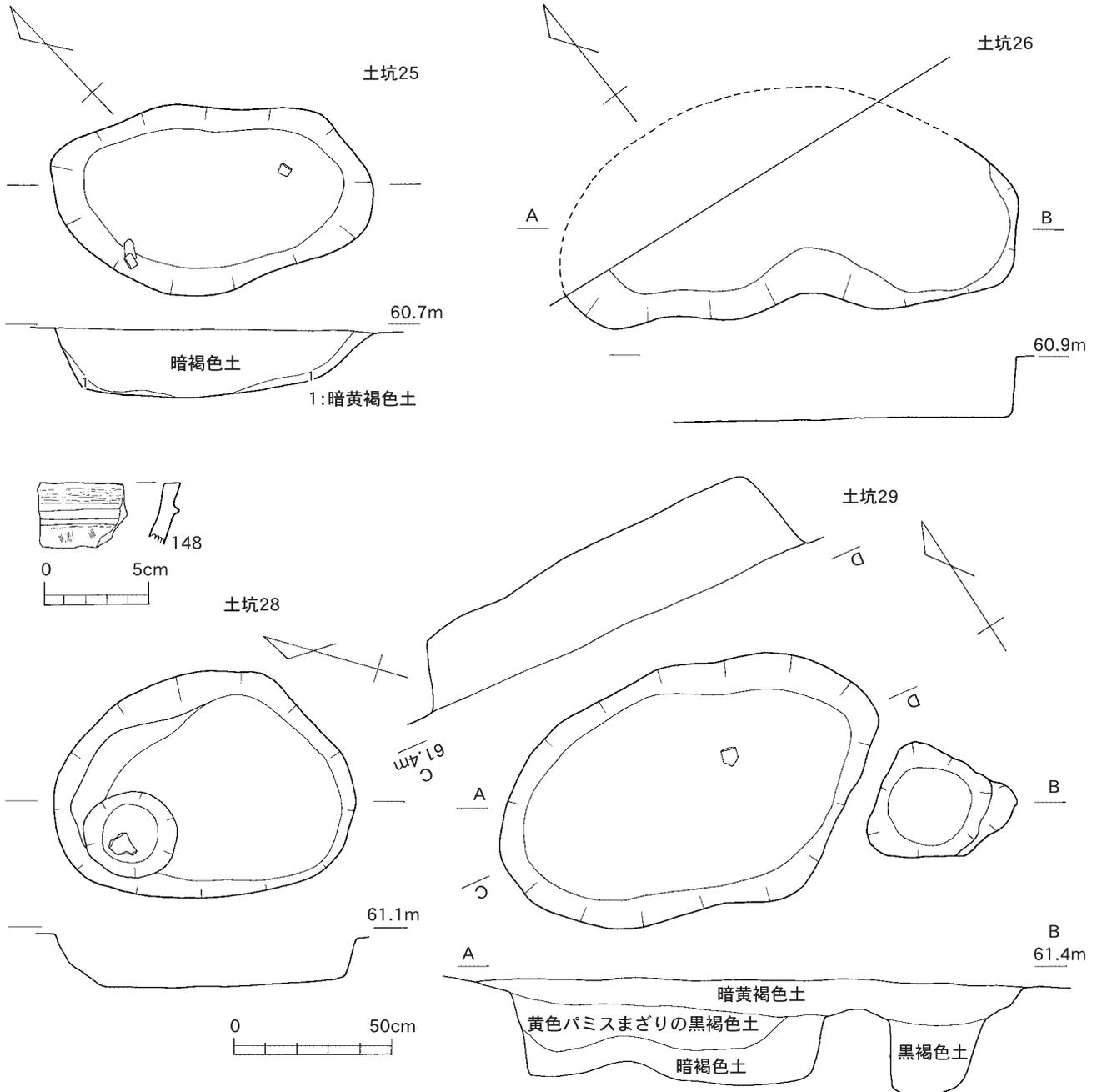
E 4区にある長径108cm, 短径68cmの北西・南東に主軸をもつ土坑で, 深さは35cmある。出土品はない。

22) 土坑23 (第29図)

E 4区にある155cm × 105cmほどの不整形円形を呈する土坑で, 深さは35cmある。出土品はない。

23) 土坑24 (第29図)

E 4区にある長径110cm, 短径55cmのだ円形をした土坑で, 深さ15cmと浅い。出土品はない。



第30図 土坑25・26・28・29と土坑25出土の土器

24) 土坑25 (第30図, 148)

E 4 区にある長径100cm, 短径60cmの東西方向に長い円形の土坑で, 深さは20cmしかない。

出土品は甕形土器の破片が2点のみで, 148は口縁端が矩形となる器形で, 口縁からやや離れて三角突帯が貼付けられている。

25) 土坑26 (第30図)

E 8 区にある長径145cm, 短径40cm+ の東西方向に長い円形の土坑だが, 北側が削平のため全形は不明である。深さは20cmしかない。甕形土器の破片が1点出土しているのみで, 中期前葉のものと思われる。

26) 土坑28 (第30図)

E 8 区にある長径95cm, 短径73cmの北西・南東に主軸

をもつ土坑で, 深さは15cmと浅い。甕形土器が4点出土しており, 磨滅も目立つが, 前期のものと思われる。

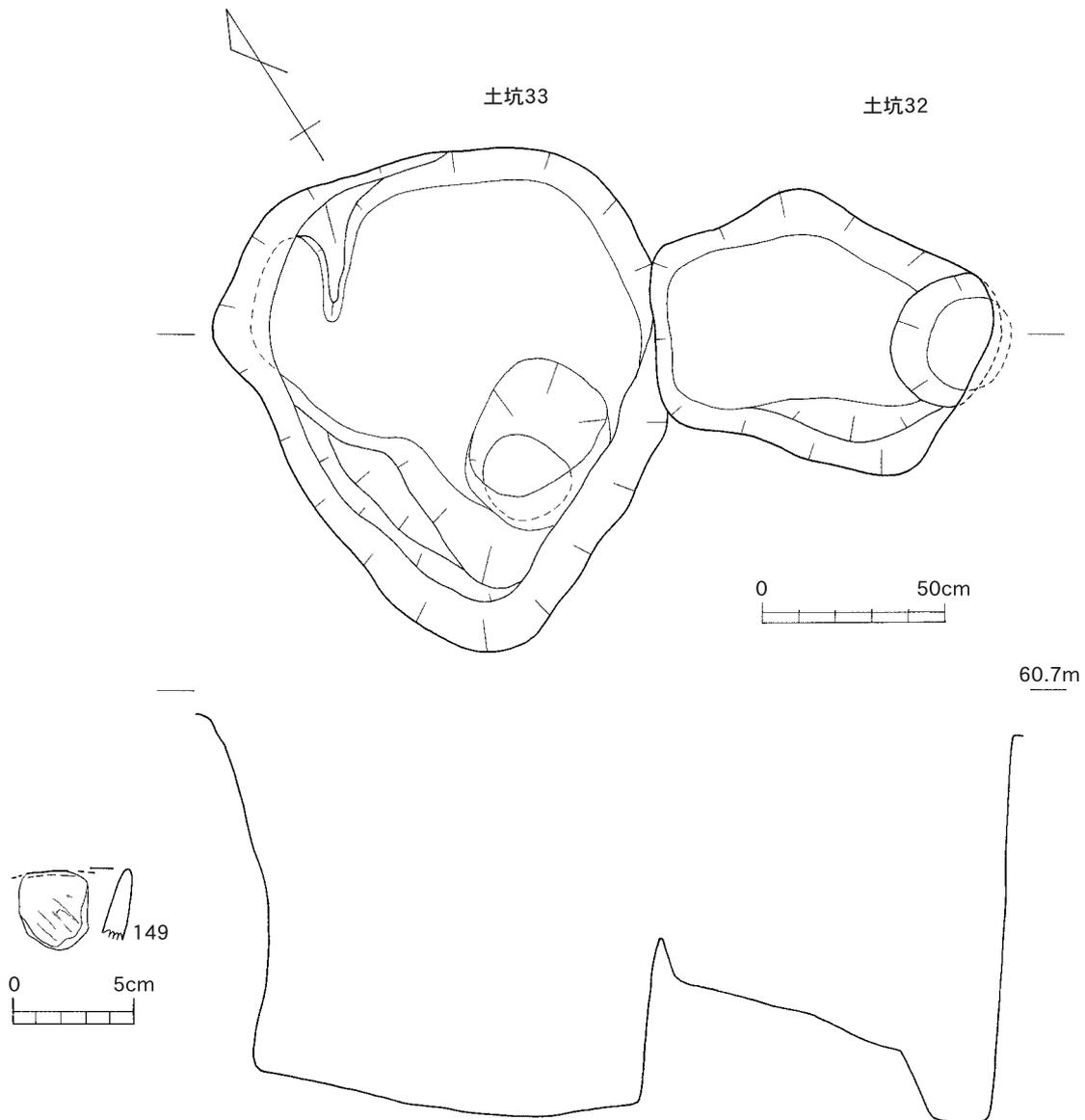
27) 土坑29 (第30図)

C 5 区にある長径130cm, 短径75cmの東西方向に長い円形の土坑で, 深さは25cmある。甕形土器の破片が1点あるのみである。

28) 土坑31 (第31図, 149)

土器5点(甕3・壺1・鉢1)が出土しており, 鉢形土器(149)は口縁部へまっすぐ開きながら伸びる器形で, 端部は丸く尖がっている。内外ともヘラナデで, 赤みがかった茶褐色を呈する。

前期のものと思われる。



第31図 土坑32・33と土坑31出土の土器

29) 土坑32 (第31図)

E・F 5区で検出されただ円形の土坑で、土坑33と接している。長径95cm、短径55cm、深さ85cmで、東端に直径35cm、深さ20cmの柱穴がある。出土品はない。

30) 土坑33 (第31図)

E・F 5区にあり、土坑32の西に接している長径140cm、短径130cmの略円形土坑で、深さが100cmある。東側に直径40cmの柱穴がある。出土品はない。

31) 土坑34 (第19図, 第32図, 150~158, S49)

C 7・8区にある長辺156cm、短辺120cmの南北に長い略長方形の土坑で、深さは50cmある。62点(甕54・壺8)の土器片と、石皿1、安山岩剥片2が出土している。

甕形土器(150~156)の口縁端には低くて刻みのないものと、刻みのある三角突帯が貼付けられている。底は安定した平底と、高い充実高台のものがある。平底のものは底に白粉がある。壺形土器(157・158)の口縁部は外へ開き、口唇部に浅い凹線がある。底部は安定した平底で、白粉が付着している。前期のものもあるが、151・156・157は中期前葉のものである。

32) 土坑35 (第20図・第33図・第34図, 159~171, S511)

C 7区にある135cm×127cmの方形をした土坑で、深さは45cmある。土坑36と切り合っており、36より新しい。

117点(甕107・壺10)もの多量の土器片と、軽石製品1点・安山岩のチップが5点出土している。

甕形土器(159~168)は小破片のみで、口縁が内傾するものと外へ開くものがある。内傾するものには内外にわずかに張り出すものと、外へ低い三角突帯の付くものがあり、突帯に刻み目のあるものもある。外へ開くものは三角突帯が口縁よりやや下がるものと、端へ付くものがあり、刻み目のあるものもないものがある。突帯は一条のものと二条のものがある。いずれも内外調整はヘラによるていねいなナデである。底は安定した平底で、布目圧痕が付いている。外面はミガキに近い縦方向のヘラナデで仕上げている。土坑7で紹介した126の一部は、土坑35から出土した破片である。

壺形土器(169~171)の口縁部は直径10cmと小さく、口唇部はややへこんでおり、頸部はくびれている。内面はミガキで仕上げている。底は外へ強く開くものと、厚くて外へ開くものがある。

軽石製品(S511)は長方形の板状を呈するもので、長側辺は一方が三角状を呈するのに対し、一方は方形に縁どっている。

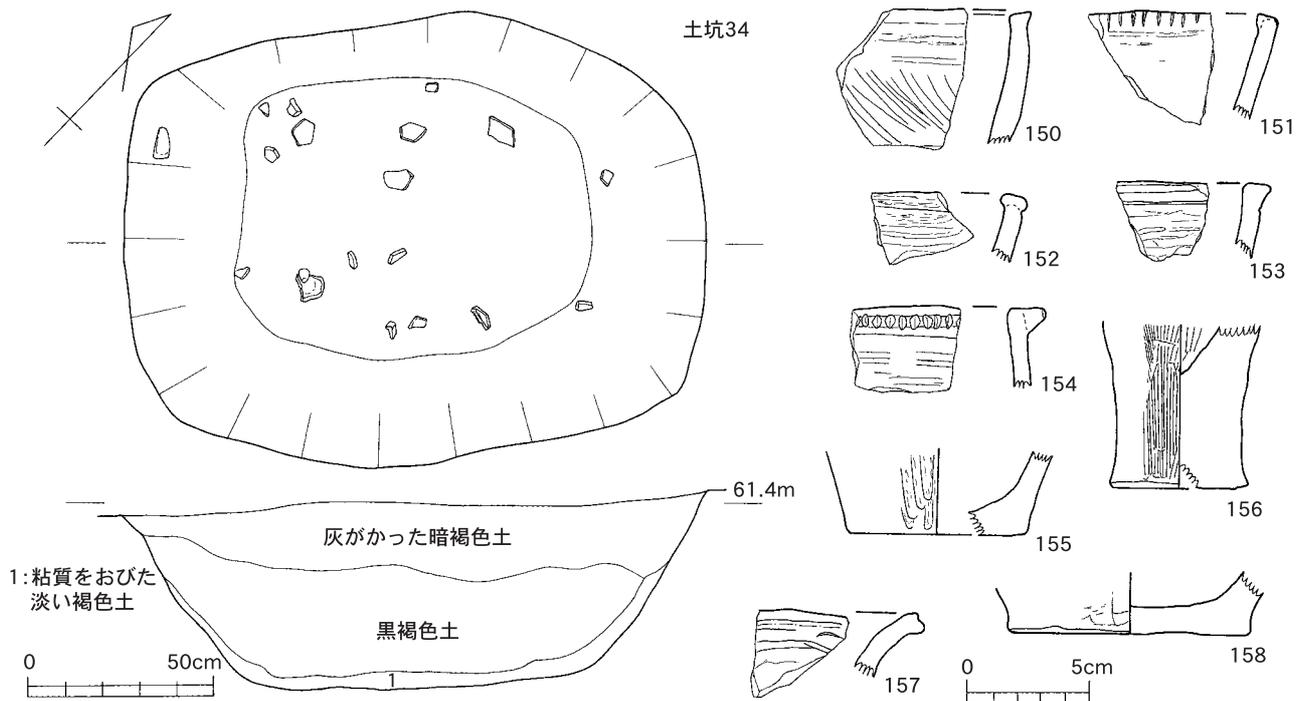
前期前半のものと思われる。

33) 土坑36 (第19図・第33図・第34図, 172~176, S45)

C 7区にある120cm×90cmの方形をした土坑で、深さが70cmある。土坑35より古い。

48点(甕45・壺3)の土器片が出土している。

甕形土器(172~174・176)は口縁端に刻目三角突帯のあるものと、幅広突帯のあるものがある。刻目突帯は一条のものと二条のものがあり、172は口縁直径34



第32図 土坑34と出土の土器

cmの二条甕で外へ開いている。端は内側へやや張り出す。外面はほとんどていねいなヘラナデだが、172の突帯間はハケナデである。173は内外ともヘラミガキとなる。

壺形土器の底(175)は直径9cmの平底で、強く外へ開いて立ち上がる。ていねいなヘラナデ仕上げである。

S45は光沢のある砂岩自然円礫を用いた敲石で、細い方の先端を使用し、太いほうは磨石として使用している。ほとんど前期のものだが、176は中期前葉である。

34) 土坑37 (第34図, 177~181)

D8区にある90cm×60cm、深さ75cmの円形土坑である。31点(甕28・壺2・鉢1)の土器片が出土している。甕形土器(177・178)の口縁部は直に近く立ち上がり、三角突帯が口縁下部に付くものと、口縁端に付くものがあり、178は二条甕である。壺形土器(179~181)の口縁部は口唇部がやや窪むもので、安定した平底である。やや窪んで胴部へ強く広がる。181は白粉が付いている。外面はヘラミガキで仕上げている。前期前半のものである。

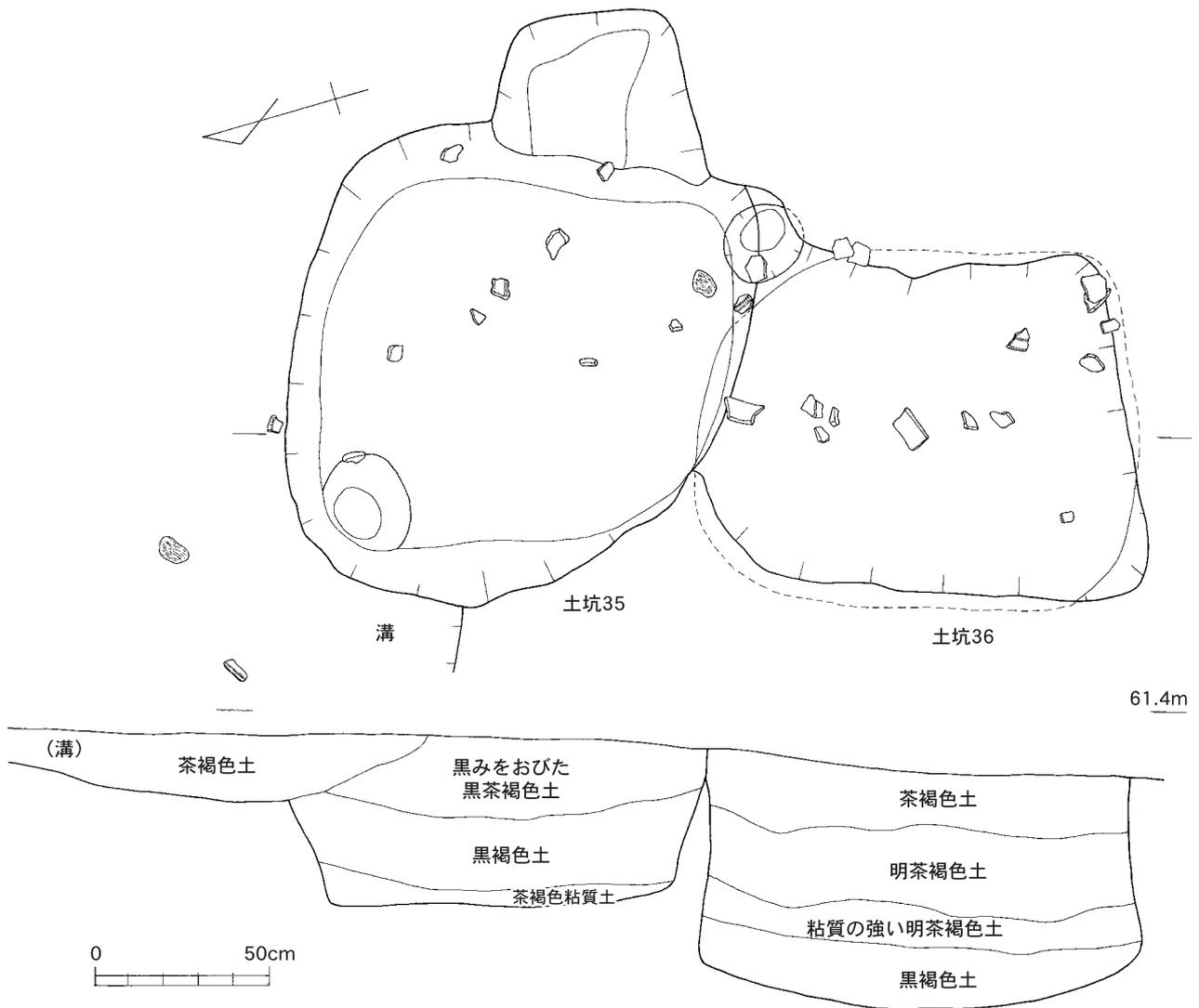
35) 土坑38 (第34図, 182)

G11区にある長径105cm、短径55cmのだ円形をした土坑で、深さは30cmある。

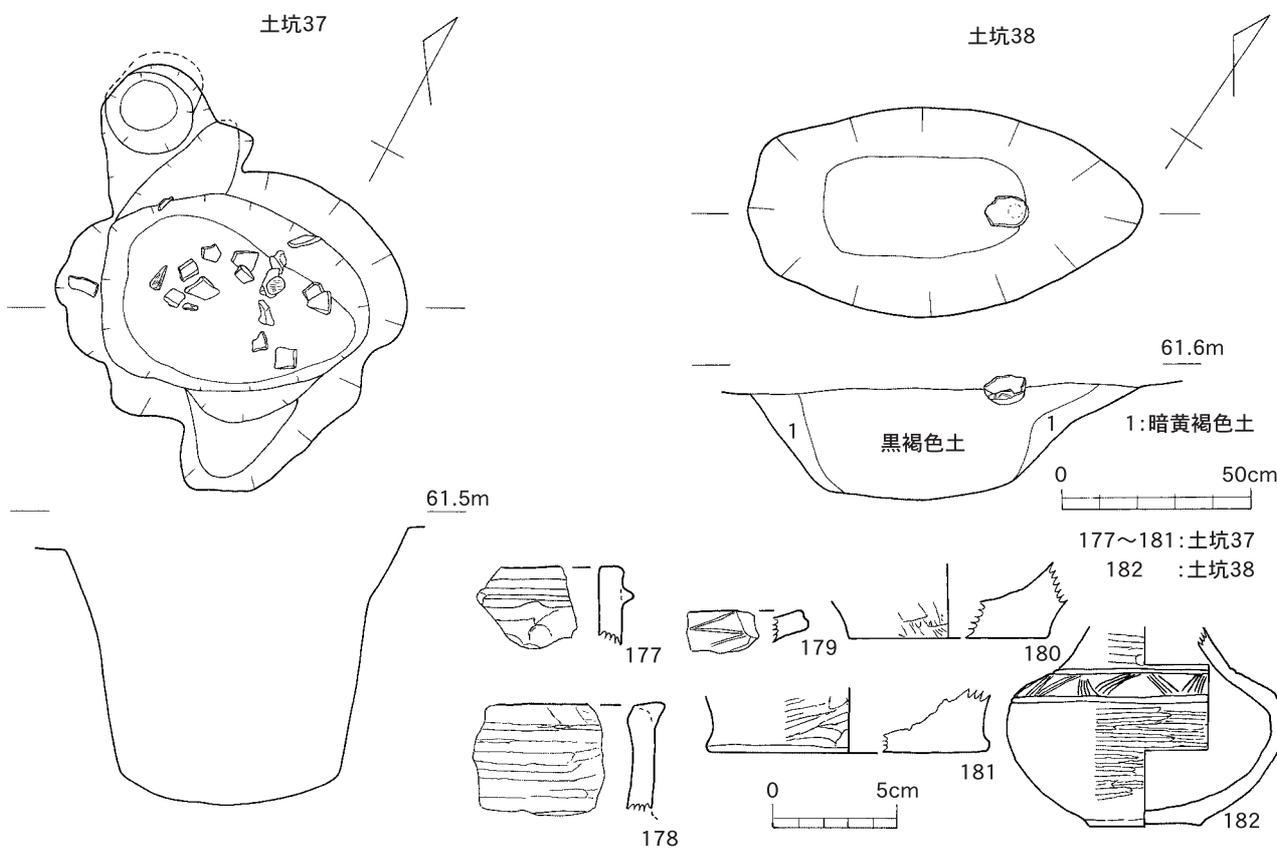
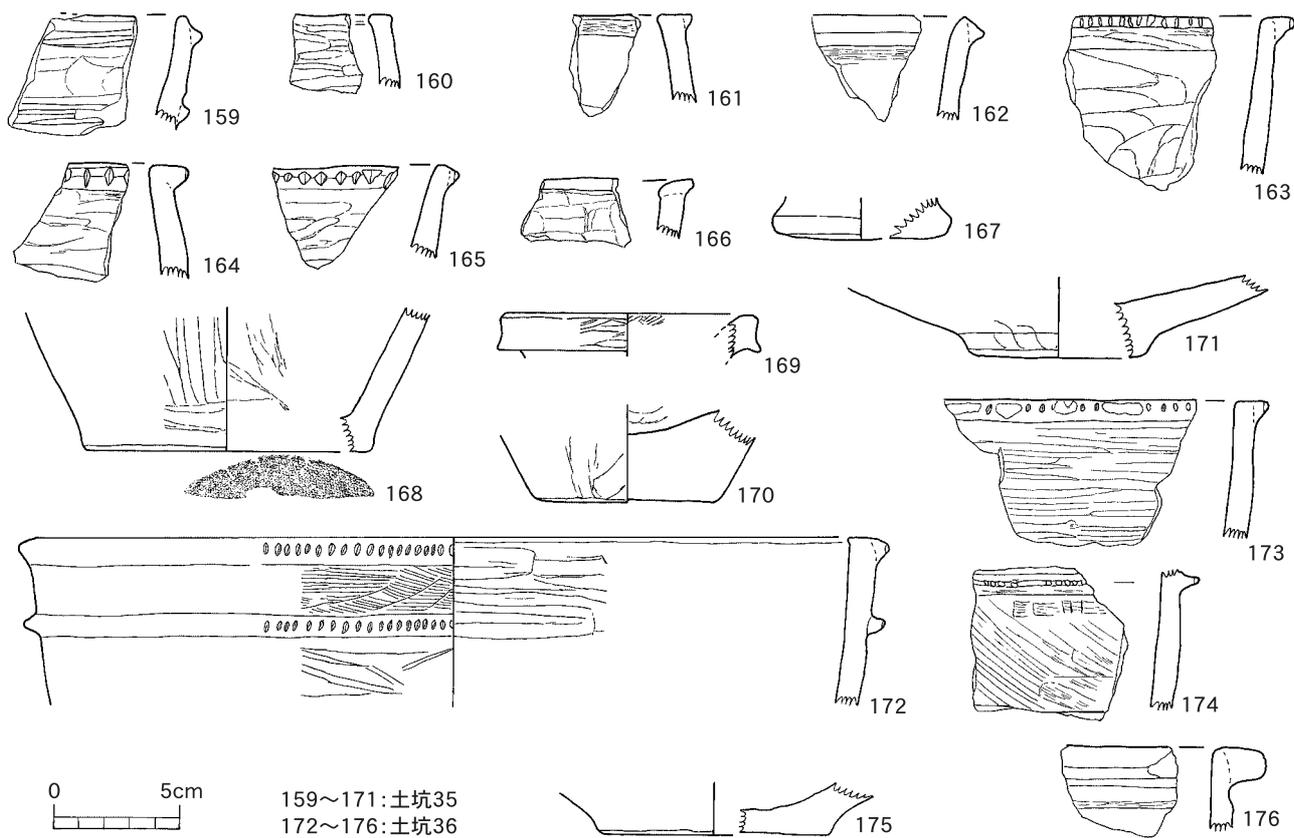
口縁部を欠いているが、底部直径43cm、残存高79cmのほぼ完形の小型壺形土器が出土している。胴部に最大径があり、肩部には二条沈線に上下狭まれた四条の鋸歯状沈線がある。外面・底部はていねいなヘラミガキ、内面は指頭によるていねいなナデで仕上げているが、内面底や外面は剥脱が目立つ。外面は概して暗茶褐色で、内面は黄褐色を呈している。白色石・茶色石などを含む細かい土で、器形・文様・調整・胎土などからして北九州辺りからの持込品と思われる。前期のものである。

36) 土坑39 (第35図, 183~185)

甕形土器は内傾する口縁部で、口縁端と胴部に各一条の三角突帯が貼付けられ、それぞれに細かいヘラ刻みが付される。壺形土器は小型のもので、肩部に弧状と横方向の浅い沈線が施されている。中期前葉のものである。



第33図 土坑35・36



第34図 土坑37・38と土坑35~38出土の土器

37) 土坑40 (第35図)

E 4区にある130cm × 122cmの方形をした土坑で、深さは12cmと浅い。出土品はない。

38) 土坑41 (第35図)

D 5区にある長径86cm、短径53cmの南北方向に長い土坑で、深さは60cmある。出土品はない。

39) 土坑42 (第15図, 78)

F 7区で検出された長径1.5m、短径0.9mのだ円形をした土坑だが、掘り下げていないため深さは不明である。4号住居跡や、E 6区・E 9区出土のものと接合した甕形土器片1点が出土しているのみで、前期のものである。

40) 土坑43 (第23図, S 54)

甕形土器片10点と、安山岩のピエスエスキュー1点、剥片1点、軽石1点が出土している。

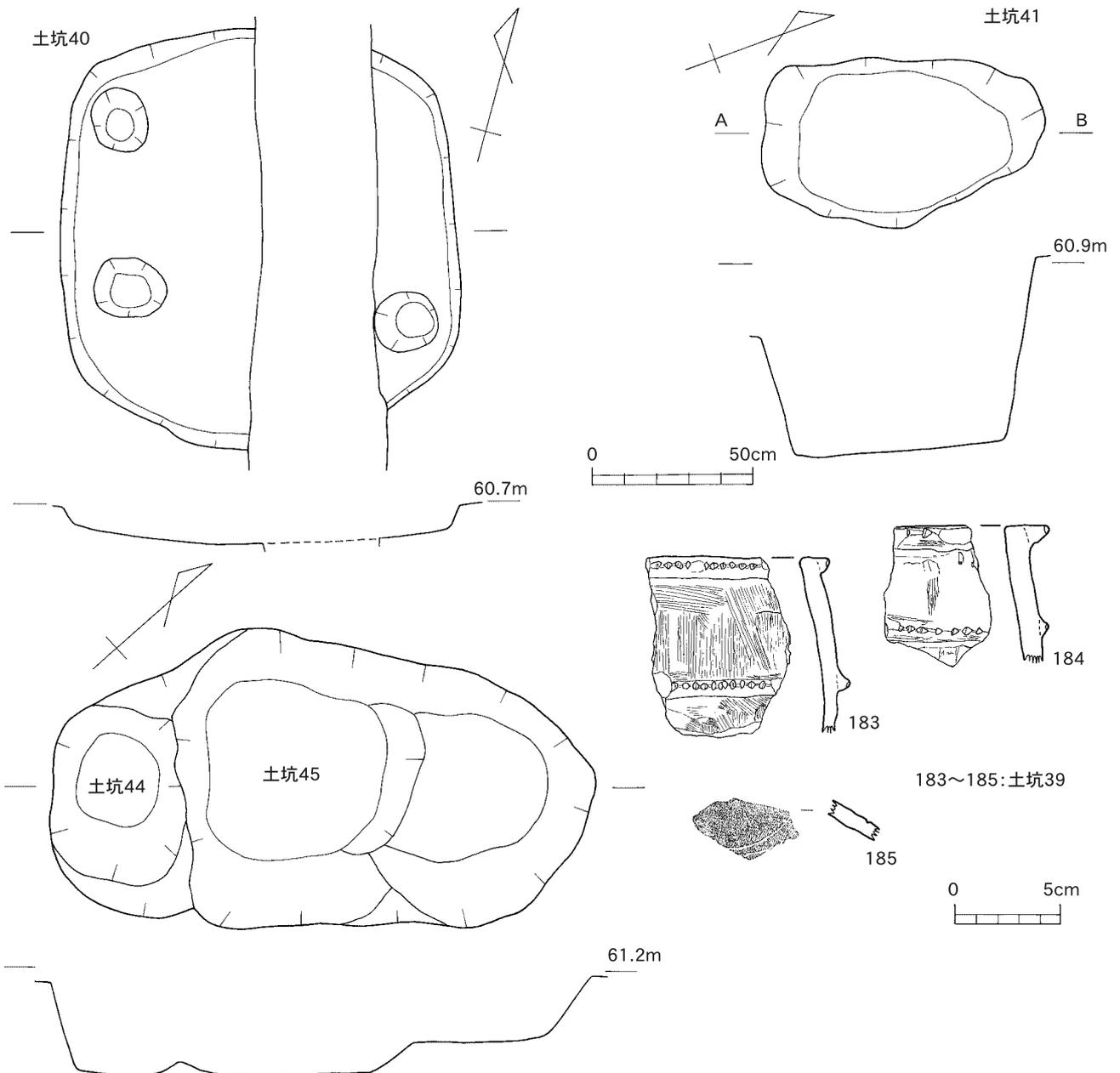
ピエスエスキュー (S 54) はサイドスクレイパーの欠損品を転用したもので、刃部を使用している。

41) 土坑44 (第35図)

E 8区にある70cm × 50cmほどのだ円形土坑で、深さは60cmある。出土品はない。

44) 土坑45 (第35図)

土坑44の北側にある90cm × 130cmの長方形土坑で、床は段をなし、深さは深いほうが65cm、浅いほうが40cmある。出土品はない。

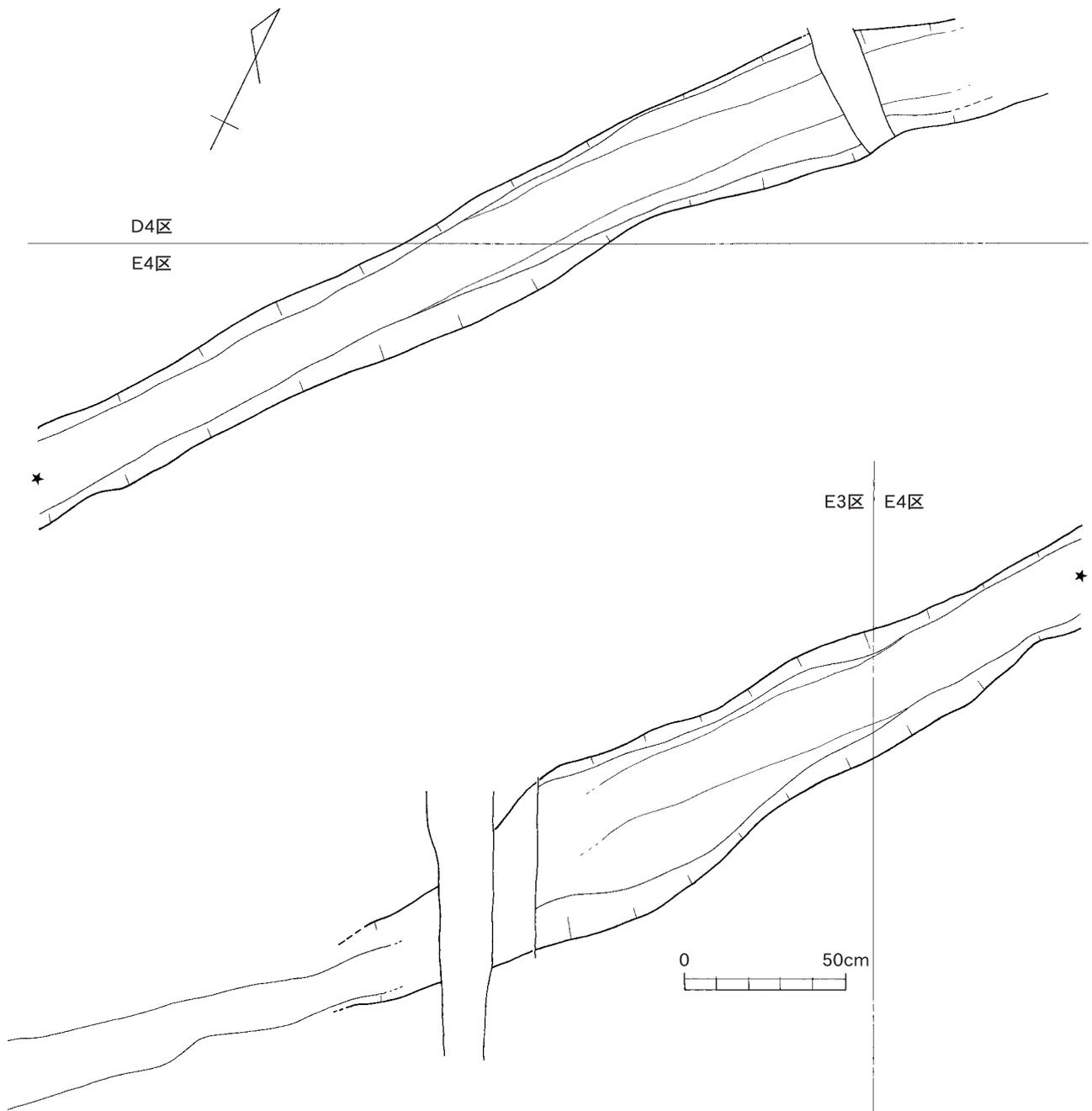


第35図 土坑40・41・44・45と土坑39出土の土器

3 溝状遺構 (第36図)

三条の溝が検出されたが、そのなかには近世のものも含まれている。弥生時代のものと思われるのはC・D7区からD6区、D5区と抜けてD4区、E4区、E3区

へと続く幅30~50cmの浅いものである。中からいくらかの土器が出土しているが、弥生土器がほとんどで、小破片が多い。



第36図 弥生時代の溝状遺構

4 柱穴群（第37図，186～194）

土坑の番号を付したものの他に多くの柱穴があり，1から107までの番号を付けた。このなかのほとんどには弥生土器がはいっていることから，これらの多くは弥生時代の柱穴や小さな土坑かと思われる。高床式倉庫などの可能性もあると思われるが，組み合わせができなかった。

甕形土器（188・189・193）は突帯文土器で，端部に刻目突帯がある。底は安定した平底で，底にこまかい布目が付いている。

壺形土器（186・190～192）の口縁部はいずれも広口壺で，端部が太いものと，口縁部に深い沈線のあるもの，端部がくぼむものがある。192は頸部の下部に強くこまかいハケナデをし段を作っており，そのあとヘラミガキを施して羽状の文様を作っている。内外ともハケナデのあとヘラミガキをして，ていねいに仕上げている。190は頸部に沈線がみられる。底部は安定した平底で，底はハケナデのあとていねいなヘラナデをしている。

鉢形土器（194）は口縁端が細くなる直口鉢である。187は高坏形土器の脚部と思われる。

石器にはピエス・エスキーユ，スクレイパー，打製石斧がある。ピエス・エスキーユ（S145）は長方形をした分厚い剥片の短側辺の片方に使用痕がみられる。スクレイパーは横長の剥片の長側辺の一方を加工しているが，直線状とはならずへこんだ形を呈している。打製石斧はバチ形・短冊形・えぐり入りのものの3種類がある。バチ形のもの（S194）は敲石あるいは擦痕石器として再利用し，側辺全周に使用痕がみられる。短冊形のもの（S195）も同様である。えぐり入りのものうちS199は磨滅が目立つ。S196は敲石あるいは磨石としての転用が目立ち，刃部は長さが半分ほどになっている。側辺部は擦痕石器としての使用が顕著でツルツルしている。

5 焼土跡（第38図）

中央部が赤く，その周辺が変色したドーナツ状の遺構である。炭化した木の実が集中して出土しているD-6～8区で5基検出された。形状・所在位置などからして木の実のアク抜き用の屋外炉である可能性が考えられる。

1) 焼土1

D8区で検出され，直径40cmほどが数cmの深さに赤く焼けている。そのまわりの直径60cmほどは茶褐色を呈しているが，部分的には赤く変色している。深さ10cmに及ぶ部分もある。

2) 焼土2

D8区で検出され，40×50cmほどのだ円形状に赤く焼けている。赤褐色を呈しているが，部分的には赤く焼けている。まわりは70×90cmほどの範囲が暗茶褐色を呈し，深い所は10cmに及ぶところもある。

3) 焼土3

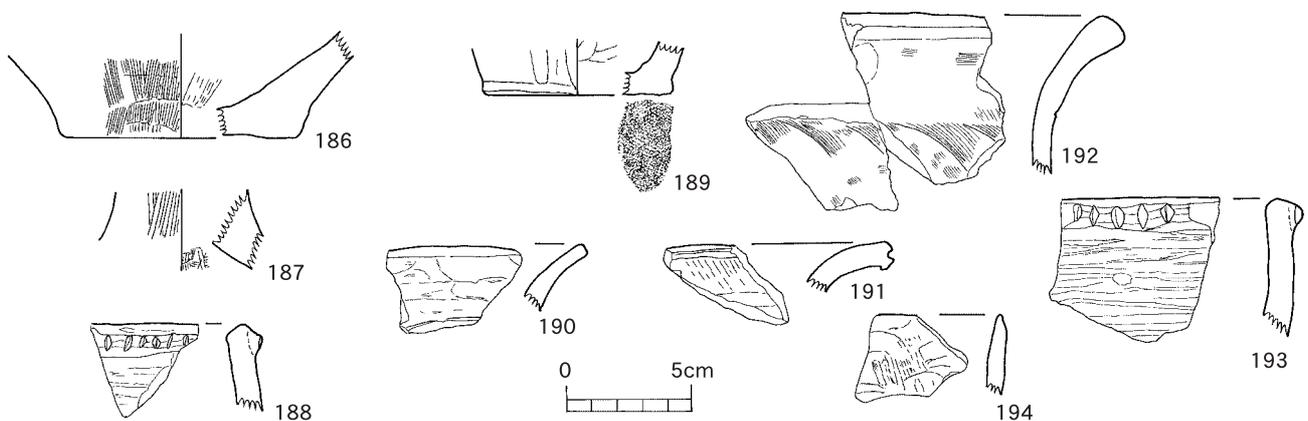
D7区で検出され，直径35cmほどが数cmの深さに赤く焼けている。そのまわりは直径70～75cmが暗茶褐色を呈しているが，部分的には赤くなっている。深い所は10cmに及ぶ所もある。周辺の柱穴に切られている。

4) 焼土4

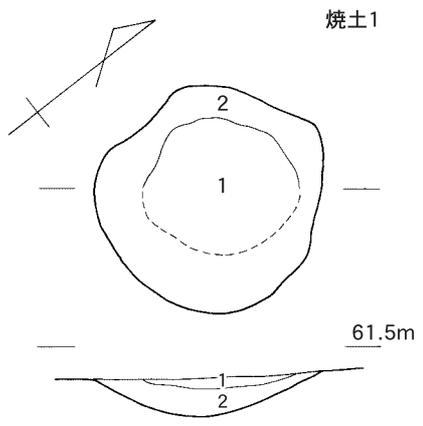
D7区で検出され，20×25cmほどの範囲が赤褐色を呈している。そのまわりは直径50～60cmの範囲が暗茶褐色を呈して，中央の深い所は15cmを越えている。柱穴に切られている。

5) 焼土5

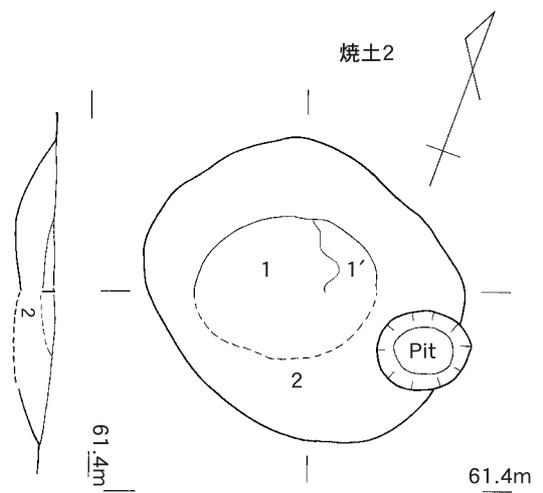
C・D6区で検出され，35×40cmの範囲が赤くなっている。そのまわりは70×80cmほどの範囲が茶褐色を呈し，深さ10cmに及ぶ所もある。部分的には赤くなっている。



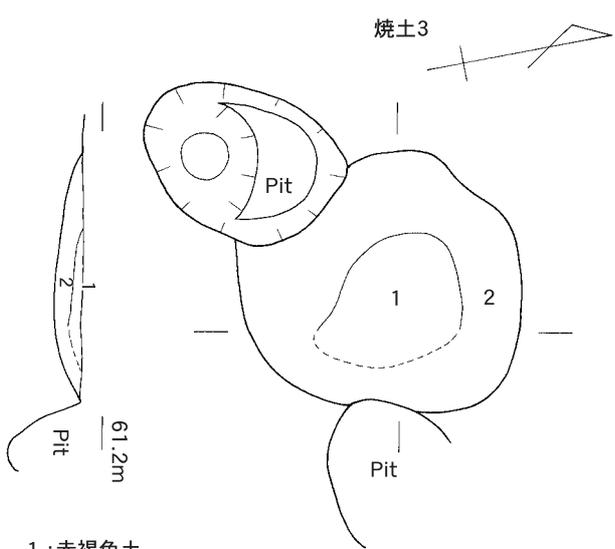
第37図 柱穴出土の土器



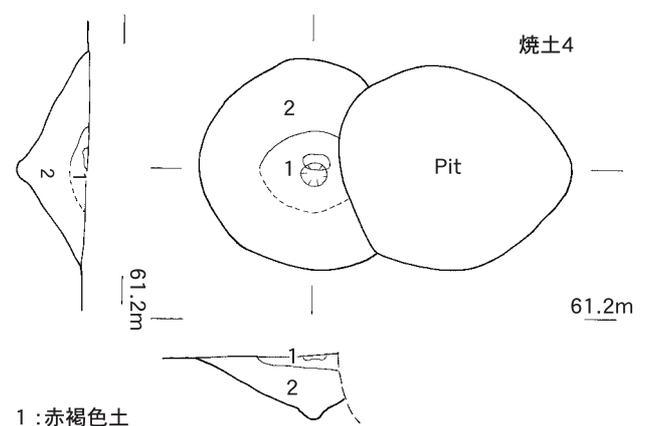
1: 赤褐色土
2: 茶褐色土(部分的に赤化した土が見られる)



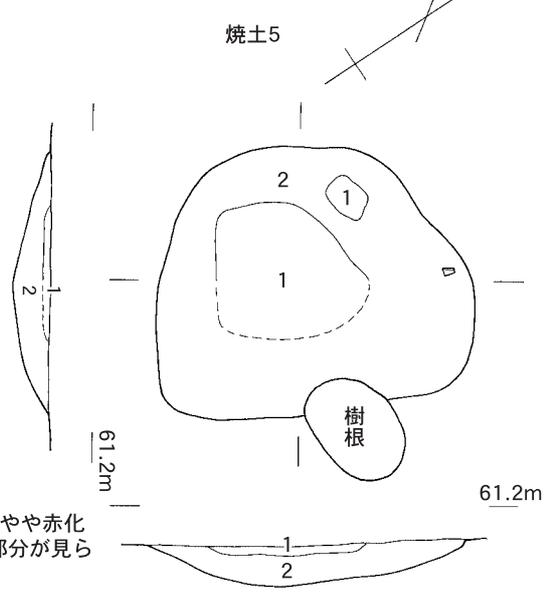
1: 赤褐色土
1': 赤化の強い赤褐色土
2: 暗茶褐色土(部分的に赤化した土が見られる)



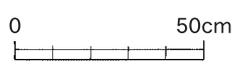
1: 赤褐色土
2: 暗茶褐色土(部分的に赤化した土が見られる)



1: 赤褐色土
2: 暗茶褐色土(部分的に赤化した土が見られる)



1: 赤褐色土
2: 茶褐色土(やや赤化している部分が見られる)



第38図 焼土跡

第2節 遺物

1 弥生土器

当遺跡の主体となる土器は弥生土器で、遺構のほかに包含層などからも多くの出土がみられる。時期的には前期のものと、中期のものがあり、器種には甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・蓋形土器とがある。

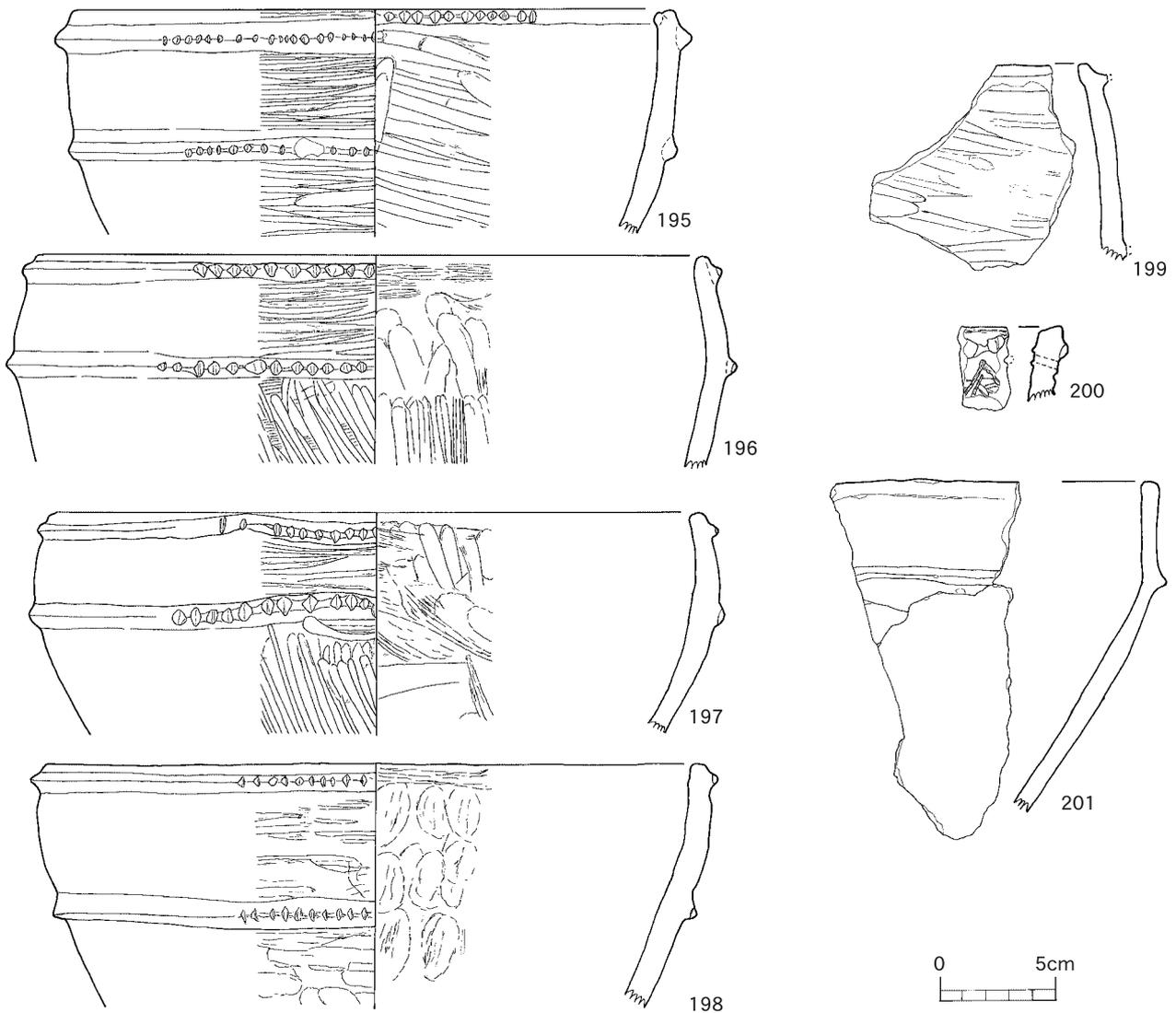
1) 前期の土器

甕形土器 (第39図~第47図, 195~306)

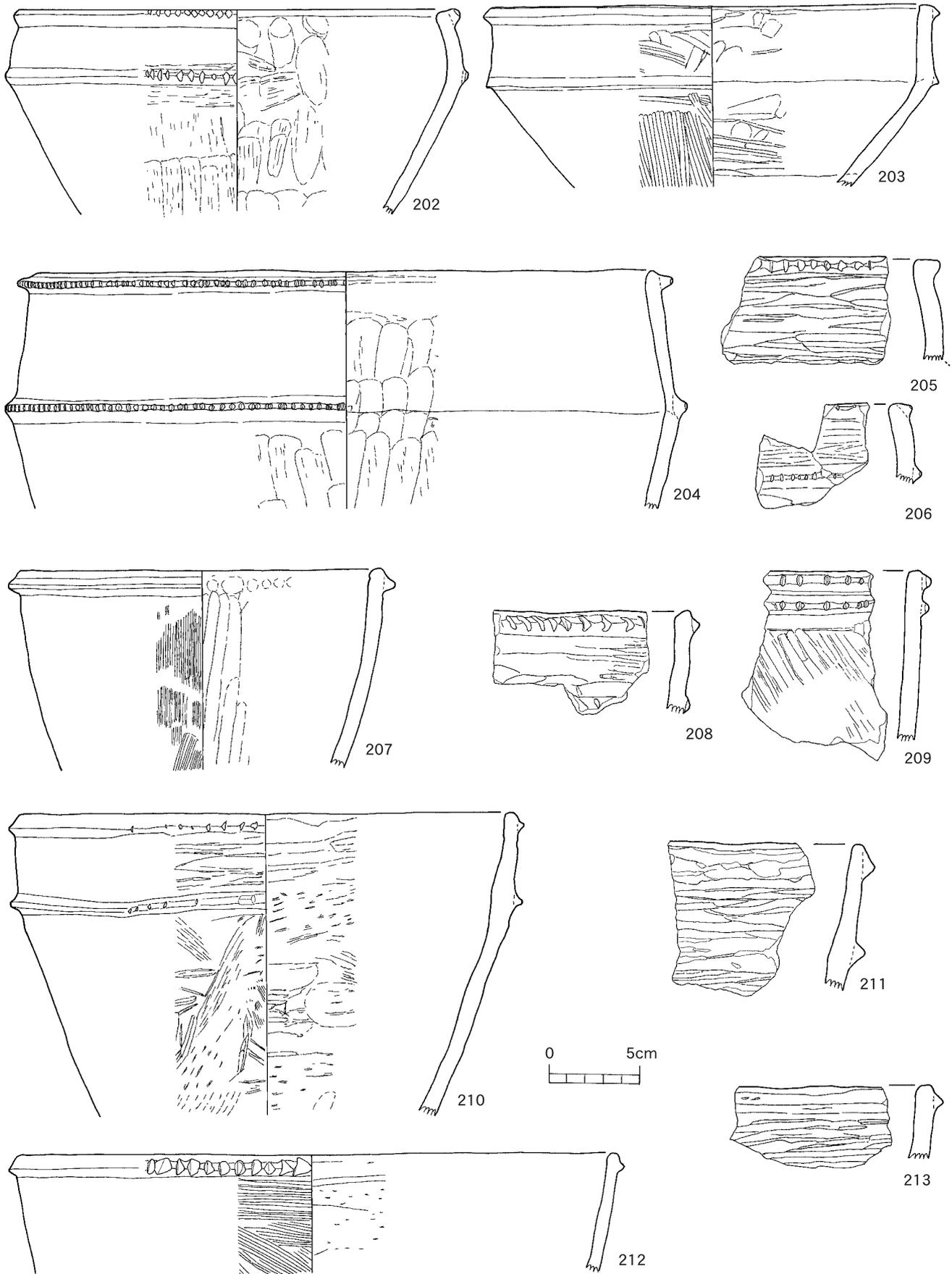
当地域の土器は細分化がされていないため、ここでは当遺跡独自の分類を行う。いわゆる突帯文土器が主体だが、如意状口縁風のもの少量含まれている。口縁部の傾きは内湾ぎみに立ち上がる深鉢形のもの、胴上半部で屈曲して内傾するもの、底部から口縁へ向かってまっすぐ開きながら立ち上がるものがある。突帯の形状はほとんど三角形を呈しており、これに刻み目のあるものと、ないものがある。また、突帯の数は口縁部端に一条の

みあるものと、口縁端とそのすぐ下にあと一条のあわせて二条あるもの、さらには口縁部の二条と、そこからいくらか離れて下部に二条のあわせて四条あるものがある。口縁端にある突帯は端部に貼付けられるものと、端部からやや離れて貼付けられるものがある。

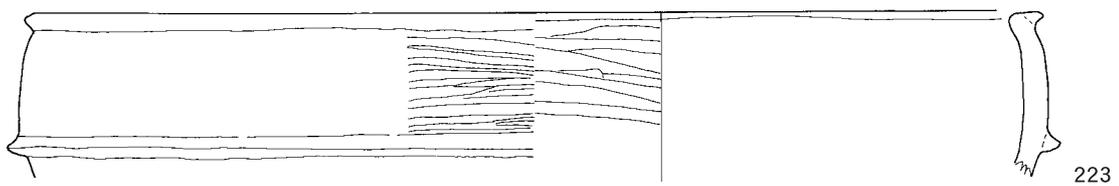
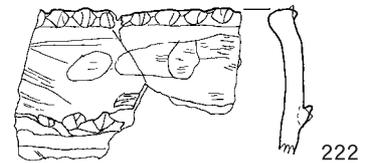
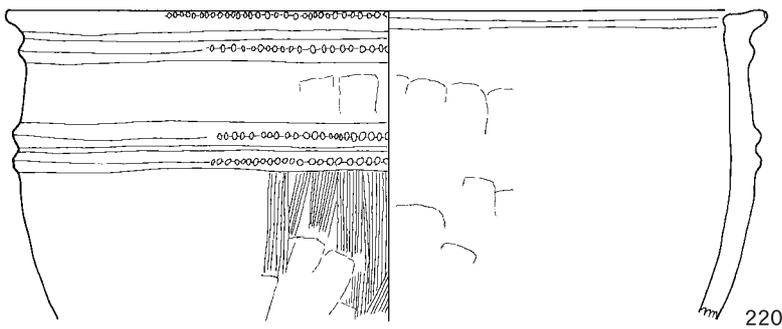
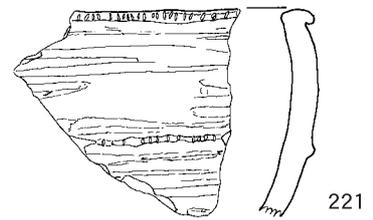
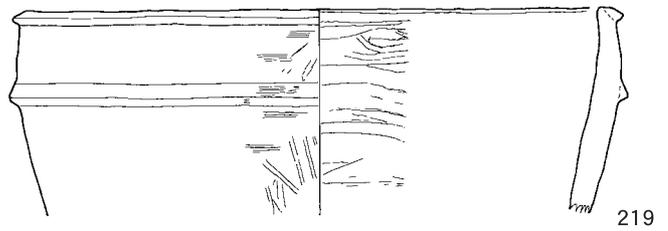
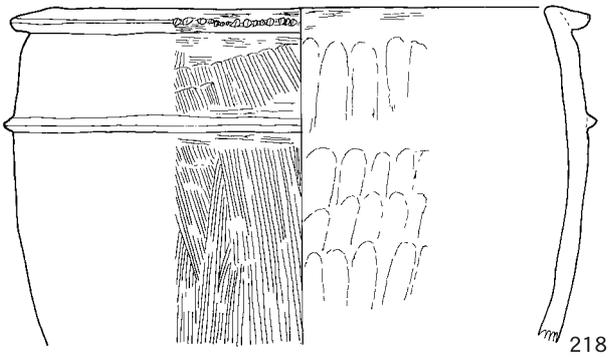
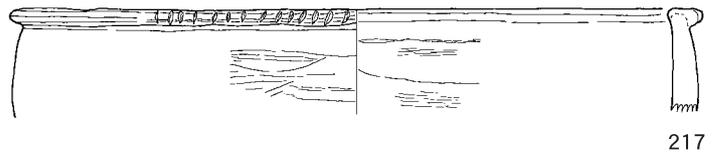
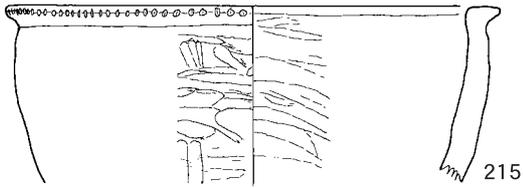
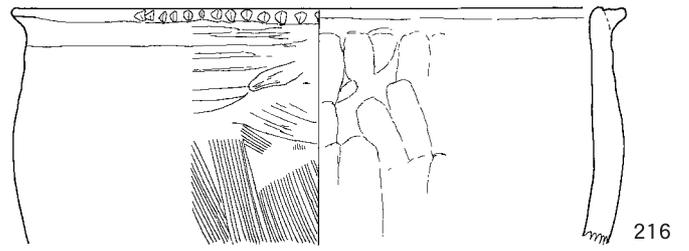
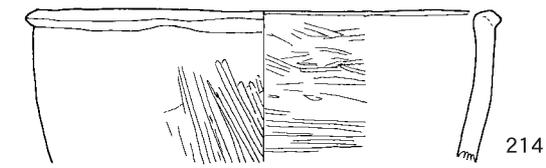
195~206が内湾ぎみに立ち上がる器形をしたもので、丸みをもって内湾するものと、203や204のように角をもって内湾するものがある。201を除いて、いずれも二条帯で、刻目突帯のものが多い。201は肩部のみに三角突帯があり、端部はやや肥厚している。刻目は小さいものが多い。口縁部の突帯はやや下に貼付けられたものが多いが、202・203・205・206などは端部に貼付けられている。195は内面の口縁端に断面が矩形の突帯が貼付けられ、外面よりやや大きめのヘラ刻みが付されている。口縁直径は24~29cmほどだが、204は36cmとやや大型である。外面はヘラミガキのものも多く、ヘラナデのものもいねいである。内面もいねいなヘラナデのもの



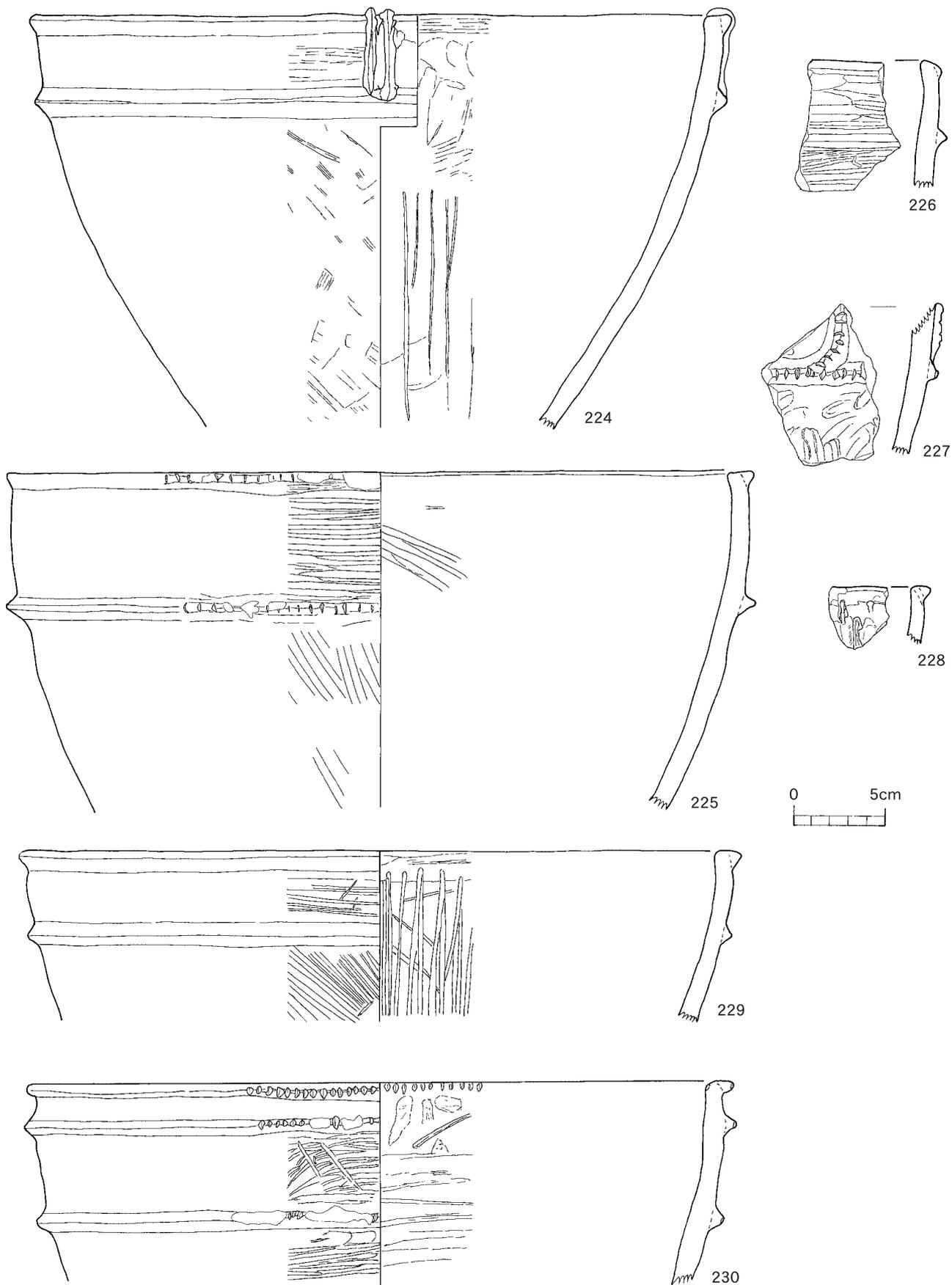
第39図 弥生時代前期の土器(1) 甕形土器(1)



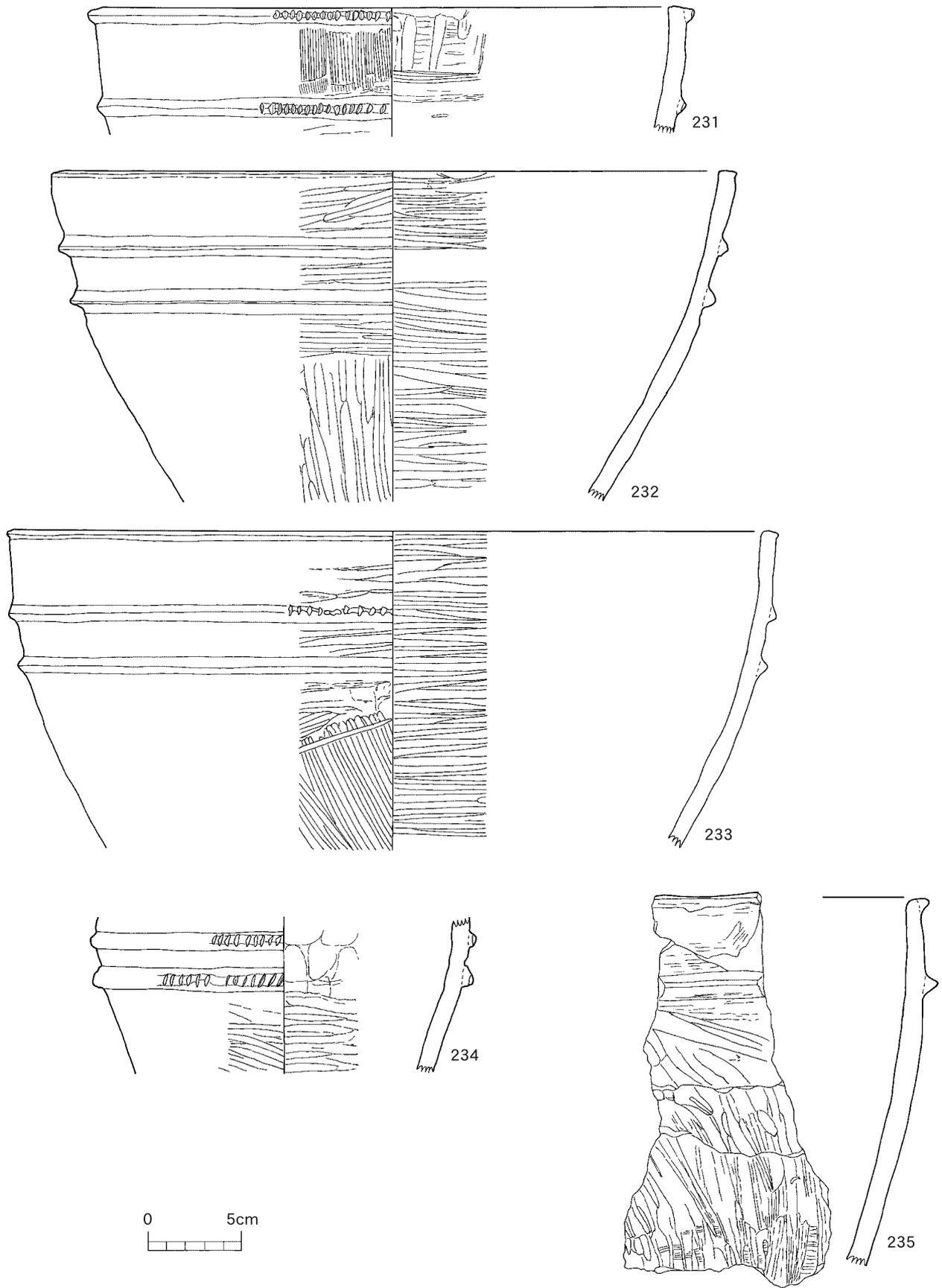
第40図 弥生時代前期の土器(2) 甕形土器(2)



第41図 弥生時代前期の土器(3) 甕形土器(3)



第42図 弥生時代前期の土器(4) 甕形土器(4)



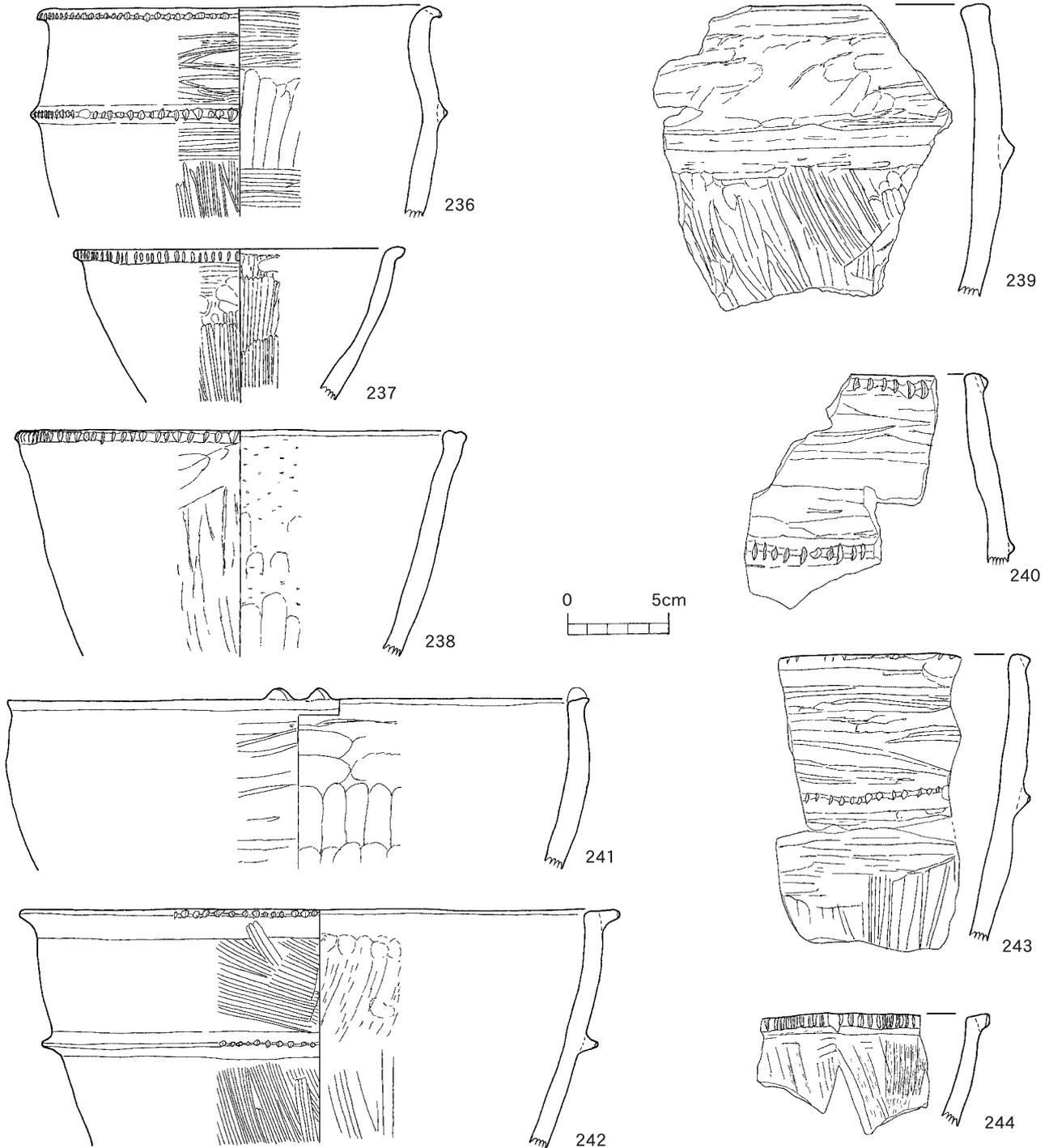
第43図 弥生時代前期の土器(5) 甕形土器(5)

多く、ヘラミガキのものもある。203の内面には指頭圧痕もみられる。外面にススが付着したものもある。200は突帯の下に二重の鋸歯状沈線があり、その下に横あるいは右下がり斜方向沈線がある。また、その横に焼成前の小さな穿孔がみられる。

207～213は外へ開きながらまっすぐ立ち上がる器形をし、突帯が口縁端よりやや下に貼付けられている。突帯は一条のもの、208や210・211のように、その下にあと一条ある二条帯とがある。209は口縁部に接して二条

貼付けられている。刻目のあるものが多いが、207・213のようにないものもある。口縁直径は207のように20cmしかないものと、212のように33cmある大きなものがある。212はまっすぐ伸びている。調整は両面ともヘラによるていねいなナデが多いが、211～213のようにヘラミガキのものもある。207の外面は縦方向のハケナデである。210の両面と212の内面は内外ともヘラケズリをし、そのあとミガキに近いていねいなヘラナデを施している。

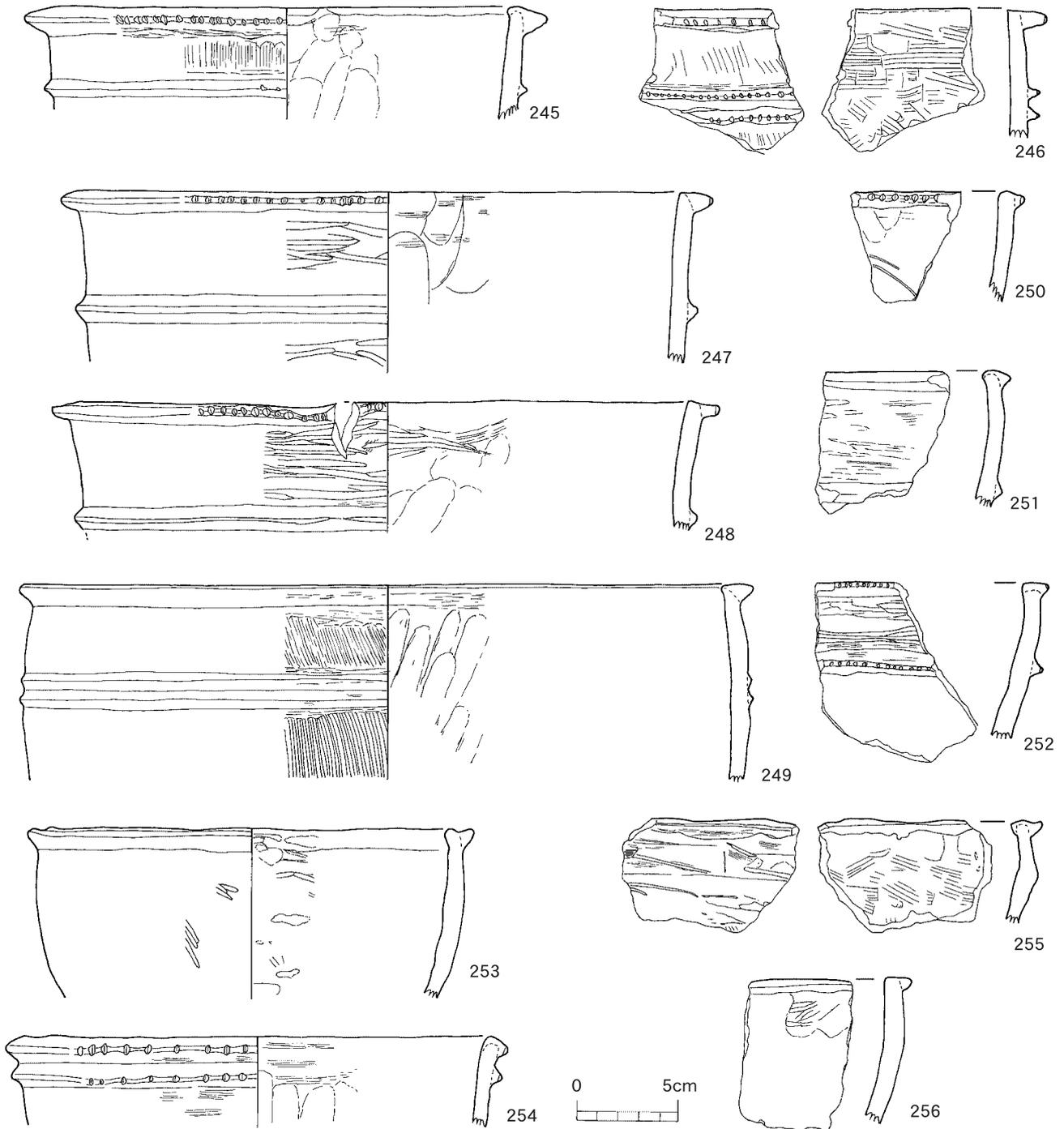
214～235は丸みをもって、やや内弯する器形をし、口



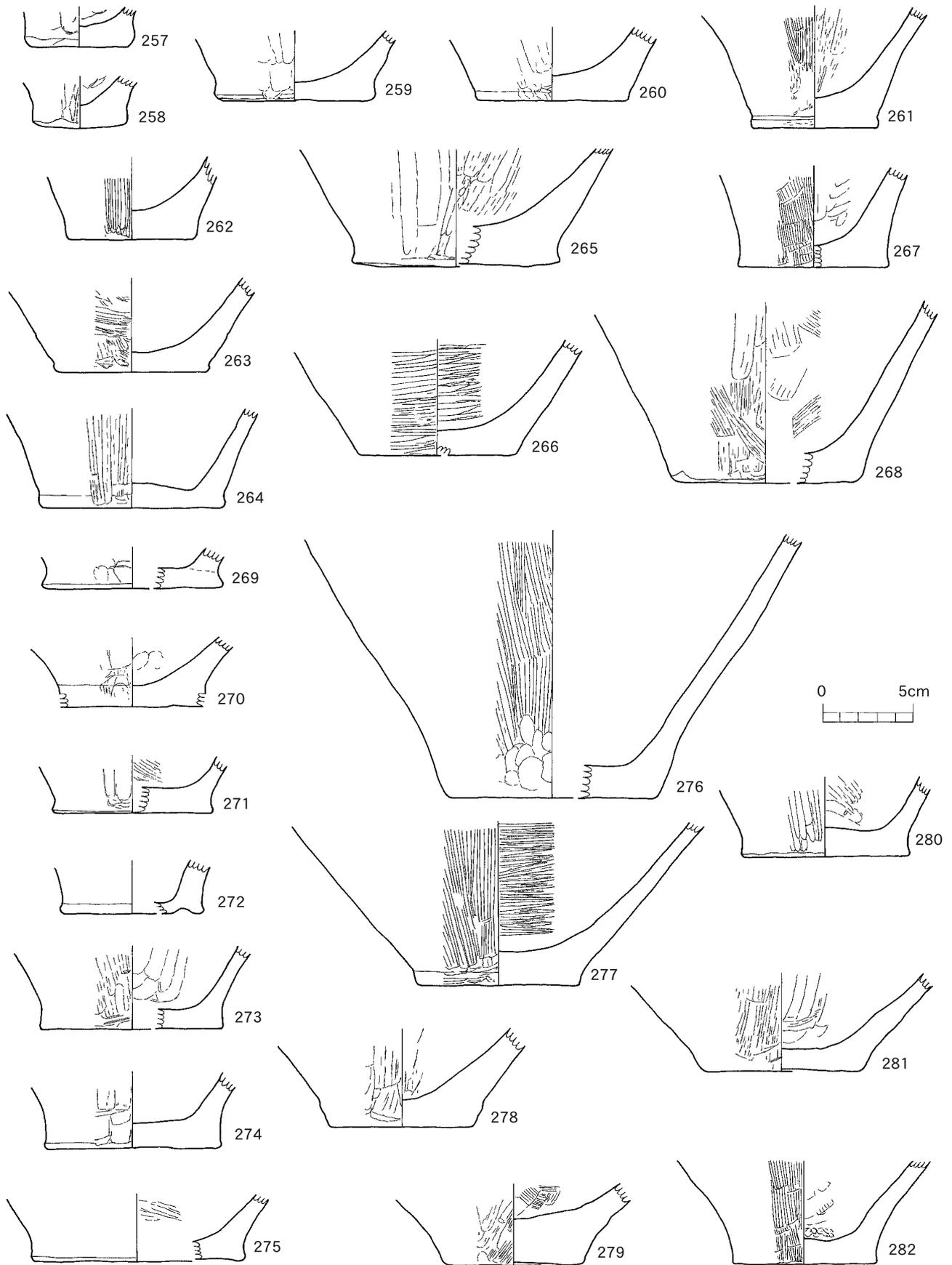
第44図 弥生時代前期の土器(6) 甕形土器(6)

縁端に突帯の施されるものである。このタイプにも突帯が一条のものと二条のものがあるが、220は口縁と胴部に各二条のあわせて四条、230は口縁に二条と胴部に一条のあわせて三条ある。232と233は胴部に二条あり、口縁部の一条は低い。234は口縁部が欠けているが、胴部に二条ある。突帯には小さな三角突帯のものが多く、217・218・220・230・234・235のように大きい三角形あるいは矩形の突帯が貼付けられるものがある。突帯には刻目のあるものとなないものがあるが、218は口縁部

のみで、胴部の突帯にはない。233は胴部の二条のうち、一条のみに突帯がある。刻み目は小さなものが多いが、222などは幅広の三角突帯に幅広のヘラで深く押し込んでいる。口縁直径は214のように14cmしかない小さなものから、223や225・233のように40cmもある大きなものまである。224は口縁直径が37cmほどの大きなものだが、口縁端と胴部の間に二本の棒状突帯が貼付けられている。接合できなかったが、同一個体と思われる破片には、この部分（つまり、対角の部分にあたる同じ場所）に半円



第45図 弥生時代前期の土器(7) 甕形土器(7)



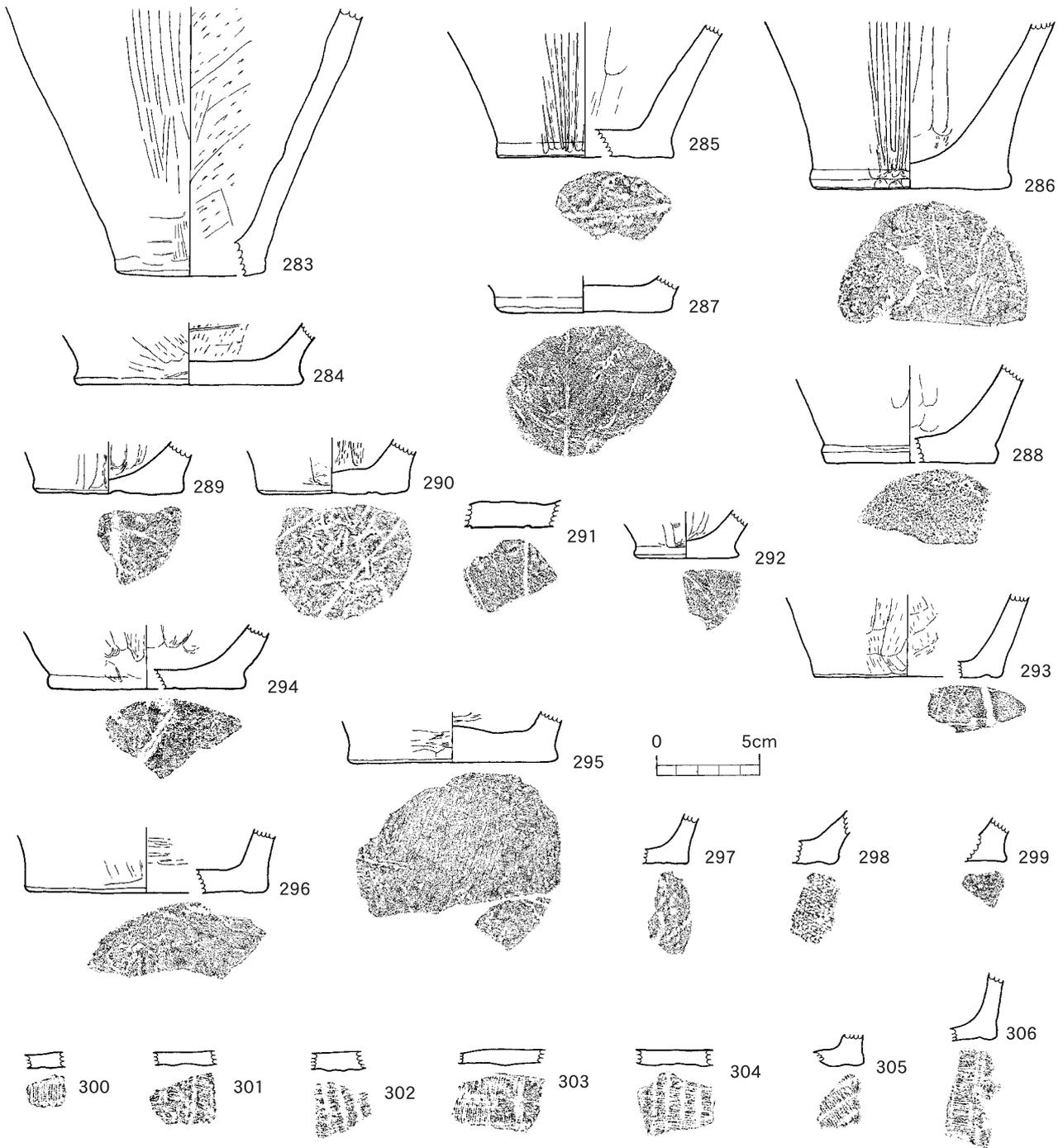
第46図 弥生時代前期の土器(8) 甕形土器(8)

状を呈する棒状貼付突帯がみられる(図版15)。227の破片にも突帯間に弧状の棒状三角突帯が貼付けられる。これには刻目が施されるが、横方向の突帯に施したあとに縦方向の突帯に施している。口縁直径が38cmある230は、内面の口縁端に刻目が施されている。調整はていねいなヘラナデのものが多いが、ヘラミガキのものも多い。216・218・220・231・235の外面には八ケ目もみられ、そのあとヘラナデをしたものもある。内面に指頭圧痕のあるものもある。

236は口縁直径が19cmある如意状を呈するもので、胴

の屈曲部に低い三角突帯が貼付けられ、この突帯と口縁部に刻目が施されている。237は口縁直径が16cmしかない小型のもので、外反する口縁端にヘラ刻みがある。

238~256は外へ開きながらまっすぐ立ち上がり、口縁端に突帯の貼付けられるものである。このタイプにも突帯が一条のものと二条のものがあるが、238・239・241の口縁突帯は低い。240の突帯は幅広である。246は高い突帯を施しているが、胴部にはくっついて二条の三角突帯が貼付けされるため三条の突帯となる。249も胴部に二条の低い突帯があるため三条の突帯となる。254

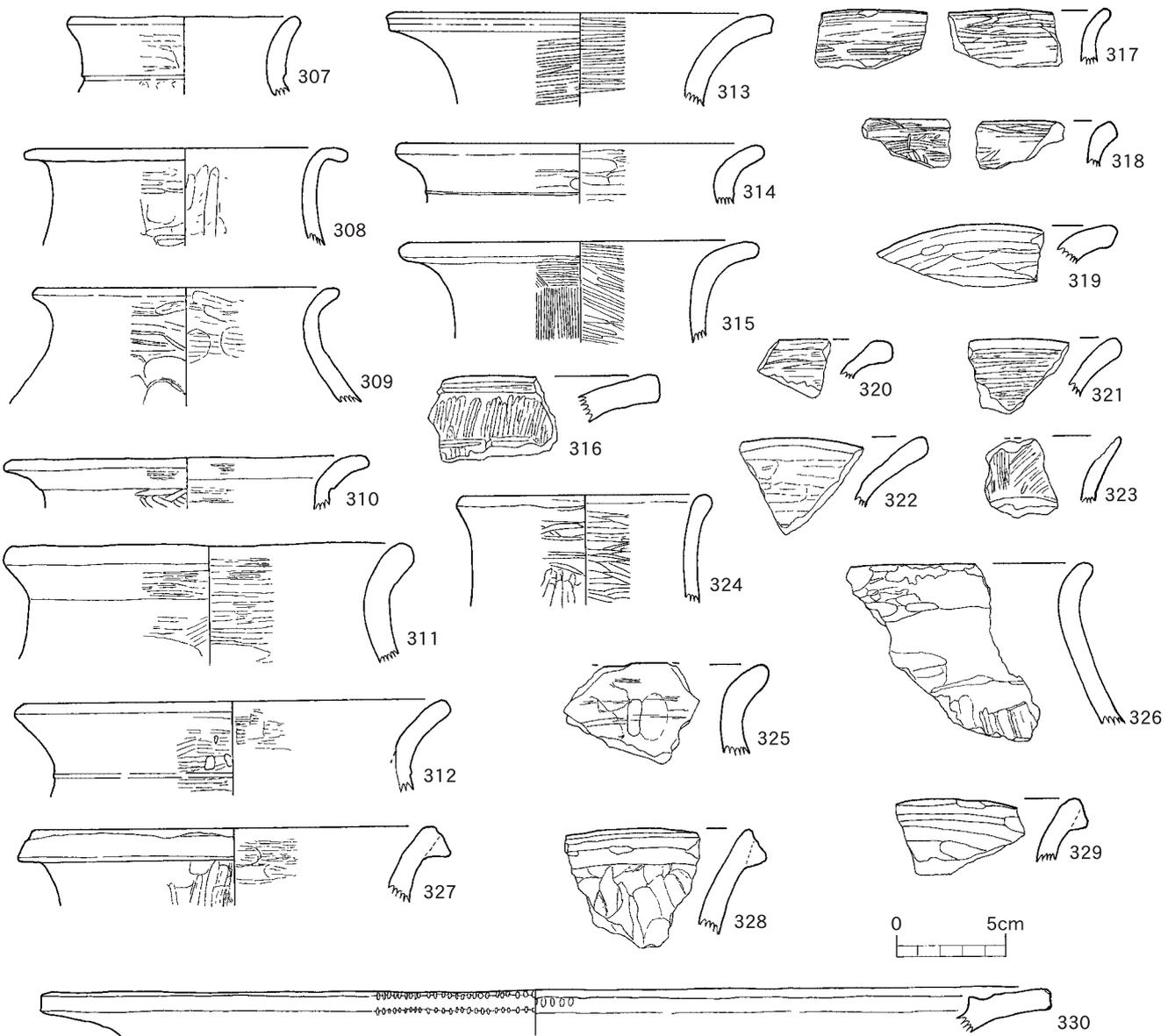


第47図 弥生時代前期の土器(9) 甕形土器(9)

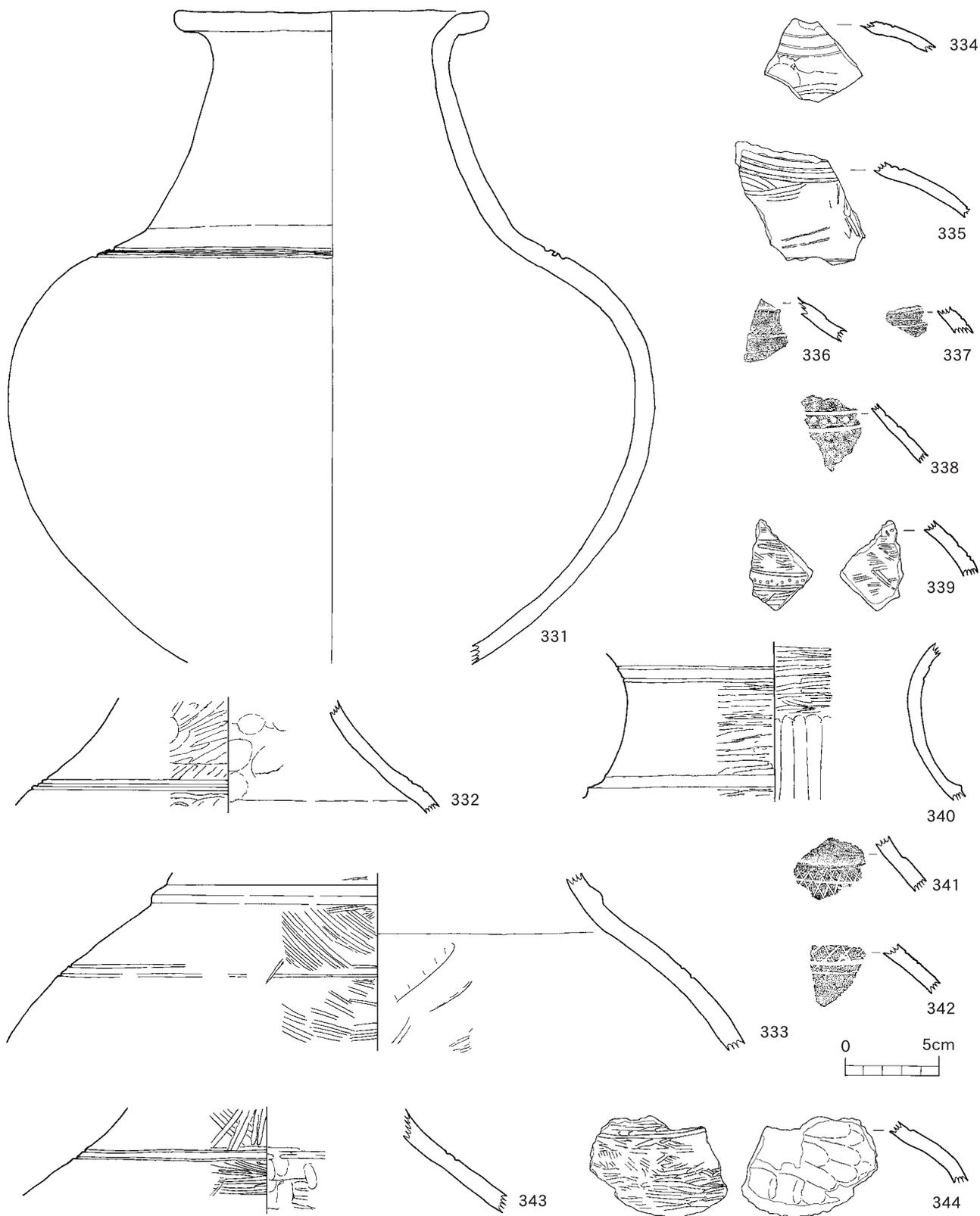
は口縁に二条の突帯がある。突帯には刻目のあるものとな
ないものがあるが、浅くて小さいものが多い。247・248
は口縁部だけに刻目があり、胴部突帯にはない。245の
胴部突帯には部分的に刻目があるだけである。250の口
縁下には二条のヘラ沈線による曲線がみられ、重弧文の
可能性がある。口縁直径は238や253のように22cmほどし
かない小さなものから、249のように35cmもある大型の
ものまである。外面・内面ともていねいなヘラナデ調整
あるいはヘラミガキで仕上げているが、242・245・249
の外面、246・255の内面にはハケ目もみられる。また、
238の内面はヘラケズリのあとヘラナデで仕上げている。
238の突帯は低いが、ヘラ刻みは大きい。239はやや内反
しているが、分厚い作りの大型甕である。胎土も4mm大
の小石を多く含む粗い土を用いている。241は口縁直径
28cmのもので、低い突帯の貼付けられるものだが、口唇

部に2個一対の突起が貼付けられている。内面に繊維痕
跡がみられる。242の突帯は二条とも高い。253は口縁の
少し下に突帯が貼付けられるが、口縁・突帯とも波状と
なっている。246～249・256などは口縁内面がはっきり
した稜をもって屈曲しているが、内側にやや張り出すも
のもあり、特に255などは口縁・突帯とも波状を呈し、
内側にも大きく張り出した雑な作りである。

底部は安定した平底で、ややくびれてから胴部へ向
かって外へまっすぐ伸びている。直径は257や258のよう
に5cmほどの小さいものから、275のように11cmあるも
のもであるが、口縁部に比べて小さい。底部はていねい
にナデているものが多いが、272はでこぼこしている。
底部の外への張り出しも259～265などのように強く張り
出すものと、266～268などのように弱いものがある。
底に木の葉圧痕のみられるもの、布痕のあるものもある。



第48図 弥生時代前期の土器(10) 壺形土器(1)



第49図 弥生時代前期の土器(1) 壺形土器(2)

木の葉は大きい葉を用いており、葉脈がはっきり残っている。布痕にはこまかく格子になったものと、編布状のものがある。295のようにていねいにナデしているため、布痕が周辺のみしか見られないもの、296のようにくぼ

み部分しか残っていないものなどもあることから、本来は多くの土器に布を用いている可能性がある。木の葉圧痕の場合も同様で、底のナデによって中央の脈だけが残っているものもある。底に白い粉のついてるものも

見られることから、土器作りの際に白い粘土状のものを敷いていたことが考えられる。

壺形土器（第48図～第51図，307～375）

頸部からゆるやかに外反する口縁部で、肩が張り安定した底になる。口縁部は直径が10～12cmほどである。口唇部は多くが丸みをおびているが、316や318は矩形となる。320は玉縁状となっている。308は口縁部がやや強く反り、324は直に近く立ち上がり、端は丸みをおびる。327～329は口縁直径が19cmほどで、外面に三角突帯が貼付けられている。

330は広口壺で、口縁直径が45cmある。口唇部にはヘラ刻みが施され、その間に凹線がみられる。内面の天井部には三角突帯が貼付けられ、部分的にヘラ刻みが施されている。

331は口縁直径が16cm、胴部最大径が34cmあり、肩部には三条の凹線がみられる。

頸部から肩部に移る部分には二条から三条ほどの沈線や貼付突帯がある。肩部には各種の文様がみられる。沈線・突帯が巡るもの、刺突文・斜格子・弧文・重弧文・綾杉文・鋸歯文などがある。頸部の沈線・突帯は他の文様と重複する可能性がある。333は頸部に三角突帯があり、肩部に二条の沈線があるが、沈線は途切れ途切れである。334は肩部に三条の沈線が、その下にヘラによる重弧文が描かれる。335は肩部と胴部にヘラ沈線がある。336は肩部に綾杉文の描かれたかまぼこ形の低い突帯が

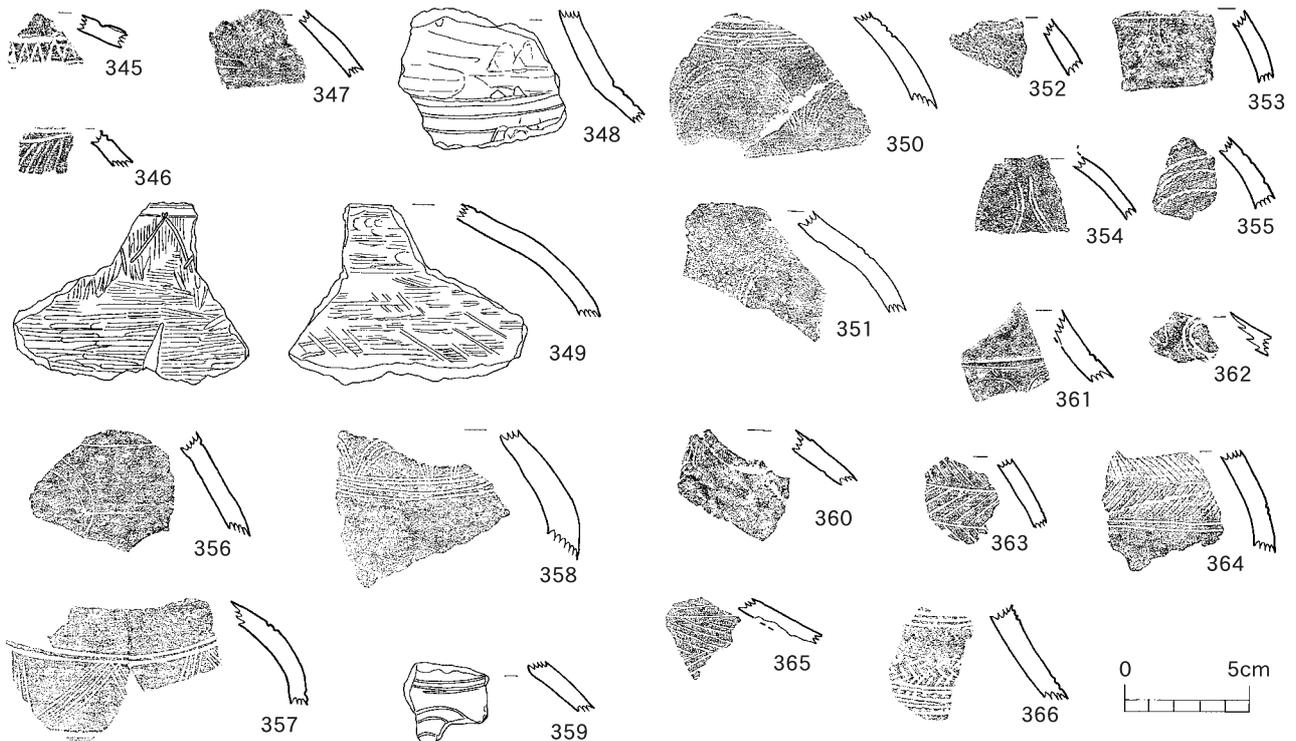
ある。345は凹線に挟まれた鋸歯文がある。346は二条の凹線の下に二枚貝腹縁による七条の押圧文がみられ、鋸歯文を意図しているものと思われる。347は三条の沈線の下に四条の鋸歯文がみられる。348は段落ちの下に二条の沈線があり、その下に鋸歯状沈線がある。349は二条の浅い沈線の下に鋸歯状沈線がある。350～361は重弧文のあるもので、350～355は貝殻腹縁で、356～358・360・361はヘラ描きで描いている。350は三条沈線の下に四重弧文が、351・353も四重弧文がある。354は下向きの二重弧、355は三重弧である。356は沈線の下に二重の重弧文らしきものがみえる。357は二条の沈線に挟まれた部分に四条のヘラ描き鋸歯文が描かれている。358は四条のヘラ描き沈線の上に三条のヘラ描き重弧文がある。362は二条の同心円文と鋸歯状文がある。363～365はヘラ沈線に挟まれた綾杉文である。366は沈線に挟まれた突帯文が二段あり、その上に一条の沈線と鋸歯文、さらにその上に三条の沈線がある。

小型壺形土器（第51図，376）

口縁直径が11cmしかない無頸壺形土器である。直径13cmの胴部中半でくの字状に内傾し、外面はミガキに近いでない横方向のヘラナデ、内面も横方向のヘラナデで仕上げている。

鉢形土器（第51図，377～381）

台なしのものと台付きのものがある。377は口縁直



第50図 弥生時代前期の土器(12) 壺形土器(3)

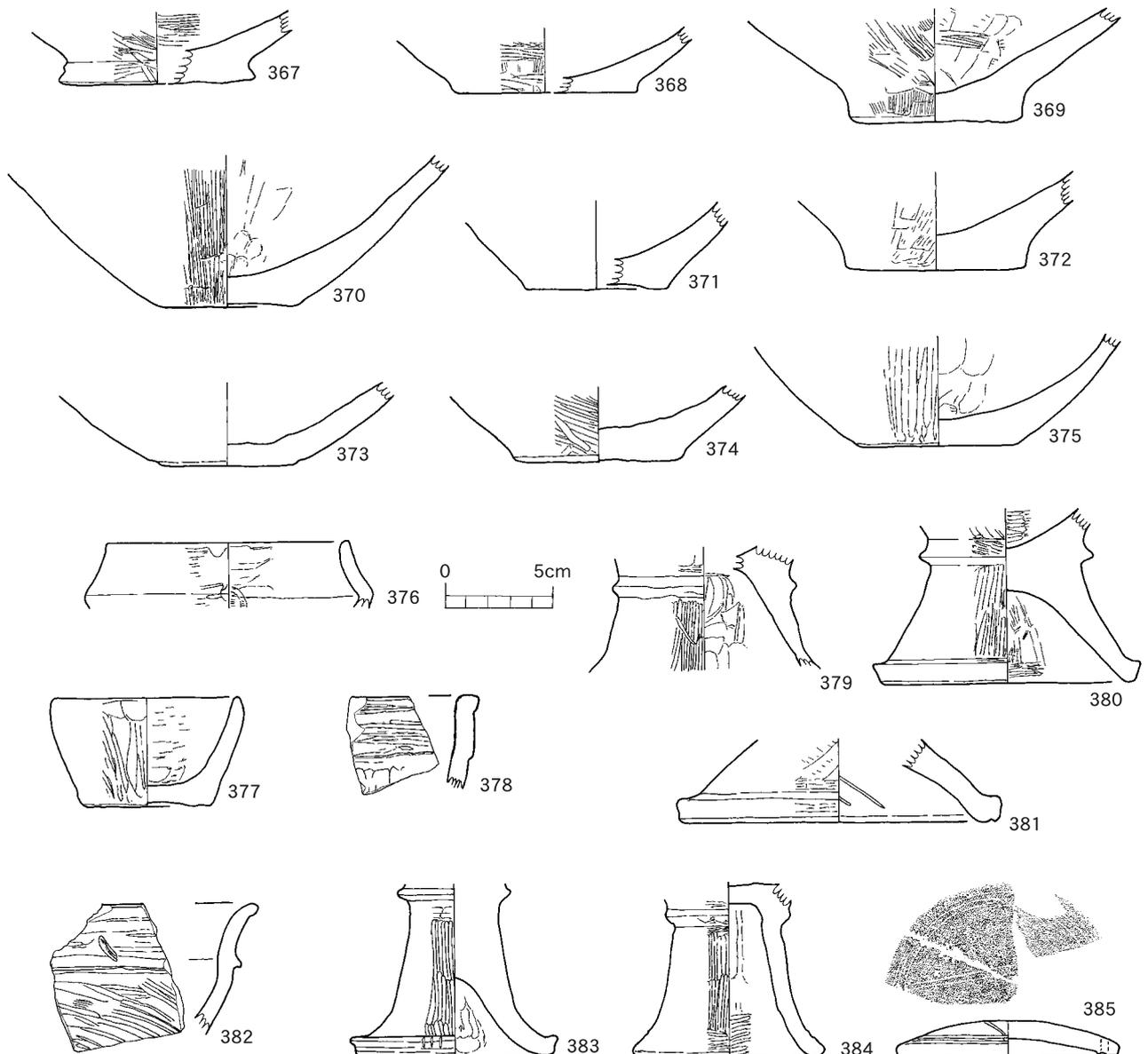
径8cm、高さ5cm、底部直径6cmの小型のもので、口縁端は細くとがり、安定した平底である。外はナデ様のヘラミガキとていねいな調整で、内面は横方向のヘラナデで仕上げているが、手づくね風の作りである。378はほぼまっすぐ立ち上がる器形で、外面には二つの段がある。内外ともヘラミガキのていねいな作りで、外面は部分的に赤みがあった明茶褐色を呈している。379~381は台付鉢形土器の脚台である。381は脚端径が12cm、高さが5cmほどある脚台で、端部はややくぼみ、外へ広がっている。外面はヘラミガキで、内面もミガキに近いていねいなヘラナデである。鉢部の内面もヘラミガキで仕上げられており、鉢部と脚台との境には三角突帯が貼付けされている。381は直径14cmの脚部端で分厚い作りとなっている。脚部はやや丸みをもった形をしており、端部はやや肥厚し、ややくぼんでいる。内外ともヘラナデだが、内面は特にミガキに近いていねいな横ナデである。

高坏形土器 (第51図, 382~384)

坏部は口縁が外反する深いもので、口縁と底部との境付近に三角突帯が貼付けされている。内面はていねいな横方向ヘラナデで、外面はヘラミガキで仕上げている。脚台はやや長脚で、端部が上へはねあがるものとすんなり広がるものがある。はねあがり部分には鋭いヘラ切りがみられる。坏部との境には三角突帯が付され、外面はヘラミガキで仕上げている。

蓋形土器 (第51図, 385)

直径が10cm、高さが1.7cmの平たい器形をし、天井部の周辺を三条の浅くて細かい沈線が巡り、そこから中央に二条の直線が向かっている。端近くに直径3mmの焼成前の穿孔が1個あるが、形態・配置からして2個一対で2ヶ所にあるものと思われる。



第51図 弥生時代前期の土器(3) 壺形土器(4)・鉢形土器・高坏形土器・蓋形土器

2) 中期の土器

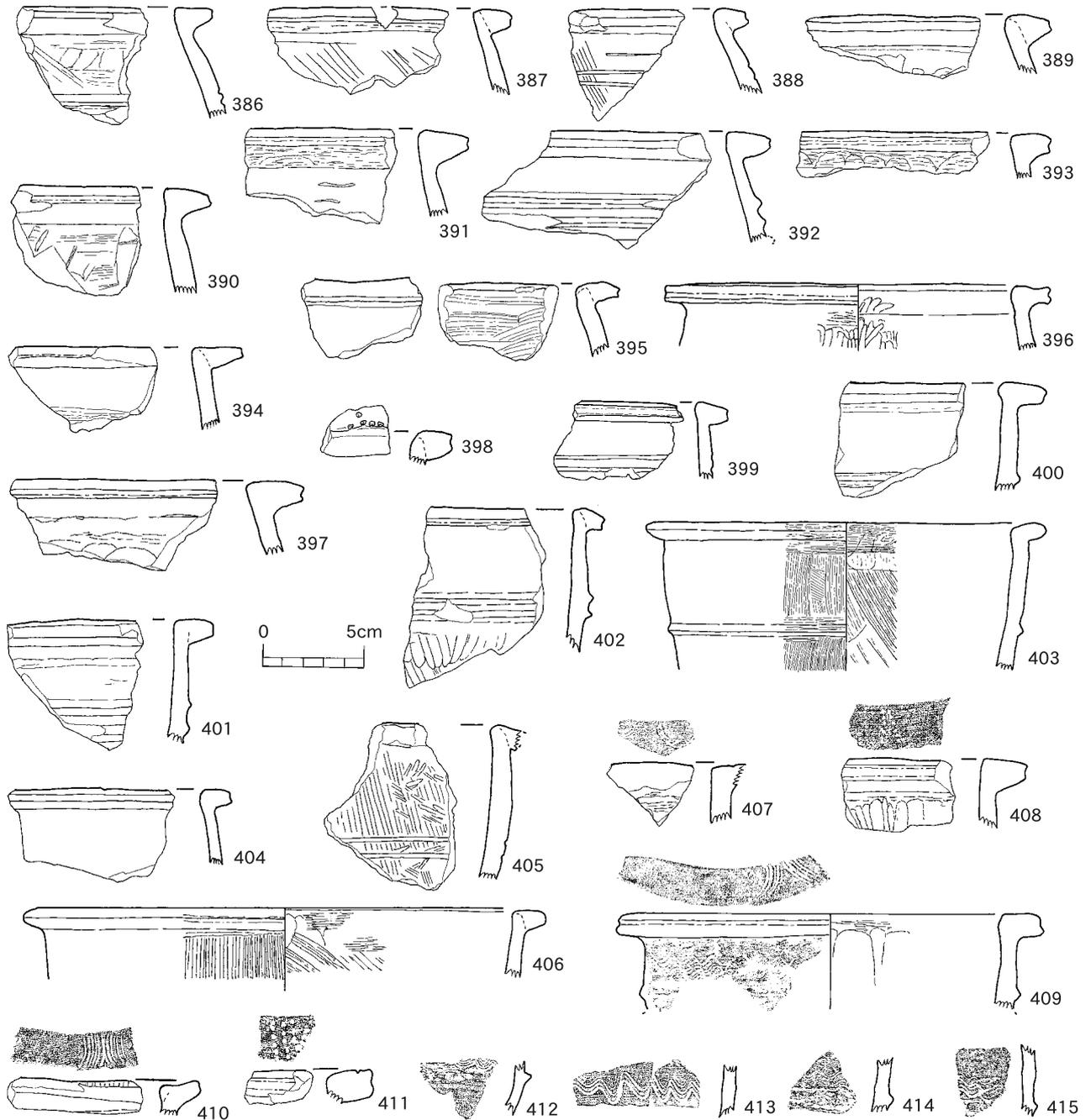
当期の土器には甕形土器・壺形土器がある。口縁部が逆L字状となり、口唇部がくぼむもので、入来式土器、あるいは北麓式土器と呼ばれている土器である。

甕形土器 (第52図・第53図, 386~428)

内傾して立ち上がった口縁部が逆L字状に屈曲し、口唇部は凹線状にくぼむ形状を呈し、底部には充実高台が付く。肩部に三角突帯が貼付けされるもの、あるいは沈

線の施されるものがある。

口縁端は386のように上端がややへこんでいるが直線状となるものと、387のように丸みをもつものがあり、内面の角部も角ばったものと、丸みをもつものがある。また、394のようにやや細長くなるもの、390や399のように内面が張り出してT字状に近くなるものもある。395も細長いが、394が直線状となるのに対して、丸みをもっている。398は上端に5つの刺突文で逆T字形の文様を呈し、408も13個の小さなへら刺突文で逆V字形を



第52図 弥生時代中期の土器(1) 甕形土器(1)

呈している。403は口縁直径が19.5cmあり、底部から口縁部へ向かってまっすぐ伸びている。胴部に一条の小さな三角突帯が付される。胴部の突帯は401や402のように二条あるものと、403のように一条あるものがある。また凹線は386や388・399・405のように二条ある。口縁部は貼り付け突帯によって付けられているが、外はゆるやかに移るものと、直に移るものがある。胴部は細いものが多い。396の口縁直径は16.5cmと小さく、口縁は矩形に突出し、端部に凹線がみられる。407は上端にこまかい2個一対の刺突文で弧文を施し、409・410は外向かいの四条あるいは六条の弧状沈線がみられる。口縁部と胴部の三角突帯の間に櫛描き波状文が施される。

充実高台は低いもので端部がゆるやかに広がっている。端部の直径は416や427のように6cmほどのものと、420のように8cmあるものがある。421は端部が幅広く段をもち、一条の凹線が施されている。424～427は脚台端があげ底となるものである。427は端部直径が8cmあり、2.5cmほどもあげ底となる。脚台風である。高台端には一条の凹線が施されている。424はゆるやかに広がり、浅いあげ底である。425・426は裾が強く広がり、直径が10cmほどとなる。浅いあげ底である。428は底から直に近く立ち上がる器形で、高台付底の様相を呈している。外面調整はヘラの縦ナデのものが多いが、428はハケ目状となる。

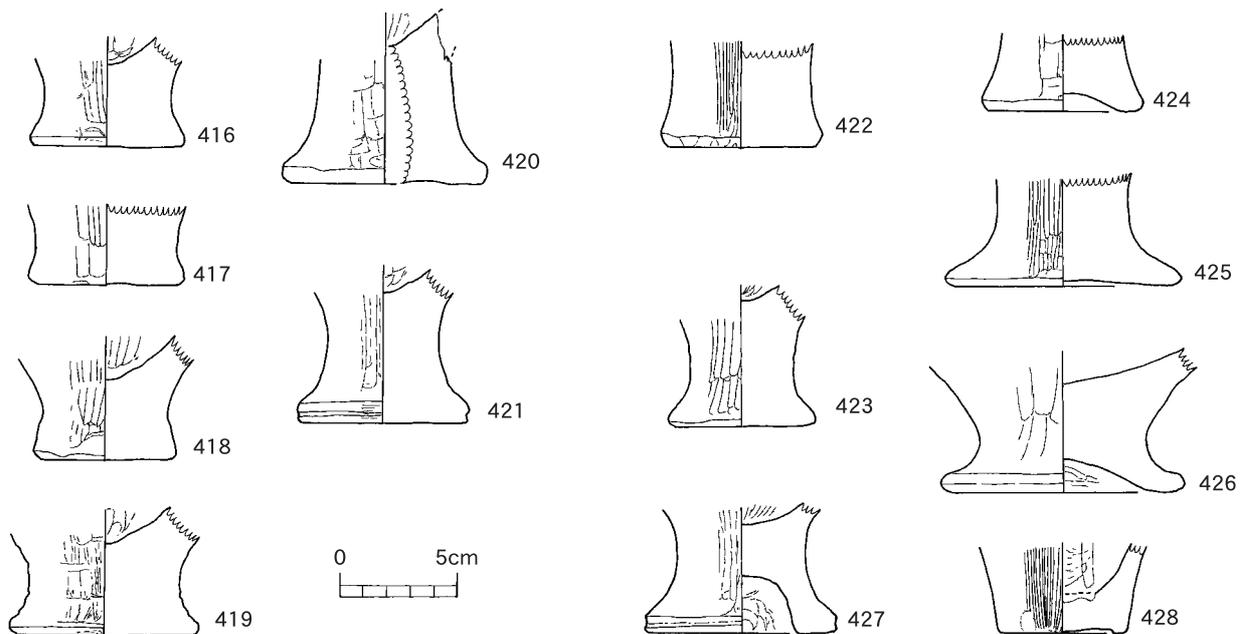
壺形土器（第54図，429～451）

口縁部はくびれた頸部から外へ開くもので、口縁形態

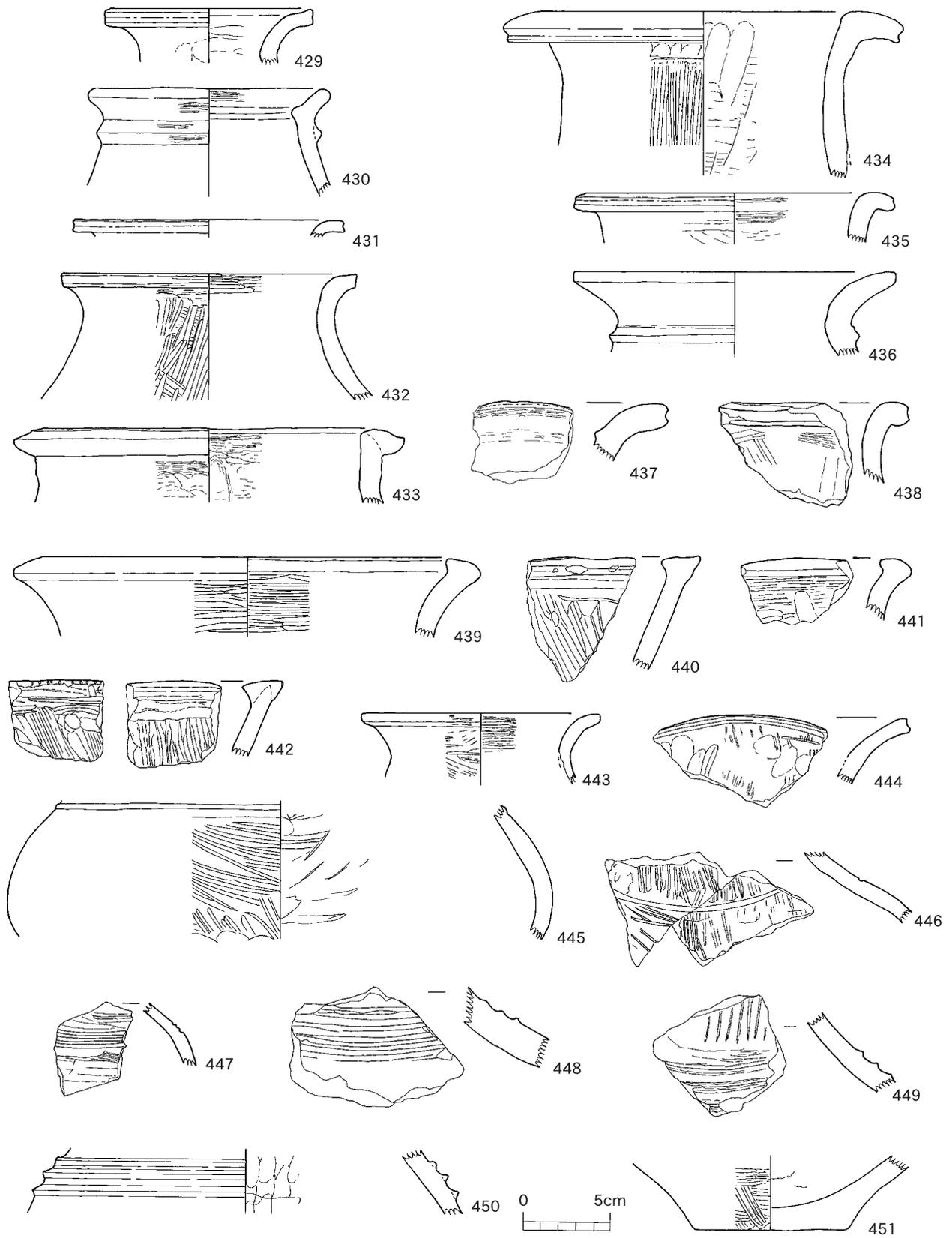
は様々であるが、口縁端に凹線のあるものが多い。この時期の壺形土器は茶色石を多く含むという特徴がある。429・431は口縁直径が11cmと15cmのもので、口縁が外反し、口唇部に浅い凹線がみられる。430は口縁直径が13cmで、内面と頸部に三角突帯が貼付けられる。頸部から肩部への広がりが小さい。432は口縁直径16.5cmで頸部が上端に近く、端は矩形となる。433～435・438は頸部が直に立上がり、そこから強く外反し、434・435・438は端部に凹線があるが、433は三角状となる。口縁直径は16～19cmである。436は口縁直径が18cmで、頸部に三角突帯がある。437は強く外反する口縁部で、端部に凹線があり、内面に三角突帯が貼付けられている。439～442は口縁端が内に張り出すもので、頸部でくびれる。439の口縁直径は23cmあり、440と442の内側にはヘラキザミがみられる。443は口縁直径13cmと小さいものでゆるやかに外反する。444は広口壺の口縁部で、口唇部に凹線がある。

肩部は張るもので、胴部が丸くなる。445は頸部に小さな三角突帯があり、胴部は丸くなっている。446は一条の、447は三条の沈線がある。448～450は三条の小さな三角突帯があり、胴へ開きながら広がっているが、448は分厚い作りである。449は突帯の上に七条以上の縦方向沈線がみられる。450も同じような突帯があるが、胴部へはあまり広がらない。

底部は直径9cmの安定した平底で、強く外へ反りながら立上がる。



第53図 弥生時代中期の土器(2) 壺形土器(2)



第54図 弥生時代中期の土器(3) 壺形土器

第3表 弥生土器観察表(1)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
35	甕	住居1		丁寧なヘラナデ条痕状ハケナデのあとヘラミガキ	ヘラ横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石などの細石多	良	スス付着
36	甕	住居1		ハケ縦ナデ	丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英など細石を多く含む	普	スス付着
37	甕	住居1		ヘラ横ナデ・丁寧なヘラナデミガキに近い	ミガキに近い丁寧な横方向ヘラナデ	明茶褐色	明褐色	石英・白色石などの細かい石	良	スス付着
38	甕	住居1		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	灰黒褐色	石英・黄白石・茶色石など細石を多く含む粗い土 6~7mm大の石も多い	普	
39	甕	住居1		ハケナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	やや緑がかかる	黄白石・石英などの細石多	良	
40	甕	住居1		凹線のとヘラ刻みヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明褐色	石英・黄白石・茶色石など細石多	普	
41	甕	住居1		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明褐色(灰がかかる)	石英・茶色石・白色石細かい石	良	スス付着
42	甕	住居1		丁寧なヘラナデ・二枚貝の押圧	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡褐色	石英・白色石	良	スス付着
43	甕	住居1		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・雲母多い石質土	普	スス付着
44	甕	住居1		ヘラナデ	ヘラナデ	やや赤みがかった淡褐色	やや赤みがかった淡褐色	石英・白色石・茶色石など細石を多く含む粗い土	良	
45	甕	住居1		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	茶褐色	黒褐色	白色石・石英・茶色石などの細石が多い非常に粗い土	普	
46	甕	住居1		表面が粗いヘラナデ	ヘラ横ナデ・丁寧なナデ(底)	茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細砂多	良	
47	壺	住居1		ヘラナデミガキ・ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラナデ	明茶褐色	明褐色	茶色石・石英・黄白石の細かい石	普	
48	壺	住居1		ヘラ横ナデ・縦ヘラミガキ	ヘラナデ	赤っぽい明褐色	赤っぽい明褐色	白色石・石英・茶色石など細石多	良	
49	壺	住居1		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石など細かい石	良	
50	壺	住居1 住居2		丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラナデ	赤みがかった淡褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多	良	
51	鉢	住居1		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ・ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	良	
52	甕	住居2		ヘラ縦ミガキ	ヘラミガキ風ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・黄白石などの小石多 1cm大のもの有り	普	スス付着
53	甕	住居2		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細かい石多	良	
54	甕	住居2		丁寧なヘラナデ	縦ヘラミガキ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石などの細かい石が多	普	
55	甕	住居2		ヘラナデ	丁寧な横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・黄白石・白色石などの細石	普	
56	甕	住居2		ヘラミガキ	ヘラ縦ミガキ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色などの細かい石	良	スス付着
57	甕	住居2		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ・横ナデ	赤っぽい暗茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細かい石	良	
58	甕	住居2		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ・底丁寧なナデ	赤みがかった淡褐色	乳茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	普	
59	壺	住居2		ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	淡茶色	乳茶褐色(部分的赤っぽい)	石英・白色石・茶色石などの細石多	良	
60	壺	住居2		ヘラナデのあと一部ヘラミガキ	ヘラ横ナデ・指ナデ痕	黒褐色	黒褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多粗い土	良	
61	壺	住居2		ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ一部ヘラミガキ	暗茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多	良	
62	壺	住居2		ハケ横ナデ	ハケナデ・丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	灰がかった淡茶褐色	石英・白色石・茶色石の細石多	良	
63	壺	住居2		丁寧な縦方向ヘラナデ	ヘラナデ・丁寧なヘラナデ(底)	乳茶褐色(黒班有り)	乳褐色(やや黄っぽい)	石英・白色石などの細石	普	
64	甕	住居3		ヘラミガキ	ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多	良	
65	甕	住居3		ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・茶色石細石多い粗砂	良	
66	甕	住居3		ヘラ縦ナデ・ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石など雲母細石	普	
67	甕	住居3		ヘラミガキ	縦方向ヘラミガキ	灰褐色	灰褐色	白色石・石英・茶色石(5mm大粗い土)	良	
68	甕	住居3		ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多	良	
69	甕	住居3		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石多	良	スス付着
70	壺	住居3		縦ハケナデのあとヘラミガキ	ヘラ横ナデ	赤みがかった茶褐色	赤みがかった茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	良	
71	壺	住居3		ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	良	
72	壺	住居3		ヘラナデ・丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	茶褐色(丹塗りの為朱色)	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
73	壺	住居3		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多 5mm有り	良	スス付着
74	壺	住居3		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった灰褐色	黄みがかった灰褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
75	壺	住居3		ハケ縦ナデ(底)丁寧なヘラナデ	全面剥脱	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石が多い粗砂	良	
76	高坏	住居3		丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	黄みがかった明褐色	黄みがかった明褐色	石英・白色石・金雲母などの細石	普	
77	甕	住居4		ヘラ縦ミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石などの多い土	良	
78	甕	住居4		ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・白色石などの5mm大石多	普	口縁近くスス付着
79	甕	住居4		丁寧なヘラナデ	ヘラ縦ナデ	黄みがかった黒褐色	黄みがかった淡褐色	石英・白色石・黄白石など含む細かい砂質土	普	
80	甕	住居4		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰がかった淡茶褐色	灰がかった淡茶褐色	石英・黄白石などの細石の多い砂質土	普	
81	甕	住居4		ヘラナデ	ヘラナデ	明褐色	明褐色	石英・黄白石などの石のある細砂	普	スス付着

第4表 弥生土器観察表(2)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
82	甕	住居4		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黒褐色	灰がかつた明茶褐色	石英・黄白石などの細かい石多	良	(4mm大)
83	甕	住居4		ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	茶褐色(口縁付近は黒色化)	茶褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの細石多(6mm大有り)	良	
84	甕	住居4		ヘラナデのあとミガキ	丁寧な横ナデ	黄みがかつた灰褐色	黄みがかつた灰褐色	石英・黄白石などの細石	良	
85	甕	住居4		ヘラ横ナデのあと縦ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石・黄白石などの石を多く含む粗砂	良	
86	甕	住居4		ヘラミガキ(底)ヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色(こげ)	石英・白色石などの細かい石の多い粗砂	普	
87	壺	住居4		丁寧なヘラナデのあとヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色一部黒褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
88	壺	住居4		丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・茶色石・白色石などの細石多	良	
89	壺	住居4		ヘラミガキ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・長石・茶色石などの細石多	普	
90	壺	住居4		ヘラ横ナデヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石などの細石4mm大	普	
91	壺	住居4		ヘラミガキ	ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石などの細かい石	良	
92	壺	住居4		丁寧なヘラナデ・ヘラミガキ	ヘラナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石などの細かい石多	普	
93	壺	住居4		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	赤っぽい茶褐色	淡茶褐色	黄白石・白色石・茶色石・などの多い粗い土	普	
94	壺	住居4		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	乳茶褐色(部分的に黒色)	乳茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細砂	良	
95	壺	住居4		丁寧なヘラ縦ナデ部分的にヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	灰がかつた明褐色	灰がかつた明褐色	石英・黄白石などの細砂	良	
96	鉢	住居4		縦方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	茶褐色	暗茶褐色	白色石・黄白石・石英などの細石	良	
97	甕	土坑1		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	黄みがかつた淡褐色	黄みがかつた淡褐色	石英・茶色石などの細石	普	スス付着
98	甕	土坑1		横ヘラミガキ	ヘラミガキ	明茶褐色(黒色化)	明茶褐色	白色石・茶色石など細かい石	良	
99	甕	土坑1		ヘラミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	白色石・黄白石・石英・赤色石など7mm大の石も含む粗い土	良	
100	壺	土坑1		丁寧な縦ヘラミガキ	ヘラ丁寧な横ナデ	明茶褐色(光沢有り)	明茶褐色	白色石・石英などの多い細かい砂質土	良	
101	甕	土坑2		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色(やや灰がかかる)	雲母・黄白石・白色石・石英細かい砂粒	普	
102	壺	土坑2		丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかつた淡褐色	黒色	雲母・白色石などの細かい砂粒	良	外部分的に黒みがある
103	壺	土坑2		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄みがかつた淡褐色	黄みがかつた淡褐色	茶色石・石英などやや粗い土5mm大あり	良	
104	鉢	土坑2		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	雲母・石英・白色石などの細かい砂質土	良	
105	甕	土坑3		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	茶色石・石英・白色石などの粗い砂粒4mm大のもの多い	良	
106	甕	土坑3		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	白色石・雲母・茶色石などの細石多	良	
107	甕	土坑3		ヘラナデ(底)丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	灰がかつた明褐色	灰がかつた明褐色	石英・茶色石・雲母・灰などの細石の多い砂粒7mm大のもの含	普	
108	壺	土坑3		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細かい砂質土	普	
109	壺	土坑3		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデミガキに近い	淡茶褐色	淡茶褐色	茶色石・白色石・石英などの細かい石	良	
110	甕	土坑4		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ斜方向	淡茶褐色	黒褐色	白色石・黄白石・石英などの細石5mm大の石を含む	良	
111	甕	土坑4		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄みがかつた淡茶褐色	黄みがかつた淡茶褐色	雲母・石英・白色石・茶色石などの細かい砂質土	良	
112	高杯	土坑4		ヘラミガキのあと時計逆回りの沈線	ヘラミガキ	茶褐色	茶褐色	茶色石・黄白石・石英などの細砂	良	
113	甕	土坑5		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	白色石・石英・茶色石などの細石	良	
114	甕	土坑5		ヘラミガキ	ヘラミガキ(剥離あり)	茶褐色	茶褐色	黄白石・茶色石・白英などの細石	良	スス付着
115	甕	土坑6		浅く細かいハケ縦ナデ	丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	茶色石の多い粗い土4mm大	良	
116	甕	土坑6		細かく浅い斜め方向ハケナデ	丁寧なヘラナデ	黒褐色	明茶褐色	茶色石・白色石・石英などの多い粗い土	良	
117	甕	土坑6		丁寧なヘラナデ	指による丁寧なナデ	黄みがかつた明茶褐色	黄みがかつた明茶褐色	白色石・茶色石・灰色石	普	
118	甕	土坑6		低い突帯に細かいヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	灰がかつた明茶褐色	灰がかつた明茶褐色	白色石の多い細砂	普	
119	甕	土坑6		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石黄白石・茶色石などの粗い石6mm大有り	普	スス付着
120	甕	土坑6		丁寧なナデ	ヘラナデ	茶褐色(底に白粉)	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石4mm大有り	普	
121	甕	土坑7		ヘラ横ナデ	ヘラ斜め縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石などの細石	良	
122	甕	土坑7		ヘラ刻み・ヘラ横ナデ	縦ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	スス付着
123	甕	土坑7		ヘラミガキ	ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	黒褐色	暗茶褐色	石英・白色石などの細石1mm大の小石も含む	良	スス付着
124	甕	土坑7		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	暗茶褐色	茶褐色	黄白石・石英などの細石	普	スス付着
125	甕	土坑7		横ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	白色石・黄白石・石英などの細石	良	
126	甕	土坑7		粗いヘラ斜めヘラナデ	ミガキの部分有りヘラ縦ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・黄白石などの細石多	良	
127	甕	土坑7		縦ヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	茶褐色	黒褐色	黄白石・白色石などの細砂粒多	良	スス付着
128	壺	土坑7		ヘラ横ナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色やや黄みがかかる	石英・白色石などの粗砂	普	

第5表 弥生土器観察表(3)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
129	鉢	土坑7		丁寧な縦ヘラナデ	横方向丁寧なヘラナデ	茶褐色	黒褐色	石英・黄白石などの細石	良	
130	甕	土坑8		ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	茶褐色	茶褐色	白色石・茶色石・黄白石などの細石	良	スス付着
131	壺	土坑8		ヘラミガキ・貝重弧	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	白色石・茶色石などの細石	普	
132	鉢	土坑10		ヘラ縦ミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	黒褐色	灰茶褐色	石英・黄白石	良	
133	甕	土坑10		ミガキに近い丁寧な横方向ヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	暗茶褐色	茶褐色	石英・黄白石・角閃などの細石多い砂質土(6mm大有り)	普	
134	高杯	土坑10		ヘラミガキ	ヘラミガキ・ヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
135	鉢	土坑11		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・黄白石などの細石	普	スス付着
136	甕	土坑12		ヘラナデ・丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ押しヘラナデ	淡茶褐色黒みおびる	淡茶褐色	石英多・白色石・青灰色などの細石	普	
137	甕	土坑12		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	スス付着
138	甕	土坑12		丁寧なヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
139	甕	土坑13		ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英などの細石を含む4mm大有り	良	
140	甕	土坑13		丁寧なヘラナデ	縦ヘラナデ	赤っぽい淡茶褐色	赤っぽい淡茶褐色	石英の多い細かい土	普	
141	甕	土坑13		ヘラ縦ナデ・底丁寧なヘラナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	黄白石などの細かい石の多い砂質土	良	
142	蓋	土坑14		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	茶褐色	石英の細石多 赤色石・青灰色石の5~7mm大の石も含む	普	
143	甕	土坑16		ヘラミガキ	ミガキに近いヘラ横ナデ	黄みがかった茶褐色	黄みがかった茶褐色	石英などの細石	良	
144	甕	土坑18		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黒褐色	黄褐色上は黒褐色	石英・白色石・茶色石の細石	良	
145	甕	土坑18		ヘラ横ミガキ	ヘラナデ	淡茶褐色(黒色化)	茶褐色	石英・黄白石・白色石の細砂	普	
146	甕	土坑18		上ヘラミガキ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細砂	良	
147	甕	土坑18		ヘラ横ナデ	ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	赤っぽい茶褐色	茶褐色黒褐色	石英・白色石などの細石	普	スス付着
148	甕	土坑25		ヘラナデ	丁寧なヘラナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
149	鉢	土坑31		ヘラナデ	ヘラナデ	赤みがかった茶褐色	赤みがかった茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
150	甕	土坑34		ヘラナデ	丁寧なヘラナデ	黒褐色	にごった茶褐色	石英・白色石などの細石	普	スス付着
151	甕	土坑34		ヘラナデ	ミガキ	黒褐色	黒褐色	石英・黄白石などの細かい砂質土	普	
152	甕	土坑34		ヘラミガキ横方向	丁寧なヘラナデ	暗茶褐色	黄褐色	石英などの細石	普	スス付着
153	甕	土坑34		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黒褐色	灰褐色	石英・茶色石・黄白色など細石	普	
154	甕	土坑34		ヘラナデ	丁寧なヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	スス付着
155	甕	土坑34		丁寧な縦ヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	黒灰褐色	石英・白色石などの細かい砂質土	普	
156	甕	土坑34		縦ヘラミガキ	ヘラナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・黄白石・茶色石の多い粗い砂質土	良	
157	壺	土坑34		ヘラミガキ	ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
158	壺	土坑34		ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石・茶色石などの粗い石	良	
159	甕	土坑35		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石多	普	
160	甕	土坑35		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄みがかった灰茶褐色	黄みがかった灰茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
161	甕	土坑35		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
162	甕	土坑35		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄色石などの細石	良	スス付着
163	甕	土坑35		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色		石英・白色石・黄色石・茶色石などの細石	良	スス付着
164	甕	土坑35		ヘラ横ナデ	丁寧な縦ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色(茶がかかる)	石英・白色石などの細石	良	
165	甕	土坑35		ヘラ横ナデミガキに近い	丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石・茶色石の多いやや粗い土	普	スス付着
166	甕	土坑35		ヘラミガキ横方向	ヘラミガキ横方向	茶褐色	茶褐色	4mm大ほどの白色石・灰色石・石英・黄色石などの粗い土	良	
167	甕	土坑35		丁寧なヘラ横ナデ		茶褐色	茶褐色	茶色石・石英・白色石など3mmまでの細石が多い砂質土	良	
168	甕	土坑35		ミガキに近いヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色一部赤み	赤みがかった茶褐色	石英などの細石	良	
169	壺	土坑35		ヘラ横ナデミガキ	ミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄色石などの細石の多い砂質土	良	
170	壺	土坑35		ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	茶色石・石英・白色石などの粗い土	良	
171	壺	土坑35		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	黒褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い細かい土	普	
172	甕	土坑36		ハケナデ・ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石などの細かい土	良	
173	甕	土坑36		横ヘラミガキ	横ヘラミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
174	甕	土坑36		丁寧なナデ・ヘラミガキ有り	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細かい土	普	
175	壺	土坑36		丁寧なナデ(底)丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	黄褐色	黄褐色	石英・雲母・茶色石・灰色石などの細石多	普	

第6表 弥生土器観察表(4)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
176	甕	土坑36		ヘラ横ナデ	ハケ状横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	茶色石・白色石などの多い粗い土	普	
177	甕	土坑37		ヘラナデ	横方向ヘラナデ	黒褐色	黒褐色	白色石・石英・黄色石などの細かい土	普	
178	甕	土坑37		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	白色石・茶色石・石英などの多い粗い土	普	
179	壺	土坑37		ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	茶褐色	石英・黄白石などの細石	普	
180	壺	土坑37		縦ヘラミガキ・丁寧なナデ	ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
181	壺	土坑37		ヘラミガキ丁寧なナデ	剥脱	茶褐色	茶褐色	灰色石・石英・白色石など5mm大の石のある粗い土	普	
182	小型壺	土坑38		丁寧な横ヘラミガキ	指頭ナデ	暗褐色	黄褐色	茶色石・白色石などの細かい土	普	
183	甕	土坑39		ハケナデ	ヘラナデ	灰褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石の多い粗い砂	普	
184	甕	土坑39		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	灰がかった淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石の多い粗い砂	普	
185	壺	土坑39		ヘラ縦ミガキ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・茶色石などの細砂粒	普	
186	甕	P-3		ハケ縦ナデ(底ハケナデの後丁寧なヘラナデ)	丁寧なヘラ縦ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・赤色石などの細石多 4mm大まで	良	
187	高杯	P-3		ハケ縦ナデ	ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多	良	
188	甕	P-6		ヘラ横ナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多	普	
189	甕	P-10		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	灰茶褐色	灰茶褐色	雲母・石英・白色石などの細石多	普	布痕
190	壺	P-14		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
191	壺	P-15		ハケナデの後ヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	白っぽい灰褐色	白っぽい灰褐色	石英・白色石などの細石	良	
192	壺	P-15		細かいハケナデの後ヘラミガキをし羽状のハケ様沈線とする	横方向ヘラミガキ	明灰褐色	明灰褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
193	甕	P-30		ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	黄白石・石英などの細石	普	
194	鉢	P-83		丁寧なヘラ横縦ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	雲母・黄白石などの細石	良	
195	甕	E-6		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	石英・黄白石などの細石	普	スス付着
196	甕	F-7		ヘラ横ナデの後ヘラ縦ミガキ	ヘラ縦ナデ	黄みがかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
197	甕	E-7		ヘラミガキ	斜方向ヘラナデ	暗茶褐色	淡茶褐色	石英・黄色石などの細石	普	
198	甕	E-7		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横縦ナデ	黒褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・黄色石などの細石	普	
199	甕	K-14		ヘラミガキ	丁寧なヘラナデミガキ様	茶褐色	茶褐色	石英・黄色石などの細石	普	
200	甕	F-8		鋸歯状沈線文様はつぎりせずヘラナデ	ヘラ横ナデ(剥離が目立つ)	黒褐色	暗褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
201	甕	C-6		横ヘラミガキ・縦ヘラミガキ	ミガキに近い丁寧なヘラ縦ナデ	黄茶褐色一部黒褐色化	黄茶褐色	石英・白色石などの細石	良	スス付着
202	甕	C-6		ヘラ横ナデ・ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの細石多い土	普	
203	甕	C-6		横ヘラミガキ・縦ヘラミガキ	ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	黄茶褐色一部黒褐色化	黄茶褐色	石英・白色石などの細石多	良	スス付着
204	甕	D-6	溝	丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧な縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・雲母などの細石7mm大のもの有り	良	スス付着
205	甕	不明		ヘラミガキ	ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色一部黒褐色	石英・黄白石などの細石多	普	
206	甕	D-6	溝	ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石	普	スス付着
207	甕	D-6		ハケ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	黄っぽい茶褐色	黄っぽい茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	スス付着
208	甕	K-15		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	黄みがかった茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細砂多い4mm大石有り	普	
209	甕	L-15		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラナデ指頭圧痕有り	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石・黄白石などの多い粗砂質土	普	スス付着
210	甕	E-7		ヘラケズリの後ミガキに近い丁寧なヘラナデ	ヘラナデ・横ヘラケズリ	赤っぽい淡茶褐色・口縁近く黒褐色	濃い黒褐色	石英・黄白石などの多い粗い石質土	良	
211	甕	E-7		ヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	黒みがかった茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・白色石・長石などの細石	普	
212	甕	K-16		ヘラミガキ	ヘラケズリの後ミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石粒多い砂質土	普	スス付着
213	甕	L-15		横方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	灰茶褐色	灰茶褐色	石英・黄白石などの細石5mm大有り	良	
214	甕	L-15		横ミガキ	縦ミガキ	赤っぽい明茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
215	甕	D-6		ミガキに近い丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色・黒褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	
216	甕	D-6		ヘラ横縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・白色石・灰色石・茶色石などの多い砂質土	普	スス付着
217	甕	K-14		横ミガキ	横ナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多い砂質土	普	
218	甕	K-15		ハケ目の後一部ミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	黄みがかった明茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土4mm大少し	良	
219	甕	K-16		丁寧な縦ヘラナデ	ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色	黒褐色	石英などの細石	良	
220	甕	C-7		丁寧なヘラナデ・ハケナデの後ヘラナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・黒雲母などの細石	普	スス付着
221	甕	E-7		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラナデ	暗茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石黒耀石有り	普	
222	甕	L-16		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石などの細石	良	

第7表 弥生土器観察表(5)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
223	甕	D-6		ヘラ横ミガキ	ヘラ横ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
224	甕	D-7		ヘラ縦ナデの後ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデの後ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	スス付着
225	甕	E-7		ミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石・長石などの細石	普	
226	甕	K-14		ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	茶褐色スス付着	茶褐色	石英・白色石などの細石	普	スス付着
227	甕	J-15		三角突帯にヘラミガキ横縦ヘラミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	黒褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
228	甕	F-8		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
229	甕	D-7		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ斜方向ヘラミガキ	ヘラ横ナデの後縦ヘラミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細かい砂質土	普	
230	甕	D-6		ヘラナデ・ヘラミガキ	指頭痕有りヘラミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石などの細石多い砂質土	良	
231	甕	C-7		ハケ縦ナデ・ヘラナデ	指頭痕有りヘラ縦ナデの後ヘラ横ミガキ	淡黄褐色	明茶褐色	石英・茶色石・金雲母・白色石などの細石	普	
232	甕	E-7		横ナデ丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	暗い淡茶褐色	暗い淡茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	
233	甕	E-7		ヘラミガキ丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石・長石などの小石多い砂質土	普	
234	甕	K-14		丁寧なヘラナデ	指頭庄丁寧なヘラ横ナデ	黒褐色	灰がかった茶褐色	石英・黄白石などの細石	普	
235	甕	D-6		ハケ様ヘラ横ナデの後縦ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	暗褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石・黄白石などの小石を多く含む砂質土9mm大有り	良	
236	甕	E-6		ミガキに近い丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色	上・黄褐色 下・黒褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	
237	甕	E-7		ヘラミガキ	ヘラミガキ(光沢有り)	黄っぽい明茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
238	甕	D-6		ヘラナデ・ミガキも有り	ヘラケズリの後横ナデ	暗茶褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
239	甕	C-8		ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデの後ヘラミガキ	暗茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの小石多い粗い土4mm大粒多い	良	
240	甕	J-12		ヘラミガキ幅広突帯にヘラミガキ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石・茶色石などの小石多い粗い砂質土	普	
241	甕	D-6		丁寧なヘラ横ナデ	上・丁寧なヘラ横ナデ下・丁寧なヘラ縦ナデ	黒褐色	淡茶褐色	石英・黄白石などの石を含む5mm大(繊維痕有り)	普	
242	甕	C-7-8 E-7		ハケナデ後で部分的にヘラナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石多	良	
243	甕	C-7		ミガキに近い横ナデ・ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	赤みがかった明茶褐色	黄みがかった茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石多い砂質土	良	
244	甕	E-6		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい淡茶褐色	灰がかった茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
245	甕	K-14		ハケ目縦方向ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの粗い土	良	スス付着
246	甕	K-15		ヘラ縦ナデ	ハケ目横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細かい砂質土	良	スス付着
247	甕	K-14		丁寧なナデ	ヘラナデ(摩滅目立つ)	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの6mm大の石多い土	普	
248	甕	K-14		ハケ後ミガキ	ハケ後ミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	良	
249	甕	K-14		ハケ目ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	良	
250	甕	K-15		丁寧なヘラ横ナデ	ナデ	黄みがかった明茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
251	甕	K-14		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	暗茶褐色(黒褐色化)	暗灰褐色	石英・白色石・茶色石などの細砂多	普	
252	甕	K-15		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石多い砂質土	普	
253	甕	I-16		ミガキ様の丁寧なナデ	ヘラミガキ	赤みがかった黄茶褐色	黒褐色	石英・黄白石などの細石	普	
254	甕	L-15		ナデ	ナデ	淡黄茶褐色	淡茶褐色	石英・茶色石などの細石	普	
255	甕	K-14		ヘラ横ナデ	横ハケナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
256	甕	K-14		ヘラナデ	ミガキに近い丁寧なナデ(摩滅)	黄みがかった明茶褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	良	
257	甕	K-14		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	明茶褐色	灰褐色	石英・白色石・長石などの細礫が多い土5mm大有り	普	
258	甕	C-8		ミガキに近い丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石などの細石4mm大有り	普	
259	甕	C-6		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	桃色がかった明茶褐色	灰褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	
260	甕	D-6		ヘラ縦ナデ	ミガキに近い丁寧なヘラナデ	灰がかった淡茶褐色	黄みがかった茶褐色	石英・白色石・黄白石などの小石	普	
261	甕	E-6		ハケナデ様縦ヘラナデ	ヘラ縦ナデ	赤みがかった茶褐色	黒褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多	普	
262	甕	K-15		ヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの細石多	良	
263	甕	D-6		ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	淡褐色	淡褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの小石多	普	
264	甕	E-6		ヘラ縦ナデ	摩滅して不明	灰褐色	灰褐色	石英・白色石などの細石多い砂質土	普	
265	甕	C-7		ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ縦ナデ	淡茶褐色	灰がかった黄茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
266	甕	F-7		時計回りヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・青灰色石・茶色石・雲母などの小石多い砂質土	良	
267	甕	K-16		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石多	良	
268	甕	L-15		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	乳茶褐色・黒褐色	石英・白色石・茶色石	普	
269	甕	E-6		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	灰褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多い粗い土7mm大有り	普	

第8表 弥生土器観察表(6)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
270	甕	D - 7		丁寧なヘラ縦ナデ	摩滅が目立つヘラナデ	暗茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・黄白石などの細石多4mm大有り	普	
271	甕	K - 14		ヘラ縦ナデ	ヘラミガキ	赤みがかった明茶褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
272	甕	K - 17		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
273	甕	D - 6		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡灰褐色(底やや赤み)	灰褐色	石英・白色石などの細石	普	
274	甕	F - 7		ヘラ縦ナデ	摩滅の為不明	淡茶褐色	黒褐色	石英・白色石・茶色石などの小石多い粗質土	普	
275	甕	K - 14		ヘラミガキだが表面凹凸雑	ヘラ横ナデ	暗茶褐色	黄褐色	石英・白色石・茶色石などの細石6mm大有り	普	
276	甕	C - 6		丁寧なヘラナデ	摩滅しているがヘラナデ	赤っぽい淡茶褐色	赤っぽい淡茶褐色	石英・黄白石・長石・茶色石などの細石多	普	
277	甕	E - 7		ミガキに近い丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラミガキ	淡茶褐色(黒班有り)	淡茶褐色	石英・黄白石・茶色石・長石などの細石多	良	
278	甕	K - 14		ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い粗砂質土	良	スス付着
279	甕	D - 7		ヘラ縦ナデ	ハケ目もあるヘラの粗いナデ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	良	
280	甕	L - 15		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	茶褐色	石英・黄白石などの細石	普	
281	甕	E - 7		丁寧な縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	黄っぽい茶褐色(こげ)	石英・白色石・黄白石などの小石多5mm大有り	普	スス付着
282	甕	K - 15		細かいハケ縦ナデ(ミガキもある)	縦ナデ・ヘラ横ナデ指頭	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	良	
283	甕	K - 16		ヘラ縦ナデ(一部ミガキ)	斜め方向ケズリ	茶褐色	部分的に黒褐色	白色石などの細石	普	
284	甕	E - 7		ミガキに近い丁寧なヘラナデ	ミガキに近い丁寧なヘラナデ	赤みがかった明茶褐色	黒褐色	石英・黄白石などの細石	良	
285	甕	F - 8		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	やや黄っぽい明茶褐色	石英・茶色石などの細石	普	
286	甕	E - 9		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	灰黒褐色	石英・白色・茶色石などの細石多	普	
287	甕	K - 16		ヘラナデ	ヘラナデ	暗黄褐色	黒褐色	石英・白色石・黄白石・灰褐色石などの細石多	良	
288	甕	K - 15		ミガキに近い丁寧なヘラナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	黒褐色	石英・白色石・雲母・茶色石などの細石多い土	普	
289	甕	F - 7		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	やや黄みをおびた淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	
290	甕	D - 6		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	淡黒褐色	石英・白色石などの細石	良	
291	甕	D - 6	溝		ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
292	甕	E - 8		丁寧なヘラ縦ナデ	ミガキに近いヘラ縦ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	良	
293	甕	表探		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色(こげ有り)	石英・白色石などの細石	普	
294	甕	E - 6		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	灰がかった明茶褐色	黒褐色	石英・茶色石・灰褐色石などの多い粗砂質土	良	
295	甕	C - 7		ヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黒褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細礫の多い砂質土	良	
296	甕	E - 6		ミガキに近い丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石5mm大有り	良	
297	甕	E - 6		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
298	甕	E - 7		ヘラ横ナデ	ヘラナデ	黒褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
299	甕	E - 8		丁寧なヘラ縦ナデ	横ヘラミガキ	茶褐色	黒褐色	石英・白色石・雲母などの細石	普	
300	甕	K - 15	表	編布	丁寧なヘラナデ	茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
301	甕	K - 15	表	編布	丁寧なヘラナデ	茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
302	甕	K - 16	表	編布	丁寧なヘラナデ	茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
303	甕	L - 14		編布	丁寧なヘラナデ	茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
304	甕	K - 14		編布	丁寧なヘラナデ	茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・黄白石などの細かい砂質土	普	
305	甕	K - 16		ヘラナデ	ヘラナデ	赤っぽい茶褐色	黄っぽい灰褐色	石英・白色石などの細石	普	
306	甕	L - 15		ヘラナデ編布	丁寧なヘラ横ナデ	茶褐色	黄っぽい灰褐色	石英・黄白石などの細かい砂質土	普	
307	壺	E - 6		丁寧なヘラ横ナデ・丁寧なヘラ縦ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄褐色・赤みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
308	壺	F - 8		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	灰がかった淡黄褐色	灰がかった淡黄褐色	石英・白色石などの細石の多い土	良	
309	壺	E - 6		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	灰がかった明茶褐色	茶褐色	石英・白色石・灰色石・金雲母などの細石多4mm大有り	普	
310	壺	L - 14		ミガキ・横ナデ	横ミガキ	黄茶褐色	黄茶褐色	石英・白色石・灰色石などの細石多	普	
311	壺	L - 16		ミガキ後ナデ	ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色(黒班)	石英・黄白石などの細石	良	
312	壺	E - 7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄みをおびた明茶褐色	黄みをおびた明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石が多い土	普	
313	壺	D - 7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石を含む土	普	
314	壺	E - 6		ハケ様の丁寧なヘラナデ	端はミガキ丁寧なヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多	普	スス付着
315	壺	E - 7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
316	壺	D - 6	溝	ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	暗茶褐色(光沢有り)	暗茶褐色	石英・白色石・灰色石・茶色石などの細石多	良	

第9表 弥生土器観察表(7)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
317	壺	L-15		ヘラ横ミガキ	ヘラ横ミガキ	明茶褐色(部分的に黒褐色)	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
318	壺	L-16		ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡黒褐色	淡黒褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
319	壺	E-8		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄みをおびた明茶褐色	黄みをおびた明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石の多い土	普	
320	壺	L-16		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黒褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
321	壺	D-6		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラミガキ	灰がかかった茶褐色ベンガラ様塗料	灰がかかった茶褐色	石英・白色石・金雲母などの細石多い砂質土	普	
322	壺	F-6		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・白色石・金雲母などの細石多い砂質土	普	
323	壺	D-6	溝	細かいヘラミガキ	剥脱の為不明	赤っぽい淡茶褐色	赤っぽい淡茶褐色	石英・金雲母などの細石	普	
324	壺	K-16		ミガキ	ミガキ	茶褐色	淡茶褐色(黄みがかかる)	石英・白色石・灰色石などの細石	良	
325	壺	K-14		丁寧な横ナデ	丁寧な横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・長石などの細石	良	
326	壺	表探		ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石などの細石4mm大有り	普	
327	壺	F-6		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	暗黄褐色壺	暗黄褐色	石英・白色石・黒耀石などの多い砂質土	良	スス付着
328	壺	E-7		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黒褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石の多い砂質土	普	
329	壺	表探		ヘラ横ナデ	ヘラ横・縦ナデ	黒褐色	黄茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
330	壺	D-7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多い砂質土	普	
331	壺	D-6		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラナデ	黄みがかかった明茶褐色(黒班有り)	黄みがかかった明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
332	壺	表探		丁寧なヘラミガキ	ミガキに近い丁寧なナデ	明茶褐色	剥脱多い為不明	石英・白色石・黒耀石・灰色石などの細石多	普	
333	壺	E-7		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	赤みをおびた淡茶褐色	赤みをおびた淡茶褐色	石英・白色石などの細かい砂質土	良	
334	壺	表探		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	普	
335	壺	K-15		ミガキ(光沢有り)	ヘラ横ナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
336	壺	C-8		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒褐色	茶がかかった灰褐色	石英・白色石・黄白石などの小石多い砂質土	良	
337	壺	E-6		丁寧なヘラナデ	ヘラミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多い	良	
338	壺	表探		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多く含む土	普	
339	壺	K-14		ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
340	壺	D-6		ヘラミガキ・ヘラナデ	ヘラミガキ・ヘラナデ	淡黄褐色(やや暗い)	淡黄褐色	石英・白色石・金雲母・茶色石などの細石	良	
341	壺	表探		横沈線の後左下が斜沈線さらに右下が斜沈線で斜格子を作り二個一対の刺突文	丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	良	
342	壺	D-7		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	やや黄みがかかった乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い砂質土	普	
343	壺	L-14		ミガキ	ミガキ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石多い砂質土	良	
344	壺	K-14		ヘラミガキ	指ナデ	黄茶褐色(黒班有り)	黒褐色	石英・黄白石などの細石多い土	普	
345	壺	F-6		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	普	
346	壺	表探		丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	普	
347	壺	D-6		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石などの細石多い砂質土	普	
348	壺	F-8		ヘラ横ナデ	ヘラナデ	黄茶褐色	やや赤っぽい黄茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石多い砂質土8mm大有り	普	
349	壺	C-6		ミガキ後ナデ	ミガキ後ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石多	良	
350	壺	E-7		丁寧な横方向ヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	淡茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	良	
351	壺	表探		ヘラミガキ	ヘラナデ	黄みがかかった明茶褐色	白っぽい明茶褐色	石英・白色石などの細石多い	普	
352	壺	E-5		ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い土	良	
353	壺	表探		ヘラミガキ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土	良	
354	壺	F-7		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ指頭圧痕有り	黒灰褐色	黒灰褐色	石英・白色石などの細石多い土	良	
355	壺	表探		ヘラミガキ	丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い土	普	
356	壺	表探		ヘラ沈線の重弧文	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・黄白石などの細石多い砂質土	良	
357	壺	F-6		二条の沈線に挟まれた四条のヘラ描き罫歯文	剥脱の為不明	黄みがかかった淡茶褐色	灰がかかった乳茶褐色	石英・白色石の細石を含む土	普	
358	壺	表探		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの多い粗砂質土	普	
359	壺	K-14		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・黄白石などの細石	普	
360	壺	D-8	表	ヘラミガキ	ヘラナデ	灰褐色・黒褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	良	
361	壺	C-6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
362	壺	E-6		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの細石多い土	普	
363	壺	表探		ヘラミガキ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・長石・茶色石などの細石多い土	普	

第10表 弥生土器観察表(8)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
364	壺	表探		ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い土	良	
365	壺	表探		丁寧なヘラナデ	剥落	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
366	壺	表探		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・茶色石などの細石多	普	
367	壺	K - 15		ヘラナデ	ミガキに近い丁寧なヘラナデ	赤黒みのある淡茶褐色	黒褐色	石英・白色石・黄白石・茶色石などの多い細石	普	
368	壺	F - 8		ハケ様ヘラ横ナデの後丁寧なヘラ横ナデ	摩滅の為不明	淡黄茶褐色	淡黄茶褐色	石英・黄白石・金雲母などの細石多い砂質土	普	
369	壺	K - 14		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	赤みがかった淡茶褐色(黒斑)	淡茶褐色	石英・白色石黄白石などの細石多	普	
370	壺	C - D - 7		ミガキ様ヘラ横ナデ	ミガキに近い丁寧なヘラナデ	黄みがかった淡茶褐色一部は黒色光沢有り	灰褐色	石英・白色石・茶色石などの細石5mm大有り	良	
371	壺	K - 14		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	黄褐色	明茶褐色	石英・白色石・青灰色石などの多い粗砂質土	普	
372	壺	K - 14		丁寧な縦ヘラナデ	丁寧なヘラナデ	灰褐色	黒褐色	石英・白色石・長石などの多い粗い土	普	
373	壺	D - 6		ヘラミガキ	不明	淡茶褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
374	壺	D - 6		ミガキに近いヘラ横ナデ	剥脱	明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・白色石などの小石多	普	
375	壺	E - 7		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	丁寧な縦ヘラナデ	明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・白色石・灰色石・茶色石などの細石多い粗い砂質土	普	
376	小型壺	K - 16		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	普	
377	鉢	E - 7		ナデ様ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石の多い細かい土	普	
378	鉢	L - 16		ミガキ	ミガキ	明茶褐色部分的に赤みがかかる	明茶褐色	石英・白色石・などの細石多	普	
379	鉢	L - 16		ヘラミガキ	丁寧なナデ	赤みがかった茶褐色	赤みがかった茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	良	
380	鉢	K - 17		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石5mm大の石	普	
381	鉢	L - 17		ヘラナデ	ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	やや黒っぽい明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・などの細石	普	
382	高杯	K - 15		ヘラミガキ	丁寧な横ナデ	明茶褐色黒褐色	黒褐色	石英・黄白石・などの細石	良	
383	高杯	E - 7		ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	黄みがかった乳茶褐色	黄みがかった乳茶褐色	石英・黄白石などの細かい土	普	
384	高杯	K - 16		ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	普	
385	蓋	F - 6		丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラナデ	明るい黄茶褐色	黒茶褐色	石英・灰色石などが多い細石	普	
386	甕	E - 6		丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石	良	
387	甕	D - 7		ミガキに近い丁寧なヘラナデ	丁寧なヘラ横ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い土	良	
388	甕	D - 7		丁寧なヘラナデ	ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・黄白石・などの細石	良	
389	甕	D - 7		ヘラ横ナデ	斜め方向ヘラナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・白色石・灰色石もある土	良	
390	甕	K - 14		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土	良	
391	甕	K - 14		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土	良	
392	甕	E - 6		丁寧な横ナデ	丁寧な縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・茶色石などの小石が多い砂質土	良	
393	甕	D - 7		ヘラ横ナデ	指頭有りヘラ横ナデ	黄っぽい茶褐色	黄っぽい茶褐色	石英・白色石・茶色石などの小石多い土	良	
394	甕	C - 6		丁寧なヘラナデ・ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
395	甕	F - 7		丁寧なヘラ横ナデ	ハケナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
396	甕	C - 7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	暗茶褐色	暗茶褐色	石英・白色石・などの細石を含む土	良	
397	甕	F - 6		ヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの小石の多い土	良	
398	甕	E - 7		摩滅の為不明	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・茶色石などの粗い土	普	
399	甕	H - 7		ヘラ横ナデ	ハケナデ・ヘラナデ指頭痕有り	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
400	甕	E - 8		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラナデ指頭痕	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの細石	良	
401	甕	K - 14		丁寧なヘラ横ナデ	丁寧なヘラ横ナデ指頭押圧	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの小石を含む粗砂質土5mm大	良	
402	甕	C - 14		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄っぽい明茶褐色	黄っぽい明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い土5mm大	良	スス付着
403	甕	K - 14		丁寧なヘラ横ナデ・ハケ自みたいに見える	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの砂質土4mm大	良	
404	甕	F - 6		ヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多	良	
405	甕	K - 14		ハケ横ナデの後丁寧なヘラナデ	ハケナデの後丁寧なヘラナデ	灰っぽい明茶褐色	灰っぽい明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石粒の多い砂質土6mm大	良	
406	甕	K - 14		縦ハケナデ	ヘラナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの石の多い砂質土4mm大	良	
407	甕	C - 7		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	淡黄褐色	淡黄褐色	石英・白色石・などの細石	良	
408	甕	C - 7		ヘラミガキ	丁寧なヘラ横ナデ	茶褐色黒褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
409	甕	C - 7		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ・ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・灰色石などの細石	普	
410	甕	C - 7		ヘラ横ナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石多	普	

第11表 弥生土器観察表(9)

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
411	甕	E - 6		ヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・白色石・茶色石の多い砂質土	良	
412	甕	L - 15	表	ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・灰色石などの細石	普	
413	甕	C - 7		ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・灰色石などの細石	普	
414	甕	D - 7		ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・灰色石などの細石	普	
415	甕	C - 7		ヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石・灰色石などの細石	普	
416	甕	D - 6		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの粗砂質土 8mm大	普	
417	甕	K - 14		丁寧なヘラ縦ナデ		明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い土	良	
418	甕	C - 7		ヘラナデでこぼこして作り難	ヘラナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土 6mm大	良	
419	甕	D - 7		下から上のヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの多い粗砂質土	良	
420	甕	C - 7		下から上のヘラナデ(指紋有り)	ヘラナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・黄白石・茶色石など含む粗砂質土細石	良	
421	甕	表採		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	黄みがかった明茶褐色	赤みがかった茶褐色	石英・黄白石・灰褐色石などの多い粗い土	良	
422	甕	J - 12		ヘラミガキ		黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	石英・黄白石・茶色石などの小石多	良	
423	甕	D - 7		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	赤みがかった茶褐色	赤みがかった茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い粗い砂質土	良	
424	甕	L - 14		ヘラ縦ナデ		茶褐色	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い粗い土	良	
425	甕	E - 7		ヘラ縦ナデ		赤っぽい茶褐色	赤っぽい茶褐色	石英・白色石・茶色石などの多い砂質土	普	
426	甕	表採		ヘラナデ(剥離目立つ)	ヘラナデ	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの粗い土の多い砂質土	普	
427	甕	L - 7		ヘラ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	茶褐色	石英・白色石などの細石多い砂質土	普	
428	甕	F - 7		縦ハケナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・茶色石・白色石・黄白石など小石が多い砂質土	良	
429	壺	C - 7		ヘラナデ	ヘラナデ	黄っぽい乳灰色	黄っぽい乳灰色	石英・白色石などの細石多い土	普	
430	壺	K - 15		縦ナデ	横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	黄白石・石英・茶色石などの細石 5mm大有り	普	
431	壺	K - 14		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい明茶褐色	赤っぽい明茶褐色	茶色石・灰褐色石・石英・白色石などの細石	良	
432	壺	L - 14		横の後縦ミガキ	丁寧な横ナデ	茶褐色(光沢あり)	茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	良	
433	壺	D - 8		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	茶色っぽい黄褐色	茶色っぽい黄褐色	石英・黄白石・茶色石などの多い粗い土	良	
434	壺	C - 7		横ヘラミガキ・ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	黄色っぽい明茶褐色	黄色っぽい明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石 5mm大有り	良	
435	壺	D - 7		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	白色石・茶色石・石英などの細石 5mm大	良	
436	壺	表採		ヘラナデ	ヘラナデ	黄みがかった明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	茶色石・石英・白色石・灰褐色石などの小石の多い砂質土	普	
437	壺	D - 7		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかった淡茶褐色	黄みがかった淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
438	壺	C - 6		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい明茶褐色	黄みがかった明茶褐色	茶色石・石英などの細石 5mm大の石	普	
439	壺	D - 6		ヘラミガキ	ヘラミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	白色石・黄白石・茶色石などの細石	普	
440	壺	E - 6		ヘラミガキ	丁寧なヘラ縦ナデ	淡茶褐色	暗い淡茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石	普	
441	壺	D - 6	溝	横方向ヘラミガキ	横方向ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石などの細石多	良	
442	壺	F - 7		ヘラミガキ	ヘラミガキ	黒色磨研	黒色磨研	石英・黄白石・茶色石・青灰色石などの細石粒多い砂質土 3mm大	普	
443	壺	F - 7		ミガキに近いヘラ横ナデ	ヘラミガキ	明茶褐色	明茶褐色	白色石・石英・茶色石・黒耀石などの細石多い砂質土	普	
444	壺	C - 5		深いハケ縦ナデの後丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	やや黄っぽい淡茶褐色	石英・茶色石・灰褐色石などの細石多い砂質土	普	
445	壺	E - 7		ヘラミガキ	丁寧な横ナデ	黄みをおびた淡茶褐色	黄みをおびた淡茶褐色	白色石・石英・茶色石・灰褐色石などの細石の多い土	普	
446	壺	C - 7		丁寧なヘラナデ	ヘラミガキ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・茶色石・白色石などの細石	良	
447	壺	表採		ミガキに近い丁寧なヘラ横ナデ	ヘラミガキ・指頭圧あり	灰がかった明茶褐色	灰がかった明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い砂質土	良	
448	壺	E - 8		丁寧なヘラナデ	ヘラ横ナデ	白っぽい乳茶褐色	白っぽい乳茶褐色	石英・黄白石・白色石などの細石	良	
449	壺	D - 7		縦方向ヘラミガキ	ヘラミガキ	茶褐色	茶褐色	石英・茶色石・白色石多い土	良	
450	壺	D - 6		丁寧なヘラ横ナデ	ヘラ縦ナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・白色石・茶色石などの細石多い砂質土	良	
451	壺	D - 6 H - 7		横方向ミガキ	丁寧な縦ヘラナデ	明茶褐色	明茶褐色	石英・茶色石・黄白色の多い砂質土 4mm大有り	普	

2 石器

石鏃など23種の石器が564点出土している。このなかには石鏃のように155点もの多数あるものと、石剣・石錘などのように1点しかないものもある。少量ではあるが縄文土器が出土しているため、これらのなかには縄文時代のものが含まれている可能性もあるが、層位的に区別できないため、ここで扱う。

1) 打製石鏃 (第55図～第58図, S55～S128)

155点出土しているが、このなかには未製品17点が含まれている。また、S120～S128のように石槍に近い大型の鏃が15点ある。

形態的には基部にえぐりのない平基式のもの(類)と、えぐりのある凹基式のもの(類), 二等辺三角形のもの(a類)と正三角形のもの(b類), えぐりの浅いものと深いものなどに分けることができる。基部が欠けているもの10点を除いた113点(未製品のものと大型鏃も省いてある)の内訳は a類が15点, b類が10点, a類が51点(うち浅いもの41点), b類が37点(うち浅いもの34点)で、えぐりを有する凹基式が8割近くと圧倒的に多く、二等辺三角形のものと正三角形のものとでは前者が6割近くあり多い。

石材には安山岩・黒耀石・チャートなどがあり、安山岩が7割強と圧倒的に多い。未製品・石核に安山岩が多く、多量のチップが出ていることと矛盾しない。

調整はこまかくされているものが多いが、S69・S70・S79・S99・S103・S108などのように大剥離面を中央に残し、周辺のみを加工したものもある。S59・S60などは大剥離面を残してはいないものの、粗い調整で形を整えている。S61の基部やS64・S65の形は左右が対

称となっていない。えぐりの基部はS67・S78・S91・S92・S95などのように鋭くしたものと、S70・S73・S94のように太くしたものとがあるが、概して前者が多い。S61・S73・S78・S83・S87・S90・S100・S112などは二等辺三角形の中央がややくびれた形態をしている。S83やS90・S112などは特にくびれが強く、先端へは直に伸びている。先端はほとんどが鋭くとなっているが、S94は丸みをおび、S115は全体的に鋤先状を呈している。

2) 石匙 (第59図, S129～S131)

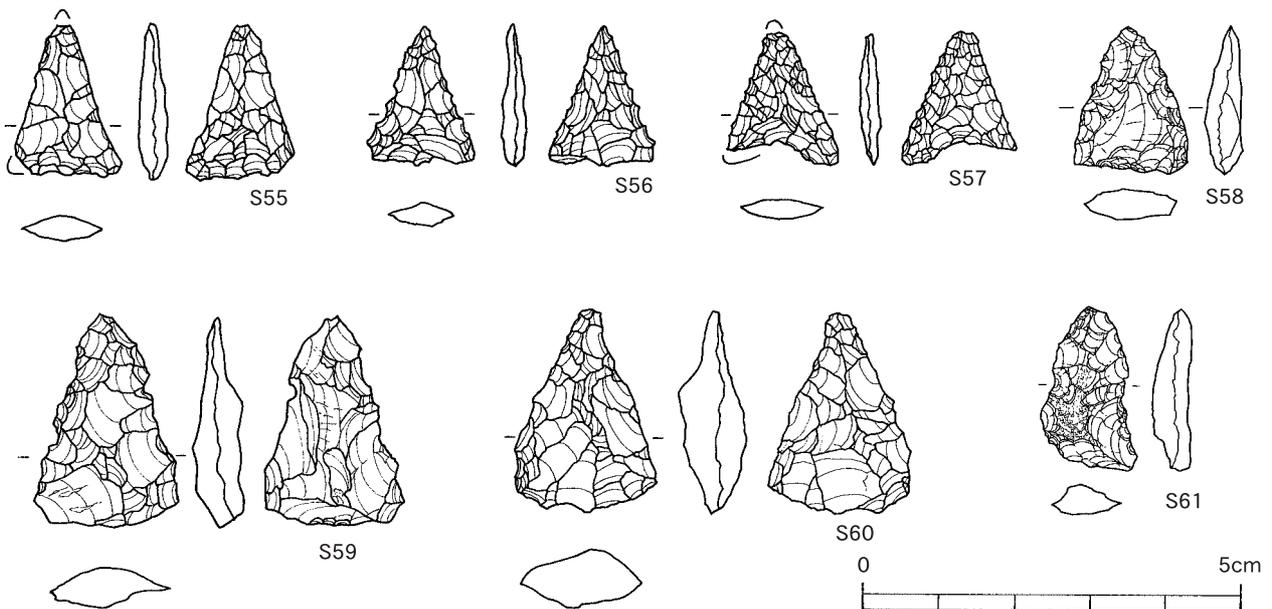
横長のものが3点出土している。S129・S131は西北九州産の安山岩製である。S129はつまみが中央につく台形状のもので、裏面中央部には皮部が残っている。S130は頁岩製で、つまみ部はこまかい加工をしているが、刃部は粗い作りである。S131は刃部が広く欠けているもので、つまみに対して刃部は幅が狭い。

3) 石錐 (第59図, S132～S142)

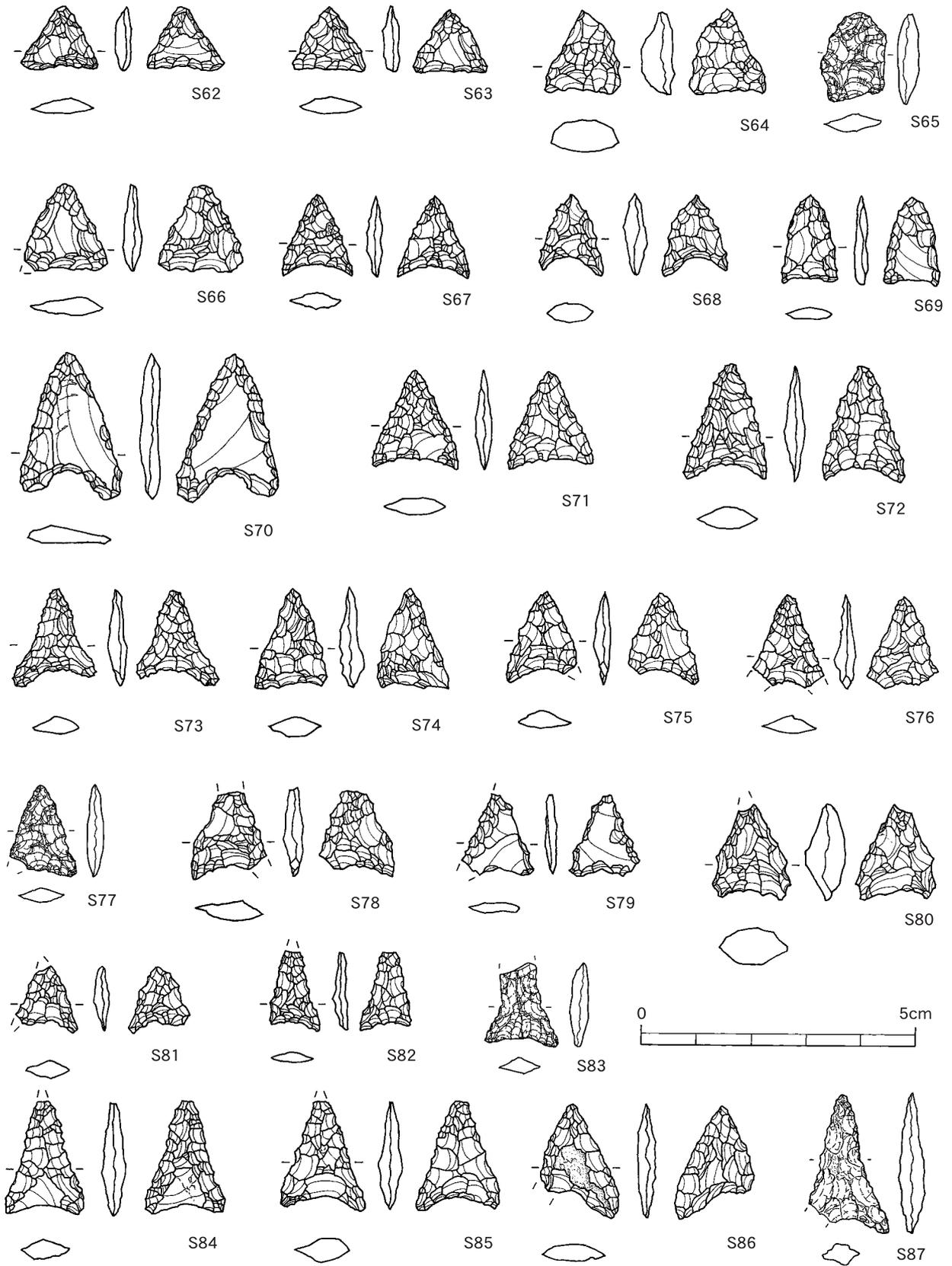
棒状のものはなく、いずれも角錐状のものが16点出土している。サヌカイト製のものが大部分である。錐部の断面形は両面からこまかい押圧剥離を施して、三角形あるいは菱形をしている。錐部の角がつぶれているものが3点あり、特にS133は目立つ。これは使用対象が石であろうと思われるものである。

4) 石槍 (第59図, S143・S144・S146)

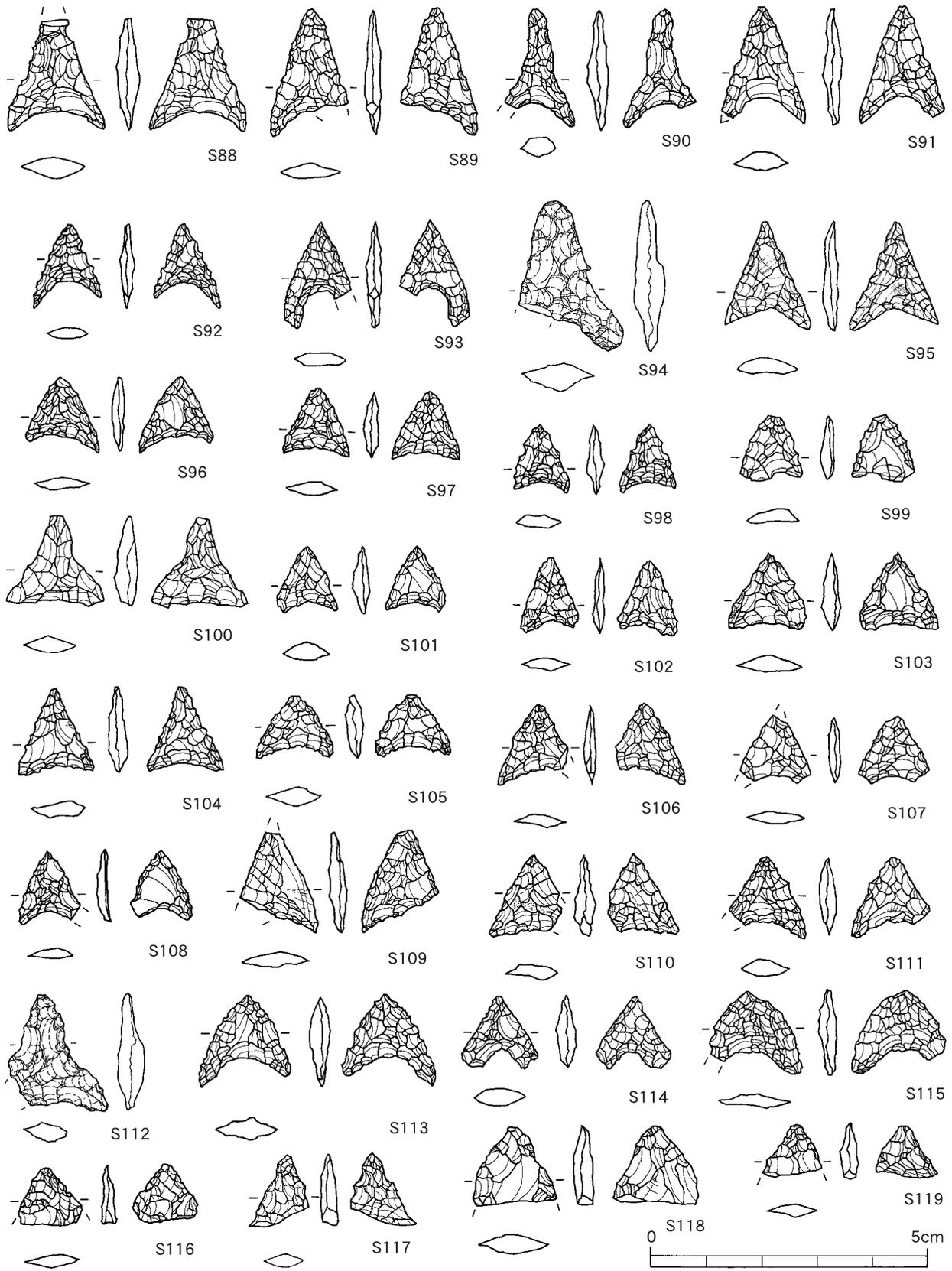
西北九州産安山岩製のものが3点出土している。S143は柳葉形をした分厚い作りのもので、基部は細くなっている。S144は破片であるが、幅が広く扁平なも



第55図 石器(1) 石鏃



第56図 石器(2) 石鏃



第57図 石器(3) 石鏃

のである。S 146は基部が欠けて途中で折れた細長く分厚いもので、ていねいな加工がされている。

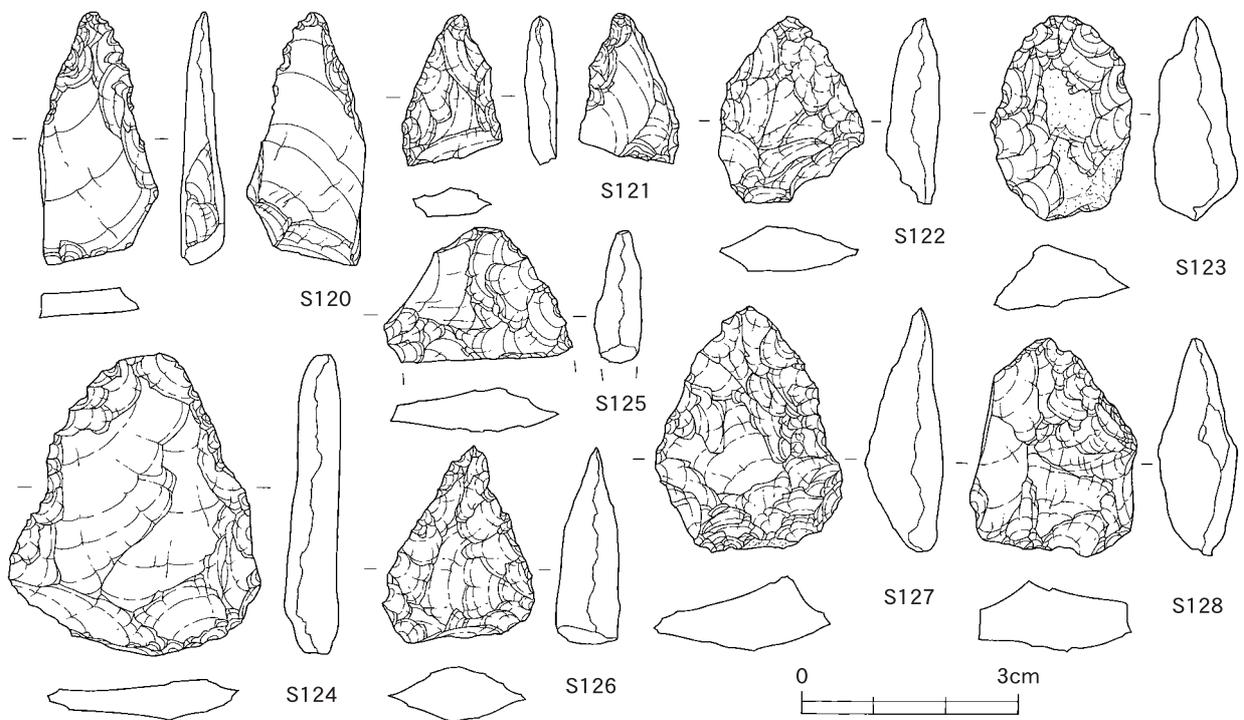
5) ピエス・エスキーユ (第59図, S145・S147~166)
骨などを砕くためのものといわれており、近年の調査では各遺跡で数点ずつ出土しているが、当遺跡では西北九州産安山岩製のものが25点もの多数出土している。形態的には縦長のもの、横長のもの、三角形のもの、台形のもの、多角形のものなど多様である。刃部もその形態によって短側辺を使うもの、長側辺を使うものがあり、一辺だけを用いるものと、上下二辺を用いるもの、あるいはそれ以上の複数辺を用いるものがある。材料は剥片を使用したものが多いが、分厚いコア状の鋭い辺を用いたものもあり、部分的に表皮を残しているものもある。

6) 石剣 (第60図, S 167)
サヌカイト製の打製石剣が1点出土している。剣先部分が欠けており、残存長10cm、幅3cm、厚さ2cmの細身である。周縁からこまかく打ち欠いて整然とした形に仕上げているが、中央部は自然面を残し、側縁は磨滅している。

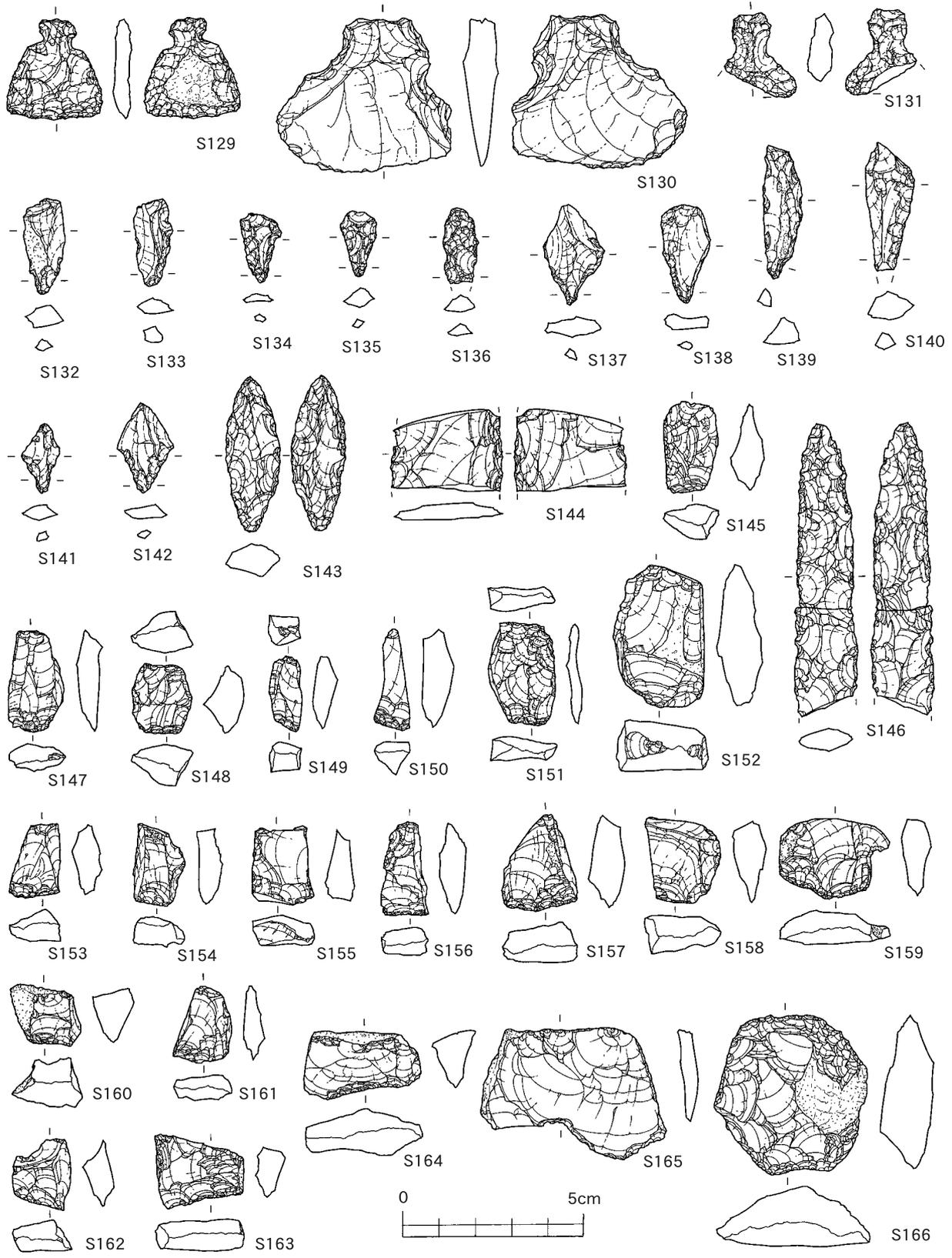
7) 石鎌 (第60図, S 168~S 170)
安山岩製の石鎌が3点あるが、いずれも破損した小さい基部破片である。S 168とS 170は背部と刃部の両側からこまかく加工しており、弯曲している。S 169は自然面を広く残しており、刃部のみを両側から打ち欠いている。

8) スクレイパー (第60図, S 171~S 174)
方形をした剥片の一辺に細かい押圧剥離を施したもので、短側辺に施したエンドスクレイパー (S 171) と、長側辺に施したサイドスクレイパーとがある。全部で16点あるが、ほとんどサイドスクレイパーである。

9) 磨製石鎌 (第60図, S 175~S 178)
6点出土しているが、破損品が多く、うち3点は未製品である。S 175は長さ・基底幅とも1.4cmの正三角形をした小型品で、基部は簡単に磨いてえぐりを作っている。表・裏面とも部分的に研磨し、側辺はこまかく打ち欠き、研磨で形を整えている。S 176は先端・基部・片側面を欠いたもので、側辺は丸く作り、ていねいに磨いている。表面はていねいに磨いているが、裏面は広く剥脱している。未製品と思われる。一部に筋状の部分があり二次的



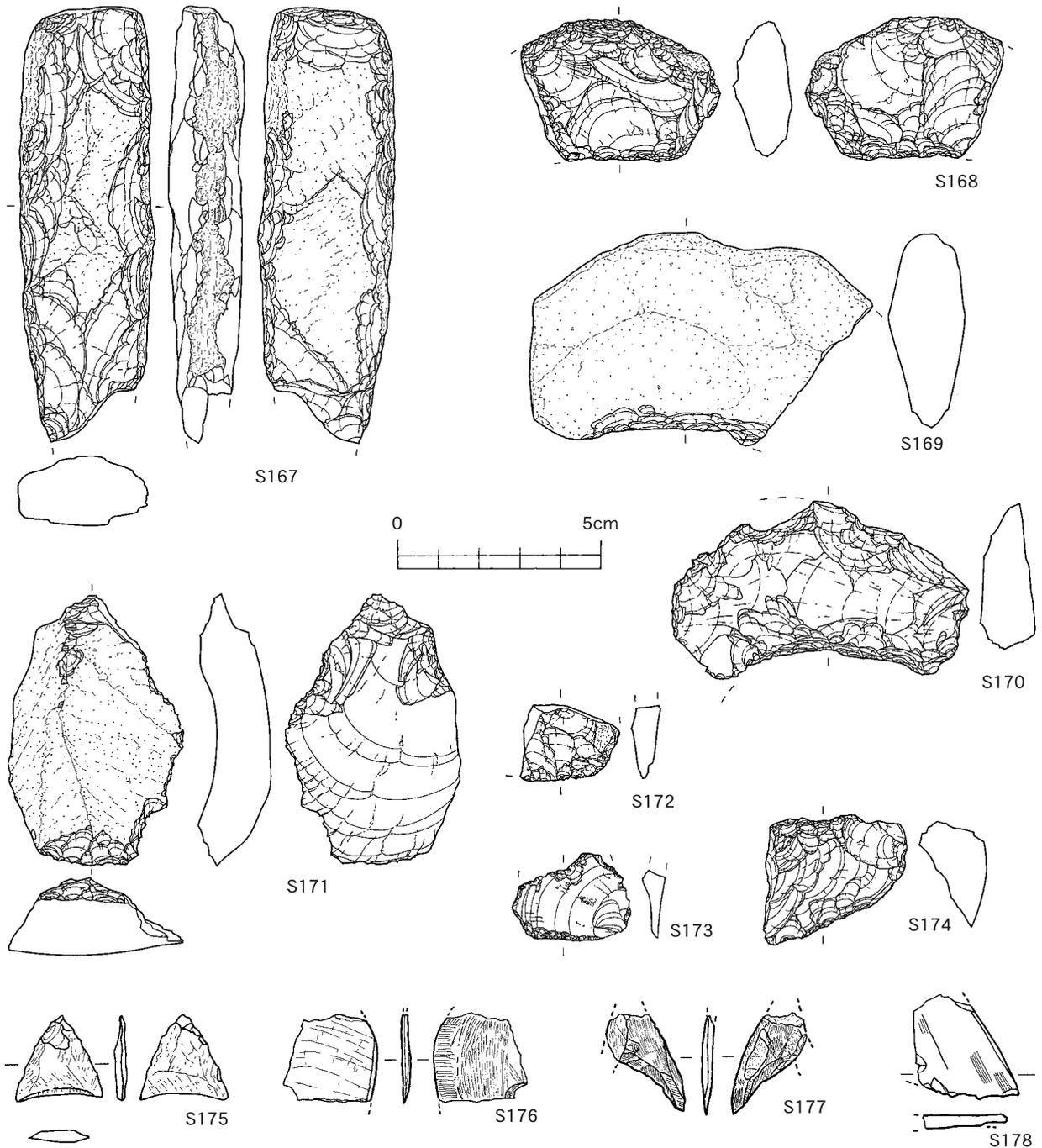
第58図 石器(4) 石鎌の未製品 大型石鎌



第59図 石器(5) 石匙・石錐・石槍・ピエスエスキーユ

に擦痕石器として使われている。S177はするどい長脚の鎌で、中央に鑄のある二等辺三角形鎌である。先端部と片脚を欠いている。S178は片面のみでいねいに磨いているが、逆面は自然面を残している。大型で、擦り切り技法によって切断している。これも未製品であろう。あとは長身に形を整えているが、一部を磨いたままのものと、片面を磨いた小破片である。

10) 磨製石庖丁 (第61図, S179~S181)
磨製石庖丁が8点出土しているが、いずれも破片で全形は不明である。石材は頁岩で、いずれも剥脱が目立つ。S179は背部付近で、これも剥脱が目立つ。残存幅は4cm足らずで、下部近くに直径7mmほどの円孔が穿たれている。S180・S181は刃部破片で、刃部はにぶい。S180の現在幅は5.2cmで、表面には段がある。S181には



第60図 石器(6) 石剣・石鎌・スクレイパー・磨製石鎌

刃こぼれがみられ、側縁は両方から打ち欠いた痕跡がみられる。残存幅は2.8cmである。

11) 磨製石斧 (第61図, S182~S188)

多様な磨製石斧が16点出土している。大きく片刃石斧と両刃石斧に分かれる。S182は長さ10cm, 幅5cm, 厚さ2cmの扁平片刃石斧の完形品で、敲打によって形を整え、そのあとでいねいに全体を磨いている。刃は片刃である。石材・形態からして持込品の可能性がある。S183は長さ5.7cm, 幅3cm, 厚さ1cmほどの小型扁平片刃石斧で、S182と違い敲打痕はみられないが、全面をていねいに磨いている。S184は自然円礫の先端部をのみ形に加工したものだが、二次的に敲石として用いており、刃はつぶれている。S185は周辺からの敲打により形を整え、そのあと研磨した扁平片刃石斧であるが、頭部・刃部が欠けている。S186は頭部を欠いているが、両面をていねいに磨いたバチ形の石斧で、土坑34の出土品である。S187・188は扁平な安山岩の刃部のみを磨いた局部磨製石斧だが、側面もていねいに磨いている。薄刃の幅の広い石斧で、S187は刃こぼれが目立つ。

12) 打製石斧 (第62図, S189~S213)

基本的に刃部が細くなり、柄部にえぐりのある形態をしているが、出土品の中には二次的に磨石・敲石・擦

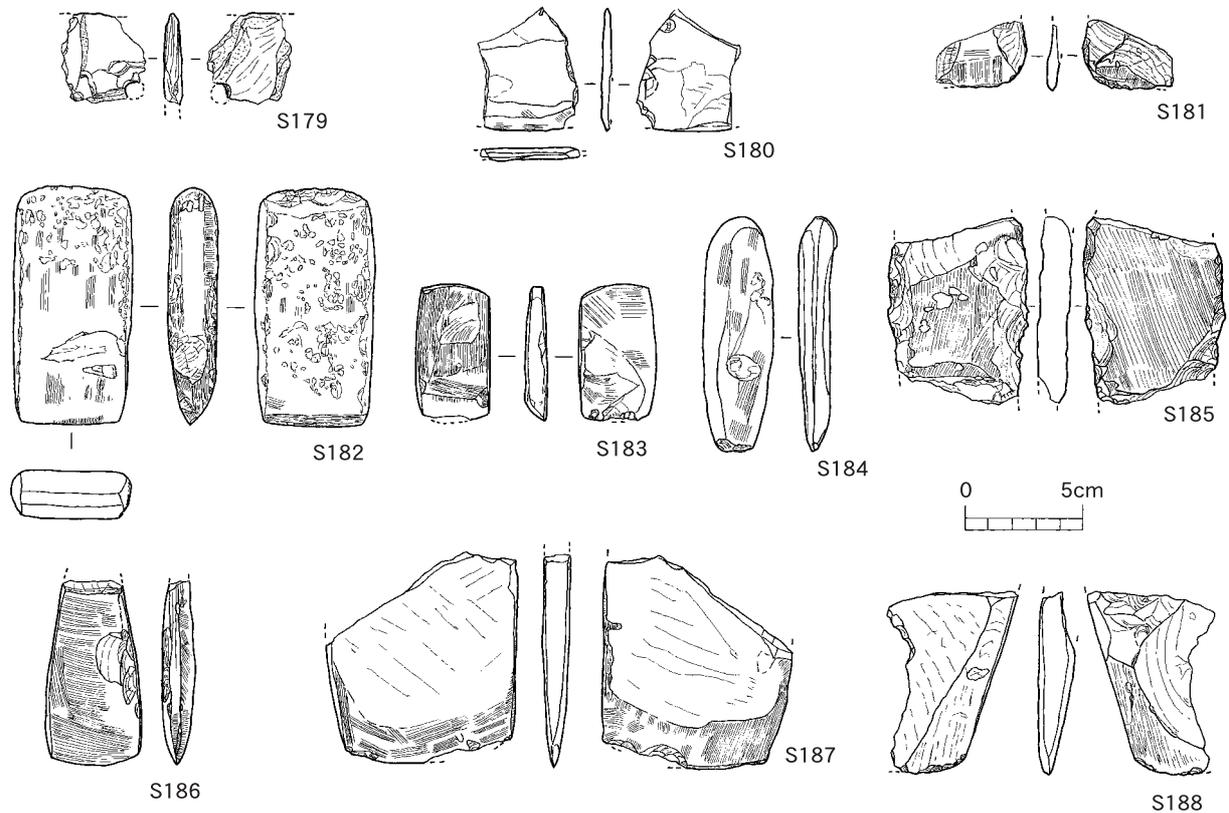
痕石器として使われ、刃部のすり減ったものが多い。S200はふたつに折れ、刃部がやや欠けているが、ほぼ完形のもので、長さが19.6cm, 幅が7.2cm, 厚さが3.0cmある。刃部が敲打あるいは磨ったりしたもの(S194~S198)が多く、短くなり、先端は矩形を呈している。またS198などは側辺を擦っており、長辺と直交する筋がみえる。S196は刃部・側辺とも使用している。

13) 石核 (第63図, S214~S217)

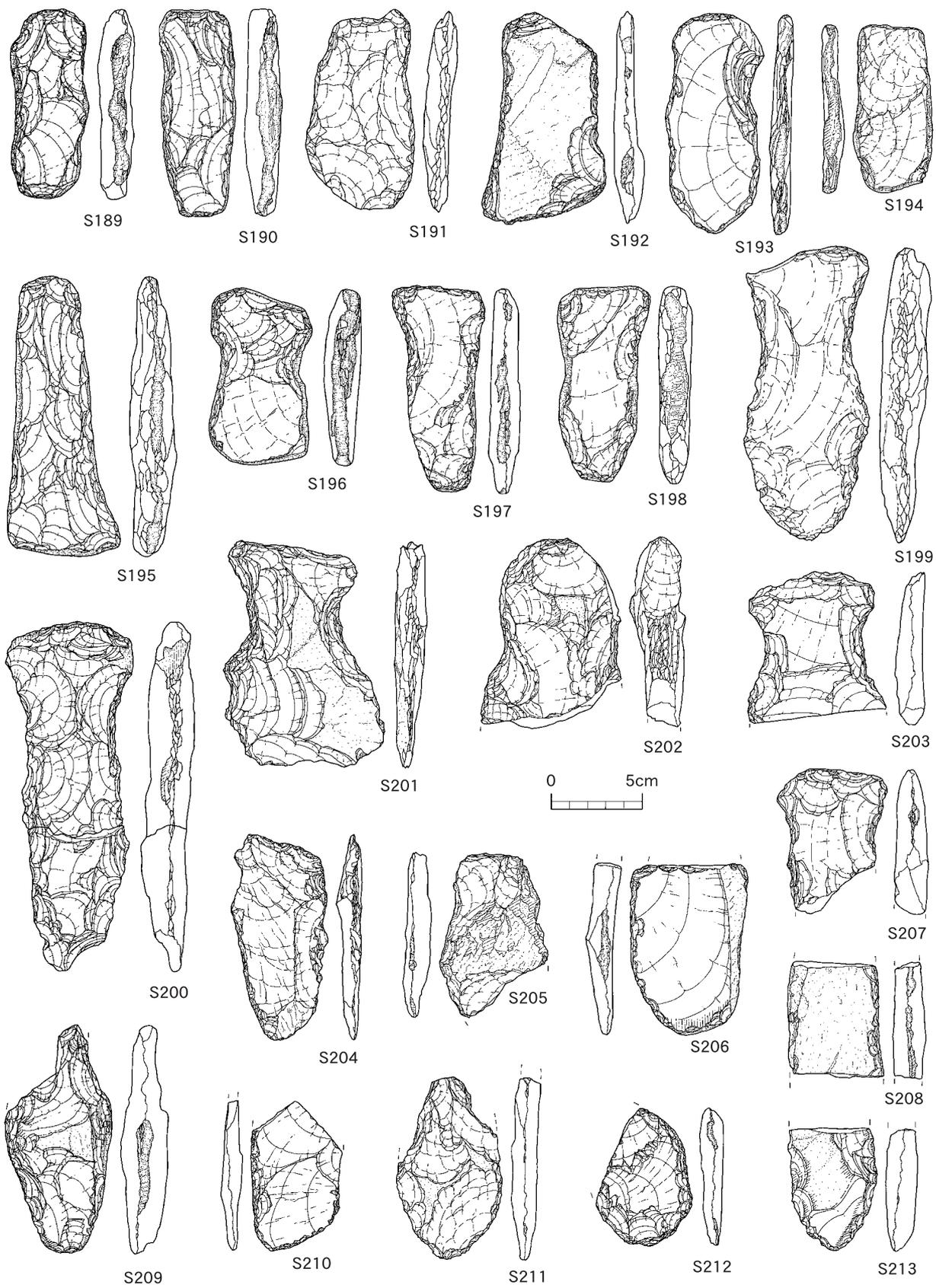
安山岩や黒耀石の石核が多くみられる。平らな部分を天井部とし、底のほうから敲打を加えて、剥片を剥ぎ取っている。側面形は逆三角形・矩形を呈している。

14) 礫器 (第63図・第64図, S218~S221)

円礫・角礫の周辺を加工し、その一面を刃部とする礫器が8点ある。S218は自然面を一部に残しているが、打ち欠きにより形を整え角礫状とし、その一側辺を刃部としている。S219は周辺を打ち欠いておにぎり状とし、長側辺を刃部として使用している。S220は長方形をした厚さ1.3cmの砂岩川原石の一長側辺を両側から打ち欠いて刃部としている。S221は半月形の扁平な安山岩礫の鋭い辺を両側からこまかく打ち欠いて刃部とした大型礫器で、これとよく似た扁平な安山岩礫を利用したものは他にも多くある(図版25)。



第61図 石器(7) 磨製石斧・磨製石斧



第62図 石器(8) 打製石斧

15) 磨石 (第64図・第65図, S222~S232)

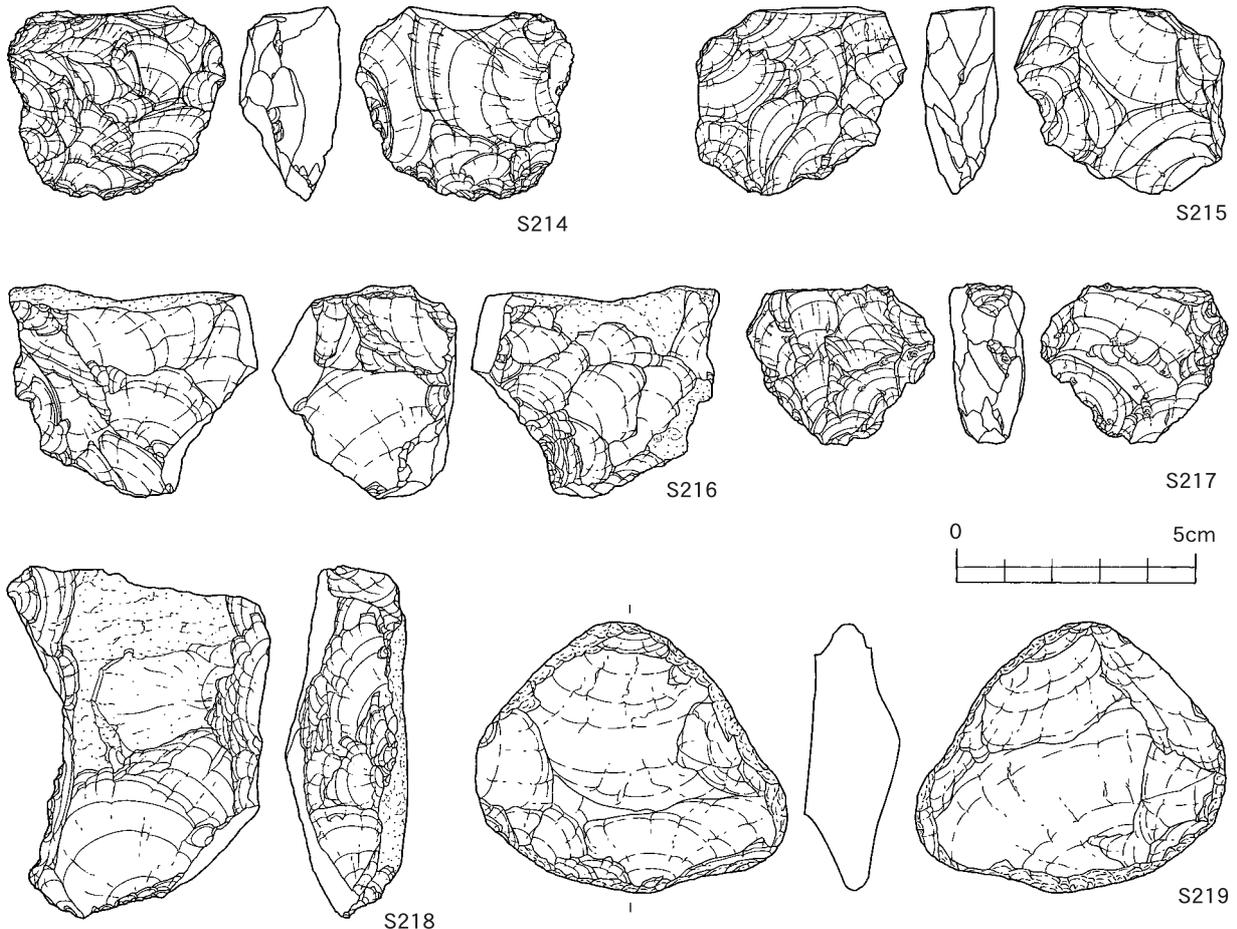
36点もの磨石があるが、完全品は少なく、多くが破損している。形態・大きさなど多様である。使用石材は安山岩が多い。

S222・S224は平面形が円形をした小型のものである。S222は最大長が4.2cmしかない小型品で、一側面のみには敲打痕がみられ、この逆の側面には欠損部があることから敲石として使われた可能性がある。S223は一側面のみを使用した破損品だが、使用面は中央に稜ができるほど両側から擦り込んでいる。S224は半欠品で、火を受けた痕跡がある。両平坦面、側面とも広い範囲に使用痕がある。S225は不整形の円礫の側辺のみを使用し、特に角部の使用痕跡が顕著である。両平坦面や側面の中央部には自然面が広く残っており、擦痕石器としての使用痕も考えられる。S226は長側辺が直線、短側辺が曲線状となる形状で、長側辺と短側辺のそれぞれ片側をよく使っており、擦痕石器の可能性もある。S227~S229は平面形が円形をしたもので、いずれも欠損品である。

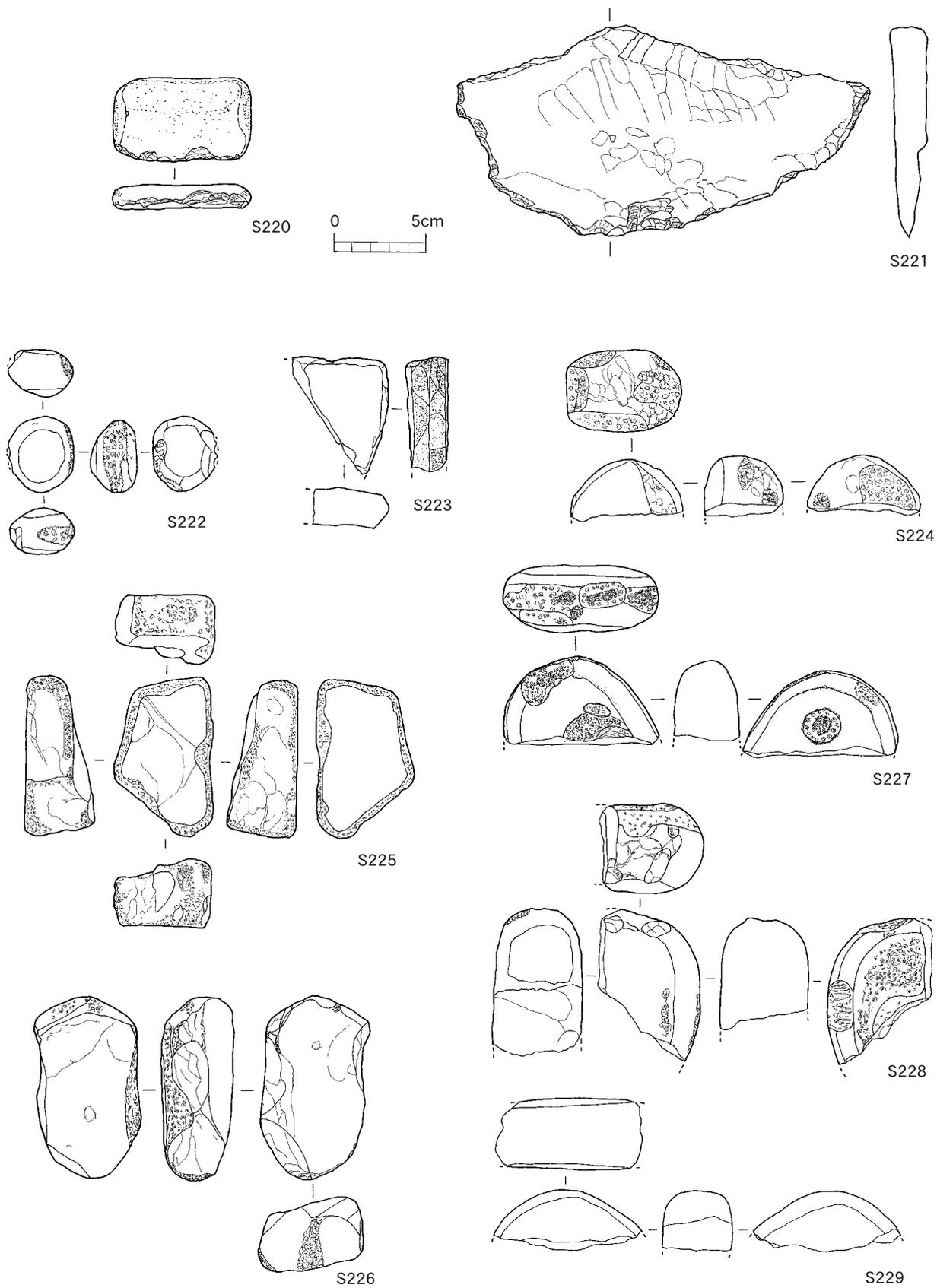
S227は側面を良く使用し、さらに割れてからも二次的に使用したらしく、欠損部も角がすれている。両面中央がくぼんでおり、凹み石としても使用している。S228も同様に欠損部が磨滅し、両面・側面とも良く使っている。側縁には敲打痕や、縦方向の条痕があり、欠損後に敲石・擦痕石器としても用いている。S229も両面・側面を良く使っている。S230~S232は円形に近い円礫を用いている完形品である。S230は自然のツルツルした石材を用い、側辺部がよく使い込まれている。S231の片面は使い込んで平坦近くに擦り減っている。長径方向に擦り痕跡がみられる。丸みのあるほうにはくぼみがあることから、凹み石としても使っており、側辺には敲打痕もある。S232は小型のもので、側辺をよく使い込んでいる。

16) 石錘 (第65図, S233)

だ円形をした砂岩円礫の短側辺を両側から打ち欠いて、紐かけとした石錘が1点出土している。



第63図 石器(9) 石核・礫器



第64図 石器(10) 礮器・磨石

17) 敲石 (第65図, S 234 ~ S 239)

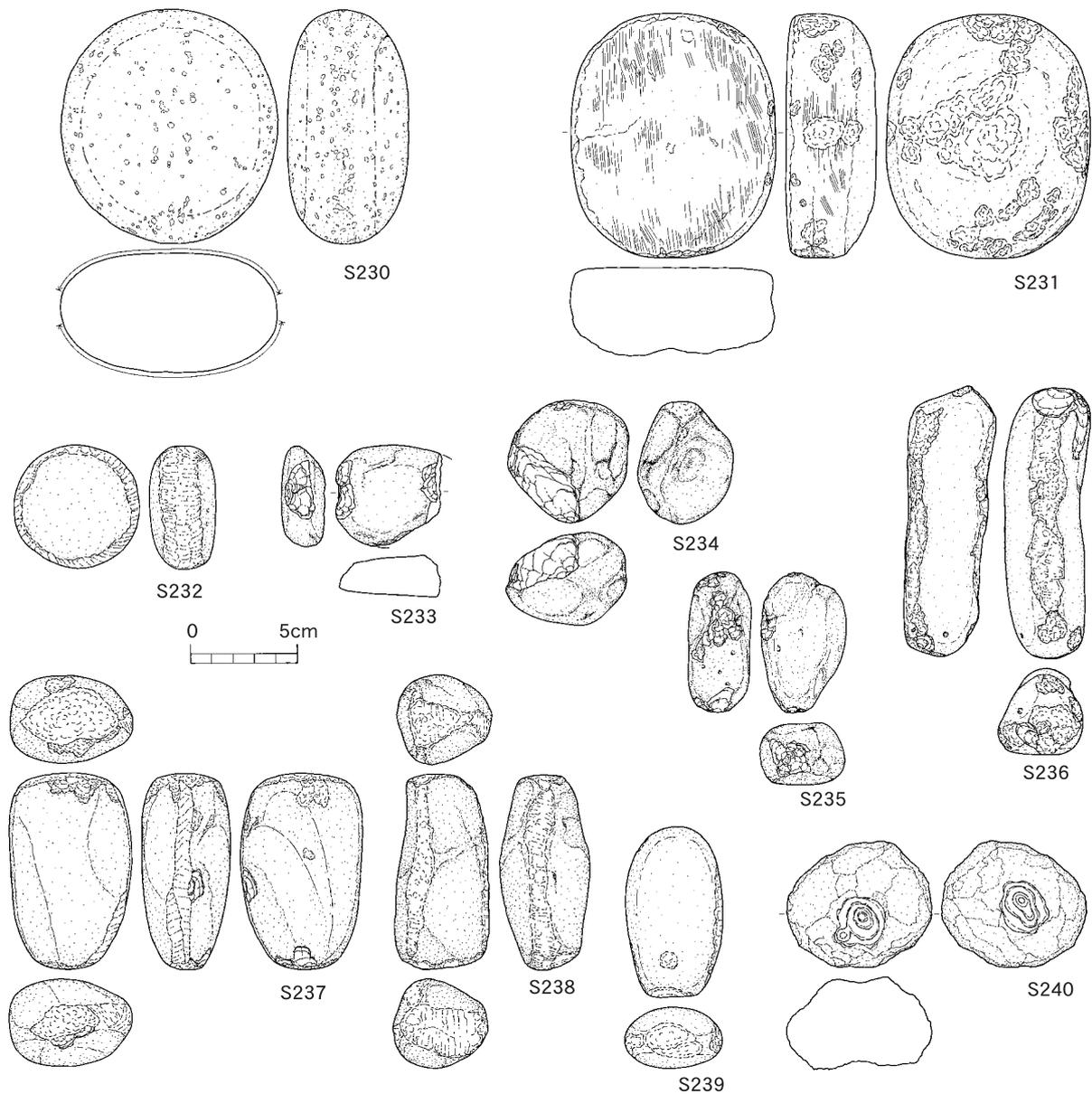
ボール状・棒状・方柱状などを呈した自然円礫の一端を敲打面として使用した敲石が30点出土しているが、側面に擦った面のあるものなどもあり、磨石や擦痕石器など他の用途にも使われていた可能性がある。

S 234はボール状の一部を使用し、敲打痕がみられる。S 235は棒状のものの先端と、側縁部に打痕がみられる。二か所とも敲く道具として使われたようである。S 236 ~ S 238は棒状のものの両側に敲打痕がみられるが、側

面の二側辺にも打痕や擦痕がみられる。これは磨石や擦痕石器として用いられたようである。S 239は片側の端と片側面に打痕がみられるが、正面の一部には打ち欠かれた部分が浅くあり、凹み石としても使用されている。

18) 凹み石 (第65図, S 240)

凹み石は5点出土しているが、S 240はひびのはいたボール状円礫の両面に、使用したことによってできた凹みがみられる。



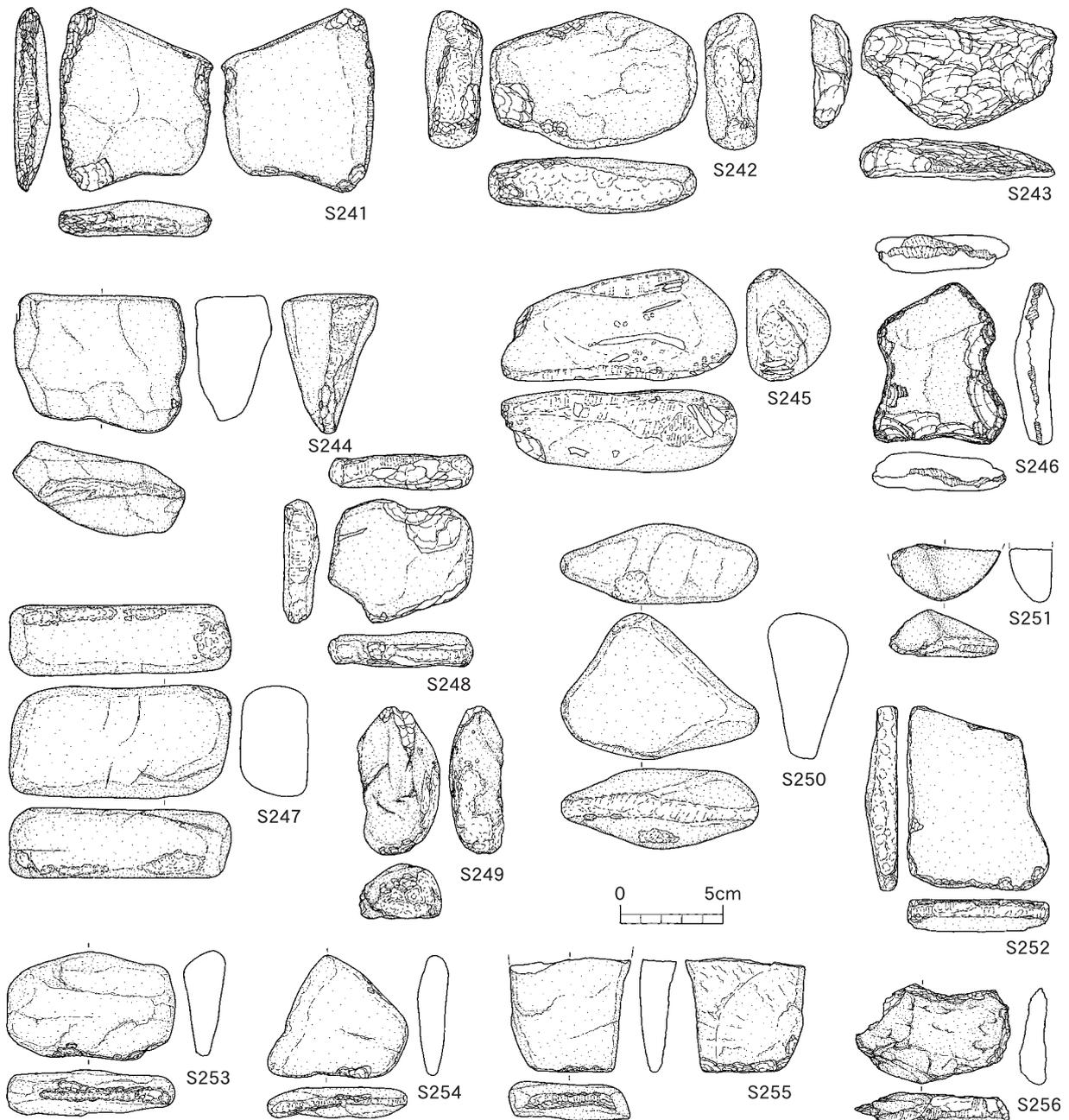
第65図 石器(1) 磨石・石錘・敲石・凹み石

19) 擦痕石器 (第66図, S 241 ~ S 256)

側辺の一部に直交する擦痕跡がみられる石器で、とりあえず擦痕石器と名付けておくが、用途等を考え、名称を検討する必要がある。69点あるが、他の石器種のなかにも再利用されて二次的にこれと同じ用途をもつものがあるため、数量は増える可能性がある。

自然の円礫を用いたものが多いが、打製石斧や敲石・石皿などの欠けたものを再利用したもの、自然の角礫を用いたものもある。ただ角礫は少なく、石器でも鋭い刃の部分避けている傾向がある。一辺だけを利用してい

るものが多いが、弯曲状に用いたもの、全周とも用いたもの、二辺を用いたものなどがある。使用面は外反するもの、内弯するもの、直線状になるものなど各種あってこの石器が多様に用いられることを想定できる。S 243は部分的に自然面を残している石核の外反している部分を用いている。S 246は打製石斧のえぐり付近の折れを利用し、折れた部分・えぐり部分などを用いている。S 250は逆面を敲石としても用いている。縦筋は浅いものと、深いものがある。



第66図 石器(12) 擦痕石器

20) 砥石 (第67図, S 257・S 258)

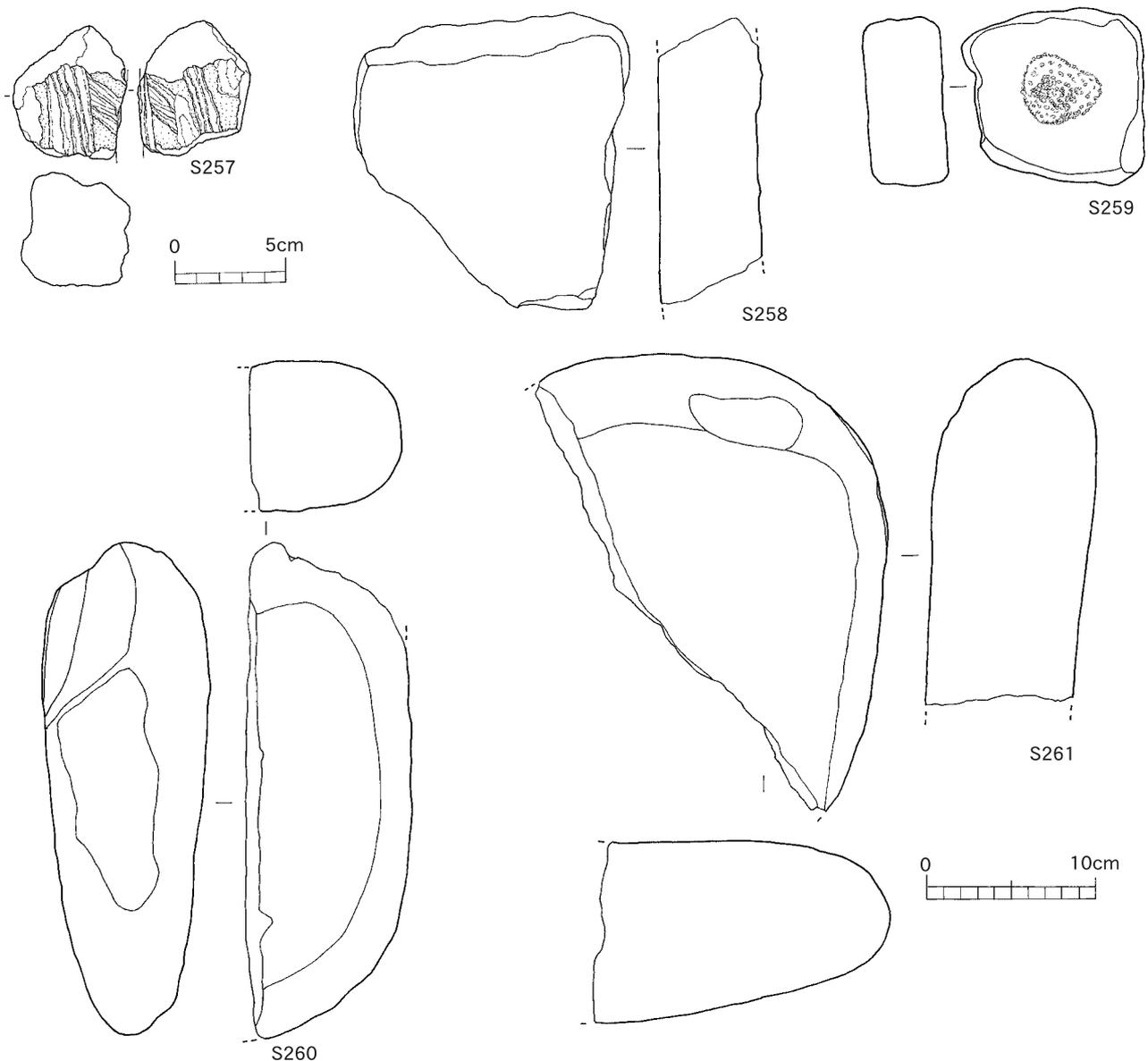
11点の砥石がある。S 257は柔らかい凝灰岩を用いた砥石の破片で、ややくぼんだ両面に筋状のくぼみが並行して数方向にあり、筋砥として使われている。S 258は周辺が欠けている厚さ5.8cmの薄い砂岩製砥石の破片で、片面を使用して平坦になっている。

21) 石皿 (第67図, S 259～S 261)

60点もの多くの石皿が出土しているが、ほとんどが欠損し、小破片になっている。くぼんだものは少なく、多くが平坦である。

S 259は一辺10cm、厚さ5cmほどの小さなもので、平坦な両面を使用している。片面の中央部はややくぼんでおり、凹み石としても用いられていたようである。また周辺が磨耗していることから、破損後に磨石として使われた可能性がある。S 260は長径が30cmほどのだ円形をしたもので、半欠品である。片面が使用され、ややくぼんでいる。S 261も隅丸方形をした大型のもので、欠けている。両面を使用しており、中央部がややくぼんでいる。

これらはいずれも安山岩を使用している。



第67図 石器(13) 砥石・石皿

第12表 石器観察表(1)

番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	石 鏃	L - 17	住 1	安山岩	1.6	1.2	0.4	0.66	a類 14082
2	石 鏃	L - 17	住 1	黒耀石	1.4	(0.9)	0.2	0.27	a類 10214
3	石 鏃	K - 15	住 2	安山岩	1.9	1.4	0.3	0.53	a類 12145
4	石 鏃	J - 15	住 2	安山岩	1.9	(1.6)	0.4	0.95	a類 13644
5	石 鏃	J - 15	住 2	安山岩	1.6	(1.3)	0.2	0.51	b類 10221
6	石 鏃	J - 15	住 2	安山岩	1.6	(1.4)	0.3	0.41	b類 10290
7	石 鏃	J - 15	住 2	安山岩	1.1	1.3	0.2	0.24	b類 10233
8	石 鏃	K - 15	住 2	黒耀石	(1.2)	1.7	0.2	0.48	b類 12176
9	石 鏃	J - 15	住 2	安山岩	1.8	(1.2)	0.3	0.42	a類 14071
10	石 鏃	C - 7	住 3	安山岩	(1.9)	(1.5)	0.4	0.78	a類 12387
11	磨製石鏃	C - 7	住 3	安山岩	1.8	1.3	0.2	0.70	14744
12	石 鏃	C - 7	住 3	安山岩	2.4	1.6	0.5	2.39	a類 12448
13	石 鏃	C - 7	住 3	安山岩	1.3	0.9	0.2	0.24	a類 12443
14	石 鏃	D - 6	住 4	安山岩	(1.2)	1.4	0.2	0.33	b類 13994
15	石 錐	K - 17	住 1	安山岩	2.7	1.5	0.6	2.04	14084
16	ピエスエスキュー	K - 15	住 2	安山岩	2.3	2.2	1.1	4.97	12191
17	ピエスエスキュー	K - 15	住 2	安山岩	3.0	1.5	1.0	3.43	12060
18	ピエスエスキュー	K - 15	住 2	安山岩	1.6	1.6	0.7	1.64	12173
19	石 錐	C - 7	住 3	安山岩	2.7	1.0	0.6	1.36	12415
20	打製石斧	K - 17	住 1	眞 岩	6.2	3.1	0.9	29.41	
21	擦痕石器	K - 17	住 1	砂 岩	6.4	6.5	2.8	160.84	1216
22	凹み石	L - 17	住 1	安山岩	13.8	12.7	9.5	2360	
23	擦痕石器	J - 15	住 2	砂 岩	7.9	7.7	2.6	208	10247
24	擦痕石器	J - 15	住 2	砂 岩	7.8	5.7	3.1	165	10244
25	敲 石	K - 15	住 2	砂 岩	3.8	3.5	2.4	42	下・側3 12137
26	擦痕石器	C - 7	住 3	砂 岩	8.6	7.6	3.8	302	12348
27	擦痕石器	C - 7	住 3	砂 岩	8.5	6.4	5.6	380	14753
28	擦痕石器	C - 7	住 3	安山岩	9.9	8.6	2.7	324	14738
29	打製石斧	D - 6	住 4	眞 岩	12.6	6.0	1.7	161.73	7114
30	磨製石斧	D - 6	住 4	凝灰岩	9.9	6.4	3.8	330	7116
31	擦痕石器	D - 6	住 4	安山岩	8.5	5.2	2.9	178	7132
32	打製石斧	D - 6	住 4	眞 岩	5.4	7.2	0.8	33.77	
33	石鏃未製品	K - 15	住 2	安山岩	1.5	2.6	0.5	2.57	12064
34	石 鏃	D - 6	住 4	安山岩	2.3	(1.5)	0.4	0.85	b類 7104
35	大型石鏃	D - 6	住 4	眞 岩	2.9	1.5	0.5	2.39	14895
36	石 皿	K - 17	住 1	安山岩	17.1	14.9	9.1	3170	1面 5932
37	石 皿	C - 7	住 3	安山岩	13.9	10.5	8.2	1175	1面 12392
38	擦痕石器	E - 8	土坑3	砂 岩	3.4	(8.0)	0.7	87	11936
39	擦痕石器	E - 8	土坑3	安山岩	10.4	2.0	2.7	108	11921
40	擦痕石器	E - 7	土坑6	砂 岩	10.0	4.2	1.6	98	13763
41	刃 器	D - 7	土坑7	眞 岩	3.2	7.8	1.1	28.13	打製石斧の再利用 13984
42	擦痕石器	D - 7	土坑7	眞 岩	3.7	(10.7)	0.9	51	14880
43	擦痕石器	D - 9	土坑16	砂 岩	4.7	7.6	3.3	167.57	8423
44	擦痕石器	E - 6	土坑18	砂 岩	7.7	5.3	1.8	84	20015
45	敲 石	C - 7	土坑36	砂 岩	9.8	4.4	3.8	198.53	
46	磨製石器	E - 7	土坑6	片 岩	4.6	3.6	0.4	8.94	13710
47	大型石鏃	D - 7	土坑7	眞 岩	4.5	2.5	1.2	10.73	13981
48	石 皿	D - 7	土坑7	安山岩	17.7	14.8	9.5	3580	2面 13975
49	砥 石	C - 8	土坑34	砂 岩	13.3	6.5	5.9	720	9480
50	石 鏃	E - 7	土坑6	安山岩	1.8	1.8	0.5	1.39	b類 8812
51	石 鏃	E - 7	土坑6	安山岩	2.0	1.6	0.3	0.57	a類 13756
52	石 鏃	E - 7	土坑6	安山岩	1.5	1.5	0.3	0.45	9726
53	ピエスエスキュー	E - 7	土坑6	安山岩	3.9	4.1	2.4	32.16	
54	ピエスエスキュー		土坑43	安山岩	3.7	2.6	0.7	8.45	
55	石 鏃	F - 6		安山岩	2.0	1.4	0.3	0.89	a類 14572
56	石 鏃	C - 7		安山岩	1.9	1.4	0.3	0.51	a類 4890
57	石 鏃	E - 8	P 1	チャート	(1.8)	(1.5)	0.2	0.59	a類
58	石 鏃	D - 7		安山岩	1.9	1.5	0.4	1.30	9406
59	石 鏃	D - 7		安山岩	2.9	1.9	0.6	2.83	a類 3825
60	石 鏃	C - 6		安山岩	2.7	1.8	0.8	3.40	a類
61	石 鏃	表 探		チャート	2.1	1.3	0.5	1.08	
62	石 鏃	L - 16		安山岩	1.2	1.4	0.3	0.38	b類 10085
63	石 鏃	F - 6		安山岩	1.2	1.3	0.3	0.40	b類 14382
64	石 鏃	C - 6		黒耀石	1.5	1.4	0.6	1.17	b類 4939
65	石 鏃	表 探		黒耀石	1.7	1.2	0.3	0.62	
66	石 鏃	C - 8		安山岩	1.6	1.5	0.3	0.62	b類 2984
67	石 鏃	E - 8		安山岩	1.5	1.3	0.3	0.34	a類 6911
68	石 鏃	C - 7		安山岩	1.5	1.2	0.3	0.53	a類 8085
69	石 鏃	L - 16		安山岩	1.6	1.0	0.2	0.41	a類 2845
70	石 鏃	E - 7		安山岩	2.7	1.8	0.3	1.37	a類 6100
71	石 鏃	E - 8		安山岩	1.8	1.6	0.3	0.53	a類 5827
72	石 鏃	E - 7		安山岩	2.2	1.5	0.4	0.79	a類 6114
73	石 鏃	L - 16		安山岩	1.8	1.5	0.3	0.51	a類 2856
74	石 鏃	C - 6		安山岩	1.8	1.3	0.4	0.62	a類 4957
75	石 鏃	D - 7		安山岩	1.7	(1.3)	0.3	0.42	a類 2007
76	石 鏃	K - 16		安山岩	1.7	(1.3)	0.3	0.44	a類 2191
77	石 鏃	D - 6		黒耀石	1.7	1.2	0.2	0.35	13496
78	石 鏃	L - 16		安山岩	(1.6)	(1.4)	0.4	0.65	a類 2855

第13表 石器観察表(2)

番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
79	石 鏃	D - 8		安山岩	(1.5)	(1.3)	0.2	0.29	a類 12937
80	石 鏃	C - 6		チャート	(1.8)	1.4	0.7	1.50	a類 5000
81	石 鏃	E - 7		安山岩	(1.2)	(1.1)	0.3	0.26	a類 6105
82	石 鏃	C - 7		安山岩	(1.5)	0.9	0.2	0.27	a類 8038
83	石 鏃	C - 6		安山岩	1.5	1.3	0.3	0.37	a類 4962
84	石 鏃	C - 7		安山岩	2.1	1.4	0.4	0.78	a類 3465
85	石 鏃	E - 6		安山岩	(2.0)	1.5	0.4	0.79	a類 13236
86	石 鏃	C - 6	イモ穴	安山岩	2.0	(1.4)	0.3	0.69	a類
87	石 鏃	E - 7		安山岩	2.6	1.4	0.4	0.87	a類 11181
88	石 鏃	E - 8		チャート	(2.0)	1.7	0.4	1.20	a類 6902
89	石 鏃	K - 15		安山岩	2.3	(1.4)	0.3	0.72	a類 2322
90	石 鏃	D - 6		安山岩	2.2	(1.3)	0.3	0.54	a類 6713
91	石 鏃	K - 16		安山岩	2.2	1.5	0.3	0.65	a類 2186
92	石 鏃	C - 7		安山岩	1.5	1.2	0.2	0.25	a類 3036
93	石 鏃	K - 14		チャート	1.9	(1.2)	0.2	0.36	a類 10573
94	石 鏃	E - 7	イモ穴	安山岩	2.8	1.8	0.5	1.33	a類 6062
95	石 鏃	K - 14		黒耀石	2.0	1.6	0.3	0.52	b類 2507
96	石 鏃	F - 7		安山岩	1.4	1.3	0.2	0.28	b類 14692
97	石 鏃	K - 15		安山岩	1.3	1.3	0.3	0.30	b類 2376
98	石 鏃	L - 17		黒耀石	1.2	1.0	0.2	0.18	b類 12006
99	石 鏃	K - 14		安山岩	1.2	1.1	0.3	0.28	b類 10841
100	石 鏃	E - 7		安山岩	1.6	1.8	0.3	0.71	b類 6108
101	石 鏃	C - 7		安山岩	1.2	1.1	0.3	0.25	b類 9274
102	石 鏃	L - 15		安山岩	1.3	1.1	0.2	0.29	b類 10118
103	石 鏃	K - 15		安山岩	1.4	1.4	0.3	0.54	b類 10391
104	石 鏃	E - 6		安山岩	1.5	1.4	0.3	0.54	b類 5203
105	石 鏃	K - 16		チャート	1.2	1.4	0.3	0.37	b類 2185
106	石 鏃	K - 15		安山岩	1.5	(1.3)	0.2	0.32	b類 10388
107	石 鏃	D - 7		安山岩	(1.3)	(1.3)	0.2	0.29	b類 9401
108	石 鏃	E - 8		安山岩	1.3	(1.1)	0.2	0.26	b類 12219
109	石 鏃	E - 7		安山岩	(1.8)	(1.4)	0.3	0.63	b類
110	石 鏃	D - 6		安山岩	1.5	(1.3)	0.3	0.54	b類 6767
111	石 鏃	E - 6		安山岩	1.5	(1.4)	0.3	0.44	b類 5229
112	石 鏃	F - 7		安山岩	2.2	1.7	0.4	0.93	a類 8725
113	石 鏃	F - 7		安山岩	1.7	1.7	0.4	0.54	b類 8922
114	石 鏃	K - 16		黒耀石	1.3	1.4	0.3	0.41	b類 2181
115	石 鏃	E - 6		チャート	1.5	(1.7)	0.3	0.62	b類 5062
116	石 鏃	E - 6		黒耀石	(1.1)	1.1	0.2	0.24	b類
117	石 鏃	L - 14		黒耀石	(1.3)	(1.1)	0.3	0.31	b類 10996
118	石 鏃	D - 7		安山岩	(1.4)	1.5	0.3	0.67	b類 4115
119	石 鏃	G - 10	表	チャート	(1.0)	1.1	0.2	0.24	b類
	石 鏃	C - 7		安山岩	1.9	1.4	0.3	0.51	a類 4890
	石 鏃	C - 7		安山岩	2.2	(1.3)	0.3	0.72	a類 8070
	石 鏃	E - 7		黒耀石	(1.3)	1.6	0.5	0.90	a類 11143
	石 鏃	K - 16	表	黒耀石	1.8	(1.1)	0.5	0.76	a類
	石 鏃	J - 12		黒耀石	(1.3)	1.3	0.2	0.44	a類 13823
	石 鏃	D - 6	溝	安山岩	1.8	(1.3)	0.3	0.49	a類 12641
	石 鏃	K - 14		安山岩	1.3	1.2	0.5	0.57	a類 10571
	石 鏃	K - 15	住 2	黒耀石	(0.8)	1.2	0.2	0.19	類 12080
	石 鏃	表 採		黒耀石	(1.2)	2.0	0.3	0.94	b類
	石 鏃	L - 16		安山岩	(1.2)	1.4	0.4	0.58	b類 2818
	石 鏃	K - 15		黒耀石	1.4	(0.6)	0.2	0.15	b類 2399
	石 鏃	F - 7		黒耀石	(1.3)	1.9	0.3	0.91	b類 8352
	石 鏃	C - 7		安山岩	(1.3)	1.6	0.4	0.61	a類 9244
	石 鏃	F - 7		安山岩	(1.2)	(1.2)	0.2	0.24	a類 8707
	石 鏃	L - 17		安山岩	(1.6)	(1.5)	0.4	1.04	a類 11985
	石 鏃	F - 6		安山岩	(1.6)	(1.1)	0.3	0.48	a類 14383
	石 鏃	C - 8	土坑34	安山岩	(0.8)	1.6	0.3	0.41	a類 9471
	石 鏃	C - 7		安山岩	1.9	(1.1)	0.4	0.63	a類 4782
	石 鏃	E - 6		安山岩	2.5	(1.3)	0.3	1.04	a類 12990
	石 鏃	K - 16		黒耀石	(0.9)	(1.0)	0.3	0.21	a類 2197
	石 鏃	E - 6		安山岩	1.3	(1.0)	0.3	0.25	a類 12839
	石 鏃	K - 16		安山岩	2.2	(1.6)	0.5	1.35	a類 2205
	石 鏃	F - 7		安山岩	(1.8)	1.7	0.3	0.83	a類 14605
	石 鏃	表 採		黒耀石	2.0	(1.0)	0.2	0.43	a類
	石 鏃	D - 7		安山岩	(1.4)	1.5	0.4	0.48	a類 8336
	石 鏃	L - 16		安山岩	1.4	1.4	0.2	0.32	b類 2882
	石 鏃	F - 7		安山岩	1.3	1.8	0.4	0.60	b類 8462
	石 鏃	E - 6		安山岩	(1.2)	1.9	0.4	0.70	b類 11673
	石 鏃	C - 7	土坑36	安山岩	(1.0)	1.4	0.2	0.20	b類 14921
	石 鏃	K - 16		安山岩	(1.2)	1.7	0.4	0.61	b類 2190
	石 鏃	D - 7	P 66	安山岩	1.5	1.6	0.3	0.53	b類
	石 鏃	表 採		黒耀石	2.3	(1.7)	0.6	1.20	b類
	石 鏃	L - 17	住 1	黒耀石	1.2	(0.6)	0.3	0.19	b類 13705
	石 鏃	C - 7		安山岩	(1.0)	1.3	0.3	0.27	b類 9238
	石 鏃	L - 16		チャート	(1.1)	(1.2)	0.3	0.37	b類 2818
	石 鏃	L - 17	住 1	黒耀石	(0.8)	1.2	0.3	0.28	b類 14091
	石 鏃	K - 14		黒耀石	(1.5)	1.0	0.4	0.58	b類 13907

第14表 石器観察表(3)

番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
	石 鏃	K - 16		黒耀石	(1.3)	1.0	0.2	0.23	b類 1086
	石 鏃	C - 7		安山岩	(1.2)	1.0	0.2	0.25	b類 4553
	石 鏃	E - 6	表・イモ穴	安山岩	(1.3)	1.2	0.3	0.33	b類
	石 鏃	C - 7		安山岩	(0.9)	0.8	0.2	0.09	b類 9266
	石 鏃	K - 15		黒耀石	0.9	(1.0)	0.2	0.11	b類 10295
	石 鏃	F - 6		安山岩	2.4	(1.4)	0.7	1.59	b類
	石 鏃	E - 6		安山岩	1.8	(1.6)	0.3	0.92	b類 12847
	石 鏃	L - 17	住 1	安山岩	(1.9)	(1.4)	0.3	0.48	b類 14086
	石 鏃	L - 16		安山岩	(1.6)	(1.7)	0.3	0.79	b類 2728
	石 鏃	L - 17		安山岩	(1.1)	(1.3)	0.3	0.32	b類 11986
	石 鏃	E - 8		チャート	(1.1)	1.3	0.4	0.49	b類 6912
	石 鏃	D - 6		安山岩	(2.5)	(1.9)	0.7	1.95	
	石 鏃	表 探		黒耀石			0.3	0.38	
	石 鏃	K - 15	住 2	安山岩	(3.7)	2.1	0.7	4.84	12102
	石 鏃	F - 6		黒耀石	2.1	1.1	0.4	0.65	14151
	石 鏃	D - 7		安山岩	(1.8)	(1.2)	0.3	0.67	9402
	石 鏃	L - 15		安山岩	(2.2)	(1.2)	0.4	0.99	10487
	石 鏃	K - 15	住 2	安山岩	(1.6)	1.0	0.3	0.37	12177
120	石鏃未製品	C - 7		安山岩	3.4	1.6	0.5	3.21	
121	石鏃未製品	F - 7		安山岩	2.1	1.3	0.4	1.05	8531
122	大型石鏃	E - 6		頁 岩	2.6	1.9	0.7	3.23	12828
123	大型石鏃	F - 7		安山岩	2.8	1.9	1.0	4.89	8746
124	大型石鏃	E - 5		頁 岩	4.2	3.4	0.7	10.72	11871
125	大型石鏃	F - 7		頁 岩	2.0	2.5	0.6	2.76	8529
126	大型石鏃	E - 7		頁 岩	2.8	2.0	0.8	4.01	11208
127	大型石鏃	E - 6		安山岩	3.3	2.4	1.0	6.95	13016
128	大型石鏃	D - 7		頁 岩	3.1	2.2	0.9	7.07	7408
129	石 匙	D - 7		安山岩	2.8	2.6	0.6	4.00	3850
130	石 匙	K - 15		頁 岩	4.3	4.8	1.0	15.71	2383
131	石 匙	K - 14		安山岩	2.4	1.9	0.7	2.28	13912
132	石 錐	J - 15	表	安山岩	2.7	1.1	0.8	1.89	
133	石 錐	E - 6		安山岩	2.4	1.0	0.5	1.39	12813
134	石 錐	D - 6		安山岩	1.9	1.1	0.3	0.61	13542
135	石 錐	F - 7		安山岩	1.8	1.0	0.5	0.72	8672
136	石 錐	D - 6		黒耀石	2.1	1.0	0.7	1.03	
137	石 錐	表 探		安山岩	2.8	1.6	0.6	2.10	
138	石 錐	E - 6		安山岩	2.6	1.4	0.5	1.61	11657
139	石 錐	K - 14		安山岩	3.8	1.1	0.8	3.14	10763
140	石 錐	K - 16	表	安山岩	3.6	1.3	0.8	3.65	
141	石 錐	F - 7		安山岩	1.9	1.0	0.4	0.62	14631
142	石 錐	C - 7		安山岩	2.5	1.5	0.4	1.32	9315
143	石 槍	L - 15		安山岩	4.4	1.5	0.9	5.72	10132
144	石 槍	D - 7		安山岩	2.3	3.1	0.6	5.82	6539
145	ピエスエスキーユ	D - 7	P 105	安山岩	2.6	1.5	0.9	2.98	
146	石 槍	D - 6・7		安山岩	8.2	1.7	0.7	10.27	5200・4000
147	ピエスエスキーユ	K - 16		安山岩	2.8	1.5	0.7	2.92	2207
148	ピエスエスキーユ	J - 15	表	安山岩	1.9	1.3	1.1	3.15	
149	ピエスエスキーユ	L - 15		安山岩	2.1	0.9	0.8	1.50	10515
150	ピエスエスキーユ	E - 7		安山岩	2.8	1.0	0.9	1.51	
151	ピエスエスキーユ	表 探		安山岩	2.8	1.8	0.6	3.35	
152	ピエスエスキーユ	K - 16		安山岩	4.0	2.4	1.3	18.28	2249
153	ピエスエスキーユ	C - 7		安山岩	2.2	1.4	0.8	2.17	8055
154	ピエスエスキーユ	E - 6		安山岩	2.4	1.5	0.7	2.36	13023
155	ピエスエスキーユ	D - 7		安山岩	2.2	1.6	0.8	3.47	
156	ピエスエスキーユ	D - 6	溝	安山岩	2.6	1.2	0.7	2.47	5012
157	ピエスエスキーユ	H - 6		安山岩	2.7	2.1	1.1	5.52	377
158	ピエスエスキーユ	F - 6		安山岩	2.3	2.0	1.0	5.04	14494
159	ピエスエスキーユ	K - 15		安山岩	2.3	3.0	0.9	5.86	10429
160	ピエスエスキーユ	L - 16		安山岩	1.7	2.0	1.3	3.64	10011
161	ピエスエスキーユ	F - 6		安山岩	2.2	1.6	0.6	2.21	
162	ピエスエスキーユ	K - 16	表	安山岩	2.0	1.5	0.8	2.23	
163	ピエスエスキーユ	D - 6		安山岩	2.1	2.4	0.9	4.49	6849
164	ピエスエスキーユ	F - 6		安山岩	1.9	3.1	1.2	7.36	
165	ピエスエスキーユ	D - 6	P 46	安山岩	3.5	5.1	0.7	13.06	
166	ピエスエスキーユ	C - 8		安山岩	4.5	4.2	1.6	28.95	2966
167	石 剣	E - 7		頁 岩	11.0	3.2	1.8	95.88	11297
168	石 鎌	表 探		安山岩	3.5	4.7	1.6	33.03	
169	石 鎌	D - 8	表	頁 岩	5.4	8.2	1.9	108.60	
170	石 鎌	C - 5	イモ穴	頁 岩	4.4	7.2	1.4	46.28	
171	スクレイパー	F - 7		安山岩	6.7	4.2	1.6	41.83	8578
172	スクレイパー	D - 7		安山岩	2.0	2.4	0.8	4.49	
173	スクレイパー	E - 6		黒耀石	2.2	2.8	0.7	4.01	5056
174	スクレイパー	C - 7		安山岩	3.1	4.0	1.7	16.76	3078
175	磨製石鏃	L - 16		頁 岩	1.4	1.4	0.2	0.32	2882
176	磨製石鏃	表 探		頁 岩	2.2	2.1	0.2	1.24	
177	磨製石鏃	E - 7		頁 岩	(2.5)	1.4	0.3	0.81	6109

第15表 石器観察表(4)

番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
178	磨製石鏃	F - 6		頁岩	(2.8)	2.2	0.4	2.19	
179	磨製石庖丁	E - 6		頁岩	3.8	(3.5)	0.7	10.76	13025
180	磨製石庖丁	K - 14		頁岩	5.2	(4.1)	0.6	12.13	2694
181	磨製石庖丁	D - 9		頁岩	2.7	(3.8)	0.4	4.81	12569
182	扁平片刃石斧	K - 14		頁岩	10.0	4.9	2.1	216.75	1044
183	扁平片刃石斧	F - 7		頁岩	(5.8)	3.1	1.1	29.42	14620
184	のみ形石斧	D - 8		沼岩	10.3	2.9	1.5	63.40	7046
185	扁平片刃石斧	D - 6		頁岩	(7.9)	5.8	1.3	68.54	5102
186	八手形磨製石斧	C - 7・8	土坑34	頁岩	(7.9)	3.9	1.4	69.52	9701
187	扁平薄刃石斧	D - 6		安山岩	(9.0)	7.9	1.1	109.14	6687-1
188	扁平薄刃石斧	D - 6		安山岩	(7.8)	5.4	1.6	46.69	6687-2
189	打製石斧	E - 7		頁岩	10.7	4.3	1.9	120.55	1369
190	打製石斧	D - 4	近世溝	頁岩	11.8	4.1	2.1	141.01	
191	打製石斧	E - 7		頁岩	11.2	5.9	1.4	131.23	1700
192	打製石斧	E - 6		頁岩	11.9	6.6	1.6	130.80	
193	打製石斧	F - 7		頁岩	12.4	5.5	1.1	112.41	8504
194	打製石斧	D - 7	P62	頁岩	9.5	4.4	1.3	63.47	
195	打製石斧	D - 7	P105	頁岩	15.8	6.1	2.3	263.81	
196	打製石斧	D - 7	P79	頁岩	10.0	5.8	2.0	165.68	
197	打製石斧	J - 12		頁岩	11.5	4.9	1.6	117.20	13821
198	打製石斧	表探		頁岩	11.1	5.0	1.7	152.39	
199	打製石斧	D - 7	P67	頁岩	16.5	6.8	2.5	320.99	
200	打製石斧	E - 6		頁岩	19.6	6.9	2.5	355	
201	打製石斧	F - 7		頁岩	13.2	8.6	1.7	187.31	8522
202	打製石斧	表探		頁岩	10.8	7.7	3.0	241.89	
203	打製石斧	表探		頁岩	8.1	7.7	1.6	118.29	
204	打製石斧	E - 6		頁岩	11.6	5.4	1.4	67.07	7331
205	打製石斧	表探		安山岩	9.3	6.0	1.6	73.65	
206	打製石斧	表探		頁岩	9.7	6.5	2.0	120.12	擦痕
207	打製石斧	C - 7	表	頁岩	8.1	6.0	1.8	92.88	
208	打製石斧	D - 6		頁岩	6.7	5.5	1.9	87.26	11755
209	打製石斧	E - 8		頁岩	12.9	5.7	2.6	183.70	12220
210	打製石斧	D - 7		安山岩	8.5	5.1	1.2	48.98	2087
211	打製石斧	D - 7		頁岩	10.3	5.7	1.3	86.65	9395
212	打製石斧	E - 7		頁岩	7.8	5.3	1.3	59.62	11239
213	打製石斧	F - 7		頁岩	6.9	5.0	1.8	68.66	8604
214	石核	E - 6		安山岩	4.2	4.6	2.1	40.21	
215	石核	D - 7		安山岩	3.9	4.2	1.5	29.17	8276
216	石核	F - 6		安山岩	4.6	5.2	3.7	93.67	14468
217	石核	G - 8		黒耀石	3.3	3.8	1.5	19.66	637
218	礫器	L - 15		珪質頁岩	7.5	5.9	2.5	116.02	10115
219	礫器	C - 7		珪質頁岩	5.6	6.4	2.1	92.80	4813
220	礫器	E - 7		砂岩	7.5	4.6	1.2	71.93	11371
221	礫器	C - 6	表	安山岩	11.1	22.2	1.8	495	7222
222	磨石	D - 6		安山岩	4.0	3.4	2.4	43	
223	磨石	F - 7		砂岩	6.4	5.1	2.3	84	8910
224	磨石	D - 7		砂岩	3.5	6.0	4.3	107	8305
225	磨石	C - 7		安山岩	8.5	5.1	3.8	229	3084
226	磨石	C - 8		安山岩	9.8	5.5	3.7	327	2961
227	磨石	D - 8	表	砂岩	11.1	6.3	4.9	495	
228	磨石	C - 7		安山岩	8.8	5.2	5.1	262	4527
229	磨石	D - 8	表	砂岩	7.8	3.3	3.8	120	
230	磨石	C - 6		安山岩	11.0	10.1	5.2	970	4936
231	磨石	表探		安山岩	10.6	9.6	4.25	820	
232	磨石	E - 9	表	砂岩	6.0	5.5	3.1	161.87	
	磨石	C - 6		安山岩	12.1	9.1	4.2	820	4976
	磨石	L - 16		安山岩	8.1	5.4	3.2	111	2871
	磨石	L - 15		砂岩	7.5	3.1	3.1	45	10105
	磨石	L - 16		砂岩	3.5	3.5	5.4	47	2762
	磨石	D - 7	P107	砂岩	5.6	4.4	5.7	132	
	磨石	C - 7		砂岩	4.2	2.1	4.2	39	3796
	磨石	D - 7	土坑7	砂岩	5.5	3.1	3.4	44	13952
	磨石	C - 7		砂岩	3.7	1.7	3.9	22	4411
	磨石	K - 14		安山岩	6.0	4.8	4.7	166	2653
	磨石	D - 7	P75	砂岩	12.3	11.1	9.8	2050	
	磨石	D - 7		砂岩	7.3	5.3	5.4	271	2056
	磨石	H - 6		砂岩	11.1	7.4	6.3	655	685
	磨石	E - 7	表	安山岩	3.8	6.1	4.5	134	
	磨石	E - 7	表	安山岩	3.1	1.5	2.7	11	
	磨石	H - 6		安山岩	6.3	5.0	4.8	162	258
	磨石	D - 6		安山岩	5.2	4.2	1.4	38	
	磨石	D - 6		安山岩	4.3	4.4	4.4	50	
	磨石	D - 6		安山岩	3.8	2.4	0.9	7	
	磨石	E - 6		安山岩	5.7	5.8	4.0	131	5061
	磨石	F - 7		砂岩	6.5	5.7	4.8	175	8508
	磨石	B - 7	表	砂岩	4.8	6.6	3.9	141	

第16表 石器観察表(5)

番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
	磨石	F - 6		安山岩	2.6	2.0	0.6	3	14501
	磨石	F - 6		安山岩	4.9	2.7	5.6	70	14154
	磨石	L - 15		砂岩	9.7	3.6	4.8	177	10539
	磨石	L - 15		砂岩	3.7	3.2	4.7	57	10468
	磨石	E - 6		砂岩	4.1	1.9	1.6	120	
	磨石	表探		安山岩	4.9	2.2	3.3	40	
233	石錘	D - 8	表	砂岩	4.8	4.9	2.0	67.13	
234	敲石	D - 7		安山岩	5.6	5.4	4.1	155	下・側3 4388
235	敲石	K - 14		砂岩	6.9	4.0	2.9	81.55	10838
236	敲石	F - 7		砂岩	13.0	4.0	4.1	284.72	8523
237	敲石	表探		安山岩	9.3	5.6	4.8	310	上・下・側3
238	敲石	表探		砂岩	9.3	4.2	4.1	250	上・下1
239	敲石	L - 16		砂岩	8.2	4.6	2.9	144.30	12031
	敲石	D - 6		安山岩	7.4	5.4	5.1	270	3 6667
	敲石	表探		砂岩	4.9	3.2	1.8	42	上・下・片側面3
	敲石	表探		安山岩	7.1	(3.5)	1.7	59	2
	敲石	C - 5	イモ穴	安山岩	(5.7)	(4.0)	1.7	42	
	敲石	J - 11		安山岩	8.3	(6.1)	5.1	380	上・下・片側面3 892
	敲石	D - 6		凝灰岩	7.4	6.2	5.3	208	下面 3 6673
	敲石	E - 7		球岩	7.1	6.9	3.9	240	側面 3 11631
	敲石	表探		砂岩	8.3	4.8	2.6	160	上・下1
	敲石	表探		安山岩	9.6	6.0	5.5	300	突出部3か所
	敲石	C - 7	土坑36	砂岩	9.8	4.4	4.2	200	下 1
	敲石	D - 6		砂岩	(3.7)	6.4	3.5	80	下面 3 11785
	敲石	C - 6一括		砂岩	(3.9)	(5.5)	2.6	50	下面 3
	敲石	E - 7一括		砂岩	6.0	(6.8)	4.1	170	下面 3
	敲石	D - 7		安山岩	7.6	3.8	3.2	140	下面 1 6534
	敲石	E - 6		砂岩	11.8	4.7	4.2	270	下面 1 13220
	敲石	J - 4		砂岩	(5.4)	2.9	2.7	66	下面1 420
	敲石	L - 15		安山岩	5.6	(5.4)	4.9	173	下面 3
	敲石	E - 6		砂岩	(8.6)	7.4	5.7	480	下面 3 7357
	敲石	C - 6		砂岩	10.2	5.3	(3.5)	235	上・下面1 5420
	敲石	E - 6		砂岩	(7.0)	(5.0)	4.7	202	下面 2 13229
240	くぼみ石	E - 6		凝灰岩	6.2	6.7	4.9	193.93	5059
241	擦痕石器	D - 7		安山岩	9.1	7.2	1.7	143.28	5032
242	擦痕石器	D - 4	近世溝	安山岩	9.9	6.5	2.7	243	
243	擦痕石器	D - 6		安山岩	9.5	5.6	1.8	118	6793
244	擦痕石器	F - 7		砂岩	8.3	7.2	4.4	271	8377
245	擦痕石器	J - 16	表	砂岩	4.8	(11.5)	5.2	329	
246	擦痕石器	L - 16		真岩	7.9	6.5	1.7	109	2872
247	擦痕石器	J - 12		砂岩	10.7	5.6	3.4	390	13826
248	擦痕石器	D - 6		砂岩	6.9	6.2	1.7	97	5532
249	敲石	D - 7	溝	砂岩	7.2	3.8	2.6	90.15	4001
250	擦痕石器	L - 14		安山岩	8.9	7.9	4.1	262	11063
251	擦痕石器	C - 7	表	砂岩	5.1	3.3	2.2	31	
252	擦痕石器	E - 7		安山岩	9.1	7.2	2.2	148	1494
253	擦痕石器	E - 6		砂岩	5.5	8.1	2.2	124.82	12803
254	擦痕石器	C - 7		砂岩	6.4	5.8	1.4	72	3380
255	擦痕石器	F - 6		砂岩	(5.8)	5.6	1.7	82	14488
256	擦痕石器	D - 6		安山岩	7.6	4.9	1.4	55	11761
	擦痕石器	D - 6		砂岩	5.3	6.6	1.7	69.38	6649
	擦痕石器	D - 7	P 102	砂岩	5.9	9.4	2.6	191.36	
	擦痕石器	F - 7		砂岩	6.1	7.3	2.9	142.75	8637
	擦痕石器	E - 8		砂岩	5.3	4.9	2.4	91.42	12292
	擦痕石器	L - 14		砂岩	4.9	9.0	1.5	98.78	11029
	擦痕石器	D - 6		溶結凝灰岩	3.7	3.1	2.1	26.60	6800
	擦痕石器	C - 7		砂岩	7.1	4.9	2.1	94	9243
	擦痕石器	D - 7		砂岩	7.9	5.3	1.9	120	3975
	擦痕石器	C - 7		砂岩	6.7	6.0	3.9	188	7849
	擦痕石器	D - 7	P 62	砂岩	8.6	4.4	3.7	154	
	擦痕石器	D - 7	P 59	砂岩	7.9	3.4	3.5	91	
	擦痕石器	F - 7		砂岩	8.2	5.5	2.8	247	8615
	擦痕石器	D - 8		安山岩	8.0	6.1	2.2	152	6960
	擦痕石器	D - 6		砂岩	9.6	7.4	2.3	187	5513
	擦痕石器	E - 7		安山岩	5.6	2.8	2.3	48	11347
	擦痕石器	C - 7		砂岩	3.3	3.0	1.2	15	4841
	擦痕石器	D - 7		砂岩	9.5	4.3	3.3	201	4262
	擦痕石器	D - 6		安山岩	7.3	6.1	3.3	183	9459
	擦痕石器	C - 6		砂岩	8.0	4.4	3.2	118	4938
	擦痕石器	K - 15		安山岩	9.7	6.0	2.7	127	10418
	擦痕石器	K - 14		安山岩	7.8	4.4	4.1	80	2460
	擦痕石器	D - 6		砂岩	6.9	5.0	2.7	67	13548
	擦痕石器	F - 6		砂岩	5.9	5.1	2.3	116	14229
	擦痕石器	C - 7		砂岩	5.5	3.8	1.7	45	
	擦痕石器	C - 7	表	砂岩	4.8	4.3	0.9	27	
	擦痕石器	表探		砂岩	6.7	4.3	3.7	140	
	擦痕石器	E - 7		砂岩	7.3	2.8	2.3	44	6101
	擦痕石器	K - 14		砂岩	8.2	6.3	4.8	315	2627

第17表 石器観察表(6)

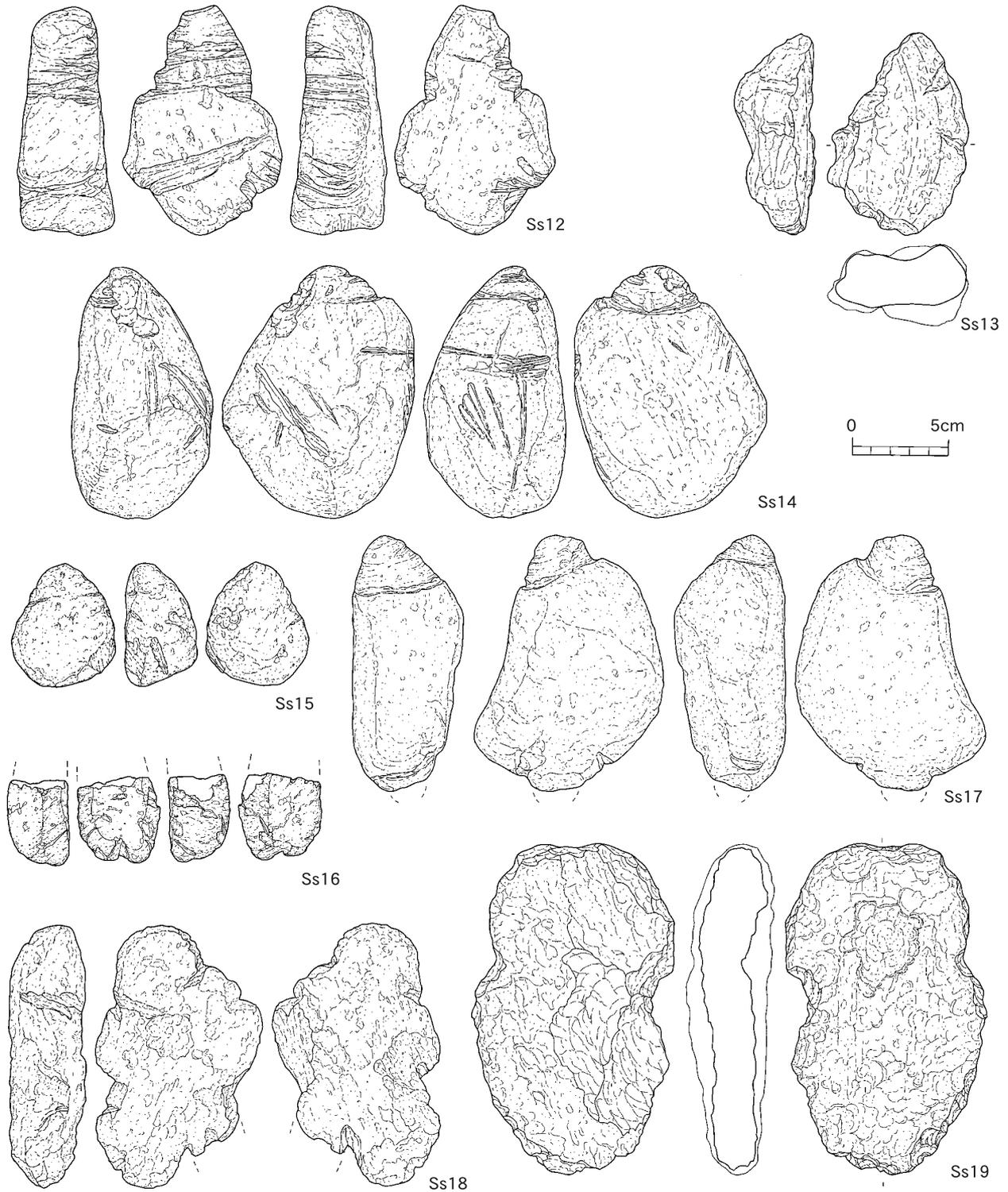
番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
	擦痕石器	D - 6		砂岩	6.9	3.4	2.5	104	13536
	擦痕石器	K - 15		安山岩	9.4	5.5	3.2	171	2338
	擦痕石器	D - 6	溝	砂岩	4.8	4.7	2.5	63	5086
	擦痕石器	C - 7		砂岩	5.2	1.9	1.5	16	8175
	擦痕石器	D - 6		砂岩	4.9	4.3	1.3	34	5122
	擦痕石器	D - 7		砂岩	8.7	6.1	2.9	180	6397
	擦痕石器	C - 7		安山岩	6.9	4.2	2.3	64	3587
	擦痕石器	D - 6		砂岩	4.3	3.1	1.5	180	5460
	擦痕石器	E - 6		砂岩	6.7	5.5	3.6	168	13264
	擦痕石器	E - 7		砂岩	8.2	6.3	2.7	146	6070
	擦痕石器	G - 8		安山岩	7.3	3.8	2.2	56	625
	擦痕石器	E - 6		砂岩	6.8	6.2	3.8	222	13208
	擦痕石器	D - 9	土坑16	砂岩	6.9	5.0	3.5	168	8423
257	砥石	D - 8		花崗岩	5.2	4.8	5.0	155.14	2891
258	石皿	D - 6		砂岩	17.8	16.7	6.2	2600	1面 5625
259	石皿	E - 7		安山岩	10.7	10.6	4.8	1055	1面 1661
260	石皿	表探		安山岩	29.2	9.6	9.7	3500	2面
261	石皿	表探		安山岩	27.5	20.7	10.8	6900	2面
	石皿	L - 15		砂岩	15.8	12.1	10.4	2200	1面 10530
	石皿	表探		砂岩	21.8	12.8	8.7	2480	
	石皿	E - 6		安山岩	12.3	8.4	12.3	1900	1面 13353
	石皿	K - 14		球岩	9.6	8.3	8.1	700	2481
	石皿	L - 14		安山岩	7.4	5.5	2.4	90	11106
	石皿	表探		安山岩	24.1	12.8	5.6	1910	
	石皿	D - 7	土坑7	砂岩	5.8	4.8	6.8	200	13953
	石皿	E - 7		安山岩	6.7	5.9	5.9	142	6084
	石皿	C - 6		安山岩	9.7	5.2	5.4	390	4983
	石皿	J - 13	表	安山岩	16.1	8.6	7.3	635	2面
	石皿	K - 16		安山岩	7.5	4.7	3.9	190	1102
	石皿	D - 6		安山岩	10.6	7.5	9.8	1060	2面 5756
	石皿	K - 17	住1	安山岩	14.3	7.1	8.4	710	5988
	石皿	C - 7	住3	安山岩	6.3	4.4	4.3	98	12365
	石皿	E - 6		安山岩	6.7	4.7	5.0	127	12987
	石皿	J - 15	住2	安山岩	5.6	3.9	0.4	10	薄い 10291
	石皿	J - 16	住2	安山岩	9.9	8.4	0.6	49	薄い 10288
	石皿	K - 16		安山岩	8.1	4.0	4.0	127	2276
	石皿	D - 7		安山岩	8.3	7.4	1.6	101	3976
	石皿	K - 15		安山岩	6.2	4.0	2.5	61	10305
	石皿	E - 7		安山岩	7.2	3.7	2.8	43	11339
	石皿	E - 6		砂岩	6.1	4.0	4.5	130	12783
	石皿	D - 7		砂岩	8.1	6.2	2.1	134	13539
	石皿	F - 7		砂岩	8.0	5.7	4.9	213	2面 8635
	石皿	F - 6		砂岩	6.3	2.4	1.4	26	14254
	石皿	C - 8	土坑34	砂岩	13.7	6.5	5.3	720	2面 9480
	石皿	D - 6		砂岩	4.3	3.1	1.6	18	
	石皿	F - 7		砂岩	3.8	4.5	2.2	46	1面 8544
	石皿	D - 7		砂岩	9.7	4.8	3.0	198	1面 4250
	石皿	L - 14		砂岩	5.8	4.3	5.3	115	11095
	石皿	K - 16		砂岩	15.9	10.5	5.3	975	2183
	石皿	D - 7		砂岩	11.6	5.0	3.8	116	3869
	石皿	D - 6	溝	砂岩	4.9	3.8	6.4	88	12652
	石皿	F - 6		砂岩	11.5	3.0	4.8	157	2面 14516
	石皿	D - 6		砂岩	8.7	3.4	5.3	122	2面 6875
	石皿	C - 8	P86	砂岩	13.3	3.8	4.7	330	2面
	石皿	土坑35	一括	砂岩	4.4	3.4	3.4	56	
	石皿	D - 5	表	安山岩	5.7	4.8	2.9	104	
	石皿	C - 6		砂岩	4.1	1.8	4.2	31	2面 5301
	石皿	J - 10・11	表	安山岩	12.6	11.6	4.3	980	
	石皿	E - 6		安山岩	17.5	7.4	5.8	720	13233
	石皿	E - 8		安山岩	5.4	4.4	4.0	127	1面 12317
	石皿	C - 7		安山岩	5.3	4.5	2.9	101	7927
	石皿	C - 7		安山岩	9.4	9.6	3.4	390	1面 7908
	石皿	F - 7		安山岩	5.0	2.2	3.7	27	8685
	石皿	F - 6		安山岩	4.4	2.4	2.1	14	
	石皿	F - 6		砂岩	3.6	1.3	3.0	9	
	石皿	F - 6		安山岩	6.5	3.5	2.7	73	1面
	石皿	F - 7		安山岩	6.1	4.0	1.9	37	8362
	石皿	E - 7		安山岩	10.1	6.0	6.4	485	1面 11238
	石皿	C - 7	住3	砂岩	5.5	2.3	2.1	29	1面 12458
	石皿	E - 7		砂岩	6.8	4.3	1.8	53	11444
	石皿	F - 7		安山岩	4.3	2.3	4.3	37	8860

長さ・幅・厚さはいずれも最大部分
単位：長さ・幅・厚さはcm，重量はg

3 軽石製品

軽石を使った製品が多く出土しているが、これらの中には加工して意図する形・状態を作ったものと、なんらかの用途に用いたため使用痕のみられるものがある。加

工したものには人形を呈したものの、生殖器を模したものの、孔を穿ったもの、穴を彫ったもの、筋状としたものの、整然とした形をしたものがある。

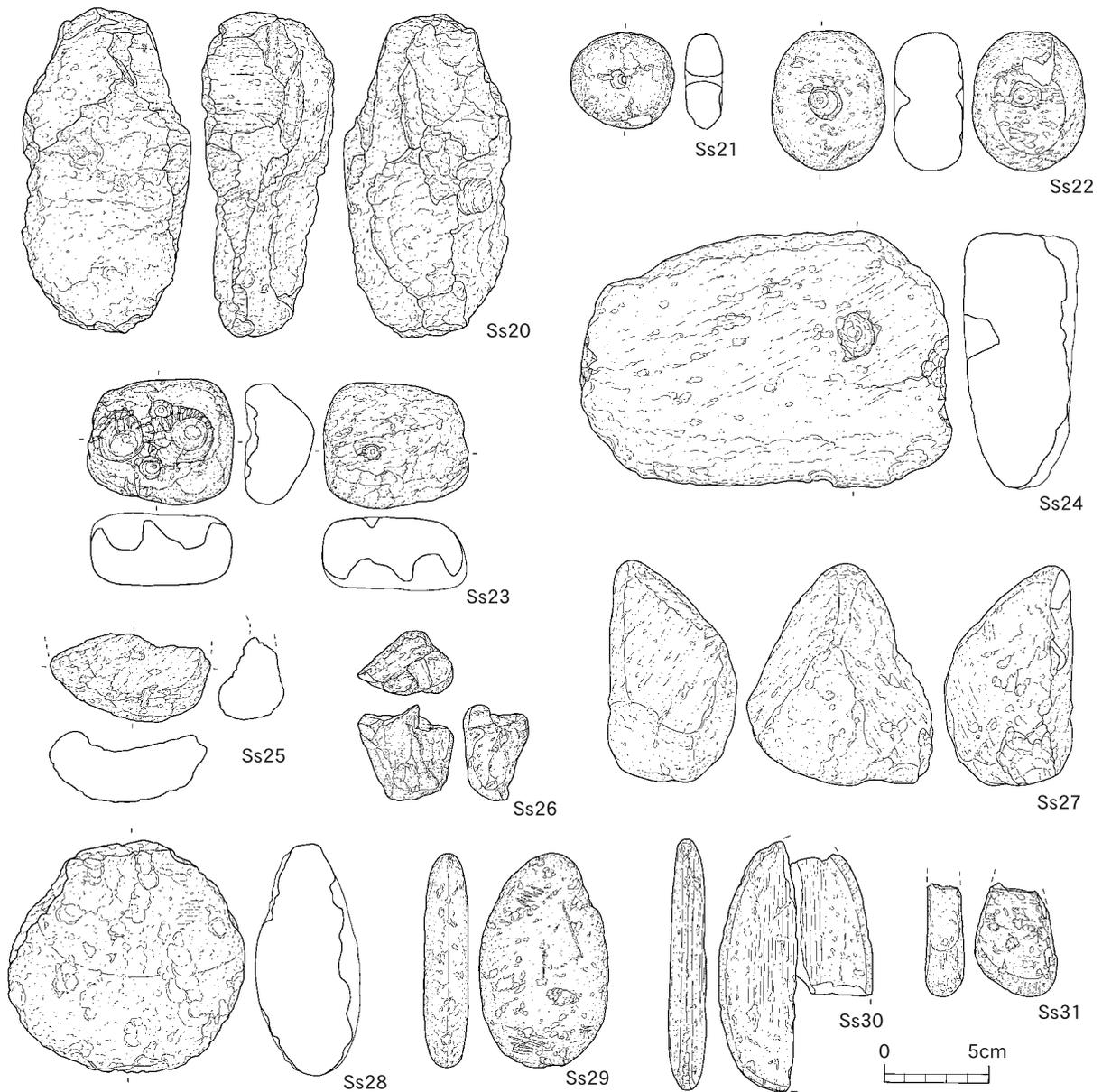


第68図 軽石製品(1)

1) 石偶 (第68図・第69図, Ss12~Ss20)

筋状に削ったり、溝を彫ったりして人形にしたものである。Ss12は2か所に複数の筋状の削り込みを施し、顔面・上肢・胴部に区分けしている。側面も削ることによって、顔面と胴部は上肢に比べて狭くなっている。筋は表面と両側面にはていねいに施されているが、裏面は簡略化されている。Ss13はくぼみ石状になった半円形様の軽石の上方と中央部付近の側面部に筋を入れて顔面・上肢・胴部に分けしている。胴部の下端部左寄りには削ることによって股部を表現している。Ss14は筋状の削

り込みによって顔面・上肢・胴部に分けている。顔面は削ることによって小さくし、上肢と胴部は筋によって分け、胴部には斜め方向の筋がみられる。Ss15は小さな石を用いて、短い筋で顔面と上肢、上肢と胴を分けている。Ss16は上方が欠けているが、下方中央部を両方から削ることにより股部を表現している。Ss17は下端が欠けているが、上下を小さく削り、その下に筋状の削り込みを施すことにより顔面を表現しているものと思われる。Ss18は柔らかい軽石に筋状凹線と削り込みを入れることによって、顔面・胴部・下肢(股部)を表現して



第69図 軽石製品(2)

いる。S s19は側面を削ることによって分胴形にこしらえ、顔面と胴部をこしらえているものと思われる。顔面の片面にはくぼみがある。S s20は側面を削ることによって上半部を小さく、下半部を大きくして、二つに区分している。顔面と胴部を分けているものと思われるが、細かい加工はしていない。

2) 有孔製品 (第69図, S s21)

直径5cmほどの扁平な軽石の中央に両面から直径4mmほどの孔を穿ったものである。

3) くぼみを有する石製品 (第69図, S s22 ~ S s25)

片面から穴を彫った軽石製品である。S s22はだ円形をした軽石の両面に浅い穴がある。一面に上面直径1.5cmほどの穴が一ヶ所、あとの一面に直径1.5cmの穴と0.5cmの穴が彫ってある。S s23も両面にある。片面の穴はあたかも目と鼻を形作っているように見える三個の穴で、直径20cmほどの横並びの穴とその下に直径10cmの穴があ

る。反対側の面には直径10cm足らずの小さい穴が1個ある。S s24は長辺17cm, 短辺12cmの隅丸形状を呈する軽石を平坦にし, その一面に直径20cmほどの穴を彫っている。S s25は石皿状に加工した製品だが, 破片のため全容は不明である。

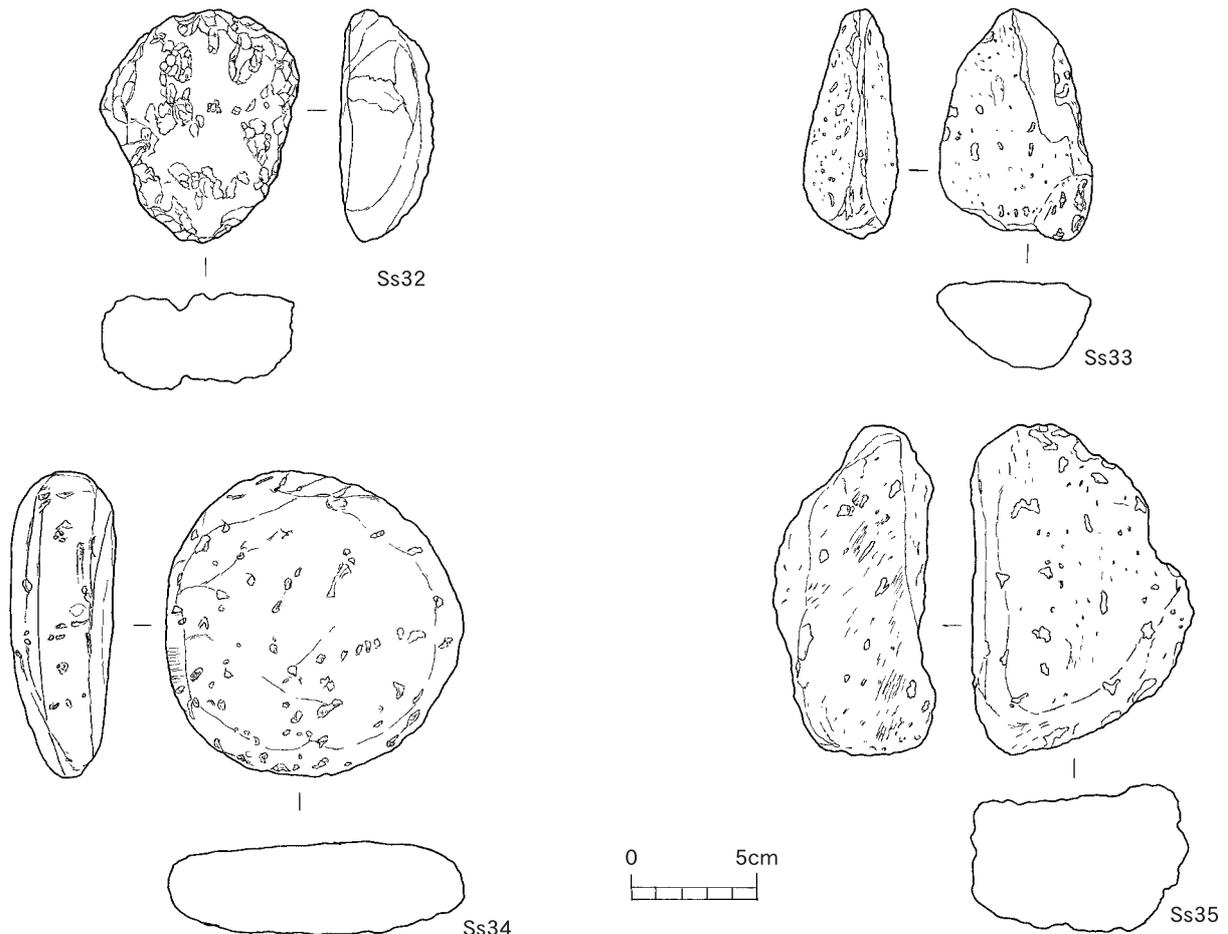
4) 形を整えた軽石製品 (第69図, S s26 ~ S s31)

軽石の周辺を加工してだ円形や円形, おにぎり状などの形に作っているが, その用途は不明である。形を整えるために周辺を打ち欠いたり, 磨いている。

5) 使用痕跡のある軽石製品 (第70図, S s32 ~ S s35)

自然の軽石のようにみえるが, 広い面が平らであったり, くぼんでいたりするものが多く出土している。ただ, 自然面なのか, へこんでいるか判断できないものも多く, この種の量を示すことはむずかしい。

いずれも片面が平になっており, この面を使用している状況がうかがえる。



第70図 軽石製品(3)

第18表 軽石製品観察表

番	器種	出土区	層	石材	長さ	幅	厚さ	重さ	備考
1	石 偶	K - 17	住 1	軽石	6.5	6.5	4.5	78.65	1353
2	筋状石製品	K - 17	住 1	軽石	12.7	9.7	5.5	124.57	1332
3	女陰形石製品	K - 17	住 1	軽石	4.1	3.8	3.1	8.64	1316
4	有穴石製品	K - 17	住 1	軽石	4.1	3.8	1.5	6.59	5972
5	円盤状石製品	K - 17	住 1	軽石	19.3	19.2	8.6	815.00	
6	くぼみ石形石製品	K - 17	住 1	軽石	13.0	11.4	3.9	136.63	1309
7	定形石製品	D - 6	住 4	軽石	10.1	10.1	5.9	94.95	
8	石皿状石製品	F - 8・9	土坑3	軽石	26.8	18.0	8.9	620.00	
9	石 偶	D - 7	土坑7	軽石	11.7	12.0	7.5	180.97	13970
10	くぼみ石形石製品	E - 6	土坑18	軽石	3.9	2.7	1.3	4.35	8401
11	方形石製品	C - 7	土坑35	軽石	7.3	4.9	1.4	14.05	14910
12	石 偶	表 採		軽石	12.1	8.4	5.0	143.36	
13	石 偶	D - 6		軽石	10.2	7.4	4.8	71.53	6804
14	石 偶	表 採		軽石	13.0	9.7	7.2	186.57	
15	石 偶	E - 8		軽石	6.5	5.4	3.6	32.12	12226
16	石 偶	D - 6		軽石	4.8	4.5	4.5	16.21	5169
17	石 偶	C - 8		軽石	13.5	9.7	9.7	112.93	9361
18	石 偶	F - 7		軽石	14.2	8.6	4.1	88.99	8610
19	石 偶	表 採		軽石	17.3	10.6	4.4	198.12	
20	石 偶	E - 6		軽石	15.7	8.2	6.5	142.39	13234
21	有孔石製品	表 採		軽石	5.0	4.4	1.8	9.76	
22	有穴石製品	E - 6		軽石	6.9	5.3	3.4	38.83	
23	有穴石製品	表 採		軽石	7.1	6.6	3.5	33.46	
24	有穴石製品	表 採		軽石	17.9	12.4	5.8	440.00	
25	くぼみ石形石製品	F - 7		軽石	7.3	4.7	3.8	21.98	8664
26	定形石製品	E - 6		軽石	4.7	4.5	2.9	17.95	13337
27	定形石製品	E - 7		軽石	10.5	9.1	6.1	116.10	6041
28	石皿石製品	E - 7		軽石	11.0	11.0	5.0	127.19	11441
29	定形石製品	表 採		軽石	10.4	6.2	2.1	41.27	
30	定形石製品	表 採		軽石	12.1	7.4	1.7	32.48	
31	定形石製品	L - 16		軽石	5.6	3.8	1.9	10.68	2797
32	使用石製品	C - 7	住 3	軽石	9.4	7.9	3.8	91.65	12434
33	使用石製品	K - 14		軽石	9.3	6.0	3.8	44.19	10769
34	使用石製品	K - 14		軽石	12.4	11.8	4.0	128.66	10799
35	使用石製品	J - 13		軽石	13.2	8.8	6.0	174.54	13848

単位：長さ・幅・厚さはcm，重量はg

第5章 古墳時代

甕形土器・壺形土器・小型壺形土器・台付鉢形土器などが出土し、採集されている。

甕形土器は、くの字状に屈曲する口縁部と脚台の付く器形である。屈曲部の内面は稜がはっきりしている。口唇部は細かく丸みをおびるものと、矩形をなすものがある。外面・内面ともヘラナデ仕上げのものが多いが、455の外面と、452の内面がハケナデ仕上げであり、内面は横方向だけであるが、外面には横方向と縦方向とがある。脚台は端部が丸みあるいはゆるやかな矩形の浅いものと、矩形を呈した深いものがある。深いものは内外ともヘラナデで、横方向が多いが、457の外面は縦方向である。

壺形土器の底は、小さい平底のものと、やや小さい安定した平底のものがある。461の外面は縦方向のハケナデで、他はヘラナデである。小型壺形土器は口縁部を欠いているがやや長胴形を呈し、安定した丸底である。外面がていねいなヘラ縦ナデ、内面がヘラ横ナデである。

台付鉢形土器は直径13cmの台のみで、口唇部はへこんであり、接合部は分厚くなっている。

第6章 古代・中世

土師器・内黒土師器・赤色土師器・須恵器・陶磁器・瓦質土器・土製品が出土、採集されている。

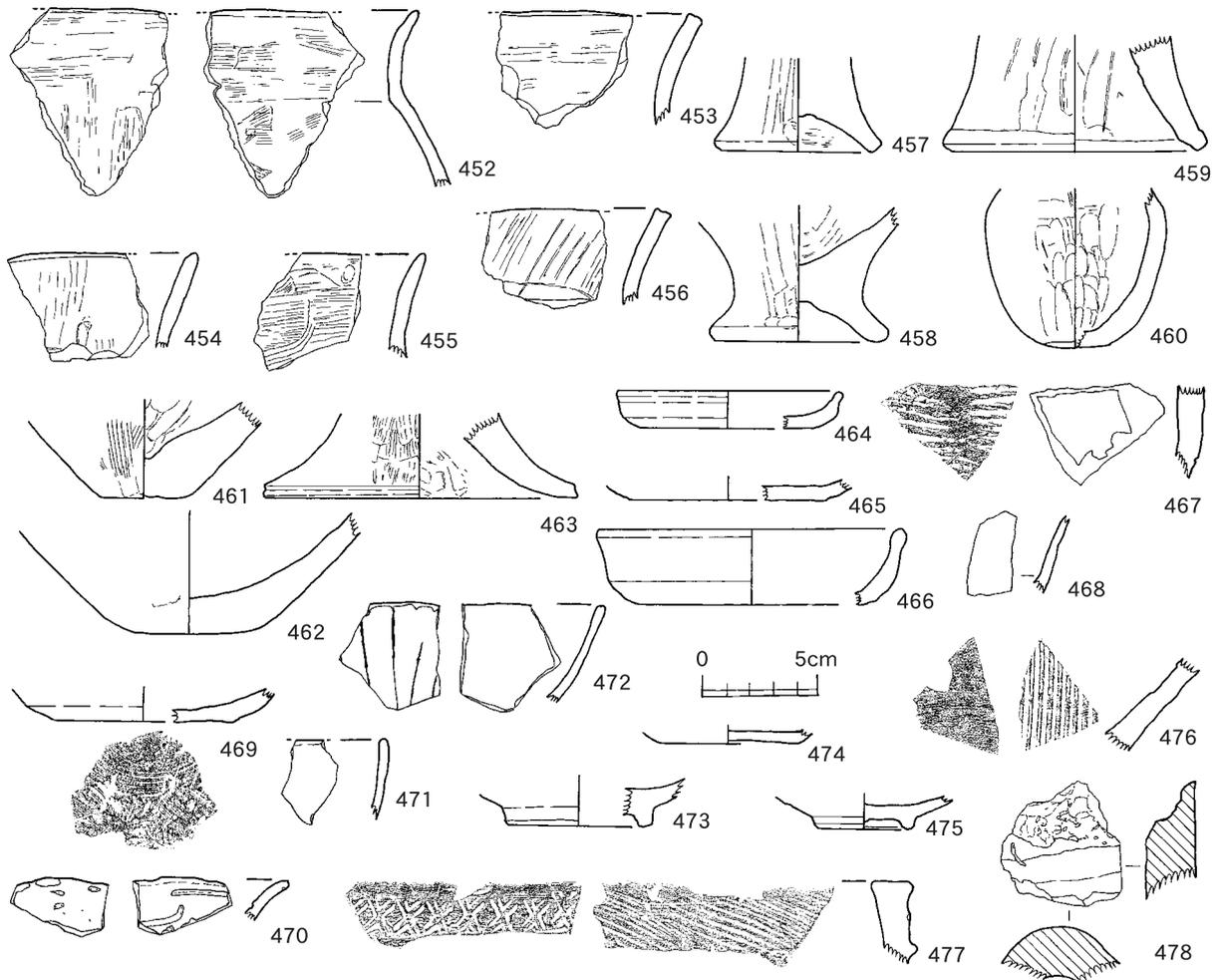
464～466・469は土師器で、ヘラ切り離し底と、糸切り離し底（469）のものがある。464は小皿、465・466・469は坏で、466は玉縁状口縁となる。

467と468は須恵器で、468は軟質の塊口縁部近く、467は外面が長格子タタキ、内面が同心円当て具痕をナデ消した壺である。他に甕もある。

474は青灰色釉のかかった口禿口縁の白磁皿、475は外面の下部から高台にかけてと、内底部が広く露胎となる白磁坏である。471～473が青磁碗、470が青磁稜花皿である。碗には無文のものと線描き蓮弁文のものがある。稜花皿は内面に線描きがみられる。他に鎬蓮弁文碗や壺肩部などがある。

476は内面に幅広のかき目がみられる陶器挿鉢、477は口縁直径が46cmほどの瓦質火舎で、外面には口縁近くに三角突帯に挟まれた連続菱形文がある。

478はふいごの羽口で、端部は熱のため変形している。



第71図 古墳時代～中世の土器・土製品

第19表 古墳時代～中世の土器・土製品観察表

遺物番号	器種	出土区	層	調整		色調		胎土	焼成	備考
				外面	内面	外面	内面			
452	甕土器	K-14		ヘラ横ナデ・ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	角閃石・白色石・灰色石などの小粒	良	スス付着
453	甕土器	L-14		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤っぽい淡茶褐色	灰色っぽい黄褐色	角閃石多い・石英・赤色石	良	
454	甕土器	C-7		ハケ縦ナデ	ヘラ縦ナデ	茶褐色	明淡茶褐色	角閃石・石英の多い細石	良	スス付着
455	甕土器	D-6		ヘラ横ナデ	深いヘラ横ナデ	明茶褐色	明茶褐色	角閃石・石英の多い細石	良	スス付着
456	甕土器	L-14 K-14		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	角閃石・茶色石・雲母	良	
457	甕土器	E-7		ヘラ縦ナデ	ヘラナデ	灰がかかった茶褐色	灰がかかった茶褐色	白色石・石英など5～7mm大の礫も多い粗い土	普	
458	甕土器	C-6		ヘラナデ	ヘラ横ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	石英・白色石などの4mm大の石	普	
459	甕土器	F-6		ヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかかった淡茶褐色	黄みがかかった淡茶褐色	石英・茶色石などの細石	普	
460	小型土器	E-6		丁寧なヘラ縦ナデ	ヘラ横ナデ	黄みがかかった明茶褐色	黄みがかかった明茶褐色	石英・茶色石・白色石などの細石	良	
461	壺土器	表探		ハケ縦ナデの後ヘラナデ	ヘラナデ	明茶褐色(黒斑有り)	黄みがかかった明茶褐色	白色石・石英などの小石	良	
462	壺土器	表探		ヘラナデ	ヘラ横ナデ	茶褐色・淡黒茶褐色	黄みがかかった淡茶褐色	石英・茶色石・白色石などの小石が多い土	普	
463	鉢土器	D-7		縦ヘラミガキ	ヘラ横ナデ	黄みがかかった茶褐色	黄みがかかった茶褐色	白色石・茶色石・灰色石の小石を含む	良	
464	皿	J-14	表	ナデ	ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	精製土	普	ヘラ切り
465	坏	表探		ナデ	ナデ	乳茶褐色	乳茶褐色	茶色石の微石・白色石・石英	良	ヘラ切り
466	須恵器	表探		長格子タタキ	同心円当て具の後ヘラ横ナデ	赤みがかかった茶褐色	灰がかかった茶褐色	白色石などの細石を含む土	良	
467	坏	H-6-7	表	ナデ	ナデ	淡茶褐色	淡茶褐色	精製土・白色石などの微石	普	
468	須恵器	表探		ナデ	ナデ	灰褐色	灰褐色	石英・白色石などの微石	普	軟質の焼き
469	坏	H-4		ナデ	丁寧なナデ	淡茶褐色	明茶褐色	茶色石・石英などの微石	良	糸切り
470	青磁皿	D-6				青っぽい釉		磁胎	良	
471	青磁碗	H-4				濃い緑色の釉		磁胎	良	
472	青磁碗	表探				明るい緑色釉		磁胎	良	線描き蓮弁文
473	白磁皿	表探				青灰色釉		磁胎	良	口禿
474	青磁碗	D-6	表			濃緑色釉		磁胎	良	
475	白磁坏	表探				あせた白い釉		磁胎	普	
476	陶器鉢	表探		ヘラ横ナデ	ヘラ横ナデ	赤茶褐色	赤茶褐色	細かい土	良	
477	瓦火舎	D-6	溝	菱形連続文	右下がり深いハケナデ	黒褐色	黒褐色	石英・白色石などの細石	普	
478	ふいご口	E-5				淡い灰褐色	黄みのある黄茶褐色	白色石・石英など	普	

V 放射性炭素年代測定

(AMS測定)

(株)加速器分析研究所

(1) 遺跡の位置

魚見ヶ原遺跡は、鹿児島県鹿児島市魚見町103番の1 (北緯31°32'10", 東経130°31'40") に位置する。

(2) 遺跡の立地

魚見ヶ原遺跡は、標高約60mのシラス台地上に立地する。弥生時代前期前半から中期前半にかけての集落遺跡である。

(3) 測定の意義

南九州の弥生土器、特に前期弥生土器の編年は、时期的な細分が確立していない。また、検出された3軒の住居跡には2種の土器が共伴している。したがって、放射性炭素年代測定を実施し、詳細な年代を把握することは、これらの遺物・遺構の年代を明らかにする上で重要である。

(4) 測定対象試料

測定試料は、2号住居跡から出土した木炭 (IAAA・60659)、3号住居跡から出土した木炭 (IAAA・60660)、4号住居跡から出土した木炭 (IAAA・60661)、7号土坑から出土した木炭 (IAAA・60662) 各1点、合計4点である。測定試料はすべて遺構の底面近くから出土したものである。試料は採取された後、乾燥させ、シャーレに入れて保管された。

(5) 化学処理工程

- 1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- 2) AAA (Acid Alkali Acid) 処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001~1Nの水酸化ナトリウム水溶液 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸 (80°C) を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。その後、90°Cで乾燥する。
- 3) 試料を酸化銅1gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500°Cで30分、850°Cで2時間加熱する。
- 4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利

用し、真空ラインで二酸化炭素 (CO₂) を精製する。

5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出 (還元) し、グラファイトを作製する。

6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

(6) 測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置 (NEC Pelletron 9SDH-2) を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局 (NIST) から提供されたシュウ酸 (HOx) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により¹³C/¹²Cの測定も同時に行う。

(7) 算出方法

1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

2) BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

3) 付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、²検定を行い測定値が1つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

4) ¹³Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定される¹³Cの値を用いることもある。

¹³C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表した。

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_\text{S} - ^{14}\text{A}_\text{R}) / ^{14}\text{A}_\text{R}] \times 1000 \quad (1)$$

$$^{13}\text{C} = [(^{13}\text{A}_\text{S} - ^{13}\text{A}_\text{PDB}) / ^{13}\text{A}_\text{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、

¹⁴A_S: 試料炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C) または (¹⁴C/¹³C)

¹⁴A_R: 標準現代炭素の¹⁴C濃度: (¹⁴C/¹²C) または (¹⁴C/¹³C)

^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{A}_S = ^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定し、標準試料の測定値との比較から算出した ^{13}C を用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、 ^{14}C は、試料炭素が $^{13}\text{C} = -25 \text{ ‰}$ であったときの ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{A}_N$) に換算した上で計算した値である。(1)式の ^{14}C 濃度を、 ^{13}C の測定値をもとに次式のように換算する。

$^{14}\text{A}_N = ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C}/1000))$ ($^{14}\text{A}_S$ として $^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$ を使用するとき)

または

$= ^{14}\text{A}_S \times (0.975 / (1 + ^{13}\text{C}/1000))$ ($^{14}\text{A}_S$ として $^{14}\text{C}/^{13}\text{C}$ を使用するとき)

$$^{14}\text{C} = [(^{14}\text{A}_N - ^{14}\text{A}_R) / ^{14}\text{A}_R] \times 1000 \text{ (‰)}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしない ^{14}C に相当するBP年代値が比較的良好でその貝と同一時代のもと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 ^{14}C との関係は次のようになる。

$$^{14}\text{C} = (\text{pMC} / 100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = ^{14}\text{C} / 10 + 100 \text{ (‰)}$$

国際的な取り決めにより、この ^{14}C あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age; yrBP) が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln[(^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln(\text{pMC}/100)$$

5) ^{14}C 年代値と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

(8) 測定結果

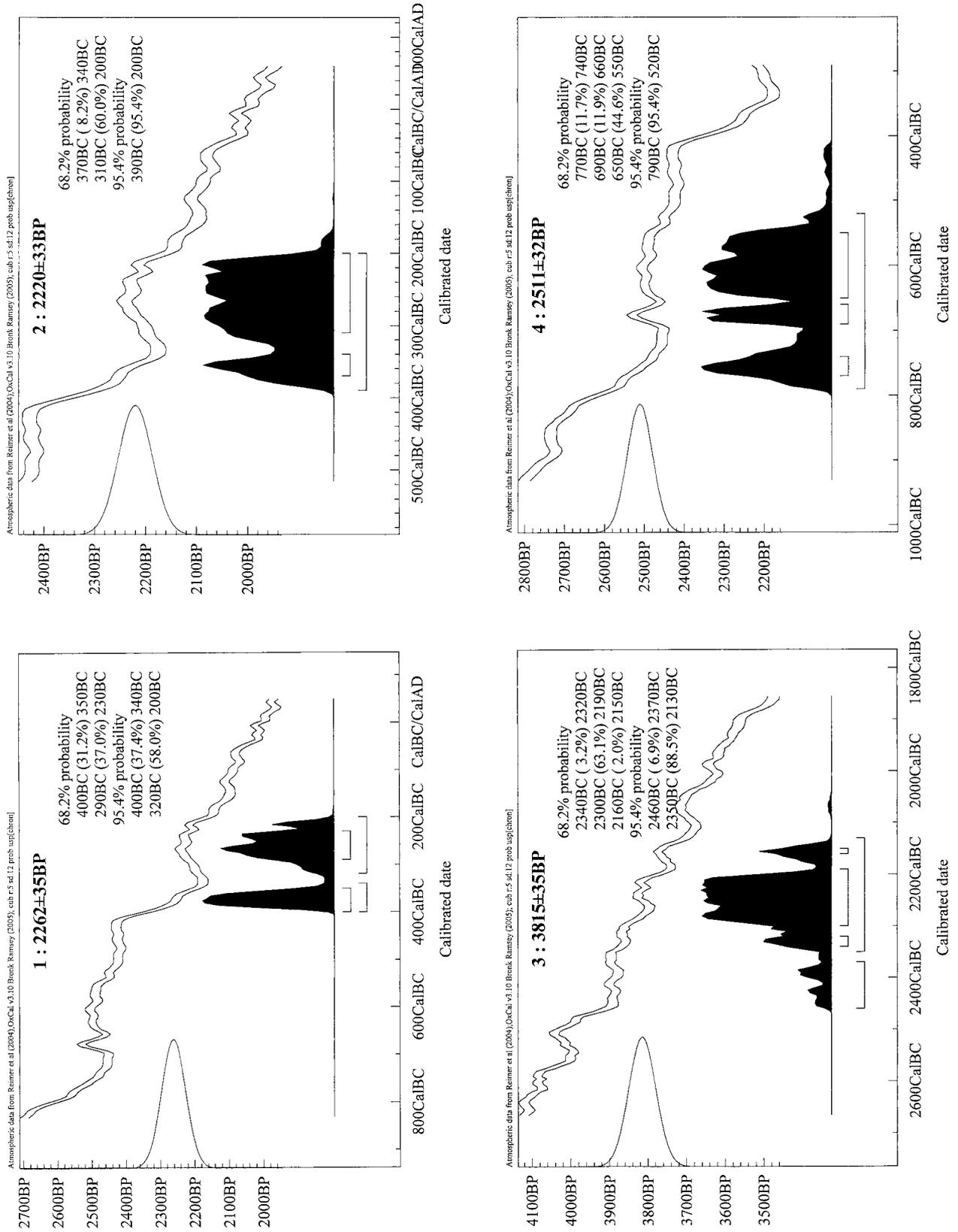
測定の結果、2号住居跡から出土した木炭 (IAAA-60659) が $2260 \pm 40 \text{ yrBP}$ 、3号住居跡から出土した木炭 (IAAA-60660) が $2220 \pm 30 \text{ yrBP}$ 、4号住居跡から出土した木炭 (IAAA-60661) が $3820 \pm 40 \text{ yrBP}$ 、7号土坑から出土した木炭 (IAAA-60662) が $2510 \pm 30 \text{ yrBP}$ の年代値を示した。2号住居跡と3号住居跡はほぼ同時

期であり、弥生時代早期に相当する年代である。測定された試料は木炭であり、試料の由来となった樹木等の年齢を踏まえれば、遺構の年代を若干遡る可能性を考慮すべきである。7号土坑は、それらよりも古く、縄文時代晩期中葉に相当する年代である。4号住居跡は、共伴遺物等から判断される年代を大きく遡り、縄文時代中期に相当する測定年代であることから、住居跡とは異なる時期の試料が混入した可能性がある。

参考文献

Stuiver, M and Polash, H.A (1977) Discussion: Reporting of ^{14}C data. *Radiocarbon*, 19:355-363

【参考値：暦年補正 Radiocarbon determination】



第72図 測定試料の暦年較正確率密度分布図

VI ま と め

第1章 弥生時代前期～中期前半のムラ

県内におけるこの時期の遺跡は多くなく、遺構の発見された遺跡はさらに少ない。これまでに竪穴住居跡が検出されたのは鹿児島市桜ヶ丘団地遺跡・南さつま市桜谷遺跡・日置市六ッ坪遺跡・同市ノ原遺跡だけで、ほかに鹿児島市北麓遺跡・川辺町寺山遺跡・日置市入来遺跡で台地を巡る溝状遺構が、日置市白寿遺跡・いちき串木野市ノ原遺跡で壺棺墓、南さつま市高橋貝塚でごみ捨て場が発見されている。

当遺跡のムラは、建物建築予定地のみ調査で全体が調査されたわけではないが、竪穴住居跡4軒・土坑42基以上とともに、焼土跡や台地下へおりる谷を利用した道などから成っている。

竪穴住居跡の平面形は円形3軒、方形1軒で、柱穴ははっきりしない。1号住居跡・2号住居跡は中央の窪みのまわりに2本の小穴があるいわゆる松菊里タイプの竪穴住居跡と呼ばれるもので、これと同じようなものは六ッ坪遺跡でも発見されている。桜ヶ丘団地遺跡・市ノ原遺跡の住居跡も平面形は円形で、中央に炉がみられる。

竪穴住居跡はいずれも中期のものであるが、その形態が大きく異なることから、その時期を決定することがひじょうに難しい。これらが同じ時期に併行していたものか、ふたつの時期に分かれるものかは南九州における当時期の住居形態を分析するうえにも重要であり、今後の大きな課題である。

土坑は平面形が長方形・方形・だ円形・円形などを呈し、平面積が4㎡以上ある大型のもの、1～2.5㎡ほどの中型のもの、1㎡以下の小型のものに分かれる。これらの遺構がどのような構成で成り立っていたのか今回は整理できなかったが、大きくは前期のもの、中期前半のもの、と大別できることがあとに記す土器の分類から分かる。しかし、前期のものは土器の細分化ができないために、これをこまかく分析することは不可能である。

5基みつかった焼土跡の周辺には多量の炭化ドングリなどが出土している。竪穴住居跡や土坑との関連は不明であるが、住居内に屋内炉がないことから屋外炉の可能性もあるし、多くの木の葉の出土は、こうした木の葉のアク抜き場の可能性も捨て切れない。炭化ドングリの種類を分析することはできなかったが、同じ頃の住居跡が見つかった市ノ原遺跡でも住居内で炭化ドングリが多く出土している。屋内と屋外の違いはあるが、ともにドングリが食用として使われていたらしいことを示している。なお、炭化物の中にはドングリとともにモモも含まれている。

土坑の中には供献用と思われる小型壺形土器の出土し

たものがあることから墓の可能性のあるものもあり、今後これらの遺構を分析し、生活空間と墓地空間などを探っていきたい。

第2章 弥生土器

県内では近年、弥生時代早期から中期前半にかけての土器が日置市市ノ原遺跡、鹿屋市中尾遺跡など各地で出土しているが、それらの細分化はまだされておらず、現在では大ざっぱに夜臼式土器・高橋式土器・入来式(入来式)土器・入来式(北麓式)土器と呼ばれている。

今回出土しているのは、このなかの高橋式・北麓式土器である。

夜臼式土器の出土量はほとんどなく、こうしたあり方は高橋式土器に比べて夜臼式土器の出土が少ない高橋貝塚の出土状況に類似しており、早期から前期における遺跡の出現状況、つまり集落規模の拡充の様子を物語っているように思える。

高橋式土器は多様であるが、高橋貝塚で河口貞徳氏が高橋式土器と名付けた如意状口縁はほとんどなく、多くは高橋式土器と名付けた突帯文土器である。口縁部の端部には突帯が貼付けられるが、これには小さい突帯、突帯の上を押さえて窪みとするもの、断面が二等辺三角形となる高い突帯、丸みをおびた幅広の突帯などがある。突帯の形状は扁平なものは少なく、ほとんど三角形、あるいは矩形であり、その突帯が口縁端からやや下がって貼付けられるものと、端に貼付けられるものがある。これらは一般的にやや下がって貼付けられているものが、端部に貼付けられるものより古いとされている。さらに器形をみると、口縁が内反するものと、外へ開くものがあり、これらは内反するものが古いとされている。こうした違いからすれば、当遺跡の土器は大きく4時期に分けられるはずであるが、これらが時期差なのか、あるいは同時期における形態差なのか等は今後、市ノ原遺跡などの整理が進めばわかっていくかもしれない。

いっぽう、壺形土器については変化がなかなか見出しにくい。肩部の文様を見ると下関周辺で見出せる二枚貝復縁を用いた重弧文の出土や、ヘラ沈線の重弧文、鋸歯文など南九州では出土例の少ないものもあり、他地域との交易がうかがえる。研磨された鉢形土器もこれらと同じようなものであろう。中期の土器には茶色石が含まれることが多いことから、胎土中に茶色石を含む壺形土器については、中期のものである可能性が高い。

甕形土器・壺形土器以外の器種がほとんど出土しないのは、南九州各地の遺跡では一般にみられることであり、当遺跡も例外ではない。鉢形土器・台付鉢形土器・高坏

形土器・蓋形土器などが少量出ている。各種の甕形土器にどのような壺形土器・鉢形土器・高坏形土器などが共存するののかについてもまた今後検討していきたい。

さらに、次の北麓式土器との間に現在の編年案では入来式土器があるが、ここではこれが抜けている。その間にいくつ位の型式があるのかも検討せねばならないし、高橋貝塚や六ツ坪遺跡・市ノ原遺跡などで出土している高橋式土器がほとんど含まれていないのも、時期的な差なのか、地域差なのかなどの問題も今後の課題である。

第3章 魚見ヶ原遺跡の生業と技術

多種多量の石器は2時期における生業と技術を物語っている。これらを狩猟・戦闘・漁撈具（鏃・槍・剣・石錘）、農耕・採集具（打製石斧・石庖丁・石鎌・石匙・スクレイパー・横刃石器）、製粉加工具（敲石・凹み石・磨石・石皿）、木器加工具（磨製石斧・礫器）、繊維関係加工具（石錐・擦痕石器）、石器や鉄器などの加工具（石錐・砥石・敲石）、調理具（石匙・スクレイパー・ピエスエスキュー・礫器）などに分けることができる。これらを完形品・破片等も含めて数量的に割合を出すと第73

狩猟・漁撈具 149点(27.6%)	農耕・採集具 114点(21.2%)	製粉具 131点(24.3%)	木器加工具 24点	繊維加工具 85点(15.8%)	調理具 25点
-----------------------	-----------------------	--------------------	--------------	---------------------	------------

(総数:539点)

第73図 弥生時代の石器分類表

図のようになる。¹⁾これを同時期のものと断定することは無理かもしれないが、狩猟・戦闘具が28%と最も多く、次いで製粉加工具が24%・農耕・採集具が21%と続く。この結果から考えると、当遺跡では稲作農耕がまだ発達しておらず、縄文時代的生業の狩猟・採集生活をしていたらしいことがうかがえる。特に未製品の多く出ている石鎌は、西北九州産のサヌカイトを多く持ち込んで、ここで加工していることが多量のチップの出土からもうかがえる。石鎌の形態は縄文時代以来の無茎鎌で、稲作農耕と同時に持ち込まれたとされる有茎鎌はない。小型鎌も目立つ。製粉加工具も多いが、石皿は小型のものが多く、使い込んで深く窪んだものはない。敲石には棒状のものも目立つ。炭化した木の実（ドングリやモモなど）が広い範囲に数多く散在しているのは、採集生活に依存していた状況を示している。石庖丁は幅の狭いものが目立ち、孔を穿っている。石錐のなかに丸くまわした痕跡がみられるものがあるのは、対象物が石である可能性が考えられるが、いずれも打製のもので、磨製品はない。打製石斧が破損品も含めて81点もあるのは、水田農耕に比べて陸耕が盛んであった可能性を示しており、石庖丁の少なさと符号する。

特殊な石器として、自然円礫などの一部を利用した細かい筋状擦痕のあるものがある。円礫を用いたものが多

いが、角礫や、打製石斧・石皿などの欠損品を再使用したものもある。角が丸みを帯びるか、鈍いものを使用し、刃に対して直角に筋がみえることから、柔らかいものを対象として、ナメたような用途がうかがえる。これまで出土例がほとんどなく、南さつま市上水流遺跡で1点出土しているのみだが、今後類例を探し、その用途を明らかにしたい。ここでは樹皮布などを作る際に、それをナメすのではないかと想定し、植物繊維関係加工具としてある。

筋砥が一点出土している。玉砥の可能性も考えられるが、これに関する玉類、あるいは緑泥片岩などの原石等の出土はない。

第4章 軽石製品の語るもの

広い範囲にわたって包含層、あるいは遺構内から多くの軽石が出土している。この中には人為的な加工、あるいは使用痕跡のみられるものも多くみられる。孔を穿ったもの、筋を入れたもの、窪みにしたものなど多種である。これが実用なのか祭祀の用途なのか判断できないものも多いが、形態的に似たものが複数あるものはその形を意識して作ったものと考えてよからう。

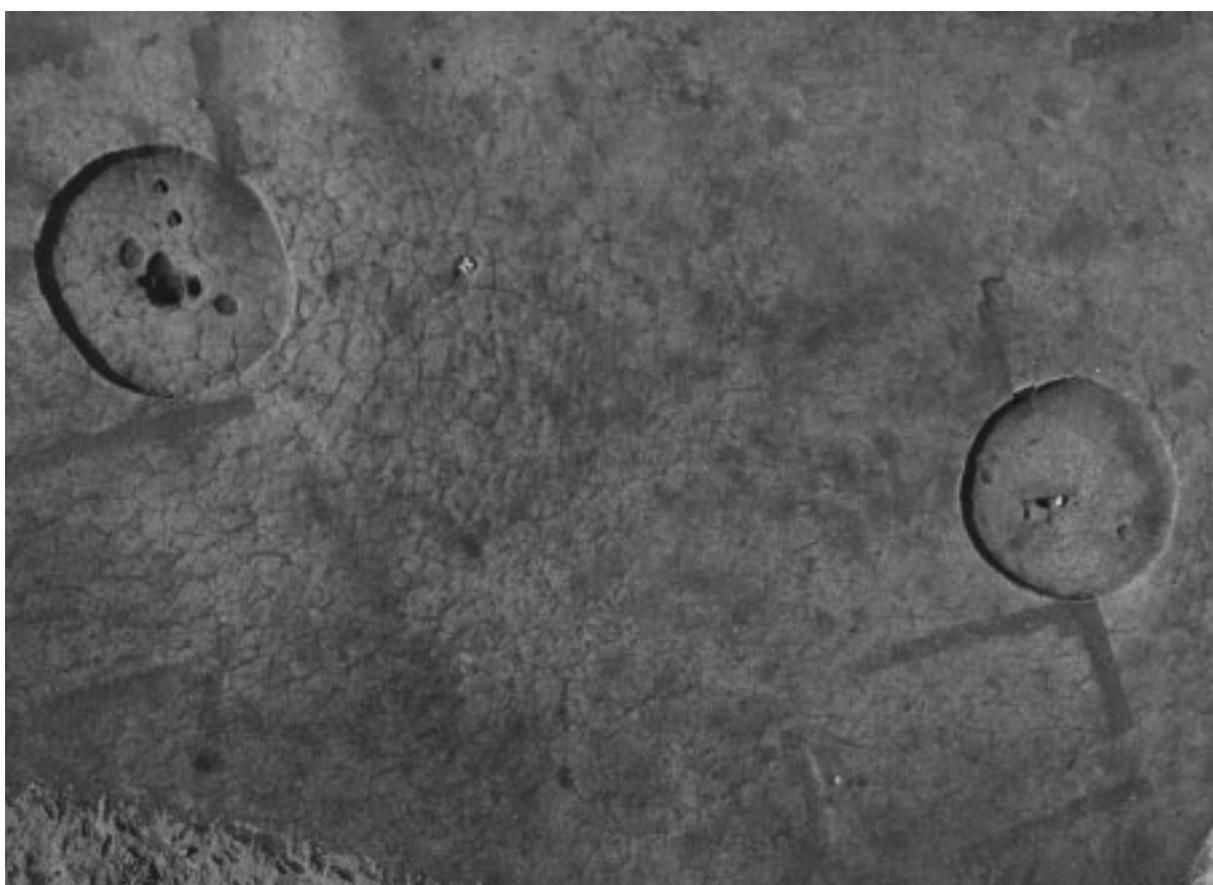
その中には顔面と四肢などを形作った石偶のような豊作祈願用と思われる祭祀的製品があり、これらは干迫遺跡や柘原貝塚など縄文時代後期の遺跡や、縄文時代晩期の上加世田遺跡、弥生時代中期の入来遺跡・山ノ口遺跡などのものと形態的に類似している。特に山ノ口遺跡の石偶とよく似たS s20は、顔面が写実的でないことからその先駆的形態を示しているのかもしれない。

いっぽう、片面が弧状に窪んでいる軽石は、弥生・古墳時代の遺跡で良くみられるもので、土器の表面調整具ではないかともいわれているが、当遺跡でも多数出土しており検討すべきものである。使用頻度が少なければ、痕跡がはっきりしないことから、数量的にはさらに増える可能性がある。

シラス台地といえども軽石はそこら一帯に露出しているものではなく、当遺跡のように多く出てくる遺跡については使用痕跡がはっきりしないものについても意図的に持ち込んでいるであろうことからその用途を考慮する必要がある。といっても他地域に比べると手に入れやすい軽石を実用に用いたのか、祭祀に用いたのか、その系譜を調べるとともに、継続性などを比較し、体系的な整理をする必要がある。

註)

1、重複を避けるため、ここでは石匙・スクレイパーは採集具に、石錐は繊維関係加工具に、敲石は製粉加工具に、礫器は木器加工具に限定した。そのため、この割合は若干変わる可能性がある。



遠景（西上空から：上），1号住居跡と2号住居跡（下）

図版 2

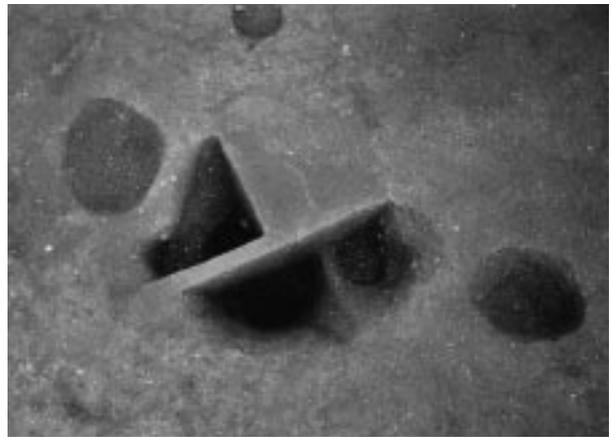


遠景（南上空から）、道跡（南から）

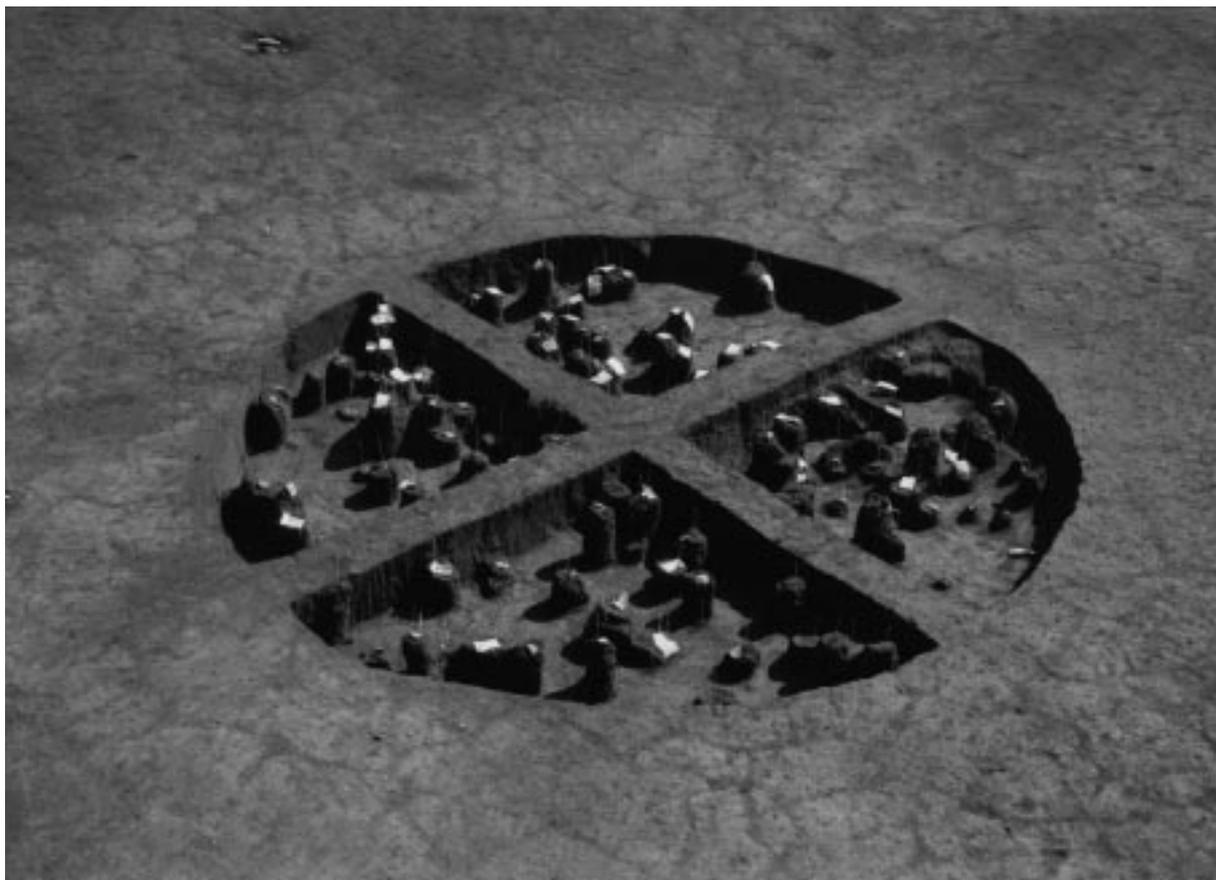


1号住居跡

図版 4



2号住居跡
全景（上），炉跡と柱穴（下）



2号住居跡（上），現地説明会（下）

图版 6



3号住居跡
上：完掘狀況
下右：土器出土狀況
下左：土器出土狀況

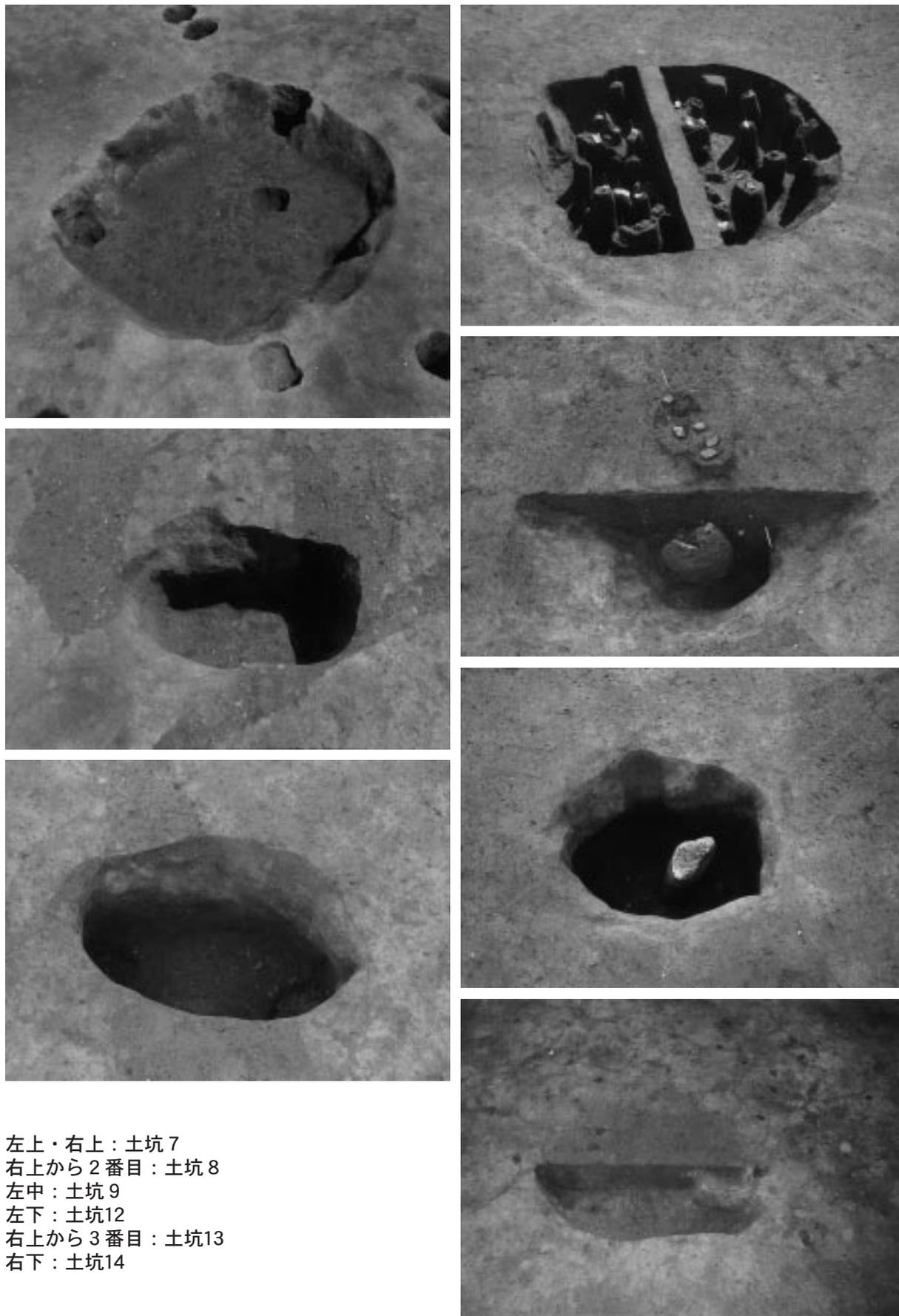


4号住居跡（上：南から，下左：北から，下右：壺出土状況）

图版 8

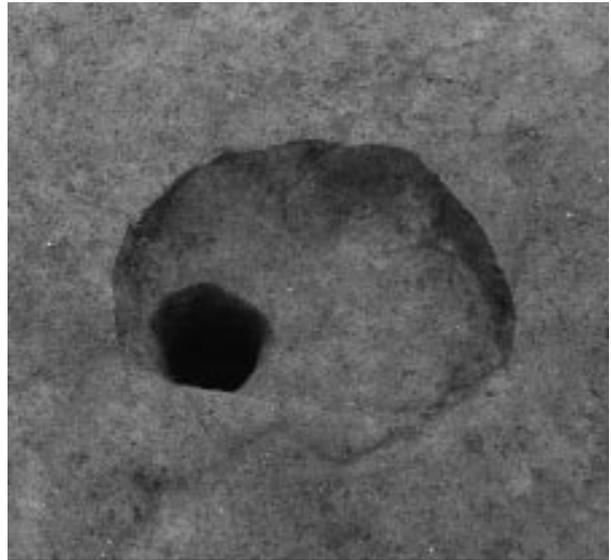
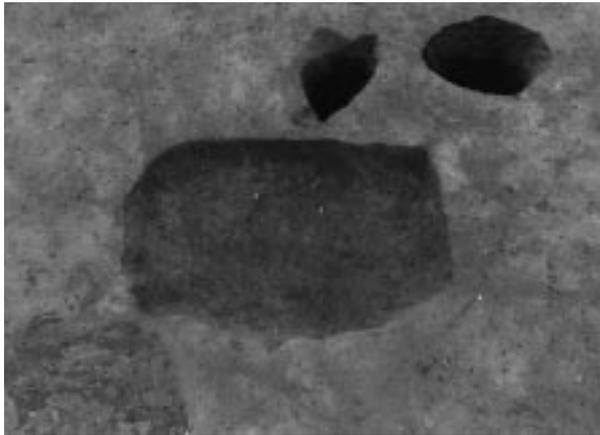


左上：土坑 1
左下：土坑 5
右上：土坑 2·3
右下 3 枚：土坑 6



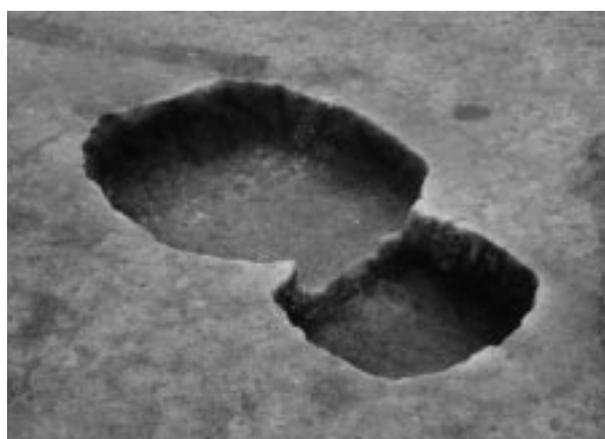
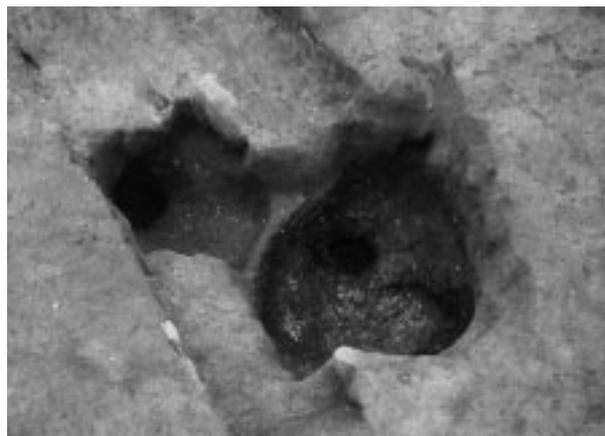
左上・右上：土坑 7
右上から 2 番目：土坑 8
左中：土坑 9
左下：土坑 12
右上から 3 番目：土坑 13
右下：土坑 14

図版10



左側上から
1 : 土坑15
2 : 土坑16
3 : 土坑21
4 : 土坑22

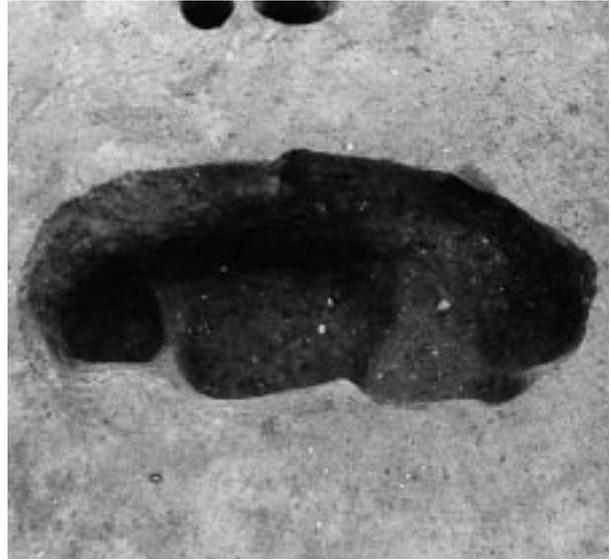
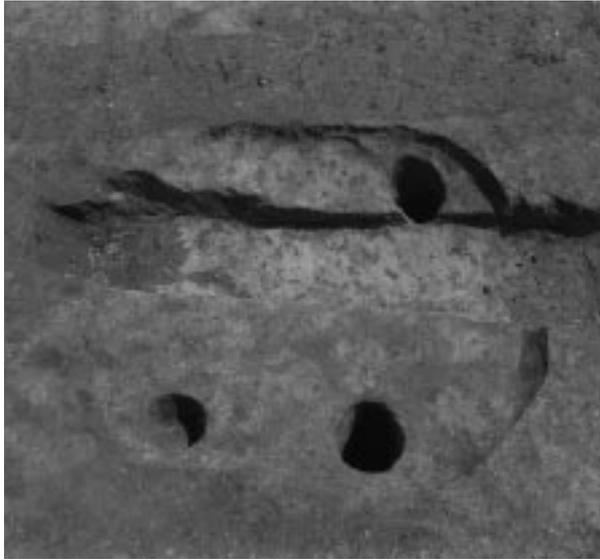
右上 : 土坑24
右下 : 土坑28



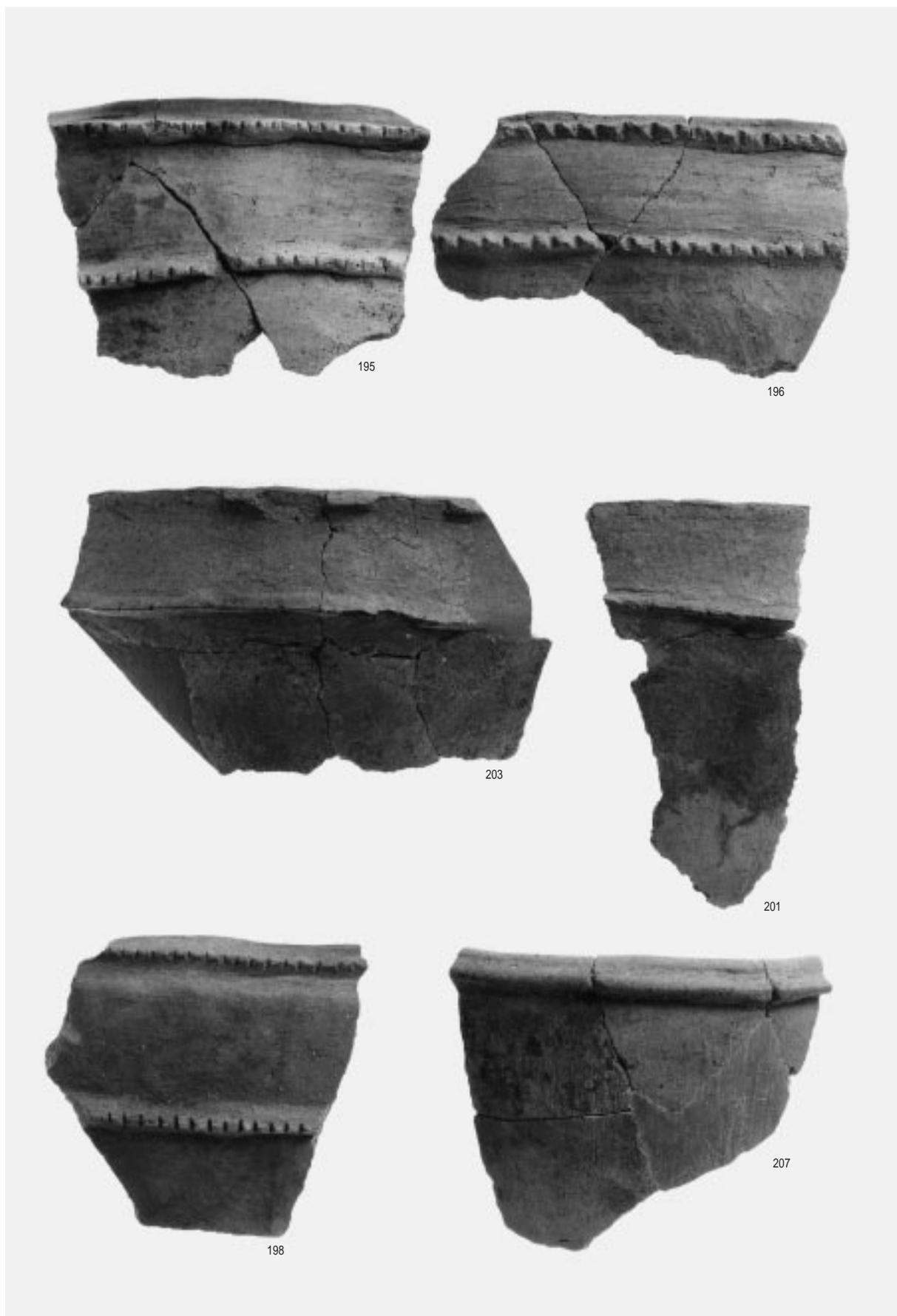
左側上から
1 : 土坑32
2 : 土坑34~36
3 : 土坑34
4 : 土坑35・36

右側上から
1・2 : 土坑38
3 : 土坑38

図版12

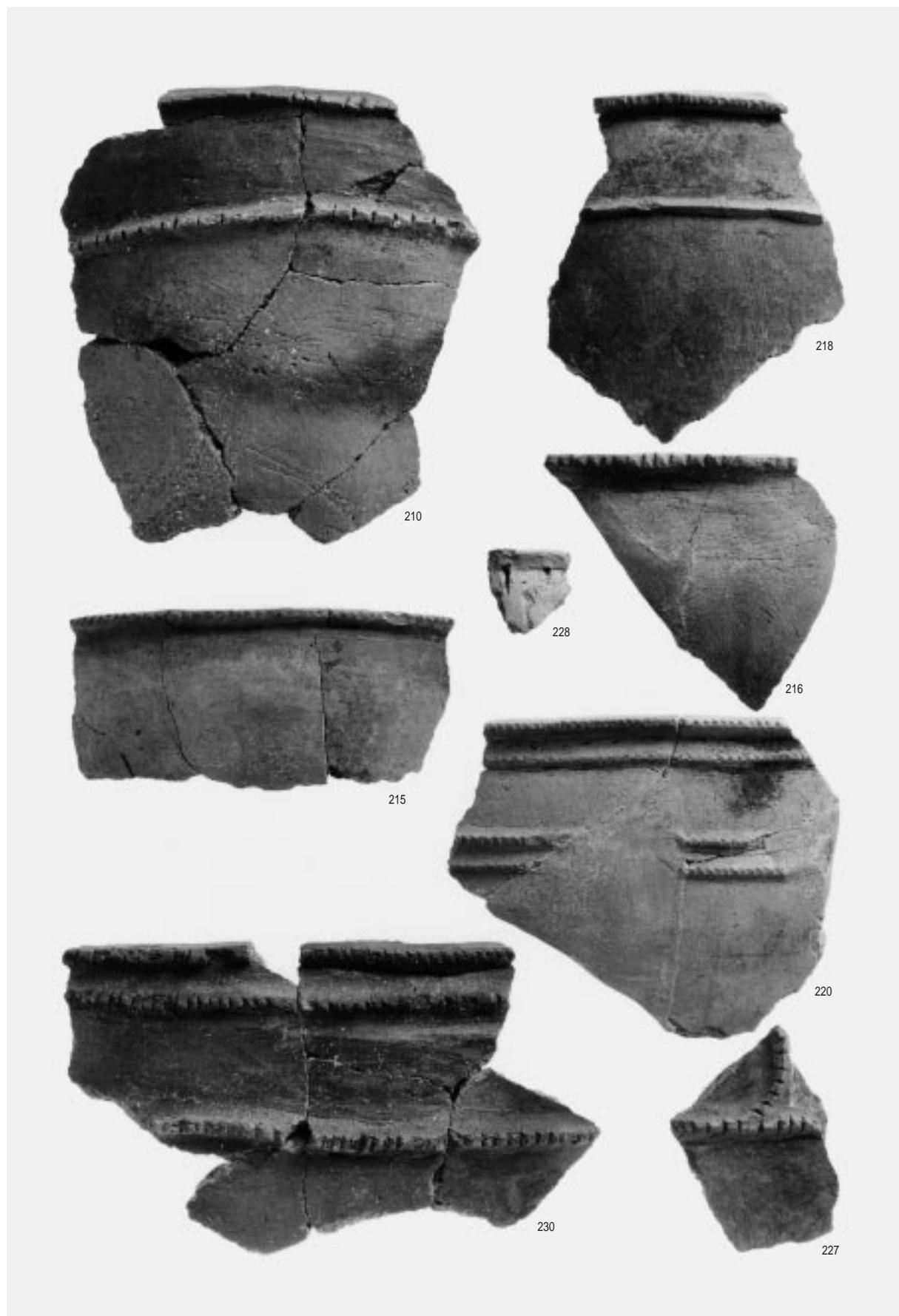


左上：土坑40
右上：土坑44・45
下：4号住居跡出土の土器

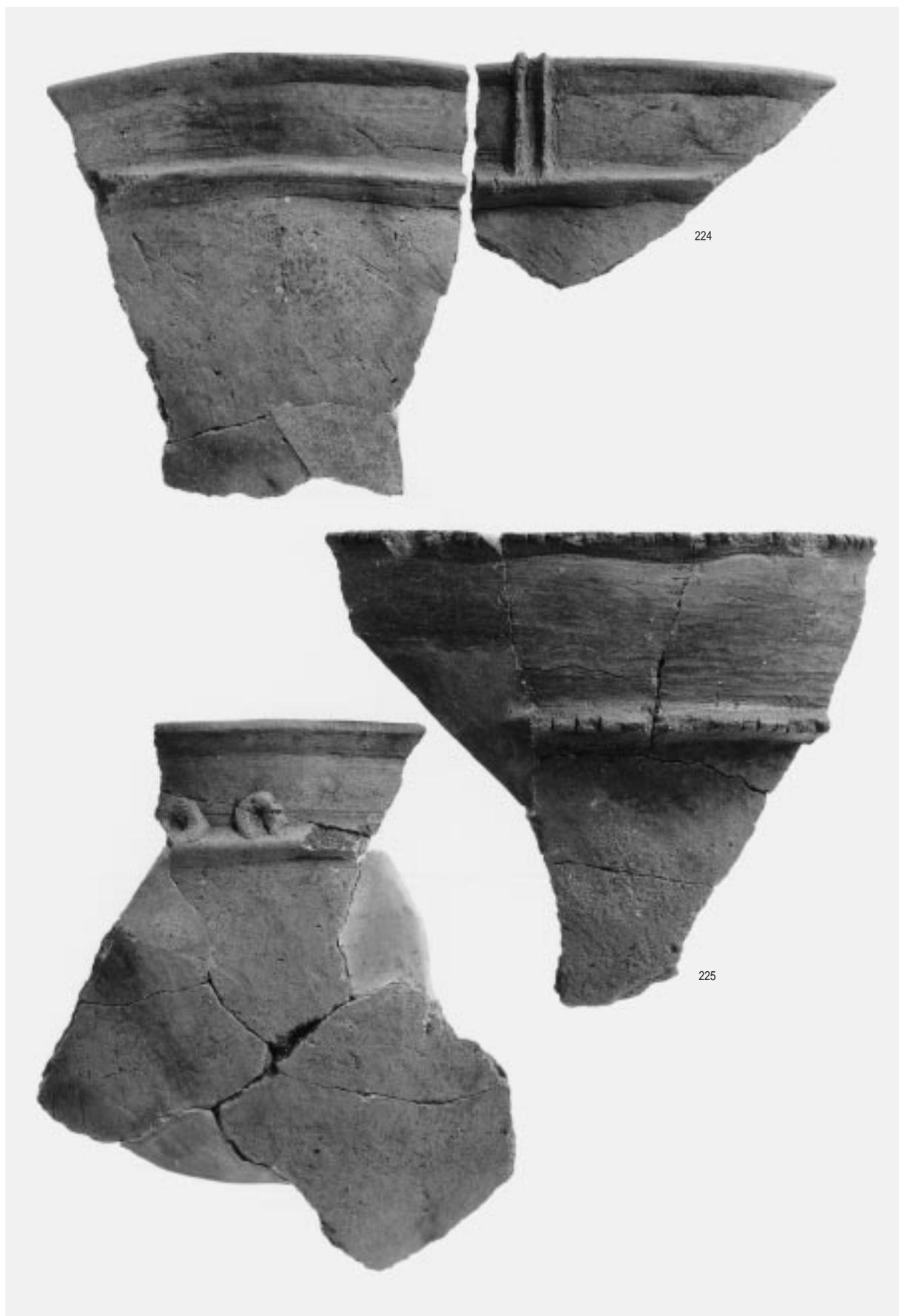


弥生土器(1) 甕形土器

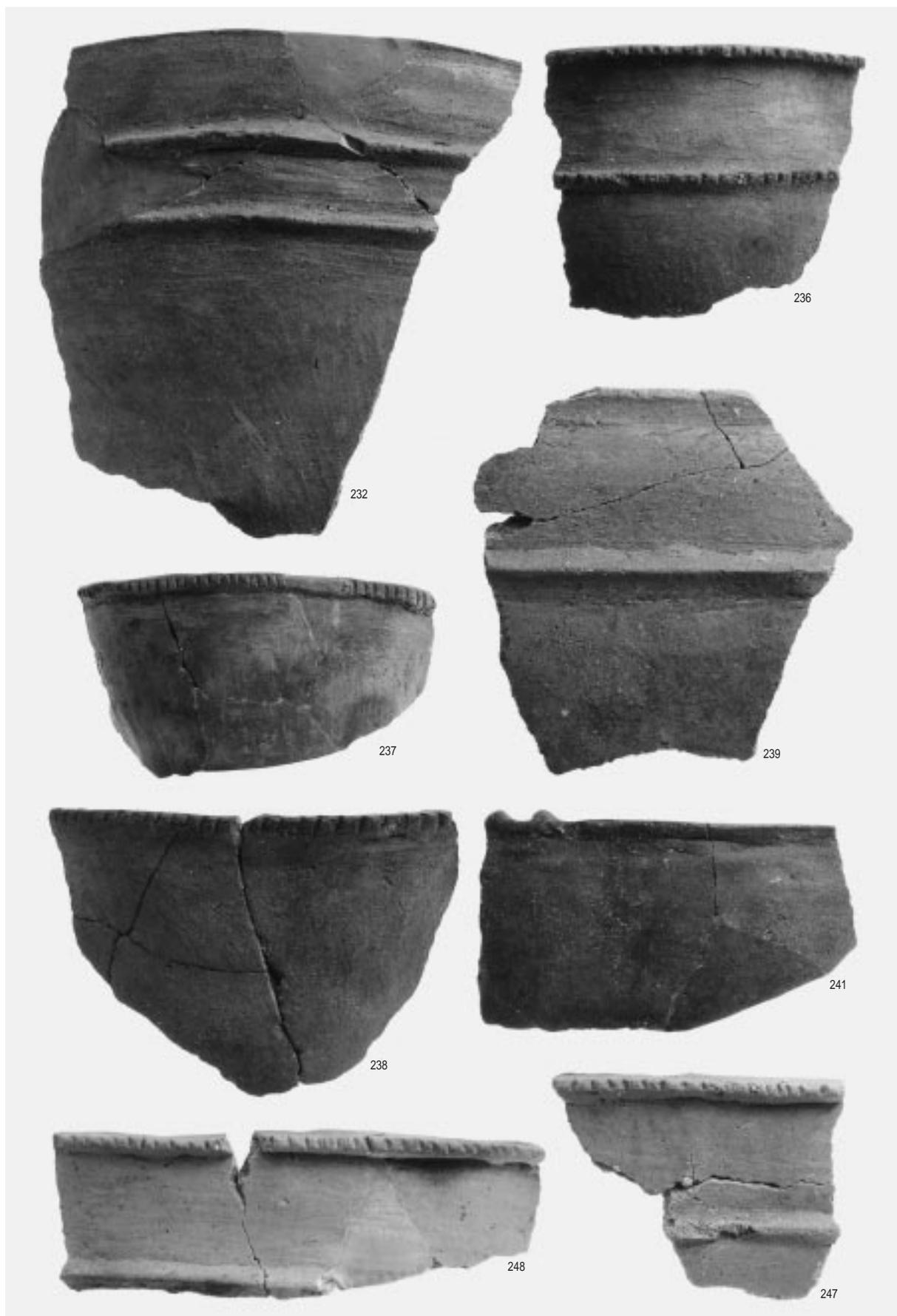
写真図版



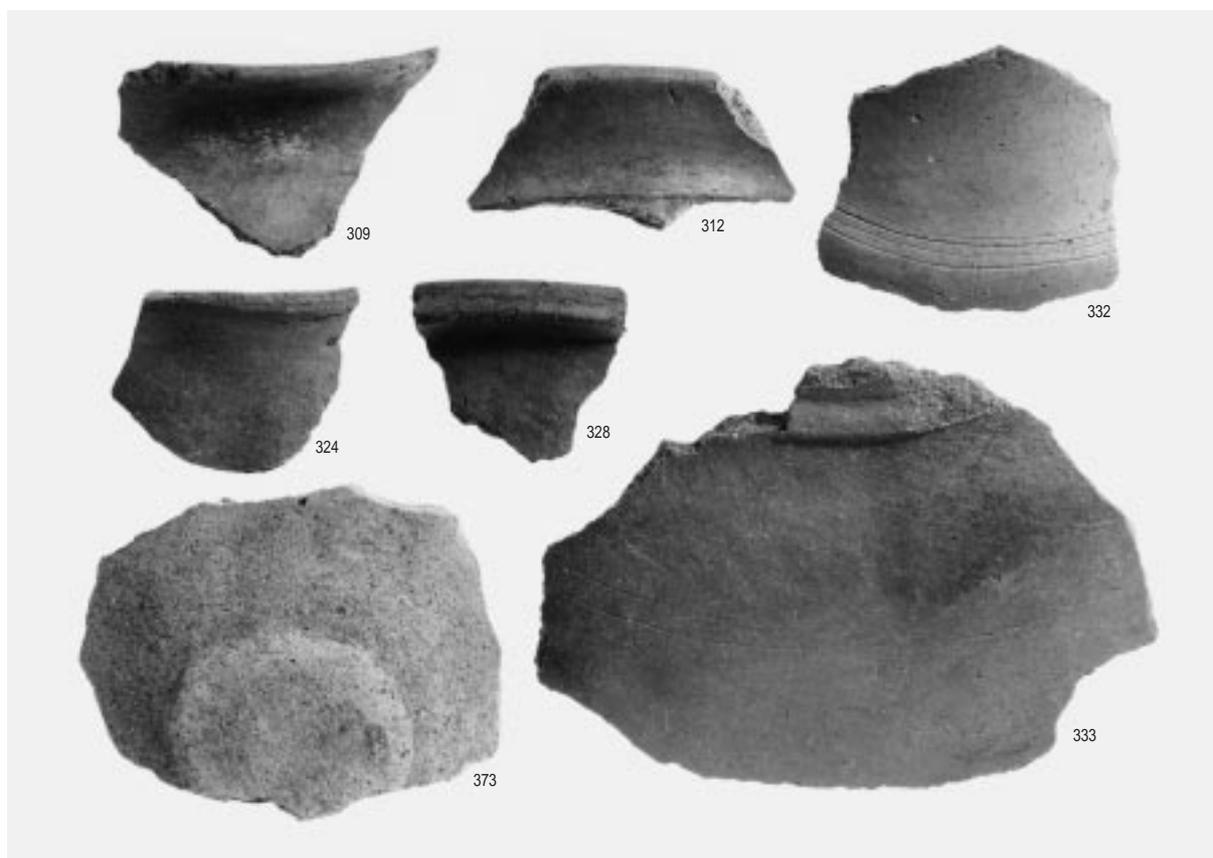
弥生土器(2) 甕形土器



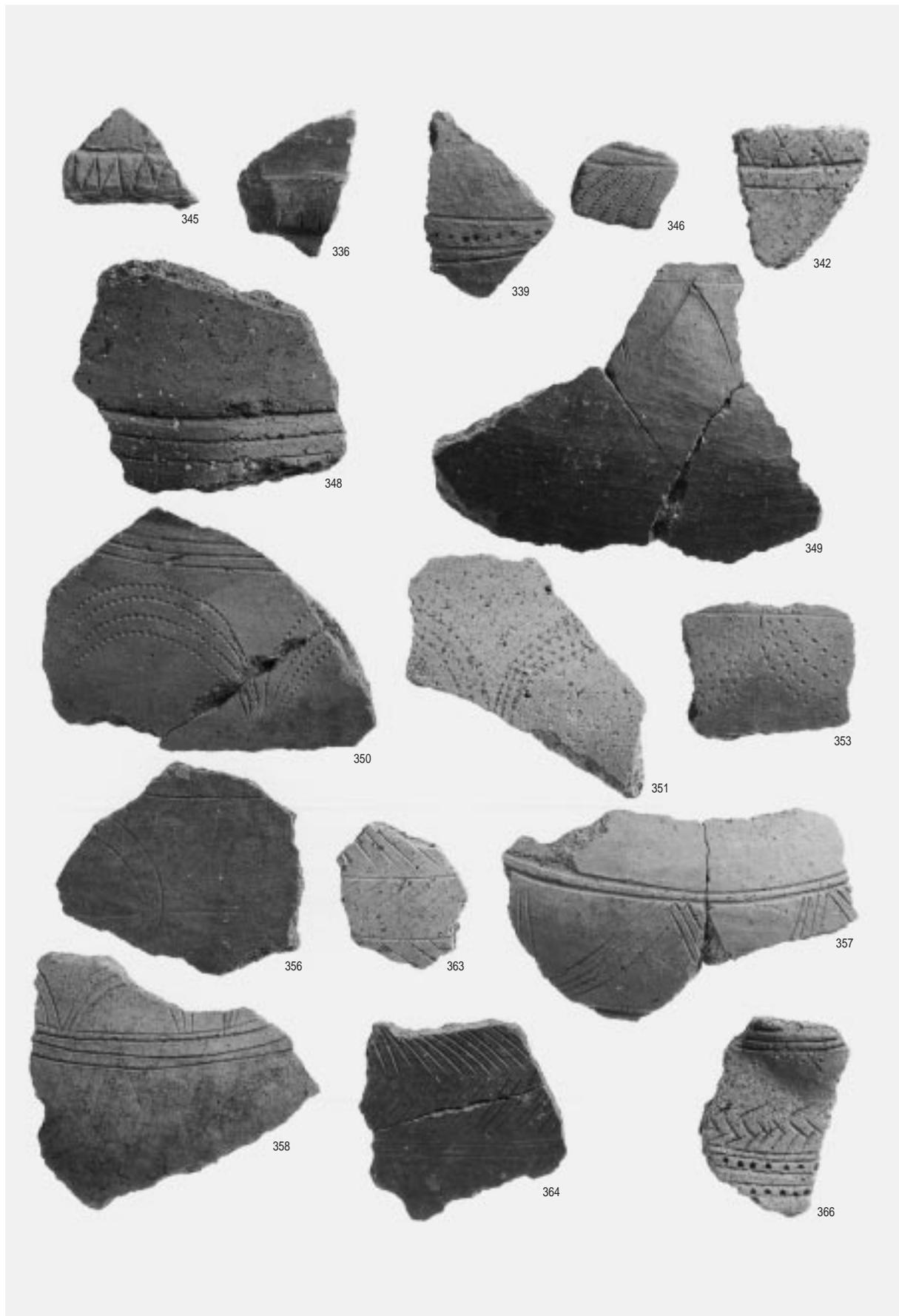
弥生土器(3) 甕形土器



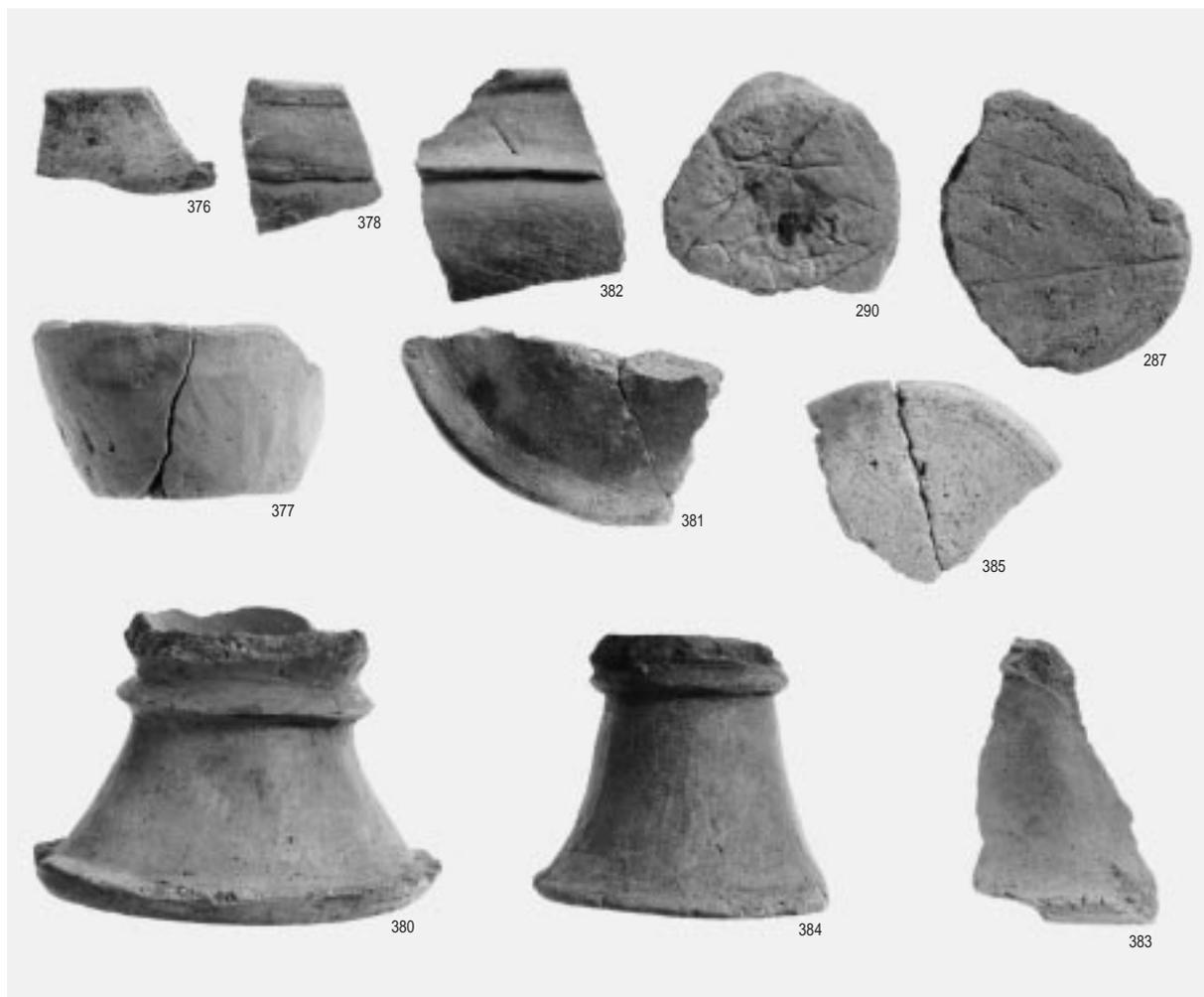
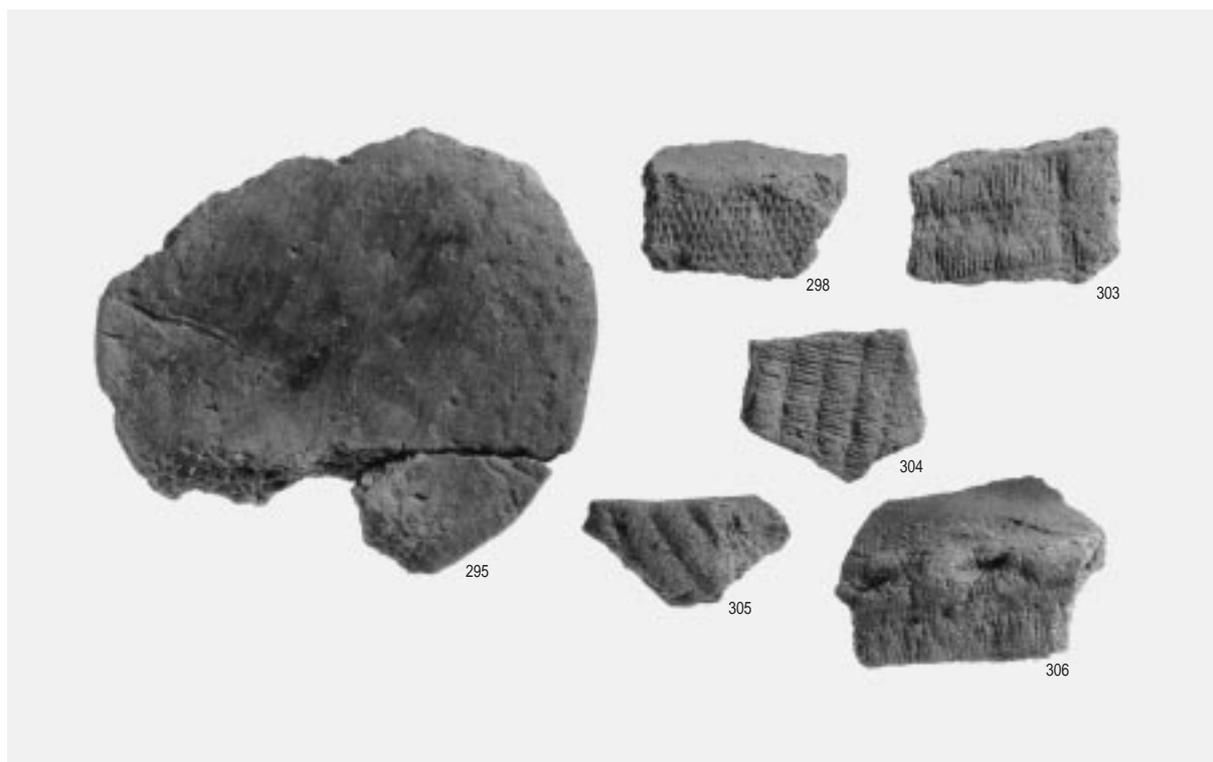
弥生土器(4) 甕形土器



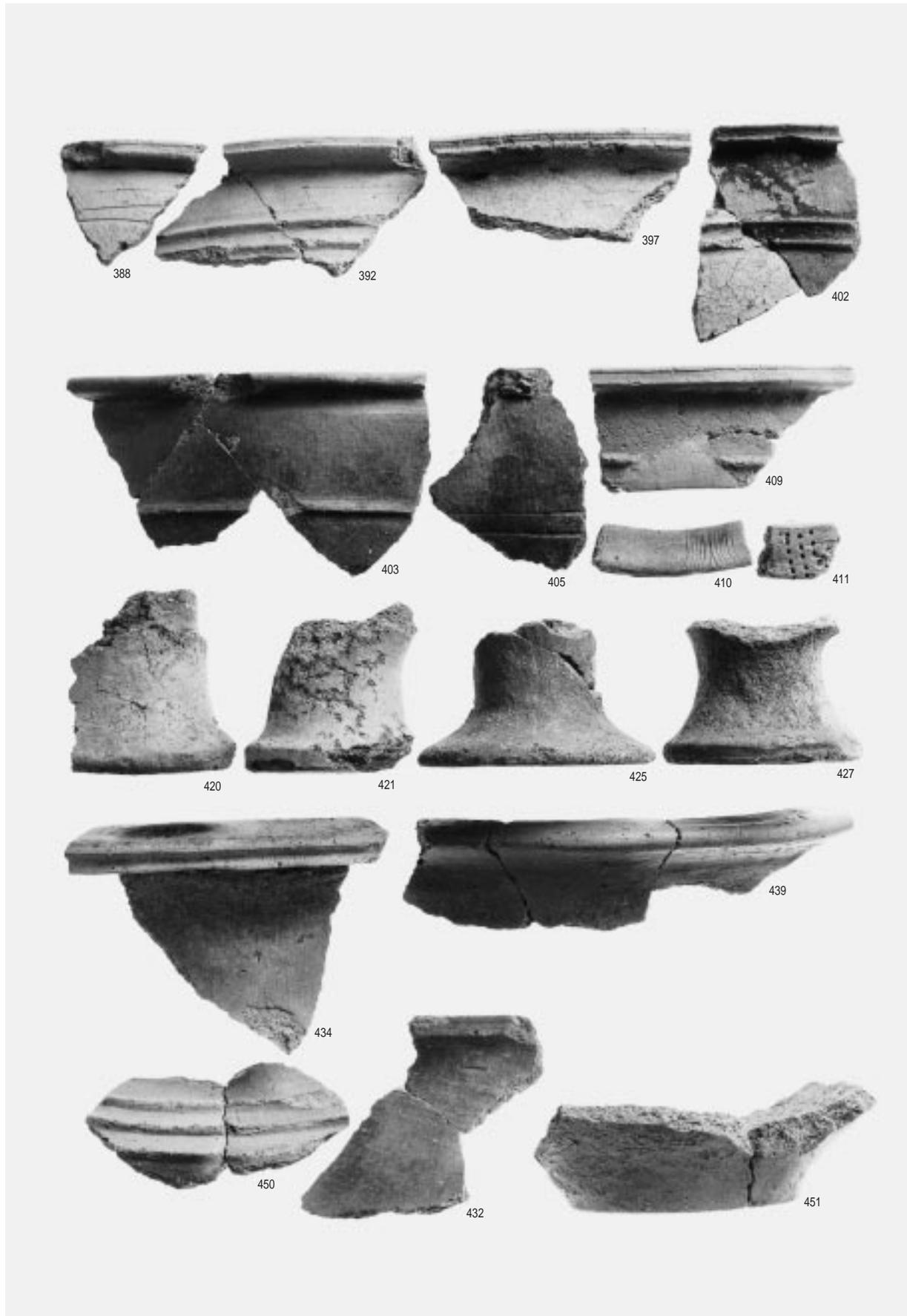
弥生土器(5) 壺形土器



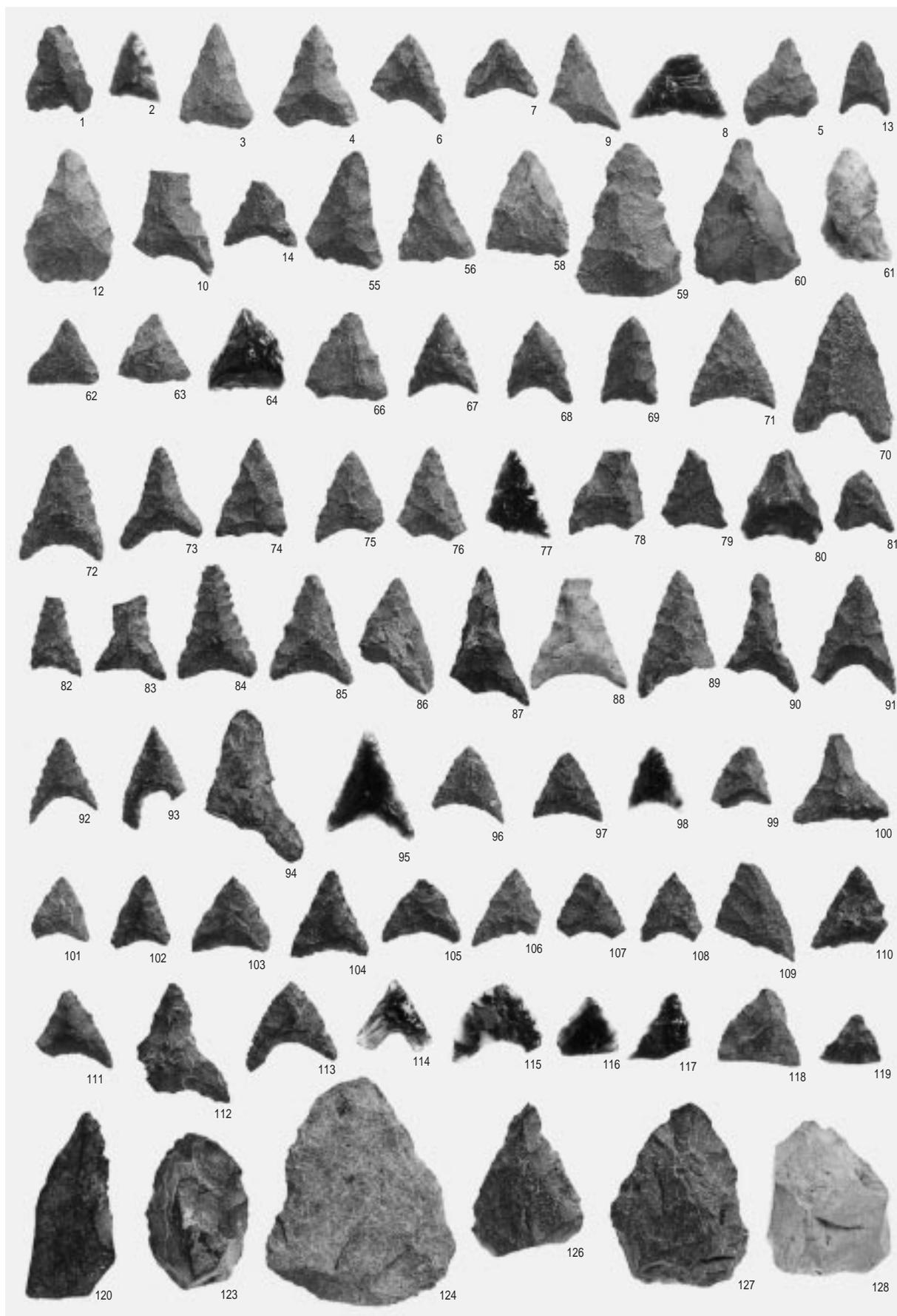
弥生土器(6) 壺形土器



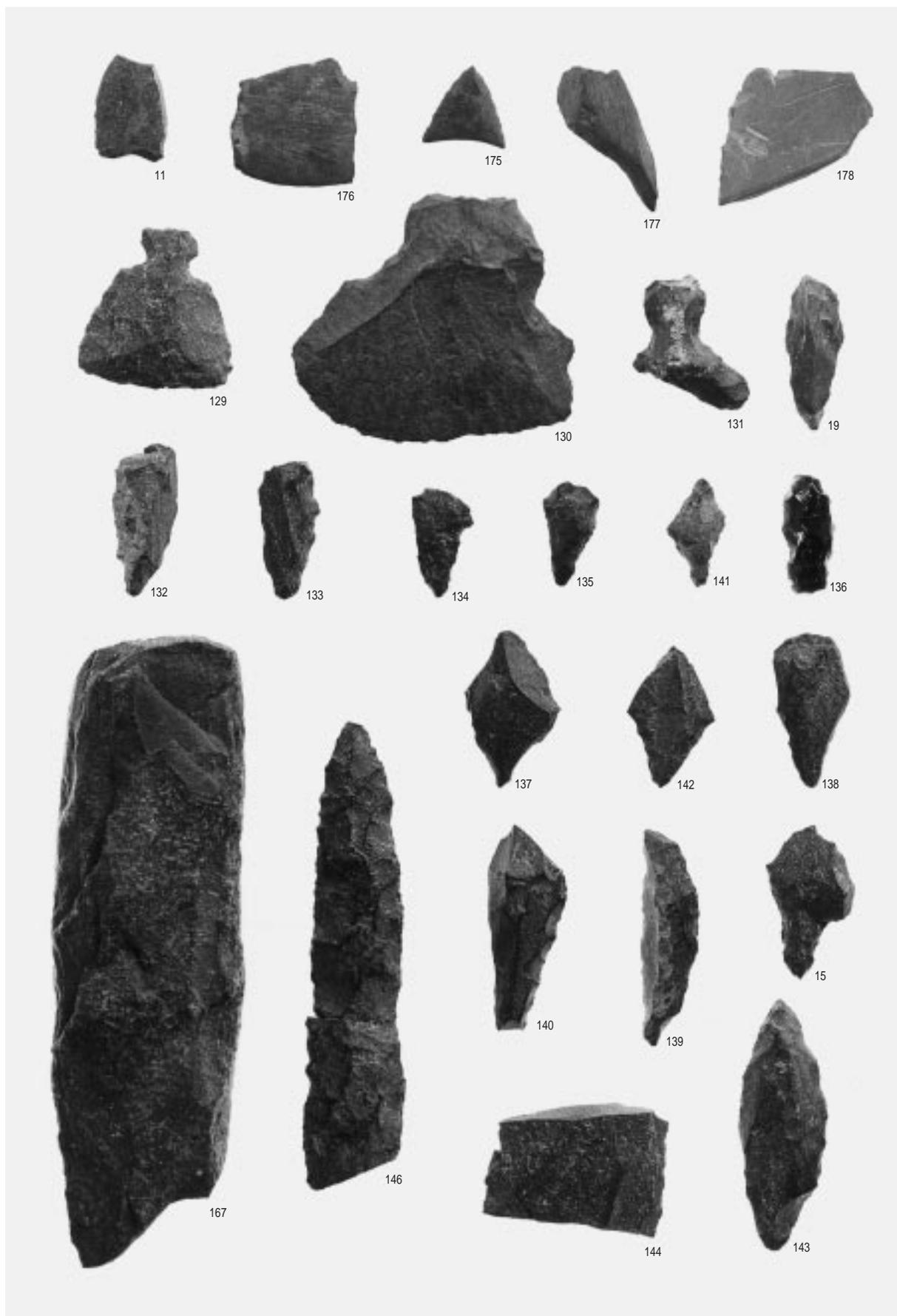
弥生土器(7) 甕形土器の底, 鉢形土器など



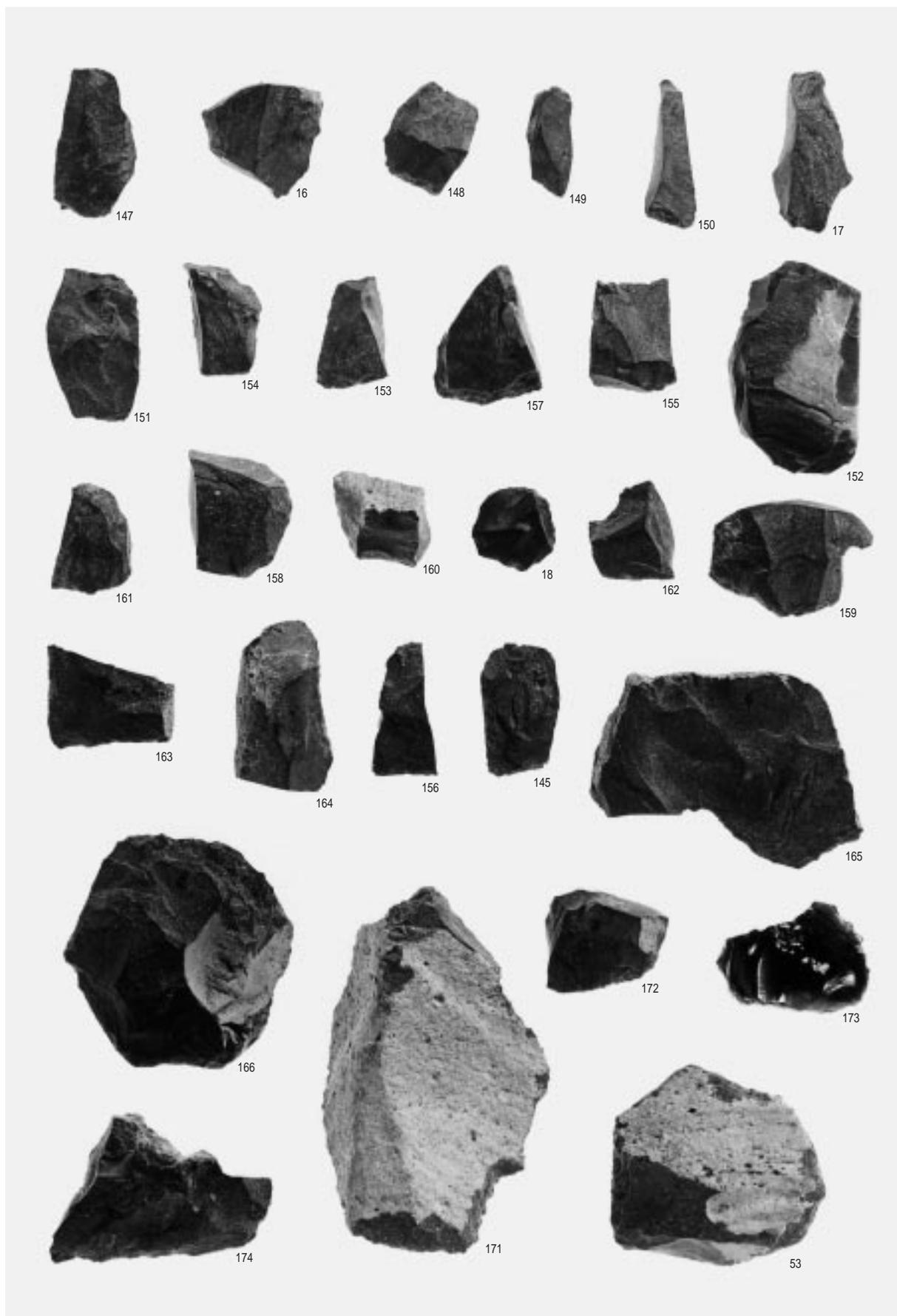
弥生土器(8) 中期の土器



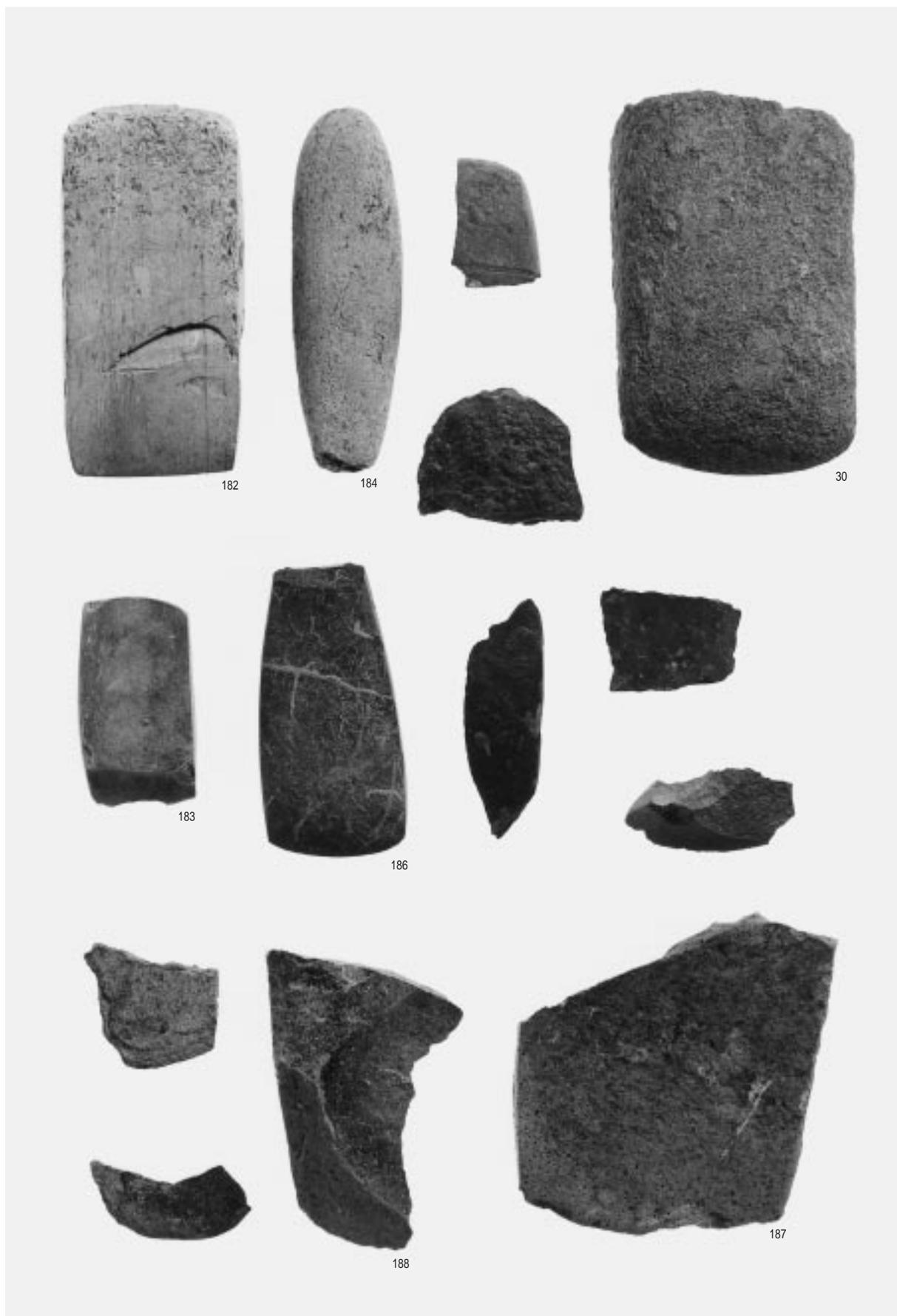
石器(1) 打製石鏃



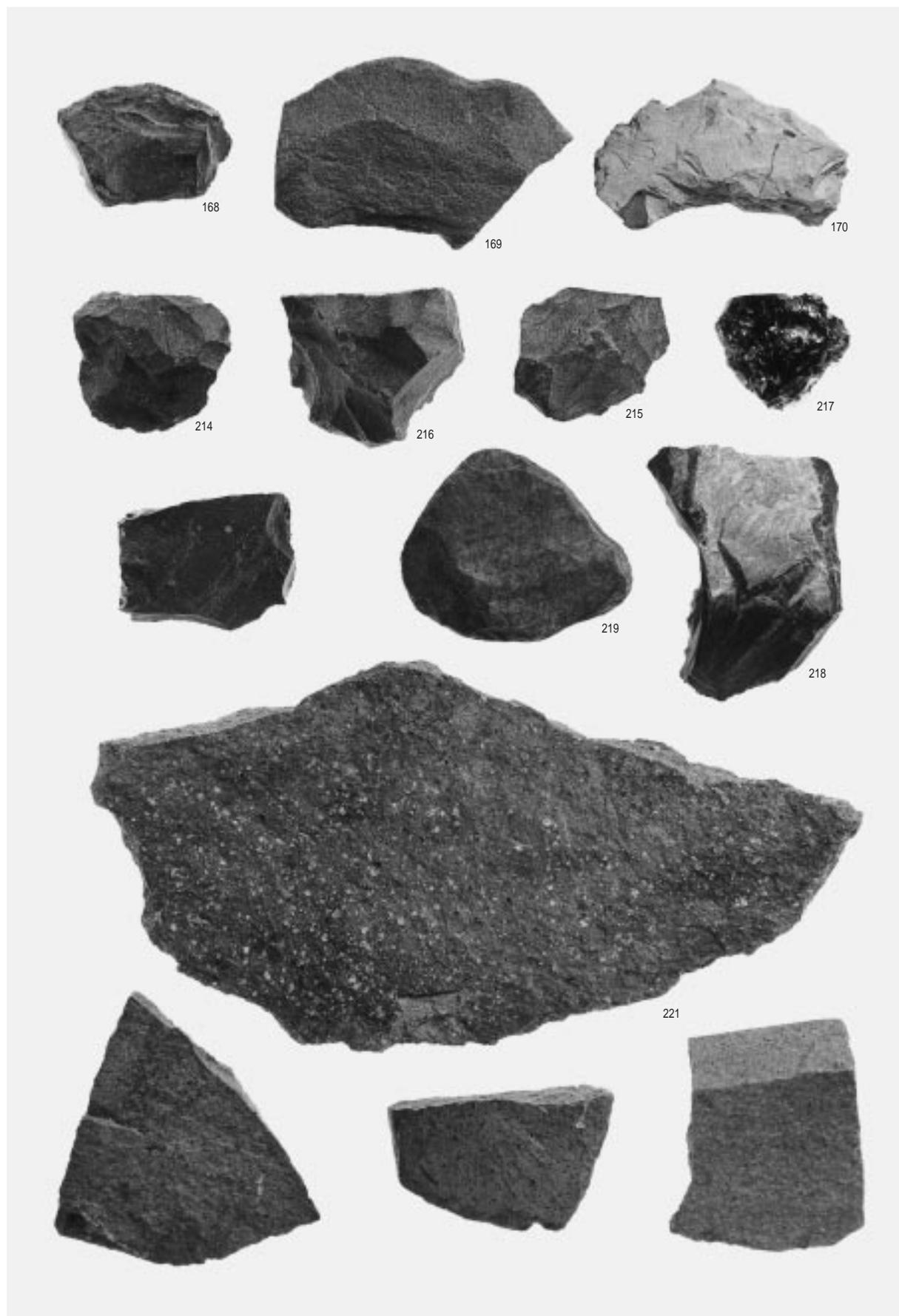
石器(2) 磨製石鏃・石匙・石錐・石劍・石槍



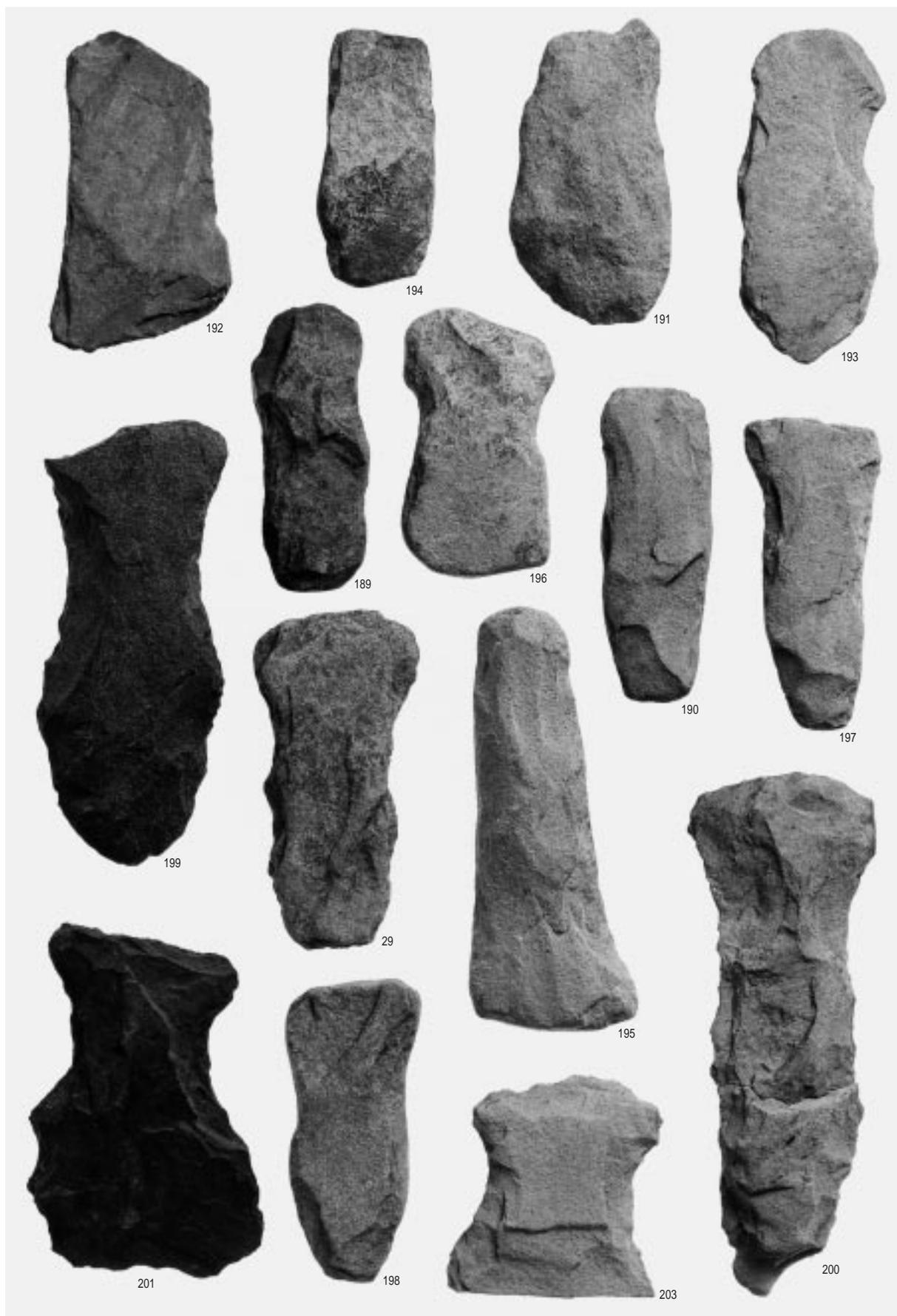
石器(3) ピエスエスキーユ・スクレイパー



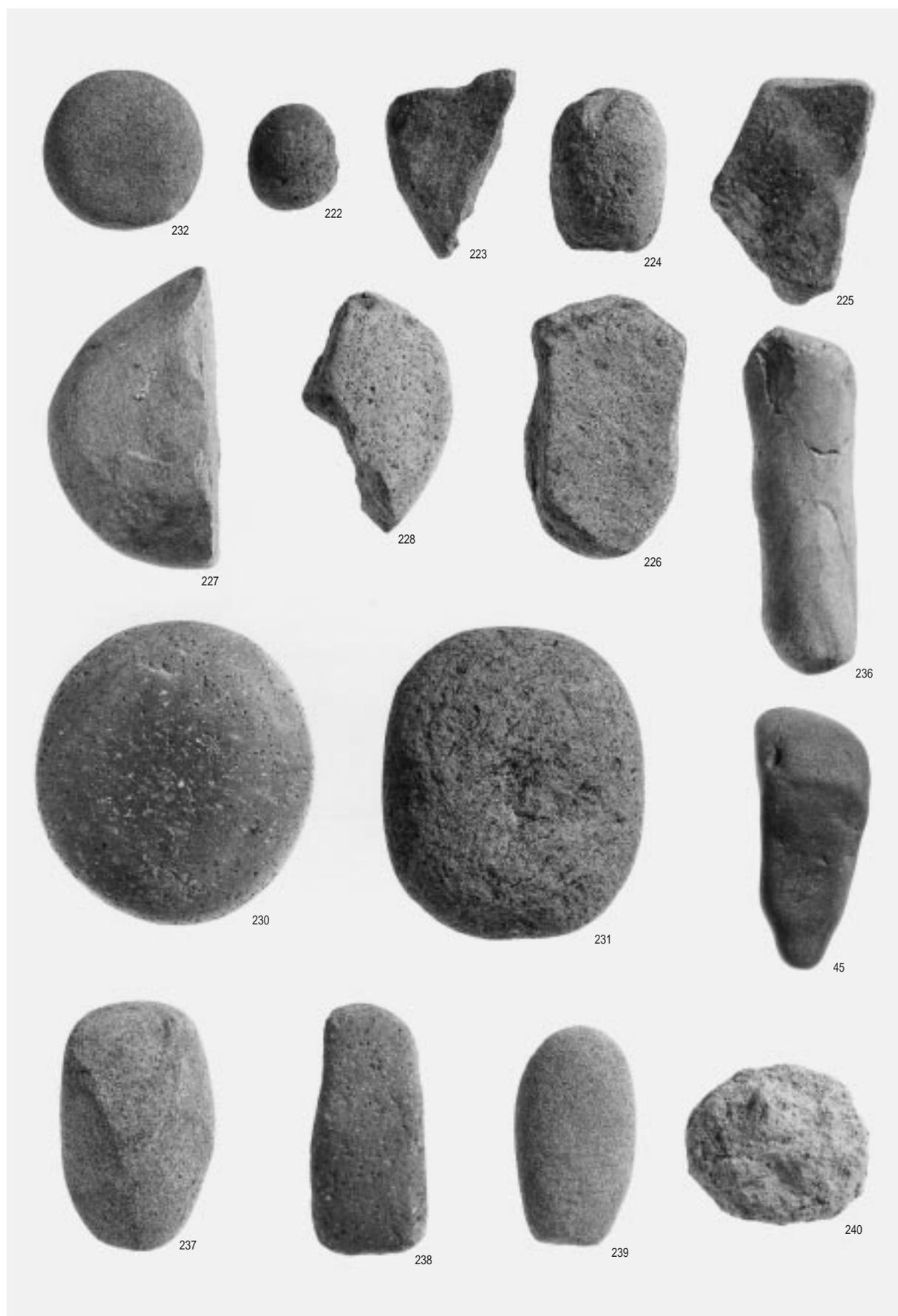
石器(4) 磨製石斧



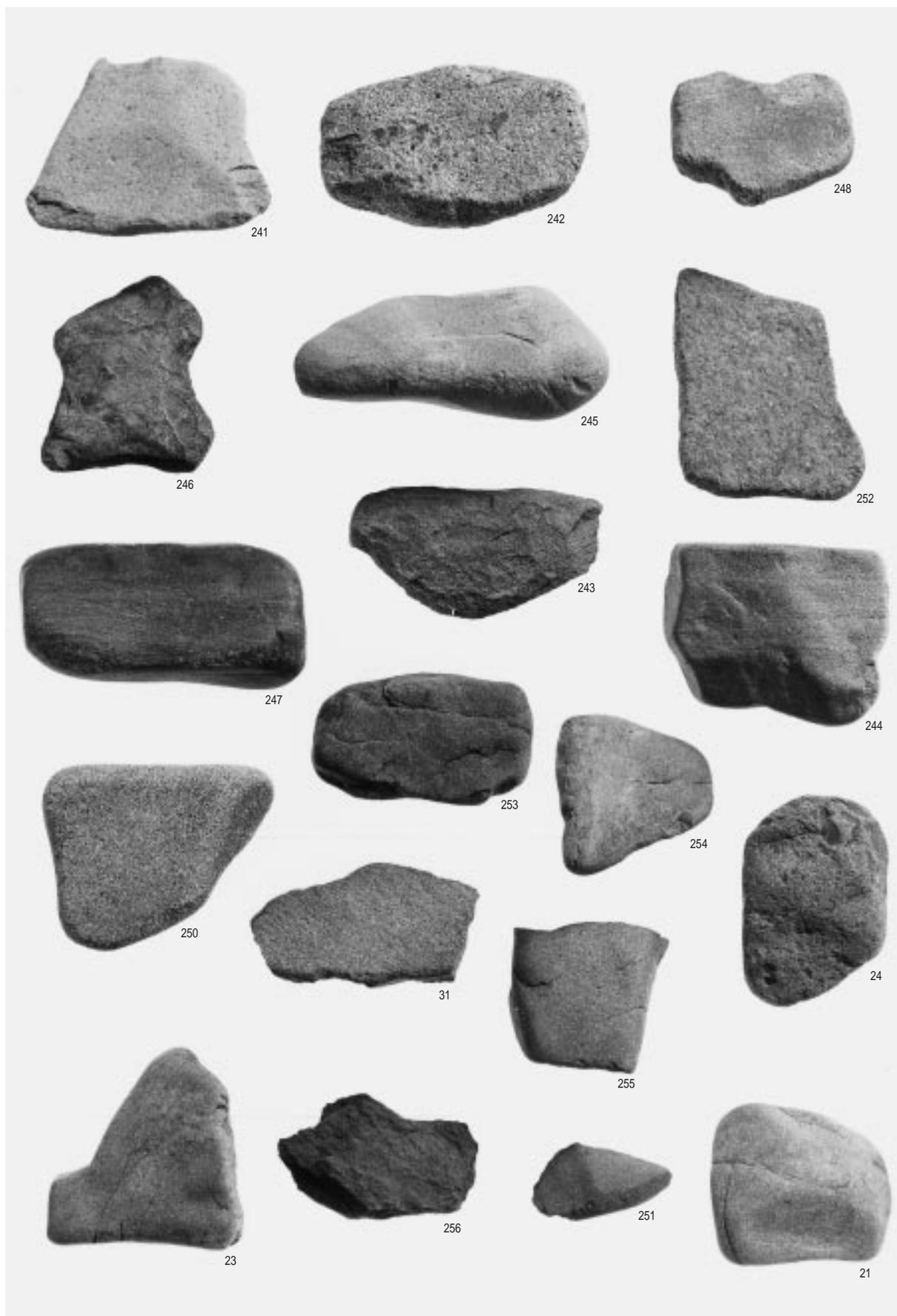
石器(5) 石鎌・石核・礫器



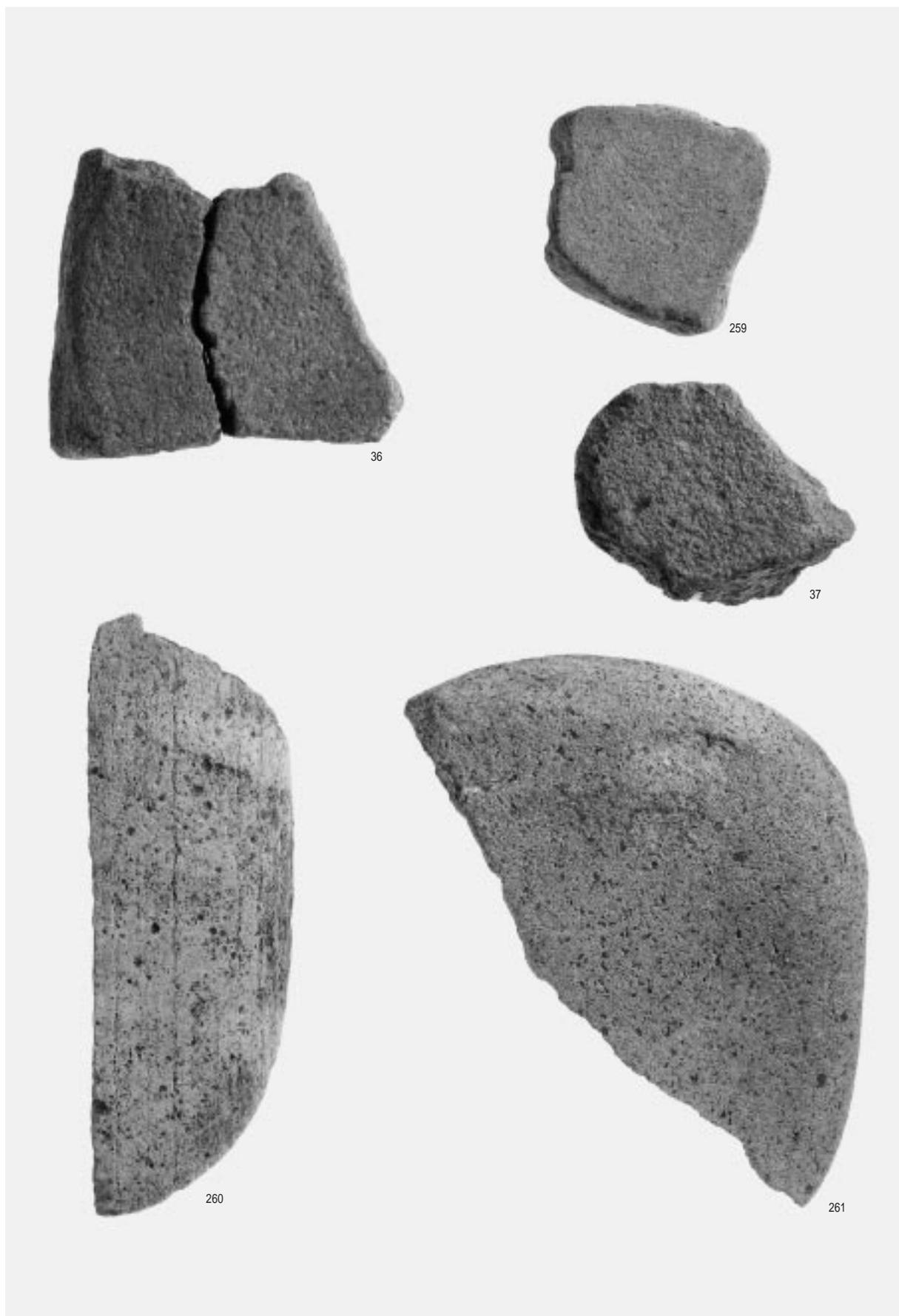
石器(6) 打製石斧



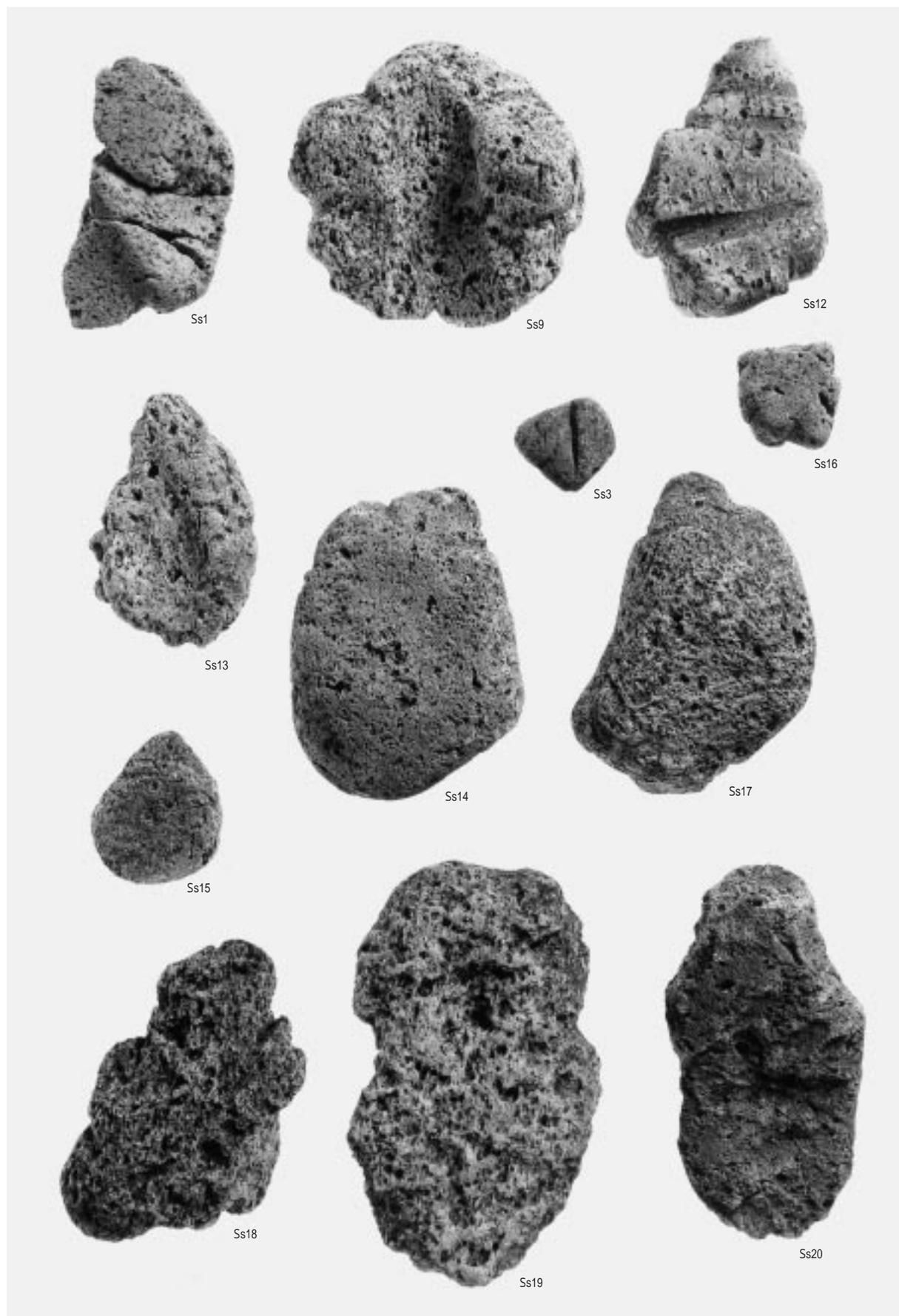
石器(7) 磨石・敲石



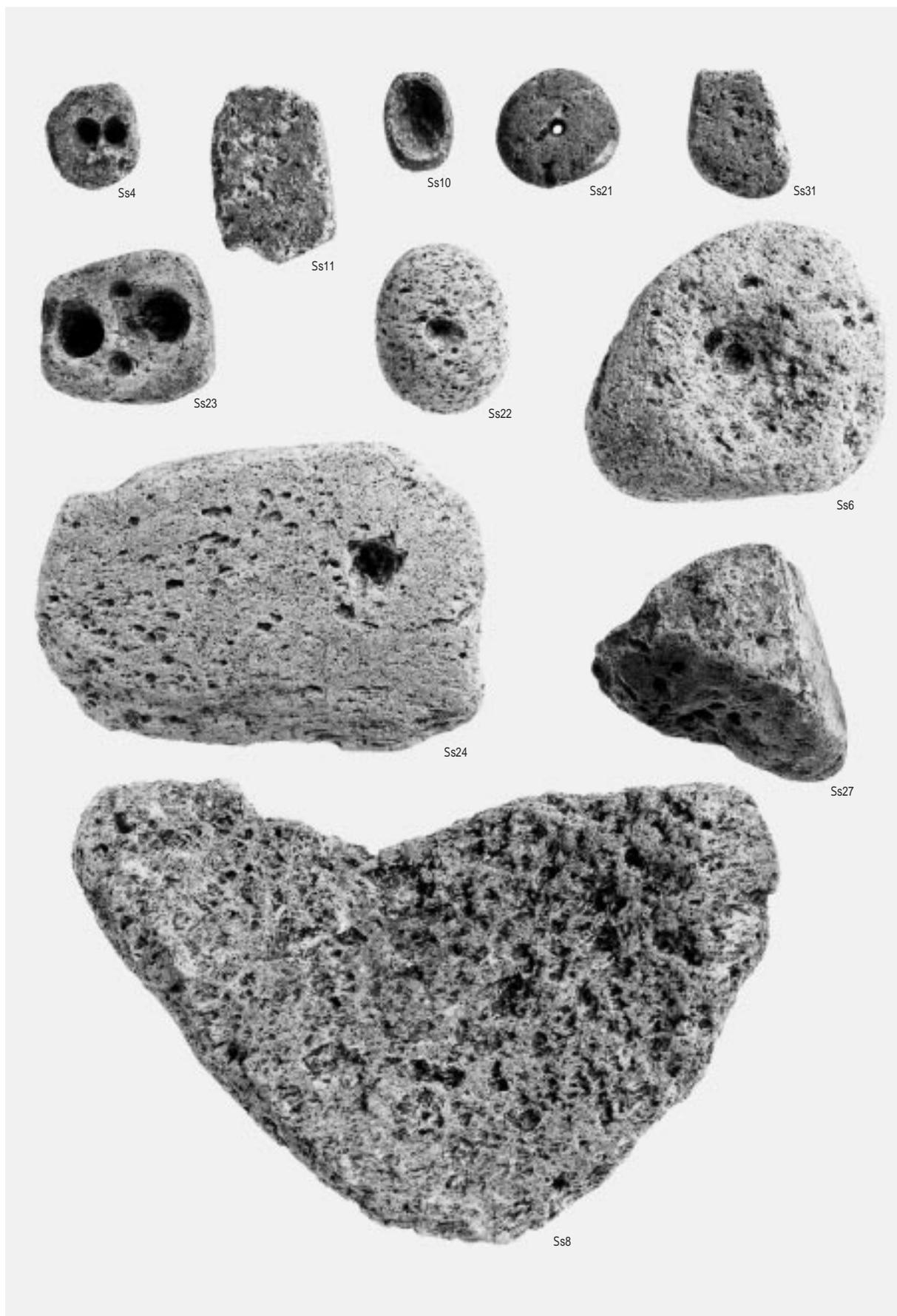
石器(8) 擦痕石器



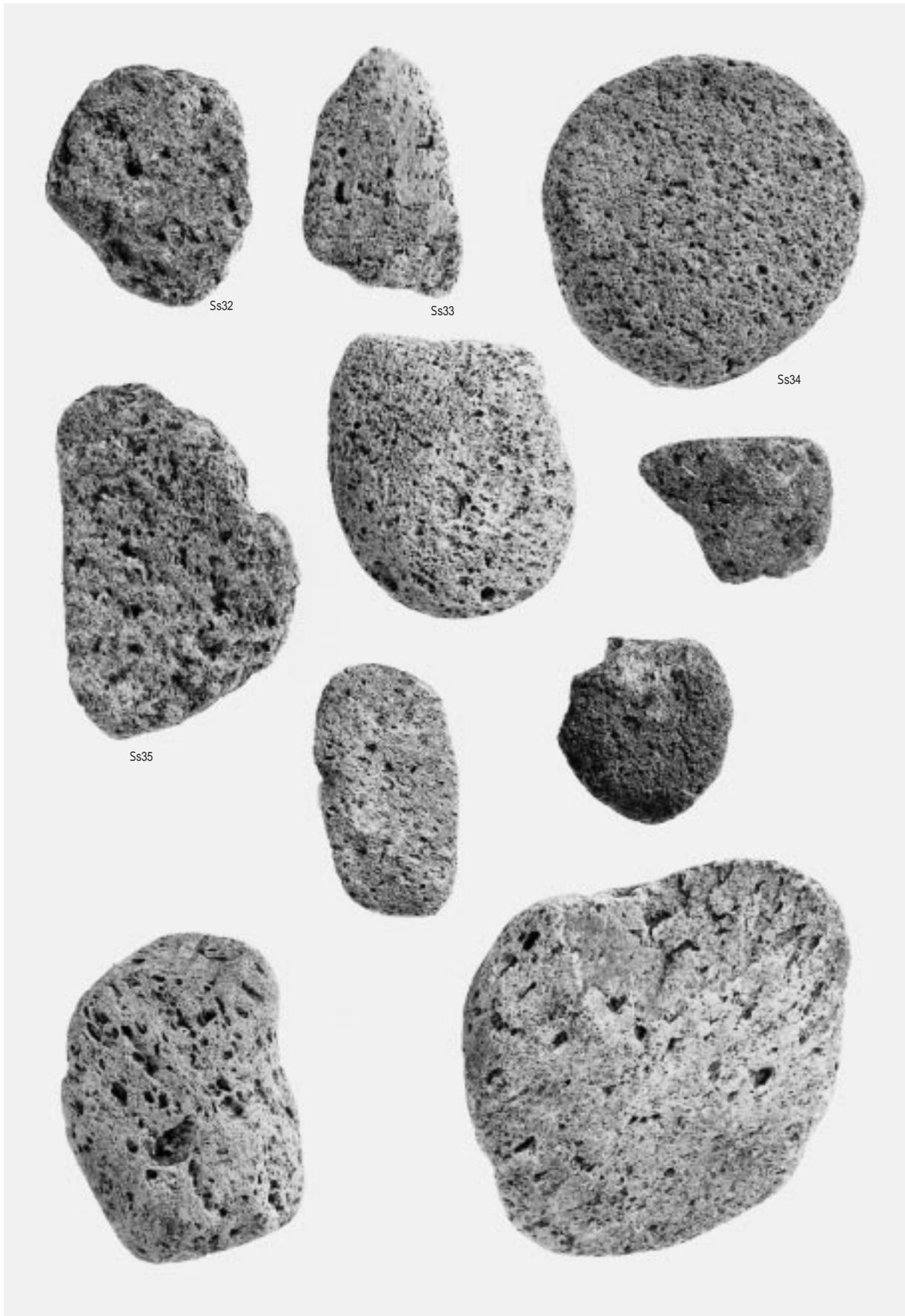
石器(9) 石皿



軽石製品(1) 人形



軽石製品(2) 凹みや孔のある製品



軽石製品(3) 使用痕のある製品

あ と が き

急に持ちあがった住宅建設に伴う発掘調査は多くの遺構・遺物の発見によって苦勞の連続となる調査となった。調査後半は多くの人びとの支援によって土曜・日曜日も返上の実測図作成，遺物取り上げとなった。

多くの竪穴住居跡や土坑・道跡などの遺構は当時のムラの様子を示してくれ，次々出土する土器・石器のなかには完形あるいは大きな破片のものも多く，北九州・山陰系の土器も含まれており，楽しい発掘でもあった。

地元の皆さんといっしょに計画した魚見ヶ原ウォークラリーには多くの人々が参加され，自分の町の貴重な文化財という認識を多くの人と共有できたのは担当した者としてうれしい出来事であった。

多量の出土品は，これまではっきりしていなかった南九州の弥生時代前期から中期前半の様相を解明する上に貴重な資料である。今回十分に提示できなかった点については今後なんらかの形で分析解明していくつもりである。

最後になったが，この報告書ができるまでに努力された発掘調査に従事された調査員・作業員の皆さん，整理作業を手伝われた作業員の皆さんに心から感謝したい。

〔発掘調査〕

安崎卓史・上野高司・内村美穂子・内村四海・内山義一・宇都ムツ子・大山登美子・上笹貫ゆかり・川野寛子・北野泉・税所るみ子・坂下登美子・座木真智子・笹平勝彦・重畠めぐみ・竹下邦子・立元恭子・出口松男・寺原小百子・富幸子・直泰江・永田實・浜田瑞枝・日高久子・藤川富男・藤崎郁子・前田清美・松元エキ子・松元常喜・水元イツ子・水口律子・都いき子・本村由美子・森良子・米永いくえ

〔報告書作成〕

西川直美・鮫嶋みどり・冷水千里香・後藤万里子・赤塚志保・吉岡美喜・山下理佳・山元宏子

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（111）

地方職員共済組合職員住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

魚見ヶ原遺跡

発行日 2007年3月

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899 - 4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号
T E L (0995) 48 - 5811

印刷 株式会社あすなる印刷
〒899 - 0041 鹿児島市城西2 - 2 - 36
T E L (099) 250 - 7033